

Presented by AiR, STAR CHILD and KODANSHA BOX

BOY AiR

はじめの
一歩。



新人賞増刊号2012

BOX-AiR (ボックスエア)

©KODANSHA2012

目次

第十五回BOX-AIR新人賞受賞作

ちつちやいホームズといじわるなワトスン

著〓城島大／illustration〓恭介

第十四回BOX-AIR新人賞受賞作

ギャルゲー探偵と事件ちゃん

著〓とよたかゆき／illustration〓染谷みのる

第十三回BOX-AIR新人賞受賞作

モツコーBグル部

著 || 吉井伍有 / illustration = mot

第十二回BOX-AIR新人賞受賞作

みツわの

著 || 松本逸暉 / illustration = えむけー

第十一回BOX-AIR新人賞受賞作

サリー&マグナム OF THE GENUS ASPHALT

著 || べら / illustration = De

BOX-AIR新人賞募集

新刊予告

編集後記

表紙イラスト 〓 趙迎樂

アートディレクター 〓 ナカノケン (アルフエイズ)

Observe,
and you will
know the truth.

心で見なければ、真実には至れない。

著 城島大

illustration 恭介

ちっちゃい
ホームズ
と
いじわるな
ワトスン

第一話
名探偵
の孫

第15回BOX-AIR新人賞受賞作は
20世紀の英国で最強タッグが謎に挑む！

秘

第十五回BOX-AiR新人賞受賞作選評

『ちっちゃいホームズと
いじわるなワトスン』

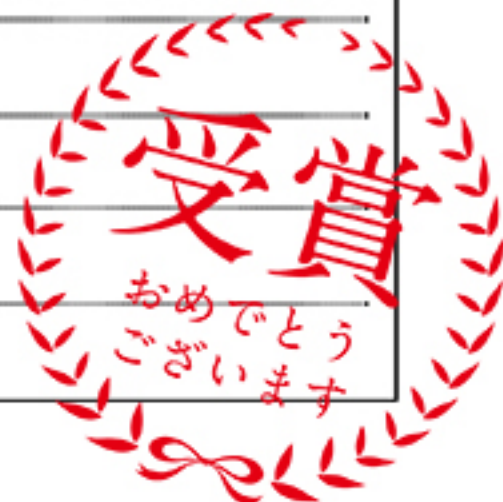
城島 大

・タイトルが内容をよく表している。ワトスンとホームズのそれぞれの子孫の造形にひとひねりがあってとても魅力的。

・ミステリとしても読み応えのあるものを書こうという気概を感じる。

・一方で物語が動き出すまでが遅く、先の展開を消化できるのか不安。物語を引っ張る大きな謎を孕んだ「手紙」も、シノプシスの設定では軽く、拍子抜けしてしまいそう。

・キャラクターの魅力をより強く伝えるような世界観描写を頑張ってほしい。



城島大——Joujima Dai

1990年生まれ。大阪府出身。第15回BOX-AIR新人賞を受賞。

恭介——Kynosuke

イラストレーター。牛柄が好き。

「hora fugit.」 <http://horafgit.jimdo.com/>

1920年代のベイカー街は、今やロンドン一寂れた場所となつてしまつた。それというのも、以前盛大に執り行われたとある人物の国葬式が、未だ皆の心に影を落としているからであつた。

その人物の訃報ふほうが新聞に掲載された時、彼が解決してきた複雑怪奇などんな事件よりも英国中は騒然とした。既に引退した身ではあつたが、彼が英国に齎もたらしたその偉業の数々は、国民にとって自国の榮譽にも等しいものだったのだ。

誰もがその頭脳を頼り、誰もがその名声を認め、誰もがその名譽を国民から授かっていたのである。

彼の国葬式が終わって以来、嫌でもそのことを思い出させるここベイカー街は、身分問わず全ての英国人に敬遠される場所になってしまった。

そんな街を、シャーリー・マクレーンは一人で歩いていた。シャーリーの足取りは重かった。彼女は、未だシャーロット・ホームズの死を受け入れられてはいなかったのだ。

シャーリーが幼少の頃、一家が崩壊するような事件に巻き込まれたことがあった。その時、シャーロット・ホームズは相棒

のワトスン博士を引き連れ颯爽さつそうと現れると、瞬またたく間に一家を危機から救ってくれたのである。

今思えば、あれが自分の初恋だったのかもしれない。親に我わが儘ままを言っつてベイカー街の隅に家を借りてもらい、暇を見てはそこを拠点に探偵事務所を観察していたものだった。

ワトスン博士の随筆が出るたびに、自分の観察日記と照らし合わせるのが当時の楽しみの一つだった。

窓から覗のぞくシャーロック・ホームズが実は蠟ろう人形で、その眉み間けんを空気銃で狙われていたとは。事務所の周りをうろろしていた巨体の男が、宝石泥棒の一人だったなんて。

シャーロックの冒険の軌跡を自らの目で観察することができ

たあの頃は、本当に楽しかった。

シャーリーは久しぶりに訪れたベイカー街を散策しながら、当時の思い出に浸っていた。

王立公園の一つであるハイド・パークは変わらず緑に溢れ^{あふ}昼寝にはもってこいだっだし、王室一家の公邸であるバツキングム宮殿はポートランド石で改装され、より煌び^{きら}やかに王室然とした存在感を放っている。

シャーリーは、昔同様景観豊かなロンドンの観光名所を回りながら、ただ一つ欠けてしまった名探偵のことを思い、ひっそりとため息をついた。

もしも彼が生きていたら、今自分を悩ませている事件など

あつという間に解決してしまおうだろうに。

魔術の類たぐいとしか思えない複雑怪奇な事件。今彼女が悩まされ
ているのは、まさしくシャーロック・ホームズが垂涎すいぜんして食
つきそうなものだった。

しかし彼女からすれば、それはあまりにおぞましい出来事
だ。

きちんとした解決が見えるまで、あんな恐ろしい私邸には帰
りたくない。そんな気持ちも手伝って、シャーリーは気づけば
二週間もここに滞在していた。

……そろそろ帰らなければならぬ。

そう思うも、自分を恐怖させ震え上がらせるあの事件は解決

の糸口さえ見つけていない。すごすごと帰ったところで、夜も眠れぬ毎日をごす羽目になるだけだ。

そんなことを考えると、シャーリーは巡り巡^{めぐ}っていつも同じ結論を描きだすのだった。

こんな時、シャーロック・ホームズがいてくれれば、と。

そんな彼女の目に、壁に貼られた張り紙が映った。

普段なら何とも思わずあっさりと通り過ぎてしまふところだが、彼女はその乱雑に貼られた張り紙の中に無視できない何かを見つけ、じっと目を凝^こらしていた。

そのレンガ石の壁は、不況の煽^{あお}りで閉店に追い込まれた店の通知、見るからに胡散臭^{うさんくさ}い仕事の求人、セールスで紹介など、

商売人達が勝手気ままに貼った広告紙でレンガの継ぎ目も見えないほどだった。

そんな、譲り合いの精神など次元の彼方に吹き飛ばす勢いで我先にと張られてある広告紙。その混沌カオスのど真ん中。

大きさをその存在感をアピールしようとする張り紙達に決然と対抗するそれは、大きさだけでも一回りは小さく、色も地味、紙もただの藁半紙わらと何の特徴もないものだった。

しかしシャーリーは、数ある無頼者ぶらいを押しよける身勝手さでばしんと張られた小さな紙に、文字通り目を奪われた。

『ホームズ探偵事務所 再開』

その短い文章を二度三度と読み返し、シャーリーは今までの

憂鬱ゆううつな気持ちも忘れ、晴れ渡る笑顔を浮かべた。

こうしてはいられないと、シャーリーは喜び勇んでベイカー街221番地を目指し走った。

この探偵事務所を開いている人間に、彼女はもちろん心当たりなどなかった。しかし、あのホームズ事務所を引き継いだ人物だ。その探偵が、彼の頭脳に勝るとも劣らないことは確かだった。

途中何度か人にぶつかりそうになりながらも、過去何輛りょうもの馬車が通り、その蹄ひづめの跡を深く刻み込んだ敷石を渡る。ベイカーストリートをひた走り、シャーリーはようやく目的の番地に到着した。

弾んだ息を整え、ゆっくりと呼び鈴を鳴らす。

その間に軽く空咳をし、声の調子を整える。

憧れるだけで本人に声をかけることもできなかつたシャーリーは、シャーロック・ホームズの正統な後継者に今から会うことを考えると緊張を拭えなかつた。

しばらくすると、がちやりと音がしてドアが開いた。

中から出てきたのは老女だつた。小さなメガネがちよこんと乗つかった顔で表すその柔和な笑みは、初対面でありながら、どんな悩み事も口から滑り出すべてしまうような親しみを覚えさせる。

シャーリーは興奮せずにはいられなかつた。

シャーロック・ホームズの理解者にして、下宿を事務所として貸し出していた女主人。あのハドスン夫人が目の前にいるのだ。

「なにかご用ですか？」

滑らかに綴つづられるアルファベットを聞いて、シャーリーはようやく我に返った。

「あ、こ、こんにちは。あの、通りにあった張り紙を見て寄せていただいたのですけれど」

「まあ。それじゃあご依頼を？」

ハドスンは嬉しそうにそう言うと、室内に身体を半分だけ入れて二階を見上げた。

「ホームズ！ お客様ですよー！」

シャーリーは目をぱちくりさせた。

「ホームズ!? あなた今、ホームズと仰おっしゃいましたか!？」

彼は死んだはずだ。

しかし、確かに彼女は言った。

ホームズと、あの名探偵の名前を呼んだのだ。

シャーリーは心が弾む気持ちだった。彼は以前、ライヘン

バッハの滝に落ちて死んだと報道された時も、その数年後には

けろっとして帰ってきた。今回も、きつとあの時と同じだった

のだ。皆を騙だまし、国葬までさせておいて探偵業から復帰するな

んで、いかにも彼らしい芝居がかった演出ではないか。

「え、ええ。言いましたけれど……」

こうしてはいられないと、シャーリーはハドスンの脇をするりと抜けて下宿の中に入った。玄関ホールを通り過ぎ、十七段ある階段を一つずつ上り、過去様々な依頼人が潜くぐったドアを押し開けた。

「ホームズさん!! あなたに相談したいことが——」

その言葉は、はたと途中で止まってしまった。

それもそのはず。中にいたのは、子供の頃網膜に焼き付けられた、驚わしばな鼻で角張った顎あごをした男性とは、似ても似つかない人物だったのだから。

シャーリーの目の前にいたのは、自分の胸ほどしかない少女

だった。

身長は四フィートと少し。可愛らしい童顔に、くりつとした大きな目が印象的で、短いふわりとカールした髪が彼女の幼い外見と非常にマッチしている。奇妙なことに、部屋の中でありながら何故かなぜ鹿撃ち帽しかうを被っており、これまた何故か男性用のインバネスコートを着用していた。

どうやら彼女は家具の整理をしていたらしい。その身長と比べるとかなり大きなカウチを懸命に引きずっている最中で、今は突然のちんにゅうしや闖入者ちんにゅうしやに、いきなりライトで照らされた子猫のようにぽかんと口を開けて停止していた。

「あ、し、失礼。てっきりホームズさんがご在宅かと」

途端とたんに平静を取り戻したシャーリーは、そう言ってそそくさと退出しようとした。

「ま、待って待って！」

少女は慌ててシャーリーを止めた。

振り返る。

相変わらず、ちっちゃな女の子である。

彼女は、自分の身体を少しでも大きく見せようとする無意識の行動からか、爪先立ちで声を弾ませて言った。

「相談したいことはなんでしようか。このわたくしがちやちやっと解決してさしあげましよう！」

目を輝かせて見上げてくる少女。シャーリーは、その生来の

子供好きで性格が表に現れ、ほっと顔をほころばせて小さな頭を撫なでた。少女の頭は、揺れるシャーリーの手と共にころころと転がった。

「まあ、それは嬉しいわ。でも子供はお勉強しないとね。お母さんはどこ？」

「わたし、もう子供じゃありません」

「はあ」

「ここには一人で住んでいます」

「えっと……」

シャーリーはどう反応したものか困り、頬ほほに手を当てた。

彼女が嘘をついている可能性もある。もしも嘘なら、どうに

か彼女を保護しなくてはならない。

「うくん。それは本当かしら。なににか、身分を証明するものは？ お名前はなんていうのかしら」

そう聞くと、少女はふふんと笑った。

帽子をすちやつと被りなおし、身なりを整え、誇らしげに胸を張った。

「なにを隠そう、わたしこそがリディア・ホームズ。かのシヤールロック・ホームズの魂を受け継いだ、二代目ホームズなのです!!」



ホームズは、怒涛どとうのように溢れる涙を拭いながら荷物整理を再開した。

事件の概要を聞き出す間もなく依頼人に逃げられたのだ。それもただの依頼人ではなく、この探偵事務所初めての客である。

念願の夢がとうとう叶う。そんな期待が見事に碎け散り、その欠片かけらが涙となつて彼女の頬からぼろぼろと零れ落ちこぼていた。うつつとしゃくりあげていると、こんこんとノックの音がして、ハドスン夫人が顔を出した。

「まありディアちゃん。そんなに泣いてどうしたの？」

「おばちゃん……」

ホームズは潤^{うる}んだ瞳を向け、彼女の胸に飛び込んだ。

「うわああん！　初めてのお客に逃げられた〜！」

「まあまあ。それは可^か哀^{わい}そうに」

そう言って、彼女はホームズの頭を撫でてあげた。

「やっぱりわたし、おじいちゃんみたいな探偵になるなんて無理なのかな……」

「そんなことないわ。何事も、なり初めは難しいものよ。さ、一階おいで。スコーンを焼いてあるから、一緒に食べましよう」

ホームズは、涙を拭きながらこくりと頷^{うなず}いた。

リディア・ホームズはシャーロック・ホームズの孫である。

シャーロックの一人息子、ハボック・ホームズの娘で、鉄鋼業によつて成功し新興富裕層の仲間入りを果たしたホームズ家の、れっきとしたお嬢様だ。

そんな彼女がベイカー街の一隅に下宿し探偵業を始めたのは、当然ながら祖父シャーロック・ホームズに憧れたからであつた。

ずつとサセツクスコの丘に引き籠もり、人を遠ざけていたシャーロックだつたが、孫のリディアには時折、その珠玉しゆぎよくの冒険を聞かせてくれたのだつた。

シャーロックはどこか人嫌いな節があり、引退してからもその性質が変わることはなかった。その煽りを最も受けたのが一人息子であるハボックだった。彼が物心つく前に母親が亡くなってしまったこともあり、家庭のことはすべてハドスン夫人に任せ切りにして探偵業に勤しむシャーロックが、ハボックは子供の頃から大嫌いだったのだ。

そんな思いも手伝ってか、一人娘が無謀にも探偵事務所を開くといふので未曾有みぞうの家族喧嘩が巻き起こり、リディアは持ち前の負けん気で家を出て、かつてシャーロックが暮らしていたベイカー街221Bの下宿部屋に居候させてもらう形で探偵業を始めたのだった。

「お父様もお母様もひどいのよ。『独りお遣いもできないような子が一人住まいなんてできるわけがない!』とか、『行動力だけはおじい様譲りねえ』とか、失礼なことばかり!」

ふてくされながら、ホームズは焼きたてのスコーンにクロテツドクリームをべったりつけて、乱暴に頬張った。

スコーンとクリームに紅茶とジャム。クリーム・ティーと呼ばれるティータイムメニューを用意したハドソンは、慈愛溢れる微笑^{ほほえ}みを浮かべた。

「お二人とも、あなたを心配しているのよ」

「どーだかね。世間体がどうか、淑女たるものこうあるべきだとか、自分の価値観を押しつけてるだけよ」

つんとしていたホームズだったが、しかしやがて力無くテールに倒れ伏した。

「でも、思った以上に大変だなあ。名を挙げるにしても、事件がやつてこないことにはどうしようもないよ」

愚痴ぐちるように言うと、ローザはいつもの笑顔を崩さず慰めた。

「こういうものは時の運よ。今に、うんと大きな事件が舞い込んでくるから、その時に全力を出せるよう力を溜めておきなさいな」

「そんなものかなあ」

ずっと紅茶を啜すすりながら、ホームズはため息をついた。

「そういえば、リディアちゃんがちようどお客様の相手をして
いる時、男の方が尋ねていらしたわよ。もしかしたらご依頼
だったのかも」

「ホント!？」

ばあつと顔を明るくして、ホームズは小さな身体を乗り出し
た。

「ええ。高級なお召し物を着こなす紳士だったわ。見るからに
育ちの良さそうな」

金持ちだ。

家具はひとそろ揃え実家から運びこんで来たが、ホームズは肝心の

生活資金をすっかり忘れていた。そのため、今お金という単語

には非常に敏感だった。

ホームズはうきうきした気持ちを抑え切れず、勢いよく椅子から立ち上がった。

「こうしちやいられない！ 早く荷解きを終えて、その人が来てもあきれて帰っちやわなないようにしなきゃ！」

ホームズははぐはぐと小さな口にスコーンを押し込むと、ぴゅうと二階へ駆け戻って行った。



「えーつと。これはこつちで、あれはあつちつと」

ホームズは、乱雑に積み重ねられた荷物をせつせと移動させる作業に骨を折っていた。

紳士のことなどすっかり忘れてしまうほどの熱中ぶりで、自分の背丈せたけほどもある化粧台をうんうん唸うなって押したり引いたりしていた。

「あーもう、めんどくさ！ それもこれも、あのインチキ業者のせいだ！」

ホームズは、荷物を運ぶために雇った運搬業者のことを思い出していた。他と比べて格安な運搬料に惹ひかれて頼んだのはいいが、これが世に云う悪徳業者で、部屋に運び入れるのは無料ただと最初に言っていたくせに、きちんと配置するのは別料金だと

法外な値段を突き付けてきたのだ。馬鹿にされたり子供扱いされるのが大嫌いなホームズは、明らかに足元を見ている業者達をラグビー選手ばりのゴールキックで追い出し、現在に至るのだった。

悪漢共を退散させたはいいが、小さい彼女に、大の大人でも苦勞する家具の整理はかなりの重労働である。

誰か人に頼もうか……、いやいやこんなことでお金を無駄使いしてどうすると、相反する意志に板挟みになってこれまたうんうん唸っていた時だった。

こんこんと、ドアをノックする音が聞こえた。

どうせまたハドソンおばちゃんだろうと振り向くと、埃が籠ほこり

もらないように開けていたドアを叩く、まったく見覚えのない若い男が立っていた。

身長は高く、目鼻立ちも整っていて、まるで舞台俳優のような存在感がある二十代半ばほどのその男は、ブラウンのトレレンチコートに身を包み、クレイパイプを片手に悠然と佇たたずんでいる。どこか禁欲的で威厳ある風格を醸かもし出しており、それに相まって目つきの鋭さがどこか冷酷な印象を与えていた。同年代の男性では決して出すことのできない貫禄とさりげない身のこなしは、まさしく英国紳士そのものといった様相だ。

「探偵事務所が再開されたと聞いて来てみれば……」
ゆっくりと、まるで品定めするように部屋を見回し、青年は

ホームズに目を止めた。

「後継者は、こんなちっちゃな女の子ですか」

ホームズはむっとした。

「見た目だけで人を判断してると痛い目見ますよ」

「なるほど、一理ある。その例外があなたなのかはともかくね」

普通に返せばいいところでわざわざ毒を滴したたらせてくるところが、ホームズをさらに苛いらだ立たせた。

「用件はなんですか」

もはや客への対応とはとても言えない、ぶすつとした声で応じた。

「気になるなら聞き出してみて下さい」

こちらを見ようともせず、青年は素っ気なく言ってみせる。ホームズは眉を吊り上げた。困惑しているのではない。怒っているのだ。

「依頼人は僕で、当然ながら全ての決定権は僕にある。話す内容も、タイミングもね」

言いながら、勝手に部屋に入ってきて勝手に柵の中を観察し、地球儀やら何やらに触れながら歩き回る。

第一印象は紳士だと思ったが、それは撤回しようとしてホームズは決めた。

「一応、ここはわたしの家なんですけどねー」

皮肉のバターをたっぷり塗った言葉を、ホームズは思い切り投げつけた。

しかしどうやらこの青年、バターは大好物だったらしい。まったく顔色を変えなかった。

「あまりぶつくさ言っていると、また初めてののお客様に逃げられてしまいますよ」

ホームズは驚いた。

「どうしてそんなこと知ってるの？」

「さて、どうしてでしょうね」

挑発的な言葉である。ホームズは怒り出したところをぐっ

と堪え、代わりに最大級の嘲笑を浮かべてやった。

「人間観察を得意としてるようだけど、わたし相手には十年早かったわね」

「ほう。自信ありですか」

「ええ。なにせ、シャーロック・ホームズの孫ですから！」

青年は、腰に手をあててふんぞり返っているホームズに、ようやく顔を向けた。

「面白い。では僕の素性を当ててみて下さい」

ホームズはわざとらしくこほんせきと咳をして、口を開いた。

「あなたはハドスンおばちゃんおばちゃんと知り合いで、わたしのことをおばちゃんから聞いて知っていた。でしょ？」

青年は口元を緩めた。

「何故？」

「だってあなた、この下宿に入るのに呼び鈴を鳴らさなかつたじゃない。それはつまり、呼び鈴なんて鳴らす必要がないくらい、あなたとおばちゃんは親しい仲だったということよ。それともう一つ当ててあげる。あなた、こつとうひん骨董品マニアでしょ」

「それまた何故？」

「今日び、そんな古くて壊れやすいだけのパイプを持ち歩く人なんて、骨董品マニアしかいない！」

ホームズは自信ありげに、どうだ！ という目つきを青年に向けた。

青年は静かに言った。

「浅はか」

ぐさりと、ホームズの心に氷の刃が突き刺さった。

「短絡的で、ただ事実を繋ぎつな合わせただけの、まったく論理に欠ける推理だ。凡人以下の人間観察ですな」

計四本の刃が突き刺さり瀕死ひんし状態のホームズは、それでもころうじて崩れ落ちることだけはしなかった。

「僕があなたの事情を言い当てられたのは、つい数十分前に温厚で見るからに子供が好きそうなご婦人が申し訳なさそうにこの下宿を出て行き、すぐに若い女性の見境みさかいの無い泣き声が聞こえてきたからです。結婚指輪をはめた彼女が、夫も連れず入居の相談に来るなんてまずありえないことですから、彼女があな

たに依頼をしに来たということは明白です。婦人の顔を見れば相談事がうまく運ばなかったことはすぐに分かりましたし、申し訳なさそうに窓を見上げる彼女の様子から、何か仲違なかつがいするような事態が起こったわけではないことも見て取れる。なのにあなたが泣き叫ばなければならなかったのは、断られた彼女の依頼に何か深い思い入れがあったから。未だ荷解きも終えていないこの部屋と、いつ依頼が来るかとしきりに窓を覗いていたあなたを見れば、この事務所がまだ開いて日が浅いことと、あなたがこの仕事に必要な以上の情熱を抱いている事実は疑いようがない。以上の事実をまとめ推論した結果、あなたは未だちやんとした依頼を受けたことがないのだらうと判断しました」

ホームズははっとした。

自分が依頼人と話をしていた時、紳士が訪ねて来たというようになことをハドスンおばちゃんが言っていたではないか。その紳士というのがこの男だったのだ。

「僕が呼び鈴を鳴らさなかつたのは、ちようど買い物に出掛けようと慌てて出て来たハドスン夫人とばつたり出くわしたから。この時間帯は、売れ残りを出したくないフード店が一齐にタイムセールスを行う時刻で、彼女は非常に急いでいた。一言あなたに声を掛ける余裕もなく、僕によろしくと言って早々と出掛けて行ったというわけです。そしてこのクレイパイプですが、小さく彫ほられた『愛する我が孫へ』という文字を注意深く

見つけていれば、祖父からのプレゼントであることがすぐに分かったはずですよ」

完敗だった。

ホームズはがくりと項垂れた。うなだ

「人間観察において、あなたが僕の足元にも及ばないことは理解できました」

きつと睨みつけるにらホームズを、青年は無視した。

「しかしまあ、それを補って余りある推理力があるという可能性も、太陽が西から昇るくらいにはありえるかもしれない」

青年は近くにあつた肘掛椅子ひじかけに座った。

そこはわたしの特等席だ、という言葉が喉まで出かかった

が、こんな男でも大事なお客様である。ホームズは我慢した。

「一つ、簡単な推理テストをさせてもらいます。その答えが分かるようでしたら、まあ、僕の依頼を受けるくらいの権利はあるものと見^{みな}做^なしてあげましょう」

上から目線の言い方にふるふる^{こぶし}拳を震わせながら、ホームズは怒りを織り交ぜた奇妙な笑顔をみせた。

「そー。すつごくうれしーなー」

「ちなみに、これはあなたの祖父シャーロック・ホームズが、実際に解決した事件でもあります。心して聞いて下さい」
ホームズの目の輝きが変わった。

それを見て青年は不敵に笑い、事件の概要を話し始めた。

「舞台はイングラランドでもそれなりに成功している実業家の豪邸です。その家ではとある決まりがあり、家の者は誰であろうと必ず十九時きっかりにリビングに降りて来て、共に夕食を取らなければならなかった。その日も普段と同じく、その一家はリビングでいつものように夕食を済ませ、各々の時間を寛くつろいでいた。そんな一日の疲れを癒す静寂の時間に、殺人事件が起こったのです」

ホームズはごくりと息を飲んだ。

そこには、どんな情報も聞き逃すまいとする気迫が見て取れた。

「登場人物は四人。若くから苦勞して財産を築いたために金遣

いには少々うるさいかっぷく恰幅の良いひげ面のご主人と、服集めになみなみならない情熱を注ぎながらも歳と共に自らの魅力が損なわれ始めていることを恐れる気の毒なご夫人。さらに肥満体形であることを同年代の女性に馬鹿にされて以来引きこもりがちな息子と、人が手を洗わないだけで発狂するほど怒鳴り散らすこまめで神経質なメイドです」

「……ねえ。その無駄な設定いるの？」

「デイトールにこだわるのが僕の主義です」

青年はすっぱりとそう言うのと、続きを話し始めた。

「その日は天気が悪く、朝から雨が降り続いていた。こまめなメイドは雨の陰鬱さと相まって洗濯物が乾かないことに苛立つ

ていたし、夫人は夫人でそんなメイドに対して苛立っていた。内気な息子は変わらず家に籠りつきりで、ご主人は久しぶりに取れた休暇に、ただ一人満足した様子だった」

雨の日に苛立つ登場人物と同様に、ホームズはどうでもいい情報を長々と語る青年にイライラしていた。

「さて、とうとう事件当夜。雨は刻々と酷ひどくなり、外は嵐のような様相でした。決まり通り全員で夕食を取り終えた後、主人は読書をすると言って自室へ戻り、息子はいつものように何も言わず部屋に籠り、夫人は一人リビングで紅茶を啜すすっていて、メイドは掃除に勤しんでいた。そんな時でした。突然メイドの叫び声が、豪邸内に響き渡ったのです。皆さんびっくりして駆

けつけると、廊下でメイドが腰を抜かしていて、こう言った。

『ご主人様が殺されています』とね」

ホームズは情報を整理するためか、人差し指でしきりにこめかみを押さえていた。

「さあ驚いたのは他の方々。皆さん急いで主人の部屋へと入ります。明かりをつけ、そこであつとびつくり。本当に主人は、胸をナイフで一刺しにされていたのです。部屋の中には荒らされた形跡はなし。窓も鍵が掛かっていて、外部の犯行はありえない。しかも、主人が死んだ時間は誰にもアリバイがない。

……さて、誰が犯人でしょう」

「え!? 情報それだけ!」

「ええ。これだけです」

悠々と、青年はパイプをふかして言った。

「ちなみにシャーロック・ホームズはこの事件、ものの数秒で解いてしまったそうですよ。さながら安楽椅子探偵のように、今と同じ話を聞いてね」

ホームズは近くの籐椅子とういすに腰を下ろすと、むむむと考え始めた。

「夫人はリビングにいたって言ってたけど、そこで誰か見たとか、家の構造上ご主人の部屋に行くには夫人の前を通らなければならぬ人がいたとか、そういうのはないの？」

「ありません。誰もが主人を殺せる立場にあった。これは不動

です」

再びホームズは考え込んだ。

しかし十秒もしない内に、突然立ち上がった。

「わかったわ！ それ、今流行りはやの叙述トリックでしょ」

「ほう。なにやらミステリオタクのご高説を聞いているような気分ですが、伺いましょう」

カチンとききたが、ホームズ、ここは我慢した。

「犯人は奥さん！」

思わずといった様子で、青年はクスリと笑った。

「それまたどうして？」

「だってあなた、奥さんにだけなんだか同情的にプロフィール

を語ってたじゃない。きつと服集めの趣味ががめついいご主人から理解されず、口論になったのね。それでとうとう、陰鬱な雨の日にぐさつとやつちやつたんだわ」

「どうだ！　と言わんばかりに挑戦的な瞳を向けてくるホームズを、青年はじつと見つめていた。

「……ホームズ。一つ聞いてもいいですか？」

「ん？　なに？」

「あなたの読むミステリ小説は、そんなトリックとも言えない理由で犯人が決まるものなんですか？」

しばらくの間、時が止まったように全てが固まり、ちつちと時計の針が動く音だけが聞こえていた。

「………決まらない」

「では却下ですね」

青年はにべもなかった。

ホームズはがつくりと項垂れる。

「せめてもの慈悲です。もう一度だけチャンス差し上げましょう」

ホームズは再びうんうん唸りながら考え始めた。

しかし今度は五分、十分と時間が経っても状況は変わらず、ただただホームズの頭が振り子ののように揺れるだけだった。

「……ちなみにホームズ。何故これが叙述トリックだと？」

見かねた青年が、ホームズに聞いた。

彼女は顔をあげ、さも当然のように言ってみせた。

「だってこれみよがしに偉そうに話し始めるんだもん。普通そうだと思うでしょ？」

「……どうやら僕の想像以上のようです。あなたの頭脳とやらは」

「え？　そう？　やっぱり溢れ出る知性は隠せないかあ」

ホームズはちよつと照れていた。

「バケツを逆さにしても落ちてこないものは、時にはつきり姿を見せているもの以上に目立つものです」

ホームズはじと目で青年を睨みつけるが、当の本人は涼しい顔で受け流していた。

「普通、これが叙述トリックだと気付いた時点で分かりそうなものですがね」

「あー！」

突然ホームズが叫び、再び勢いよく椅子から立ち上がった。

「犯人はメイドだ」

「ようやく気付きましたか」

どこかほっとした様子で青年は言った。

「うん！ ミステリで第一発見者が犯人なのは常識だもんね！」

青年は、じつとホームズを見つめた。

その顔は、頭を過ぎよった嫌な予感を否定したくても否定でき

ない心情を、如実によじつに表していた。

「……ホームズ。ちなみに証拠は？」

「え？」

再び、時が止まったかのような長い沈黙が流れた。

「わかんない」

「帰ります」

青年は立ち上がった。

「ま、待って待って!! だってあなた、犯人を当てるとは言っ

たけど、証拠も言えなんて言わなかったじゃない!」

「妙なところで頭が回りますね」

恥も外聞も恐れず実を取ろうとする剛胆さに、青年はある意

味で感心していた。

「こう見えても勉強はできるんだから！」

「勉強^ゝは^ゞ、ねえ。あながち間違ってもないな」

「むっかく！ そんなこと言つて、ホントは答えも何もないインチキ事件だったんじゃないの!？」

ホームズが憤然と抗議する中、青年はため息をついた。

「……明かりですよ」

「明かり？」

ホームズはきよとんとした。

「ご主人の遺体を見つけた時、僕は言いましたよね。明かりをつけて、あつと驚いたと」

「言ったけど？」

「そこから読み取れる情報は二つです。彼らが駆けつけた時、部屋に明かりはついていなかった。そして明かりがつくことで、ようやく死体を発見できた。つまり、全員で駆けつけるまで、その部屋は死体も発見できないほど真っ暗闇だったということです。なら最初に死体を発見したメイドは、一体どうやって死体を見つけたんですか？」

あ、とホームズは立ちつくした。

分かってみれば、あまりにも単純過ぎるトリックだった。

「で、でも……もしかしたらメイドが——」

「まさか、メイドが主人の断りもなしに手探りてさぐで部屋に入っ

行つたとか、死体を発見してからわざわざ明かりを一旦消して人を呼びに行つたなんて、不条理なことはい言いませんよね？」

ホームズに、もはや反論の余地はなかった。

「そ、そんなの卑怯よ！ 他にもいっぱい情報あつたのに、全然使つてないじゃない！ みんなをイライラさせる嵐みたいな豪雨は!? あの無駄に長いプロフィールは!? 十九時に全員集まるつていういかにもな設定は!? あんな意味深に語つてたのは一体なんだつたのよ！」

「現実と小説は違うんですよ。固定観念に惑わされず真実を見つけ出す。それが探偵というものだ」と、シャーロック・ホームズも言っていたように思いましたが？」

ぐつとホームズは口を噤つぶんだ。

全てにおいて完敗だった。

「ではこれで。あなたの素晴らしい推理力は、僕の記憶に刻まれる程度で充分でしょう」

背を向けてドアへと向かう青年を見ながら、ホームズは思った。

ここで帰してはいけない。せつかく仕事が入るチャンスなのだ。これを逃せば、いつまた依頼人が来るかも分からない。

ホームズは混乱していた。心臓は大きな音をたてて鼓動し、その小さな手は小刻みに震えている。その時、すぐ近くに火か

き棒が置いてあり、それに目が止まったのは、運命の悪戯いたずらともいえる偶然だった。

ホームズは考える間もなく、火かき棒を手にとっていた。ドアへと足を運ばせる青年。その背中に向かつて、ホームズはとつさに殴りかかった。

ガン！

鋭い音と共に、ホームズは静止した。

火かき棒の先端。そこに青年の姿はなく、代わりに金属製の置き時計があった。

青年がさつと身をひるがえ翻したことで、本来彼を襲うことになって

いた衝撃は、振り下ろされた火かき棒を伝い、そのままホーム

ズの手を襲った。

「にやああ!! 痺しびれるう!!」

びりびりと電気がほとばしる手を抱えて、ホームズは悶絶もんぜつした。

「殺す気ですか!」

青年の叫びは、まさしく的を射た発言だった。

「だ、だって……、いきなり帰ろうとするから、思わず……」

「そんなことで殺されたら堪りませんよ! 探偵が殺人を起こ

してどうするんです!」

冷や汗を拭いながら、青年はホームズを警戒してじりじりと後ずさる。

「そ、そんな警戒しなくてもいいじゃない。殺人鬼じゃあるま

いし」

「衝動的に手を出してくる人間の方がよほど夕チが悪いと思いますが」

もはやその体勢は、凶悪犯を目前にした警察官と変わらなかつた。

「もお！ それはあなたが帰ろうとするからでしょ!!」
どんとどんと何度も床を踏みつけて怒りを表現するホームズ。
その時だった。突然ばんとドアが開いて、一人の女性が顔を出した。

「ジェームズ!! 大丈夫ですか!? さつき凄いい音が……!」
それは、この探偵事務所に初めて訪れた依頼人、シヤー

リー・マクレーンだった。

「下がっていてください！　ここは危険です！」

「だから！　もうあんなことしないって!!」

「これほどの危険人物は初めてだ。もう何人が手にかけているのかも……」

「人の話を聞けー!!」

青年がなかなか言うことを聞いてくれないので、ホームズは再び痲癩かんしゃくを起こして暴れ出した。

收拾がつくまでには、しばらく時間が掛かった。



「……で？　これはいったい何の茶番？」

ふてくされたように唇を尖らせながら、ホームズは言った。シャーリーは終始申し訳なさそうな顔をしているが、もう一人の主犯格は悠然とパイプをふかしている。

「あの……ごめんなさい。ジェームズは悪くないの。元はといえば、私が頼んだことで……」

言いにくそうにしながらも、シャーリーは話し始めた。

「あなたの事務所を出てから、少し考えていたの。私の依頼はその……少し特殊で。だから、あなたのような柔軟な思考の方じゃないと引き受けていただけじゃないかと」

「要するに、仕事も選べないほど困窮した探偵はあなたくらいしかいないと言いたいわけです」

「あなたは黙ってて！ わたしはこの人から話を聞いてるの！」

青年は白々しくそっぽを向いた。

「そ、それでね。たまたまジエームズがあなたに用事があると言うから、少しその……信用できる人間か、見てもらうことになつて……。ごめんなさいね。なんだか試すようなことをして」

ホームズの身体はふるふると震えていた。

怒られると思ったシャーリーはぎゅつと目を瞑つむつたが、ホー

ムズの怒りはまったく別の人間に向けられたものだった。

「ちよつとあんた！ さつきさも自分が推理したみたいになわたしの素性を明かしてくれちゃったけど、あれ全部この人から聞いたことですよ！」

「そうですよ」

そのあまりに堂々とした言い草に、ホームズは二の句が継げなかつた。

「僕は別に、シャーリーさんと知り合いではないなんて一言も言つたつもりはありません。それに、彼女が帰って行く様子を見ていた僕が、何故わざわざ時間を置いて訪問したのかを考えれば、彼女と僕が友人で、その空白の時間は話に講じていたた

めだということも簡単に想像できると思いますが」
ホームズは地団駄を踏んだ。

まったく反論できなかつたのである。

「むかつくく！　なによこいつ！　ちよつと人を騙せたと思つて良い気になつて!!」

「これだけ言いくるめられておいて、『ちよつと』で済まそうとするあなたの方がよっぽどむかつきますね」

「くくつ！　ああ言えばこう言うく……!!」

ホームズが言葉のマシガンマシンガンを暴発しかけた時だつた。

シャーリーたしなが窘めるように言つた。

「ジェームズ。さつきから、こんなかわいい女の子に対する言

葉じゃないわ。レデイに失礼よ」

ホームズはぱつとシャーリーに顔を向けた。

彼女はそれを見て、にこりと笑ってみせる。

ホームズは、毒の沼地に腰まで浸かっせずぶずぶと沈んで行く中、自分の命を救ってくれる親友に出会った気分だった。

「わたしって身体ちっちゃい？」

「どんな人でも最初はちっちゃいものよ」

「頭悪いかな……？」

「とても賢そうなレデイに見えるわ」

心まで沁み渡るそよ風は、濁り切った事務所の空気を綺麗

さっぱり洗淨してくれた。

シヤーリーがさつと手を掲げる。ホームズは、跳躍する勢いでその手を叩き、「「いえい」と互いの仲を確認し合った。

ため息をつく青年を無視して、二人は両手を繋ぎ合ってステップを踏んでいる。

気分はまさしく花畑の中を踊る少女だ。しかし、あははと笑い合いながら回っていると、やがてホームズはその異変に気付いた。徐々にその回転スピードが増していつているのだ。風を切るような速さで振り回され始め、ぐんぐんと瞳に映る景色が回り、とつくの昔に地面から離れた足はばたばたと空を切っている。ホームズの小さな口からは、遅ればせながらほとんど悲

鳴のような叫び声があがっていた。

「あ、ごめんなさい」

シャーリーがようやくそのことに気付いたのはよかったが、彼女は条件反射で、大車輪の如く回っていたホームズの手をぱつと離してしまった。

アイザック・ニュートンによつて証明された慣性の法則は、ホームズの小さな身体にも当然適用され、彼女はくるくるとブーメランのように回転して本棚にぶつかった。

「おおー……」

ばさばさと落ちてくる本に埋もれながら、ホームズは驚きともいえない声を発した。

「ご、ごめんなさい！　悪気はなかったの。大丈夫？　怪我はない？」

「死ぬかと思った……」

「本当にごめんなさい。昔から木登りしたりして遊んでいたものだから、妙に力が強くなってしまっただけ。ちよつと気が緩んじやうと、つい……」

ホームズは助け出されながらも、彼女との接触には今後注意しようとして固く心に誓った。

「そ、それで、けつきよく依頼はどうするの？　わたしの知性を試していたなら、当然合格だったと思うけど」

「いい加減自分の無能を認めたらいいかがですか？」

怒りはとつくに頂点に達しているホームズだったが、うまい言葉が出てこず、身体を身悶えみもださせることしかできなかつた。

シャーリーは、そんな知性とはかけ離れた行動をとるホームズから、心配げに青年へと顔を向けた。

その動作は、彼女の探偵としての能力に対する僅かながらの不安を如実に表したものだつた。

「僕としては、あれほど簡単なサービス問題もこなせない人間に解決できるものなどないと思います……」

すちやつと火かき棒を掲げてみせるホームズを見て、青年は即座に黙る。

「ささ。この歩く毒ガス噴出器は無視して、ちやちやつと事件

のほうを話してみてください。ぜつつつたい、解決してみせま
すから！」

爛々らんらんと輝く星々を瞳に貯めて、ホームズは天真爛漫な笑顔を
見せた。

「はあ。そこまで言うのなら……」

ホームズは、嬉しそうに何度もこくこくと頷いた。

「ジエームズと一緒に聞いていただけますか？」

青年もホームズも、露骨に嫌そうな顔をした。

「何故僕まで聞く必要があるんです。役目はちゃんと果たした
はずですよ」

「そうよ！　なんでこんな奴の同席を許すの!？」

さんざん自分を馬鹿にしてきた青年を指さし、ホームズは叫んだ。

シャーリーは、「だってね」と言いながら、胸の前でかわいらしく手を組んだ。

「私、こう見えてあなたのおじい様、シャーロック・ホームズの大ファンなの」

「だから？」

「だから、見てみたいのよ」

「なにを？」

シャーリーはにこやかに笑って言った。

「リディア・ホームズとジェームズ・M・ワトスン。時代を超

えた名コンビの誕生を、よ」

その言葉に、ホームズは文字通り目が点になり、いじわるな青年ジェームズ・M・ワトスンは辟易してため息をついた。へきえき



「改めて自己紹介します。私は、スコットランドのロージアン州で代々地主をしております、今は亡きジャック・マクレーン伯爵の一人娘、シャーリー・マクレーンと申します」

先程までの浮かれた様子は一切なく、そこには歳相応の落ち着きある貴族がいた。ホームズも、自然と背が伸びる。

しかし先程から、ちらちらと視界に映るワトスンに気持ち散って仕方なかった。

祖父のシャーロック・ホームズに何度頼み込んでも会わせてくれることのなかったワトスン一家。その孫が今、ここにいるのだ。

だが今は興奮よりも、適当に部屋を物色して歩くワトスンに苛立たしさを感じて仕方がなかった。特に、自分の秘蔵コレクションである蓄音機のレコード集をちらと確認して鼻で笑われた時は、ぶん殴ってやろうかと半ば本気で思った。

もしもあの男が依頼の仲介人という立場でなく、またその依頼人が目の前にいなければ、再び火かき棒を手に追いかけてまわ

していたことは間違いないだろう。

「先程少し触れた通り、荒唐無稽こうとうむけいなお話になりますけれど……」

「構いません。話してください」

そう言われて安心したのか、シャーリーは「では」と前置きしてから話し始めた。

「私の依頼というのは、主人についてです」

「ほほう。意味深な言葉をつぶや呟かれたり、過去について決して追及するなとか言い含められたんですね」

「ホームズ。勝手に解釈を進めないで依頼人の話を聞いたかどうかですか？」

ホームズはむすつとしたが、ワトスンの言うことにも一理あることを認めめたのか、文句は言わなかった。

「ごめんなさいね。そういうものとは少し違うの。どちらかというと、あなたのおじい様が言っていた グロテスク 奇怪な事件グ に近いんじゃないかしら」

グロテスク 「奇怪、ですか？」

「ええ。私は、グロテスク 奇怪が恐怖に代わる、そのほんの一步が怖くて仕方がないんです」

言いながら身体を震わせる彼女を見れば、それがただの誇張でないことが容易に分かった。

「まず、主人についてお話しますね。私の夫は、かじ 鍛冶屋をなりわい 生業

にしている職人です。私も夫も、互いに信頼し、尊敬し、愛し合っていました。幸いなことに両親もその愛情を認めてくれて、私達の結婚を祝福してくれました」

「素敵なお両親ですね。そういう家系なら、やっぱり血筋を気にするものなのに」

階級意識が根強い英国人からすれば、非常に珍しい事例だった。

「ええ。両親は、それだけ私を愛してくれていたのでしょう。

今はもうこの世にいませんが、いまわ臨終きわの際にも、私と夫の幸せ

を、二人共祈ってくれました。けれどついこの前、私の愛した人も病気で亡くなって……」

ホームズは完全に感情移入してしまい、うるうるとつぶらな瞳を涙で潤ませていた。

「それじゃあ一人ぼっちなんですね。かわいそう。きつと心細い毎日なんだろうな……」

「あ、いえ。そうでもないんです。寡婦かふではありませんけれど、二十歳前後の息子が二人いますので」

「え!? 二十!？」

素で驚くホームズに、シャーリーはクスクスと笑った。

「厳密には私の子供ではありません。主人の連れ子です。ちよつと複雑な事情があつて、今は家で預うちかっています」

「はあ。なるほど……」

その複雑な事情というのが少し気になったが、ホームズは敢^あえて聞かなかつた。

「夫の突然の死に私はなにがなんだか分からなくて、しばらく呆然とした日々を過ごしました。葬儀もほとんど息子達に任せきりで、なんとか私有地の片隅に土葬いたしました。それから何週間かして、ようやく立ち直りかけた時に、あんな事件が……」

「どんな事件ですか？」

シャーリーは意味深に言葉を区切り、ホームズの顔を見つめた。

「時にホームズさんは、怖い話などはお好きですか？」

「あはは。それが全然ダメなんです。ほら、ブラム・ストーリーカーの『ドラキュラ』ってあつたじゃないですか。あれを寝る前に読んで以来すっかり」

「まあ！ 私とおんなじ。あなたくらいの頃に『ドラキュラ』を読んだの。それ以来怪談^{ばなし}は大嫌い」

「ほんと!? わたし、人が死体みたいになつて彷徨^{さまよ}い歩くつてというのがぞつとしちやつてだめなの。夜とか、暗いところにいるとそいつが近くにいるような気がして、しばらくは一人で家の中も歩けなかったもん」

「きゃあ！ 私もまったく同じ！ うれしいわ。こんなところで同志に会えるなんて！」

言いながら、シャーリーは興奮した様子でホームズの手を掴んでぶんぶん振り回した。

時折みしつと音がしてホームズの顔が苦悶と共に青ざめはしたが、シャーリーもすぐに落ち着いてくれたので大事には至らなかった。

「それでですね、ホームズさん。依頼の話に戻るのですが」
佇まいを整え、彼女は改めて話し始めた。

「〃それ〃を最初に目撃したのは住み込みで働いているメイドでした。私に報告に来た時は気の毒になるくらい取り乱しています。断片を拾って、なんとか伝えようとしていることは理解しました。けれどあまりにおかしな話で。それで私も少し気に

なつて、[〃]それ[〃]が出てきたという場所をちよつと監視して
たんです。そしたら、私もとうとう[〃]それ[〃]を目撃してしまっ
て……」

「[〃]それ[〃]というのは？」

シャーリーがずいと顔を近付けるので、ホームズもつられて
ずいと近付けた。

彼女は、秘密の話を打ち明けるように片手を口に当て、言っ
た。

「歩く死体です」

「……死体？」

「そう。死体」

「死体……」

ホームズは、その言葉を決して認めない頭に無理やり押し込めようと、死体死体とぶつぶつ呟いていた。

「それ以来、使用人たちもみんな怖がってしまつて……。かくいう私もその一人なんですけれど……。それであなたには、このおかしな現象の正体を突き止めていただきたいのです」

「うん……」

いつもうるさいくらいに元気なホームズの声が、ろうそく 蝋燭の火のようにか細かった。

「とりあえず仕事内容としましては、あなたにその死体が歩いたという場所を調べていただいで」

びくつと、ホームズの肩が震えた。

「棺ひつぎの中も、検あらためていただけると安心します」

びくびくつと、ホームズの小さな体が震えた。

シャーリーはおずおずとホームズを見て、言った。

「お引き受け願えますか？」

ホームズはしばらく黙っていた。

部屋の隅でばらばらと本を捲めくっているワトスンにちらと目を

やり、それからゆっくりと口を開いた。



自動車の普及によつて、華やかだつた鉄道会社も経営に支障を来し始めた昨今。それでもここ、ロンドン・アンド・ノース・イースタン鉄道はごつたかえすような盛況ぶりだつた。

最近になつていくつもの鉄道を合併して作られたこの鉄道は、四大鉄道会社でも第二位の規模を誇っている。

蒸気が蔓延まんえんして濁つた空気の中、ある人は列車に乗り遅れな
いように、ある人は乗客相手に品物を売り込み、人々は忙しな
く駅の中を行き交つていた。

そんな中、一際存在感を放つ青年が一人。どことなく落ち着

かない周囲の人間などお構いなしに、洗練された所作でパイプをふかしている。

青年は、隣にいる小さな少女に言った。

「で、なぜ僕もここにいますか？」

その少女、リディア・ホームズは、答えに窮きぎゆうして手をもじもじさせた。

「べ、別にいいじゃない。どうせ暇でしょ」

「別に良くもないし、それほど暇でもないのですが」

「紳士ならつべこべ言わないの！」

「怖いなら怖いと、はっきり言ったらどうですか」

「う……。ち、ちがうもん。そんなんじゃないもん。た、た

だ、常にわたしのそばにいる人がいないと、わたしの伝記が書けないと思ったただけだもん」

「あなたの伝記ですか。何ポンド積まれてもお断りですね」

ホームズがライオンに挑むウサギのように挑みかかって返り討ちにあっていると、シャーリーが謝ってきた。

「なんだかごめんなさいね。こんな突然来てもらうことになって」

「シャーリーさんのせいではありませんよ。誰がどう見ても悪いのはこのはた迷惑なお嬢様ですから」

ホームズの柔らかい頬をむにむにと引っ張りながら、ワトスンは言った。

「だあーもう！ やめんかこら!!」

ワトスンの魔の手から離れるために、ホームズはそそくさと彼から距離をとった。

「けれど、本当にお仕事は大丈夫なの？ 忙しいんじゃない？」

「いえ。僕の仕事は意外と自由の利くものですから。それに一応、彼女に用もありますしね」

「ああ。そういうええばそんなことを言っていたわね。何か依頼が？」

「まあそうなんですが、話したものでかどうか。……おや？ 彼女はどこですか？」

二人がきよろきよろと首を動かしていると、駅から出て来る人の波に吞まれているホームズをようやく見つけることができた。

押し流されながらも、最後の抵抗と言わんばかりに腕だけによつきり天に突き上げて「うにゃああ」と叫んでいる様は、まさしく海で溺れた子供そのものである。

荒くれる群衆からホームズを救いだすのに、かれこれ三十分は掛かってしまった。

「まったく。人に世話をかけさせることに関しては何天才的ですね、あなたは」

「ふう。なかなかの難所だった……」

ホームズは聞いているのかいないのか、汗という名の海水滴る額を手で拭っていた。

「たかだか駅を歩くだけで随分と大げさな言い方をしますね」

「人には得手不得手というものがあるの！」

「なるほど。あなたの人生は不得手の連続というわけですか」

「なにをー!!」

一行は、当初予定していた時間よりもだいぶ遅れた状態で切符売り場へ向かった。

今度は離れ離れにならないよう、ホームズはしつかりとシャーリーの手を繋いでいる。らんらん言いながら大きく手を

振って歩いていけると、途中ホームズの腕が外れそうになるとい
う事故が起こるも、それ以外は何の問題もなく切符売り場に到
着することができた。

ちなみに、ロージアン州行きの一等列車の切符は、お金がな
いと嘆く^{なげ}ホームズに代わってワトスンが立て替えた。

切符代をペニー換算にしても足りないくらいの文句を言われ
ると覚悟していたホームズだったが、珍しくワトスンは何も言
わなかった。

ホームズが礼を言い出しあぐねてもたもたしていると、ワト
スンは真面目な顔をこちらに向けた。

「早く乗り込みましょう。もうすぐ17時になってしまう」

「はあ？」

ホームズは文字通り首を捻ひねった。

その時間が列車の発車時刻でないことは確かだった。

「17時はアフタヌーンティーの時間と決まっています。さあ急いで」

ワトスンがあまりに急かすので、ホームズもシャーリーも慌てて列車に乗り込んだ。

さつさと席を見つけて荷物を置くと、ワトスンは言った。

「申し訳ありませんが、僕は早速食堂車に向かいます。シャーリーさんはどうしますか？」

「んー……。止やめておく。もう少ししてからデイナーをいただく

くわ。荷物は私が見ておくからいってらっしゃい」

シャーリーのはにかんだ笑顔に見送られて個室を出ようとしたワトスンは、何か思い出したのか、はたと止まった。

「そうだ。一応、この手紙だけ」

ワトスンが鞆かばんから取り出した一通の手紙を、ホームズは反射的に奪い取った。

「……あなたはしつけのなっていない猿か何かですか？」

「失礼ね！ レディを猿呼ばわりなんて」

「人の手紙をふんだくる方がよっぽど失礼です」

「だって気になるんだもん！」

ワトスンは口を開きかけたが、何も言い返さなかった。

言い争いをしている時間も惜しいのだろう。

「じゃあそれは渡しますが、代わりに一緒に来てもらいます。ほら、早く」

ホームズは猟師に捕獲されたウサギのように首根っこを掴まれ、文字通り引きずられながら個室を後にした。



一等の食堂車は美しい装飾品の数々と落ち着いた雰囲気に包まれた、いかにも上流階級を思わせる作りだった。ホワイトクロスを敷かれた丸テーブルは高級レストランを思わせ、そこに

座って上品に食事を口に運ぶ紳士淑女も気品に溢れた人物ばかりだ。

そんな中、ワトスンもテイススタンドを彩るケーキやサンドイッチを前に、優雅に紅茶のカップを傾けていた。

「ふう。やっと落ち着いた」

心の底から満足そうに一息つく。

そんな様子を、ホームズは頬杖をついて見つめていた。

「ほんつと、めんどくさい性格してるわね」

「規則正しい生活と正確な栄養摂取は脳を活性化させるんです」

「活性化してどうなるもんでもないでしょうに」

「あなたと違って、頭脳労働に忙しいのでね」

「わたしだって忙しいもん！」

思わず大声をだすと、じろりと他の客達に睨まれてしまった。

ホームズは口元を押さえ、声を小さくした。

「それで、さっきの手紙ってなに？　けっこう古そうだったけど、恋人からの手紙とか？」

少女特有の夢見がちな空想で身体を揺すりながら、ホームズは聞いた。

ワトスは黙って紅茶を啜った。

「あ、答えたくないんだー。そんな恥ずかしい内容なの？　わ

たし、見ちゃおっかな〜」

今までやられてきた分を取り返そうとホームズは攻撃に転じ始めるが、ワトスは素っ気なかった。

「どうぞ。好きに」

「あれ？ いいの？」

「減るものでもありませんしね。シャーロック・ホームズに宛てたジョン・H・ワトスの手紙なんて」

ホームズは言葉の意味を飲み込むのにしばらく時間が掛かった。

「ええ!? あれ、ワトスンおじちゃんの手紙なの!? しかもおじいちゃんに宛てた!?」

「またもや客に睨まれ、ホームズは再び口を押えた。

「で、でも、なんであんなものがそんなもの持つてるの？」

「当然、譲り受けたからですよ。とある人からね」

その〃とある人〃というのが気になるのだが、ワトスンは喋る気がないらしかった。

「じゃあ、それを後生大事に持ってた理由は？」

「教える義務がありますか？」

ホームズのこめかみにぴくりと血管が浮き出たが、笑顔の仮面で覆い隠した。

「義務はないけどー。教えてくれてもいいんじゃないかなー。

一応、おじいちゃんの孫なんだしー」

怒りのせいかどこか棒読み口調になっているホームズには頓着せず、ワトスンはじつと彼女を見つめた。

「僕はあなたのためを思っているんですよ。この手紙に纏まつわる一つの謎が、今一人の女性の人生を暗いものにしようとしている。あなたもその人と同じにならないとは限らない。それでもいいんですか？」

それがただの脅おどしでないことは、ワトスンの顔と口調でよく分かった。

ホームズは少しだけ躊躇ちゆうちよした。

「怖がるようなら止めておいた方がいい。この世には知らなくていいものもあるんです」

そう言って、ワトスは手を差し出した。

手紙を返せと言うのだ。

ホームズはどうかと思案していたが、ふところ渋々手紙を入れていた懐ふところに手を突っ込んだ。

その時だ。

ホームズの顔色が変わった。

まるで、何かとんでもないことに気づいてしまったように、目をまんまると開け、口を半開きにし、ワトスンの顔をじっと見つめた。

「……どうかしましたか？」

ホームズは、その問いに対し、意を決したように声を紡つむい

だ。

「……………手紙、なくしちゃったみたい」

ワトスンは、思わず頭を抱えてしまった。

(ちっちゃいホームズといじわるなワトスン 第一話／おわり)

ギヤルケー探偵と

第二話 ユイネラ喪失事件ちゃん

飛び出せ、 事件ちゃん!

これは斬新、それとも反則!?
「事件」と話せる少年探偵登場!

第14回BOX-AIR新人賞受賞、
ゆるくてかわいい
期待のゆるかわミステリ!

事件ちゃん

著 〓とよ たかゆき

Illustration 〓染谷みのる



秘

第十四回BOX-AiR新人賞受賞作選評

『ギャルゲー探偵と事件ちゃん』

とよ たかゆき

・ 事件の擬人化である少女を攻略することで事件を解決する探偵というアイデアに素晴らしいインパクトがあった。

・ 各話のゆるい会話劇が楽しい。

・ ミステリとして読むと謎解き部分の弱さが気にかかる。

・ 基本、一話読み切りの形なので、物語に入りこみやすい。

・ 登場人物がかわいらしく、文章も平易なので年少の読者にも受け容れてもらえそう。

受賞

おめでとうございます
ございます

とよたかゆき

1980年生まれ。福岡県出身。広島大学文学部卒。本作で第14回BOX-AIR新人賞を受賞、デビュー。

染谷みのる——Someya Minoru

ゆつたりと生きている関西人。甘いものには目がないです。

「ソメル」 <http://asapi.client.jp/>

日本のとある地方都市、宵山町よいやま。元々は夏に避暑地として日本中の富裕層が好んで訪れることで有名であったこの町。さらに最近では近くの自然公園が世界遺産に認定されたことで特に大きな賑わいにぎわいを見せていた。

「ふうむ。これは困ったな」

その宵山町にある日本全国でも有数の高級ホテル『レイクサイド宵山』、その最上階のスイートルームでしきりに首を傾かしげているのは一人の中年男性だった。

「いったいどういうことなんだ？ 俺にはさっぱりわからん」

彼の名前は梶森進^{かじもりすすむ}。刑事であつた。最近はお腹やあごに少

し脂肪が多くなつてきてはいたが、文武に長けた優秀なベテラン刑事だ。その彼が夜中に突然呼び出されて担当することになつた事件の現場が、ここレイクサイド宵山の最上階スイートルームだつた。

「梶森警部……」

パーティーでもできるほどの広さを持つ部屋の中、いるのは梶森だけではない。ほかにも数人の警察官が慌^{あわ}ただしく動き回つていた。そのうちの一人が梶森に暗い顔で話しかけてきた。

「どうも駄目ですね。いくら部屋の中を探しても見つかりませ

ん」

梶森は警察官に厳しい表情を向ける。

「本当に隅から隅まで調べたんだろ。ベッドや枕の中、エアコンなどの機械の中、通気口、排水管、とにかく物を隠せそうなところは全部だぞ？」

「もちろんです。X線スキャナーや小型カメラを使って部屋の中のありとあらゆるところを調べました。しかし、怪しい物は何も見つかりませんでした」

「……そうか」

梶森は落胆して、ため息まじりに返した。

「ご苦労だった。今日はもう帰っていいぞ」

「はい、お疲れ様です」

何人かの警察官が機材をまとめて部屋を出て行った。ただ、梶森だけはまだ部屋の中に残っていた。そこへ――。

「刑事さん！」

一人の女性が金切り声を上げて、部屋の中に入ってきた。

「わたくしの大切な『ユイネラ』はまだ見つかりませんの！」

「お、奥さん。部屋の中に入ってこられては困りますよ」

「どうしてですの！ ここはわたくしが取った部屋ですよ。」

わたくしが入って何が悪いのですか！」

「も、申し訳ありません。まだ捜査中ですので。規則で誰も部屋に入れてはいけないことになっていますよ」

睨みつけてくるその女性にたじたじとなつて答える梶森。彼女の名前は鏡山京子、今日この部屋に泊まっている客だ。

「そんなことより！」

真っ赤なドレスに身を包んだ鏡山夫人は大声で言う。

「わたくしのユイネラですわ。あれはまだ見つかりませんの！」

梶森は及び腰で答える。

「現在、鋭意捜査中です。もうしばらく待っていただければ必ず見つけて差し上げますので、どうかお待ちください」

「本当ですか？ あなた、あのネックレスがいくらかご存じなの？ 一億円ですよ、一億円！」

梶森は唾^{つば}を飲む。

「……はい、それはもちろん」

鏡山夫人が無くしたものは貴重なブルーダイヤモンドをあしらった高級ジュエリーネックレス、ユイネラであつた。しかも、ユイネラは宵山町中心部で開かれた今晚のオークシヨンで彼女が手に入れたばかりのものであつた。

「何よりも美しいユイネラ……まだほとんど身に付けたことがなかつたのに……まさか盗まれてしまうなんて……」

夫人は今にも泣き出しそうな顔だ。

「きつとこのホテルの従業員が盗んだに違いありませんわ！

刑事さん、絶対にあのネックレスを取り返してください。絶対に

ですからね！」

「わかりました。我々におまかせください」

涙を浮かべて部屋を出て行く鏡山夫人。その後ろ姿を見ながら梶森は考えた。

（とは言ったものの、この先どうやって事件の捜査を続けたものか）

梶森は悩んでいた。

（夫人はホテルの従業員にネツクレスを盗まれた、と言った。

しかし、ネツクレスが部屋の中にあつたとき、ネツクレスを盗むことが可能だと思える人間は一人もいなかった。ということ。つまり、ネツクレスは盗まれたのではないということだ）

さらに部屋を隅から隅まで調べた結果、どこにもネットワークレスを発見することができなかつた。

（実際にネットワークレスはどこにもない。単純な紛失事件というわけでもなさそうだな）

部屋の中から忽然こっぜんと姿を消したジュエリーネットワークレス、ユイネラ。いったいどこに消えたというのだろうか。一億円もするもの、しかもオークションで落札されたばかりのものに窃盗せつとうの疑いがあるとすればかなりの事件だ。マスコミが嗅ぎつけてくるのは間違いない。解決が長引けば宵山町の警察官としての信用や名誉にも関わってくるだろう。梶森としては是ぜが非ひでも迅じん速そくな事件の解決を凶はかりたいたところだった。

「こうなったら……」

梶森はある決心をした。

「あまり気は進まないが、あいつに頼むしかないようだな」
そして、ある人物に携帯電話をかけたのだった。

次の日の朝。観葉植物やシツクな調度品ちようどひんで落ち着いた雰囲
気に整えられたレイクサイド宵山の受付ロビー。きれいに着
飾った宿泊客たちが出入りするなかで、一人だけ場違いな姿を
した高校生ぐらいの少年がいた。

「あーもうー。めんどくさいなー」

ぼさぼさに伸びた髪に、鼻からずり落ちそうにかけられた眼

鏡、痩^やせた体がまとっているのはぼろぼろに着崩れたジーンズとTシャツ。しかもTシャツには大きな文字で「まりしい激ラブ」と書かれてあった。

「今日はせつかくの休みだし家で僕の彼女、まりしいといちやいちゃしようと思っただのに。急にこんなところに呼び出されるなんて。ほんと、ついてないよなー。でもまあ、いっか」

ロビーの椅子に座った少年はポケットから何かを取り出してスイッチを入れた。それは携帯ゲーム機だった。

「高級ホテルでまりしいとデートっつていうのも洒落^{しゃれ}てていいかもな」

にたにたとした笑みを浮かべる少年。そのゲーム機の画面に

は『ラブコーラス』というタイトルが映し出されていた。彼がボタンを押していくと、今度は一人の女の子が画面に登場した。

「うおおおおおーっ！　僕のまりしいいいいいい！」

突然、画面に向かって大声を上げ始める少年。何かと思つて近くにいたホテルマンや客たちが彼に注目したが、それでも彼はおかまいなしでゲームを続ける。

「僕のまりしい！　会いたかったよおおお、僕は一秒でも早く君の顔を見たかったんだあああ！」

少年が変わらない大声で画面にそう呼びかける。それから彼が画面内のある項目を選んでボタンを押すとゲーム機からも声

が出てきた。

「おはよう、弥人君^{やひと}。あたしもすつごくうれしいよ！」

画面の中にいるショートカットの女の子はにっこりと微笑^{ほほえ}む。それを見て弥人と呼ばれた少年はまたゲーム機に話しかける。

「おはよう、まりしい。今日は高級ホテルで君とデートだよ。楽しみだね」

ボタンを押す弥人、ゲーム機から流れ出る女の子のかわいい声。

「ホントに？ あたしもすつごくうれしいよ！」

そんな感じで人目も気にせずゲームの中の女の子と会話をし

続ける弥人。

「ああ、まりしい。なんてかわいいんだ。顔も声もかわいすぎたたまんないよ。日本のゲームメーカー、コナムは最高だな！」

彼が今、携帯ゲーム機でやっているのは恋愛シミュレーションゲーム『ラブコーラス』というものだった。ゲームの中に出てくる女の子たちといちゃいちゃできる、いわゆるギャルゲーだ。弥人はこのゲームが大好きで、どこに行くにも持ち歩いていた。そして、どこに行っても誰の目も気にせずにかうして声を上げて画面内の彼女との恋愛にのめり込むのだった。

「ねえ、まりしい。僕たちが今いるこのホテルはね、レイクサ

イド宵山といつてとつてもいいホテルなんだよ。内装も豪華だし部屋からの眺めも最高らしいよ。僕たちのデートにぴったりのところだよね！」

そこへ。ゲームに夢中の弥人に一人の男が話しかけてきた。

「……おい、弥人」

しかし、それでも弥人は気がつかない様子だ。

「ねえ、まりしい。このホテルのすぐ隣には大きな湖があるんだ。あとでそこにも行ってみようね。え、なに？ すつごくうれしいって？ 僕もだよ、うへへ」

男はそんな弥人の様子に、次はどなるような大声で呼びかけた。

「おい！ 谷口弥人！」たにくち

「うわっ、びつくりした！」

さすがに今度は気がついて、横に立つ男に顔を向ける弥人。

「なんだ、梶森さんか。おどかさないでくれよ」

「なんだじゃないだろう、弥人」

梶森進警部はしかめ面で続ける。

「俺は仕事でおまえをここに呼んだんだ。それはおまえもよく分かってるだろう。ゲームなんかして遊んでいる場合じゃないんだぞ」

「失礼だな、梶森さん！」

なぜか逆ギレしてくる弥人。

「僕は遊びのつもりなんかじゃ全然ないよ！　まりしいとは本気で付き合ってたんだからさ！」

「……あ、ああ、そうか」

怒ってくる弥人の顔を見ながら頭が痛くなってくる梶森。彼は自分のこめかみを手で押さえながら思う。

（谷口弥人。よりもよって事件の解決にこんな変なやつの手を借りなければならぬなんて。しかし、弥人は変人だが探偵としては信じられないほど優秀だ。さすがは警察署長の息子と聞いたところか。とにかく今回の事件は弥人に任せるしかないだろうな）

梶森は気を取り直して言った。

「それでは、弥人。事件の説明をするから上の部屋まで付いて来てくれるかな？」

「しようがないなあ。わかったよ、梶森さん。でも、ちよつと待ってね。まりしいとさよならのあいさつをしないといけないから」

そう言った後の弥人の行動に梶森は目を疑った。

「じゃあまた後でね、まりしい。ぶちゅう〜」

弥人はゲーム画面の女の子に濃厚なキスをしたのだった。

「……………」

その様子を見た梶森は頭痛がひどくなるのを感じた。

（ほ、本当にこんなやつに事件を任せていいのだろうか？）

ベテラン刑事の不安はつのるばかりであった。

「ここが事件が起きた部屋だ」

最上階のスイートルームまで弥人を連れてきた梶森。

「うわあ。すごい部屋ですね」

弥人は広い室内を目を輝かせて歩き回る。宵山にあるホテルで最も値段が高いと言われるこのスイートルームを借りるには一人一泊につきおよそ百万円もかかる。ただ、それだけの価値は充分にあるだろう。高い天井に豪華なシャンデリア、顔が映り込むほど滑らかな石材の壁と床、ため息がでるほど細やかな装飾がなされたテーブルや椅子などの家具。大きなソファーや

ベッドに座ってみると体がふわりと浮かび上がったかのような柔らかさを感じる。

「まるで王様にでもなったみたいなお気分だ」

弥人だけではなくこの部屋に泊まった全員がそんな感想を抱くのだった。

「カーテンを開けてもいいですか？」

「ああ。そこのスイッチを入れてみる」

それにこの部屋一番の目玉は窓から見える外の景色にあった。今、壁の一面を支配する巨大な窓にはすべてカーテンがかかっていたが、弥人が窓際の小さなボタンを押すと、するすると横に長いカーテンがたたまれていった。

「おおーっ！」

思わず歓声を上げる弥人。目の前いっぱい広がるのは青く揺らめく湖の姿だった。

「宵山湖がこんなそばにすぐ側で一望できると。素晴らしい……」

レイクサイド宵山湖は宵山湖と呼ばれる大きな湖に文字通り隣接するように建てられていて、この最上階の部屋は湖のもっとも良い眺めが堪能たんのうできる場所であった。

「ちよつと外に出てみてもいいですか？」

「そうだな。バルコニーの方も調べてみてくれ。おまえの目から見たら何か分かるかもしれん」

部屋の外は広いバルコニーが設けられていた。窓を開けて外に出てみる。

「おおっ。すっげー気持ちいい！」

バルコニーの上には夏とは思えないほど涼しい風が吹いている。おそらく湖上の冷えた空気が流れてくるのだろう。宵山町が避暑地として有名な理由の一つにはこの湖からの風が挙げられる。

「それにしてもきれいな景色だなあ」

欄干らんかんにもたれかかるようにして湖を見渡す弥人。夏の光を浴

びてきらきらと光をたたえる湖面、遠くにはうつすらと市の中
心街の様子が見える。夜になればそちらの夜景も素晴らしいと

聞く。本当にここはいい部屋だ。高い値段にもかかわらず予約が途切れない理由がよく分かるのだった。

「ふくん。真下はもうほとんど湖なんだ」

弥人は欄干から身を乗り出すようにして下を眺^{なが}めてみた。バルコニーのすぐ下は切り立った岩場のようになっていて、少しごつごつとした湖岸と波のない鏡のような水面が見えていた。

「よし、ここはもういいかな」

しばらくして弥人は梶森警部がいる部屋の中に戻ってきた。梶森は弥人にいくつかの書類を手渡した。

「これが事件の詳しい資料だ」

「あ、はい」

弥人は書類に目を向ける。

「被害者は鏡山京子。三十歳。東京からの旅行者だ」

梶森も同じことが書かれた書類を見ながら弥人に事件の詳しい説明を始める。

「一昨日から夫の鏡山敏三としぞうと一緒にこのホテルに泊まっている。二人の詳しい身元については後ろのページにあるから後でしっかりと目を通しておいてくれ」

弥人が少しそのページを見てみると、二人の顔写真や詳細に書かれた経歴などが載っていた。鏡山京子、ほそおもて細面の美人だ。

夫の鏡山敏三は四十六歳、不動産経営で富を築いた大金持ちだ。最近では他の業種にも仕事を拡大して富を増やし続けている

るらしい。宵山町は初めてではなく夫婦で何度かこのホテルにも泊まっているようだった。

「事件は昨晚の九時頃に起こった」

梶森は事件についての説明を続ける。

「市内の大手オークションハウス『ルミアール』で一億円ものジュエリーネックレス、ユイネラを落札した後、鏡山夫妻がこの部屋に帰ってきたのが午後九時五分だ。部屋の中に入ったのは夫妻だけではなく、オークションハウスから派遣されて一緒に付いてきた警備員が一人いた。警備員の名前は浅瀬川太一。あさせがわたいちもちろん彼の身元についても洗ってある。資料は同じく後ろのページにあるから見ておいてくれ」

弥人はうなずいて、ちらりと浅瀬川の情報を見る。浅瀬川太一、四十歳。警備員らしく大柄で引き締まった顔つき体つきをしている。大手オークションハウスの専属警備員を務めるだけあって彼の素性すじょうや経歴に不審な点はまったく見られないようだった。

「三人は部屋に入るとすぐにトランクケースに収められたユイネラを取り出して無事を確認してみたそうだ」

梶森は続ける。

「ユイネラの幻想的な輝きは三人の目にしつかりと焼き付いている。つまり、この時点では確かに本物のユイネラがこの部屋の中にあつたというわけだ。それから一度、夫人はユイネラを

トランクケースにしまったそうだ。それを見て浅瀬川はひとまず安心して部屋を出ることにした。浅瀬川は鏡山夫妻に頼まれてもうしばらくはユイネラの警備を続ける予定だったそうで、その晩も部屋を出てから部屋の前で警備を始めた」

梶森警部の声がさらに真剣味を帯びる。

「そして、浅瀬川が部屋を出てほんのすぐのことだった。おそらく一分も経たないであろううちに、部屋の中から大きな女性の悲鳴が聞こえてきた。慌あわてて浅瀬川は鏡山敏三に部屋の中へと入れてもらった。中にいたのは開かれたトランクケースの前で青ざめる鏡山京子の姿だった。浅瀬川が彼女に近寄ってみると悲鳴の理由がわかった。トランクケースの中からはユイネラ

の姿がきれいさっぱりなくなっていたからだ。それからはずぐさま浅瀬川が警察に連絡を入れたそうだ」

「警察が三人の元に到着するまでの間、部屋に人の出入りはまったくなかったわけですね」

「ああ、そうだ。その辺は浅瀬川がしっかりと対応してくれている。およそ十五分後、部屋に俺たち警察が着くまで部屋を出入りした者は一人もいない。それはホテルの防犯カメラでも確認されている。そして、俺たちはすぐに三人の体や部屋の中をX線スキヤナーなどを使ってくまなく調べてみたがユイネラはどこからとも発見されなかった。トイレの排水管の中まで調べたんだ。それは間違いない。つまり、一瞬にして一億円の高級

ネツクレスはどこかに消え去ってしまったというわけだ。これが事件の概要だ」がいよう

話を終えた梶森。

「……なるほど、わかりました」

弥人は書類をテーブルの上に置いてソファアームの上に寝っ転がった。

「浅瀬川さんが部屋を出て、また入るまでのおよそ一分の間。この短い間にユイネラはトランクケースの中から霧のように姿を消した、というわけですね」

「そういうことになるな」

「うーん」

弥人は高い天井を見ながら首をひねる。

「まるで手品てじなのようだ」

弥人は考える。

（この事件は盗難ではないようだ。三人の人間がいるなかで誰にも見られずに一分間でトランクケースの中からネツクレスを盗み出して逃げる、そんなことが可能なわけがない。では、この事件はきつときょうげん狂言、いわゆるでつち上げ犯罪だろう。何らかの理由で犯人はユイネラが盗まれたかのように見せかけようとしているんだ。となると、どう考えても怪しいのは鏡山夫妻だ）

弥人は梶森に尋ねる。

「梶森さん、ユイネラには保険金が掛けられていましたか？」

もしユイネラに多額の保険金が掛けられているとしたら鏡山夫妻による保険金詐欺さぎの疑いが濃厚だ。ユイネラが盗ふとまれたと嘘をついてどこかに隠したならば、彼らの懐ふところには保険金がまるごと転がりこんでくることになる。

「それがなあ……」

梶森は渋い表情で答えた。

「保険金詐欺の可能性は俺も考えてみた。しかし、実はユイネラはまだ落札されたばかりで保険は掛けられていなかったみたいなんだ。鏡山夫人はこんなことになるならすぐにも保険を掛けていれば良かった、としきりに悔くやんでおられたよ」

「……そうですか」

最初の考えはどうやらハズレのようだった。確かに考えてみればこの詐欺を成立させるにはユイネラを「どこかに隠して、また回収する」ということをしなければならぬ。ただし、この部屋の中にユイネラは見つからなかったもので、それは不可能なことかもしれない。

（だが、しかし。それでもまだ怪しいのは鏡山夫妻だ。きつと彼らが犯人で彼らは何かを企んたくらでいるはずだ）

今まで数々の難事件を解決してきた弥人の直感はしきりにそう訴えるのだった。

「よしっ」

弥人はソファから立ち上がった。

「そろそろ本気でやるか」

弥人は梶森に言った。

「しばらく一人で考えたいと思います。梶森さんは部屋の外に出てももらえますか？」

「ん？」

事件現場に部外者を一人だけで置いておく。こんなことは普通なら許されることではない。なのに梶森はあっさりと了承した。

「うむ、いいだろう。今回もうまく事件が解決できるところを願っているぞ、弥人」

「はい、がんばりまっす」

部屋を出ていく梶森。彼には弥人との長い付き合いからわかっていった。谷口弥人は本気になると事件現場で一人になって集中して考えたがることを。そして、しばらくして部屋から出てくるときの弥人は必ず事件を解決してしまっていることを。梶森は弥人のことを誰よりも信用しているのだった。

バタリ、と大きなドアを閉めて部屋を出た梶森。広いスイートルームの中にはこれで弥人一人だけということになった。

「……じゃあ、始めるか」

すると、弥人は部屋の中を歩き回りながら突然何かしゃべり出した。

「おーい、事件ちゃん」

誰かに呼びかけるような声だ。

「出ておいでー」

もちろん部屋には弥人のほかは誰もいない。出てくるも何もないはずだ。それでも弥人はいないはずの誰かに対して呼びかけ続ける。

「もう部屋の中には僕しかいないから出ておいでー」
うろろうろと歩きながら呼びかけ続ける。

「事件ちゃん、出ておいでー」

あまりの難事件のために弥人の頭はおかしくなってしまったのだらうか。そう思われても仕方のない弥人の様子だったが。

「事件ちゃん、どこにいるんだーい？」

おおよそ五分ぐらい経ったとき。

「もうっ、騒がしいわね！ さっきからなんなのよ、あんなたっ」

突如として^{とつじょ}弥人の耳に女の子の声が飛び込んできた。

「事件ちゃんっ？」

慌てて声をした方を振り向く弥人。すると、目の前には一人の少女が立っていた。

「ちよつとあんだ。なれなれしくあたしのことを呼ばないでよね！」

「ご、ごめんなさい」

つり目がちで怒るその少女に弥人はとりあえず謝っておく。

「まあいいわ。それであんたはなんなの？　不思議とあたしのことが見えるみたいだけど？」

腕組みをして弥人のことをじろりと見るその少女。年の頃は中学生ぐらいだろうか。長い金髪のツインテールに宵山湖の水のように青い瞳、白いワンピースのようなドレスが驚くほどよく似合っている。そして、さらに驚くのが彼女の控えめな胸元で輝いている大きなジュエリーネックレスだった。それは紛れもないあのユイネラだった。

弥人は彼女の予想を越えるかわいさに喜びながら答えた。

「僕の名前は谷口弥人。これでも探偵なんだ。僕は君のことを

解決しようと思っただけに来たんだよ」

「あんたがあたしのことを解決するですって？」

「うん、そうだよ」

「あたしは自分で言うのもなんだけどかなりの難事件よ。あんたみたいな冴えない男に解決なんてできるのかしら？」

自分自身のことを難事件などと表現する少女。もちろん彼女は人間ではない。その正体は『事件ちゃん』という不思議な存在だった。事件ちゃんは事件を取り巻くありとあらゆる概念がいねんの集まり、言わば『事件の象徴』しょうちようだ。そして、事件ちゃんは弥人にしか見ることも触れることもできないものだった。

「君のことを解決できるかどうかはやってみないとわからない」

い」

弥人は事件ちゃんをまっすぐ見つめて答える。

「でも、僕は君のためならなんだってするよ！」

「……そ、そう」

事件ちゃんは弥人の力強い言葉に少し頬ほおを赤らめた。

「そういうことならあたしもあんなのことを手伝ってやらないこともないわ。せいぜいあたしのためにがんばってよね！」

事件ちゃんの照れくさそうな励はげましに弥人は元気に応える。

「ああ、もちろんさ！」

このように弥人は事件ちゃんと会話や推理を進めていくこと
によって事件の解決を図るのだ。

『事件のギャルゲー化』

これこそが警察署長の息子でありながらギャルゲーのやり過ぎで少し頭が変になってしまった弥人が持つ特殊能力だった。

「事件ちゃん、まず僕の推理を聞いてくれるかい？」

「あんたの推理？ ええ、いいわ。言ってみなさい」

弥人は部屋の中をゆっくりと歩きながら話し始めた。

「誰にも見つからずにトランクケースからユイネラを盗み出して逃げる、そんなことは絶対に不可能だ。だからこの事件は盗難ではないと僕は思う。となるとユイネラが消えたというのは前もって誰かがしくんだ狂言である可能性が高い。犯人はおそ

らく鏡山夫妻だろう」

事件ちゃんは意地の悪そうな笑みを浮かべる。

「あら、そうとも限らないんじゃない？　警備員の浅瀬川太一が犯人、もしくは鏡山夫妻との共犯ということも充分に考えられるんじゃない？」

弥人は梶森警部からもらった書類を見ながら、

「いや、浅瀬川さんはシロだ。彼は今回のように高額な宝石類の警備を担当した経験も多く、会社からの信頼も厚いようだ。

事件が起こったならば真っ先に疑われることがわかっていいる彼がこんな犯行に及ぶとは到底思えないよ。それにホテルの通路に設置された防犯カメラの映像からも浅瀬川さんの行動に不審

な点は見られない。すべての証言と一致しているよ」

弥人の眼鏡越しの目が鋭さを増す。

「むしろ鏡山夫妻の方が浅瀬川さんの信用を利用して考えると考えた方が自然だ。浅瀬川さんの証言により、ユイネラが消えたトリツクにおよそ一分間という極端に短い時間的条件が発生している。おそらく鏡山夫妻はわざと浅瀬川さんが部屋を出てすぐというタイミングでユイネラを隠したんだ。ユイネラが消えたと思わせるトリツクをより強固なものへと変貌へんぼうさせるためにね」

事件ちゃんは弥人の推理を聞いて眉を開いた。

「なるほどね。どうやらあんた、バカじゃあないみたいね。な

かなかの洞察力どうさつりよくだわ。さすがあたしを解決するなんて大口を叩くだけのことはあるわね」

「へへ、どうも」

「でも、いい気になるのはまだ早いわよ。謎なぞはまだまだ残っているわ」

事件ちゃんは挑戦的な視線で弥人を見る。

「いいわ、じゃあ仮に犯人は鏡山夫妻だとしましょう。でも、

彼らの犯行動機はいつたいなんなのかしら？　彼らはなんのた

めにトリツクまで使って落札したばかりの高級ネットクレスを隠したりしたのかしら。保険金詐欺じゃないってことぐらいは当

然わかっているわよね？」

「うん、もちろん。でも、さすがに鏡山夫妻の犯行動機までは僕にもはつきりとわからない」

少し考えて弥人は言った。

「たぶんお金儲けかねもうに関係したことではあるとは思うんだけど」
事件ちゃんは意外そうに聞き返す。

「へえ、犯行動機が金儲けに関係あると思う根拠は？」

「資料を見てみると夫の鏡山敏三、この人は不動産経営で成功した実業家でかなりのお金持ちなんだ。しかし、経歴を見てみると生まれが裕福なわけでも、若い頃から成功していたわけでもない。最初は小さな飲食店から始めてむしろ貧まずしいとも言える生活を長く続けていたみたいだ。事業がうまくいきだしたの

はどうもここ数年の話のようなんだ。彼は苦勞人だと言ってもいいだろう」

「まあ、そうね」

「そして、現在の彼はかなりの勢いで事業の拡大を図っている。彼は野心家でもあるようだ。そんな人並み以上にどん欲だと思われる彼が一億円も払って手に入れたものをトリツクのネタに使って何かをしようとしているんだ。大きな金銭的な見返りを期待してのことだと考えるのが自然なんじゃないかなあ。

いや、ちゃんとした根拠があるってわけじゃないんだけど」

ややあつて、事件ちゃんが口を開いた。

「あんだ、ホントに鋭いのね。あたし、びっくりしたわ」

彼女は弥人の目の前までやって来た。

「あんだ、弥人とかいったかしら？ いいわ、弥人。こうなつたらあたしが特別に大サービスをしてあげる。あんだに鏡山夫妻の犯行動機、そのヒントを教えてあげるわ」

「えっ、いいの？」

「ええ、いいわよ。ヒントぐらいなら教えてあげてもいいわ。

ただしサービスするのはこれつきりなんだからねっ」

ちよっぴり恥ずかしそうな事件ちゃん。そして、意外な事実を口にした。

「実は事業家である鏡山敏三は近々、宵山町でホテル経営に乗り出す予定なの。宵山町で有名なほかのホテルを買収すること

「によってね」

「なんだって！ 鏡山敏三が宵山町で事業をつ？」

「ふふん。そうよ」

まるで弥人が驚く様子を見て楽しむかのような事件ちゃん。弥人はまた聞く。

「それって当然、犯行現場がここレイクサイド宵山であることと関係があるんだよね？」

事件ちゃんはくるりと弥人のまわりを一周しながら、

「さあ、どうかしら？ ヒントはここまでよ。あとはあなたが自分で考えて当ててごらんなさい。あんなんかに分かるかしらねえ」

小悪魔のように翻弄ほんろうしてくる事件ちゃんに弥人はなんとか推理を再開させる。

「が、がんばるよ」

じつとうつむいて深く考え始める弥人。

「……ホテル経営……買収か」

事件ちゃんの言葉からは多くのことが読み取れた。

（鏡山敏三が宵山町でホテルの経営事業を始めることと今回の犯行は水面下で深いつながりがあるのだろう。いったい鏡山敏三は何を企んでいるのか。仕事に関することなのでやはり大金を儲けるための手段には違いはずだが……）

すぐに弥人はあることに気がついた。

（鏡山敏三が宵山町でホテル経営を始めると、自動的にレイクサイド宵山は彼にとって最大のしょうばいがたき商売敵となるはずだ。

となるとレイクサイド宵山の不利益はすなわち彼の利益。つまり、彼は自らの手でレイクサイド宵山の経営に何らかのダメージを与えようと考えて今回の犯行に及んだのだらう）

弥人の頭はもう考えをまとめ始めていた。

（今回のような事件が起こった場合、ホテルの経営者が一番恐れること、それは……）

弥人はヒントを聞いてからおおよそ数秒ほどで答えをはじめ出した。

「わかったよ、事件ちゃん！」

「えっ？　もう？」

今度は逆に驚かされた事件ちゃんに弥人は宣言するように言った。

「鏡山夫妻の犯行動機——それは風評被害だ」

「……詳しく説明してちょうだい」

弥人はうなずいて話し始める。

「鏡山夫妻の目的はレイクサイドで大きな窃盗事件が起きたと見せかけることによつて、このホテルに風評被害を与えることなんだ。ホテルの中でこんな事件が起きた、その上犯人は従業員かも知れない、なんて話が世間に広がったらレイクサイド宵山を利用する客は必ず減少することになるはずだ」

「そうね。悪評が広がるとおそらく一割から二割はお客さんが減ってしまうでしょうね」

「うん。そして、レイクサイド宵山を利用する客が減るということは自動的にライバルとなる宵山のほかのホテルに客が移るということ。つまり、今回の事件は宵山町でのホテル経営事業において最大のライバルとなるレイクサイド宵山に先手を打っておきたいという鏡山敏三の思惑おもわくによるものだったんだ！」

弥人の推理に事件ちゃんは小さく肩をすくめた。

「やれやれ、まいったわね。くやしいけどあなたの推理はすべて正解よ」

「本当っ？ やったぜ！」

喜ぶ弥人を事件ちゃんは今までとは違った眼差しまなざしで見始める。

「弥人、あんたの力はどうやら本物のようね。あんたなら本当にあたしの謎を解き明かすことができるかもね」

「うん。僕は最後まで絶対にあきらめないよ」

こうして弥人は鏡山夫妻の犯行動機がレイクサイド宵山に風評被害を与えることだとわかった。これは事件の解決に向けてとても大きな進展だと言えるのだった。

「でもね……」

事件ちゃんは釘くぎを刺すように続けた。

「探偵のあんたなら当然わかってると思うけど、犯行動機なんでもものは事件の証拠にはまったくならないのよ。この事件を解決するには避けては通れないものがまだ残っているわ」

「そうだね」

神妙にうなづく弥人。

「ユイネラ消失のトリック、これを解かないかぎり事件はなんの解決にもならない」

弥人は考える。

（鏡山夫妻の手によってユイネラが隠されたという確固たる証拠を見つけないと、彼らにはいくらでも犯行の言い逃れを許してしまうことになる。しかし逆に考えるなら、ユイネラ消失の

トリツクさえ解いてしまえば鏡山夫妻が嘘をついていることはつきりする。きつと逮捕まで漕こぎ着けることができるはずだ。なんとしてでもトリツクを解いて鏡山夫妻の犯行を証明しなければ)

決意を固める弥人。鏡山夫妻の犯行がこのまままかり通ってしまうのは到底我慢のできることはなかった。

「ふむ」

必死に頭を働かせてトリツクについて推理し始める弥人。ただし、すぐには良い考えが浮かんでこなかった。さすがに一筋縄でいく事件ではない。

「彼らはこの部屋の中のいったいどこにユイネラを隠したのだ

ろうか。とにかく不思議だなあ」

しばらくの間、どことはなしに部屋中を見回す弥人。

「いや、待てよ？」

ふと、彼の脳裏のうりにあることが閃ひらめいた。

「何も隠したとはかぎらないんじゃないだろうか」

弥人のつぶやきに事件ちゃんは反応する。

「へえ。いいところに気がついたわね」

「もしかしたら、なんらかの手段を使ってこの部屋からユイネラだけを外に送り出すことが可能なのではないだろうか。そのようなトリックがあるとしたらユイネラが部屋から消えたと思わせることができるはずだ」

弥人はある場所に向かった。

「おそらくここからだ」

弥人は外のバルコニーへと出た。

「バルコニーから何かを使ってユイネラを送り出す。不可能ではないはずだ。そうだなあ……」

バルコニーから空を仰ぐように見る弥人。

「例えば……ラジコンヘリ」

弥人は同じくバルコニーまで来た事件ちゃんに顔を向ける。

「ラジコンヘリを使って別の場所にいる誰かまでユイネラを送り届ける。この方法ならばうまくいくかもしれない」

しかし、弥人の推理を聞いた事件ちゃんはゆっくりと首を横

に振った。

「……いいえ、駄目ね」

「えっ？」

きよとんとした弥人に事件ちゃんは、

「ラジコンの類は誰かが操縦そうじゆうしないといけないわ。浅瀬川が

部屋に戻るまでのたった一分間の時間でラジコンを操縦してユ
イネラをどこかに送り届けるなんてことはかなり難しい作業
よ。それにラジコンなどだと誰かに目撃される恐れもある。ト
リツクとしてはいまいち完成度が低いわね」

「うっ。た、確かに」

万が一にもトリツクが失敗して警察に捕まるようなことに

なつてはいけない。鏡山夫妻としては百パーセントの確率で成功するトリックを用意しておくのが当然だろう。推理の穴を事件ちゃんから指摘された弥人はしかたなく考え直す。

「ラジコンが駄目なら……動物、特に鳥ではどうだろうか？」
「なるほどね。飼い慣らしたハトやタカのような鳥を使ってユイネラを運ばせた、ということね」

「そう。鳥ならば訓練しだいで決まった場所にユイネラを送らせることができるかもしれない。しかも持たせて放すだけだから時間もまったくかからないし、鳥なら誰かに見られても怪しまれることはない。これだ。きつと鏡山夫妻は鳥を使ったに違いない！」

自信に満ちた弥人の言葉だった。――。

「残念だけどまた不正解ね」

「ええーっ。なんだ、またハズレか」

くやしがる弥人に事件ちゃんは丁寧に説明する。

「ここ宵山町ではペットなど動物の出入りには厳しい制限が設けられているのよ。近くにある世界遺産になった自然公園の生態系保護のためにね。だから動物をこの町に持ち込もうとするなら特別な許可が必要になってくるのよね。そして調べたらすぐに分かると思うけど鏡山夫妻はそんな許可はとっていない」

「そうか。なら鏡山夫妻にとっては怪しげな動物を隠し持っているのを誰かに見られたら大変なんだな」

「その通り。しかも、そもそも二人とも動物に対する特別な興味や知識は持ち合わせていないみたいね。訓練を受けた動物を調達できたとしても、うまく扱いきれるかどうかは疑問が残るところだわ。そんな彼らが動物をトリックに使おうとするのはリスクが高いことのようにあたしには思えるわね」

事件ちゃんの話聞いて、がつくりと肩を落とす弥人。

「なんだ〜そうなのかあ〜」

機械でもない動物でもない。こうなったらもう弥人にはまったく新しい考えは浮かんでこないのだった。

「バルコニーからユイネラをどこかに送り出す。けっこういい線行ってると思っただけだなあ。やっぱり違うのかな」

バルコニーの欄干に手を突いてもたれかかる弥人。どうしてもユイネラ消失のトリックが解けない。気持ちは冴えてこない。

「はああ〜」

大きなため息をついて顔を上げる。湖の穏やかな水面が大きく目に入ってくる。

「なんかもう疲れてきちゃったな。このきれいな湖で遊んで気分転換でもできたらいい考えが浮かんでくるかも。でも、そんなことしてたら梶森さんに怒られちゃうな。早く事件を解決しない」と

振り返って部屋にまた入ろうとする弥人。

「あっ！」

その時だった。

「も、もしかして……そうか！」

弥人の脳内に閃光せんこうが走り、ユイネラ消失のトリックが一瞬で解き明かされていた。そして事件を構成するあらゆる要素が一つにまとまるのを弥人ははつきりと感じ取ったのだった。

「後はあれを確かめるだけだ」

慌てて部屋の中へと戻っていった弥人。

「へっ？ あんた、急にどうしたのっ？」

弥人の様子に驚く事件ちゃん。弥人はテーブルの上にあった資料を手にとるとレイクサイド宵山に関するページを読んだ。

「うん、間違いない！」

ぽかんと弥人を見つめる事件ちゃんに、彼は言った。

「事件ちゃん、君の謎はクリアーできたよ！」

数時間後。

「し、失礼だな、君たち！ 私たちに向かってなんてことを言

うんだ！」

レイクサイド宵山最上階スイートルームには弥人のほかに梶森警部と鏡山夫妻の姿があった。

「私たちが嘘をついているって？ 冗談じゃない！」

鏡山敏三は目の色を変えて怒り出す。

「そうですね。あなたたちの言い様はまるでわたくしたちが犯罪者だと言っているように聞こえますわ！」

鏡山京子も立ち上がって叫ぶ。ただし、弥人からすべての事情を聞いている梶森警部は冷静に話す。

「鏡山敏三さん、あなたは近々ここ宵山町でも不動産事業の展開を予定しているようですね。しかもホテルの経営を」

「うっ！」

鏡山敏三は言葉に詰まる。警部は続ける。

「あなた方は狂言によってレイクサイド宵山に風評被害を与えて、自分たちの事業を有利に展開しようと考えていたのではないのですか？　これは立派な犯罪行為ですよ」

「くっ……」

しばらくして鏡山敏三が口を開く。

「確かに私は宵山での仕事を予定している。しかし、それはまったく偶然のことだ。今回のこととは一切関係ない！」

彼は勢いに乗って続ける。

「それに、もし私たちが嘘をついているというのなら証拠を見せてもらおうじゃないか、ええ？　ユイネラはこの部屋の中にはどこにもないんだろ？　それはつまり、誰かの手によってユイネラが盗まれたということじゃないのかね」

今度は弥人が口を開いた。

「何も盗まれたとはかぎりませんよ。あなた方はあるトリック

を使えばこの部屋からユイネラを消し去ることは可能だったのです」

「……ほほう」

鏡山敏三はにやりと口元をゆがめた。

「なら、教えてもらおうか。そのトリツクとやらを。私たちがこの部屋のどこにユイネラを隠したのかを」

弥人は鏡山敏三を鋭く見返して答えた。

「わかりました、お答えしましょう。しかし、その前に一つ訂正しておきましょう。まず、あなた方はユイネラをどこかに隠したのではない、ということをおね」

「なに？」

鏡山敏三も弥人をにらむように見る。

「隠したのでないのならばどうしたというのだ？ 私たちはユイネラをトランクケースにしまっただけからわずか一分ほどの時間で今度はユイネラがなくなったことに気がついた。このことは警備員も一緒にいたから確かなはずだ。君はまさか私たちがユイネラをどこかに瞬間移動させたともいうのかね。これは面白い冗談だな、はっはっは」

余裕を見せる鏡山夫妻だったが、

「いいえ、この部屋からユイネラを消し去るのに瞬間移動は必要ありません。もっと単純で誰にでもできることです」

弥人のこの言葉にすぐに表情を凍りつかせることになった。

「……な、なんだというんだ？」

弥人ははつきりと言い放った。

「あなた方は『バルコニーからユイネラを宵山湖に向かって投げ捨てた』のです。この方法ならば一分もかからずに百パーセント確実にユイネラをこの部屋から消し去ることができるのです」

「なっ！」

すぐに鏡山敏三は弥人の言葉に反論した。

「馬鹿じゃないのか、おまえは！ ユイネラがいくらしたと思っっているんだっ？ 一億円だぞ！ 私が必死になつて稼いだ

金で買ったものだ。おまえらが一生かかっても買えないような

額だぞ。それを湖に投げ捨てるなんてことをするわけがないだろうがっ！」

しかし、弥人は動じることなく答えた。

「確かに普通ならば一億円もするものを捨てるなんてことは考えられないでしょう。しかし、あなたの場合は失った一億円を超えるだけの十分な見返りが期待できるはずです」

「……………」

無言の鏡山敏三に弥人は続ける。

「ここレイクサイド宵山とそのグループ企業における一年間の営業利益もおよそ一億円です。そして、ホテルの経営というのは信用やイメージが非常に大切な事業です。もし風評被害を受

けたとすると来年度からはかなりの減益が出てしまうはずで
す。おそらく利益全体の1割から2割でしようか。では、レイ
クサイド宵山の受けた損益は何に変わるか？ それは多くがあ
なたが経営するであろうホテルの利益に変わる、という話で
す」

弥人は鏡山敏三を追いつめた。

「あなたがユイネラに投資した額は一億円と大金ですが、それ
でも長い目で見れば確実に取り返すことができる額なのです。
まして、宵山町で最大手であるレイクサイド宵山の評判が落ち
たタイミングで、新しいホテル経営事業を展開できるならばそ
の効果はきつと絶大なはずです。鏡山敏三さん、あなたはそこ

まで計算して今回の計画を実行したというわけなのです」話を終える弥人。うなだれる鏡山夫妻は、すがるような表情で最後に言った。

「証拠、証拠がまだ……」

「鏡山敏三さん、鏡山京子さん」

梶森警部が彼らの前に立つ。顔を上げた鏡山夫妻の目に飛び込んできたのは――。

「ユ、ユイネラ！」

梶森が手に持ったビニール袋の中には、魅惑の輝きを放つブルーダイヤモンドのネックレスが収められていた。

「ユイネラは警察の潜水班がバルコニー下の湖底から発見しま

した。証拠はそろっています。あなた方を虚偽風説流布業務きょぎふうせつるふぎようむ妨害ぼうがいの疑いで逮捕します」

「……………」

ついに反論する力が尽きた鏡山夫妻。梶森によつて部屋から連れ出される。こうして彼らの企みは弥人と事件ちゃんの力によつて未然に防ぐことができたのであった。

弥人は自分だけになった部屋の中でまだ帰らずに残っていた。梶森警部に便宜べんぎを図つてもらつてもう少しの間だけ部屋で一人にさせてもらっていた。それは、事件ちゃんと最後のお別れをするための時間だった。

「事件ちゃん、これで君とはもう二度と会えなくなるね。僕はさびしいよ」

弥人の前に姿を現した事件ちゃんも少し元気のない声で言った。

「あ、あたしは別にさびしくもなんともないわよ。事件が解決したのならば事件の象徴であるあたしは消える。これは当たり前前のことなんだから。いちいち感傷的になる必要なんてまったくないんだからっ」

そう、事件が解決されれば事件ちゃんは消えてしまう。これは自然の理ことわりであり避けては通れないことであつた。ただ、事件ちゃん本人は夏の青空のように晴れ渡つた表情を見せるのだつ

た。

「そもそも事件なんてものはこの世には生まれてこない方がいいもの。あたしなんて絶対にいない方がいい存在なのよ。だから、今のあたしも自分が消えることができすぎてすごく満足した気持ちでいっばいなの。あたしはようやく消えることができる。とても幸せな気分なのよ」

弥人の顔をちらちらと見てくる事件ちゃん。

「べ、別にだからといってあたしはあんたに感謝してるわけじゃないんだからねっ。あんたなんてあたしの助けを借りてようやく謎を解くことができた三流の探偵なんだから！」

「ははは……」

苦笑いの弥人。それから、事件ちゃんは真っ赤に顔を赤らめると、

「でも、いちおうお礼ぐらいは言っておいてあげるわっ」
急に弥人の体に飛びついてきて、

「ありがとう、弥人」

彼の頬にキスをしたのだった。

「じ、事件ちゃんっ？」

うろたえる弥人。その目の前で事件ちゃんは、

「……さようなら」

笑顔のままその可憐な姿を消し去っていったのだった。

「事件ちゃん……」

しばらくの間、ぼうつと彼女が消えていった空間を見つめる弥人。また一つの事件を解決し、その自らの存在に苦しむ事件ちゃんを救うことができた。弥人もまたとても幸せな気分であつた。

(ギャルゲー探偵と事件ちゃん 第一回／おわり)

ギャンブル探偵と事件ちゃん

第二話 声優脅迫事件ちゃん

モフモフだね、
事件ちゃん!

著 〓 とよ たかゆき

Illustration 〓 染谷みのる

事件〓と話せてごめんなさい!!
第14回BOX-AIR新人賞受賞の
斬新脱力系ミステリー!



とある夏の晩。閑静な住宅街の一角にある民家の一室から妙な声が漏れ出ていた。

「ハッピーバスデー〜トウ〜ユ〜、ハッピーバスデー〜トウ〜ユ〜
……」

歌声だ。どうやら誰かの誕生日を祝う歌のようだ。

「ハッピーバスデー〜ディア〜まりしい〜」

テーブルの上には小さなバースデーケーキが置かれており、ケーキの上にはチョコレートで出来た四角いプレートが載って

いる。プレートには『まりしい おたんじょうび おめでと
う』とかわいい字で書かれていた。

「ハツピバスデ〜トウ〜ユ〜……まりしい、お誕生日おめでと
う！ わーわー、ぱちぱちぱち」

しかし、どう見ても部屋の中には一人の人間の姿しかないよ
うだった。ごちゃごちゃと物が多い部屋の中には高校生ぐら
いの少年が一人いるだけ。先ほどから歌ったり話したりしてい
るのは、この少年だった。

「まりしいは十六歳になったんだっけ？ 僕と同一年だね。僕
たちは本当にお似合いのカップルだね！」

彼が話しかけている場所、テーブルの上をよく見ると、そこ

には一台の携帯ゲーム機が置いてあった。少年の目の前にキーキと並ぶような格好だ。携帯ゲーム機の画面にはショートカットの女の子が一人座っている映像が映っていた。

「まりしいと一緒に誕生日を祝うことができ僕は最高にうれしいよ！」

そうやって少年はゲーム機のボタンを押す。するとゲーム機から甘くてかわいい声飛び出してきた。

「ありがとう、やひと弥人君。あたしもすつごくうれしいよ！」
ゲームの中の少女は彼に満面の笑みを向ける。

「うおおおおお！ 僕のまりしい！ なんてかわいいんだあああああ！」

弥人と呼ばれた少年はゲーム機の少女に対してハイテンションで叫ぶ。そう、この谷口^{たにぐち}弥人が今プレイしているのは二次元の美少女といちゃいちゃできるゲーム、いわゆるギャルゲーだった。ちなみにゲームのタイトルは『ラブコーラス』だった。そして今、弥人は『ラブコーラス』のキャラクターである、まりしいという子の誕生日を一人で祝っている、というわけだ。

「ああ、僕のまりしい。では、お誕生日おめでとうのキスをしようか。まりしい、僕とキスをしようか……」

こともあろうか弥人はゲーム機の画面に映った少女の顔にキスをしようとした。ちようどそのとき。

——ピロピロリン、ピロピロリン。

弥人の携帯電話が鳴った。

「もう！　誰だよ、こんなタイミングで電話をかけてくるやつは！　くそっ。しかたない、出るか。はいっ、もしもしっ」

電話からは中年男性らしき声が聞こえてくる。

「梶森^{かじもり}だ。夜中に突然すまない、弥人。しかし、ちよつと困っ

た事件が発生してな。是非ともおまえの力を借りたいんだ」

電話の相手は梶森進^{すすむ}、刑事だった。

「なんだ、梶森さんか。なに？　またなんかやっかいな事件なの？」

「ああ、そうなんだ。大きな事件ではないんだが、少し奇妙な

事件で、俺たちではどうも要領を得ないんだ。多くの難事件を解決したおまえなら、きつとなんとかしてくるだろうと思つてな」

谷口弥人、彼は単なるギャルゲー好きの高校生ではなかった。優秀な少年探偵でもあったのだ。

「明日は日曜日だよな。俺と一緒に事件の捜査に参加してくれないか。頼むよ、弥人」

「えー。今日から明日にかけてはネットの動画サイトで、まりしい誕生祭があるんだ。すごいクオリテイの動画がたくさん投稿されるんだよ。まりしいと一緒に全部見ないといけなから、とても事件の捜査なんて付き合っている暇ひまはないんだ。梶

森さん、悪いけど今回はパスさせてもらおうよ」

ぼさぼさに髪が伸びた頭をかきながら弥人は言う。ただ、梶森は意外にも落ち着いた声で返した。

「そうか、それは残念だな。実はな、今回の事件の被害者はおまえもよく知っている人なんだがな」

「ん？ いったい誰です？」

「声優の花町はなまちなくなる、だ」

「ええーっ！」

弥人は心底驚いた。なぜなら声優の花町なくなるは、まりしいの声を担当している人物だからだ。弥人はずり落ちそうになつた眼鏡めがねをかけ直して梶森に聞いた。

「ということとはっ、事件の捜査に参加すれば花町なくるさんに会えるんですねっ」

「そういうことになるな」

「絶対に行きます！　僕が絶対になくるさんの事件を解決してみせます！」

こうして谷口弥人は事件の捜査へと乗り出したのだった。

次の日。

「へえ、花町なくるさんはここよいやまちょう宵山町に住んでいたんです

ね。まさか僕と同じ町に大好きな声優さんが住んでいたなん

て。本当に意外だ」

田んぼに囲まれた町外れのいっけんや一軒家。表札には花町と書かれていた。敷地の広い木造平屋建ての家で、トラクターや農具が庭にあることから、一家は農業を営んでいることが分かった。

「ここは花町さんの実家だ。普段、花町さんは東京に住んでいるらしいが、ここ数カ月は仕事の関係で、この実家に戻ってきているそうだ。今回の事件も、どうやらこの家に関係しているらしい」

「なるほど」

梶森と弥人が呼び鈴を鳴らして待っていると、すぐに玄関のドアが開いた。そして、ドアの奥から姿を現したのは、

「あら、刑事さん。よかった、来てくれて。私、もう、ずっと不安で不安で。刑事さんが来てくれてとても頼もしいわ」

年の頃は二十代半ば。長い黒髪にすうっと切れ長の目元、清楚^そな顔立ちの美人。弥人がテレビや雑誌で見たことがある、紛^{まぎ}れもない本物の花町なくるだった。当然といえは当然だが、声も普段からまりしいによく似ている。

「うわーっ。本物の花町なくるだーっ」
思わず叫ぶ弥人。花町は少し驚いて、

「あ、あら。この方はどなたですか、刑事さん？」

「失礼、花町さん。こいつは今回の捜査に協力してくれる一般人です。こう見えても優秀な探偵なんです。必ず事件解決のお

役に立てるはずです。ほら弥人、花町さんに挨拶ぐらいいきちんとしろ」

「ど、どうも初めまして。た、探偵の谷口弥人です。よ、よろしくお願ひします」

人気声優を目の前にして、がちがちに緊張した様子の弥人。

花町は優しく微笑みかける。

「そう、探偵さんなのね。お若いのにすごいわね。こちらこそよろしくね、弥人君」

「は、はいっ。がんばります！」

花町に声をかけられて至福の感情にひたる弥人。

（花町なくなるさん、なんてきれいで優しい人なんだ。まるで本

物のまりしいと話をしているみたいだ。あ、いや、まりしいはまりしいでちゃんと本物なんだけどね。中の人なんて全然いいし。そうだ、きつとなくなるさんは、まりしいの生き別れのお姉さんか何かだ。うん、きつとそうに違いない！)

多少、混乱したように何度も表情を変化させる弥人。花町も梶森もそんな弥人を訝いぶかしげに見ている。

「で、では、中にどうぞ」

家の中へと案内される弥人と梶森。きれいに片付けられた玄関と廊下。廊下を抜けてリビングに入ると、ある声が耳に入ってきた。

「うにゃあ、うにゃあ」

猫だった。それもたくさんの。リビングに戻ってきた花町の足下あしもとに群がるように猫たちが集まってくる。

「あらあら。みんな、どうしたの。私がいなくてさびしかったのかな。ふふふ」

花町を取り巻く猫たちを見て、弥人も梶森も頬ほおが緩ゆるむ。

「おおー、猫だ。めちやくちやカワイイですね！ 全部で何匹いるんですか？」

「ちようど十匹ね。今、この部屋の中にいない子たちも合わせてね」

「十匹も？　すごいですね」

「うちは家族が全員猫好きなのよ。近所に捨て猫とかがいる

と、かわいいそうでみんなが拾ってきちゃうのよ。そしたらいつの間にか、こんなになくさん飼うことになっちゃったのよね」

「へえー、みなさん優しいんですね。それに僕も猫は大好きだから、うらやましいですよ。一度、僕もこんな猫たちに囲まれた生活をしてみたいですわね」

「あら。弥人君、ありがと。でも、さすがに十匹もいると世話が大変よ。エサだったりお掃除だったり。私は東京にいてここにはいないことが多いから、いつもこの子たちの面倒を見てくれる家族にはとても感謝してるわ」

「そうですよね。やっぱり大変ですよ。ご家族の方は確か、お父様とお母様と弟さんがいらっしやるんでしたっけ？」

「ええ。このうちにいるのは全部で四人ね。半年ほど前から私もまたこのうちに戻ってきているわ。撮影中のドラマのロケ地がたまたま近くにあってね。どうぞ、こちらに座って」

リビングのソファに座るように促うながされた弥人と梶森。花町はてきばきと動いて、前のテーブルに飲み物とお菓子を用意した。

「あ、どうも」

向かいのソファに座った花町。すると、すぐに一匹の白猫が彼女の膝ひざに飛び乗ってきた。ただ、その猫は動き方が少しおかしかった。右の後ろ足がうまく曲がらないようだ。

「ん？ どうしたんですか、その猫ちゃん。足が悪いんです

か？」

弥人の問いに花町は白猫の頭を撫なでながら、

「さすが探偵さん、鋭いのね。そうなの、この子は足が悪いのよ。名前はシロロっていうんだけどね。四カ月前に交通事故に遭あつちやつて。幸い命は助かったんだけど、後ろ足にひどい骨折をしてしまったのよ。獣医さんに診みてもらって最近ようやく治ってきたところなの。でも、まだ動きにくそうにしているわ。かわいいそうに」

「それは確かにかわいいそうだ。シロロちゃん、怪我けがに負けずにがんばってな」

弥人がそう声を掛けると白猫は、ニヤア〜と小さく返事をす

る。一同の顔に笑みが浮かぶ。

「それで刑事さん……」

しかし、笑顔もすぐになくなり、花町が口を開いた。

「事件の方はどうでしょうか。何か犯人についてわかりましたでしょうか？」

花町の表情が暗くなつていくのが弥人には分かった。

「それがですね……」

答える梶森の顔も冴^さえない。

「花町さんの受け取った脅迫状^{きようはくじょう}、うちでも鑑識課^{かんしき}を使って詳細

に調べてはみたんですが、残念ながら犯人の特定につながるようなものは何も見つかりませんでした」

「……そうですか」

花町と梶森、二人の表情からも今回の事件が難しいことが容易に推測された。今朝、弥人は事件に関する資料はすべて目を通していたが、いちおう聞いてみる。

「僕が読んだ資料によると、花町さんは誰かに脅迫を受けているということらしいですが、もう一度僕にも詳しい話を教えてもらえないでしょうか？」

花町は多少、緊張したように話し出した。

「え。あ、はい。事件についてですね、わかりました。あれは今日からちようど十日前のことです。この家のポストに一通の封書が届きました。開けてみるとそれは私に対する脅迫状だっ

たんです。仕事柄、内容のよくない手紙を受けることはたまにあるのですが、今回の場合は明らかに様子が違っていました。その内容は、えつと……」

弥人が代わりに、完璧に暗記していた脅迫状の文面を言う。

「『花町なくなる、おまえは今すぐ芸能界を引退しろ。俺はおまえの秘密をすべて知っている。おまえが俳優かしわざかこうたろうの柏坂光太郎と付

き合っていることも知っている。おまえが弟と不仲なことも知っている。おまえの所属事務所の経営が悪化していることも知っている。おまえがやっているドラマの展開も知っている。

俺はおまえのことならなんでも知っている。おまえの秘密が世間に公表されれば、その被害はおまえだけでは済まないことぐ

らいは理解できるな。いいか、おまえは今すぐ芸能界を引退しろ。もし俺の言うことを聞かなければ今から二週間後、おまえに関するすべての情報をネットにばらまく。俺は本気だ』……
これで合っていますか？」

花町は青くなつた顔でうなずく。

「そ、そうです。脅迫状に書かれていたのは、まさにその通りです。そして私は悩んだあげく警察にこのことを相談したのです」

「わかりました。ちなみに脅迫状の内容、例えばあなたが俳優の柏坂光太郎さんと付き合っている、などということはすべて本当のことですか？」

「はい、すべて本当のことです。私としては決してやましいこととはないのですが、仕事の都合上どうしてもそれらのことを公表されると困ってしまいうもので。それに犯人はいつたいどうして私のことを、こんなによく知っているのか。私、とても怖いです……」

「……お気持ち察します」

脅迫に盗聴、いくら芸能人でもこれは大変な恐怖に違いない。弥人は花町に心から同情する。梶森も口を開いた。

「我々、警察は花町さんと話し合った結果、どうも犯人は盗聴器を使って花町さんのことを調べたのではないか、という結論に至ったのです」

「はい。どうも犯人が知っていることは、私がこの家の中でのみ話したことのようなので。電話などでの会話や打ち合わせ、部屋での演技の練習などを盗聴されていたと私は思うんです」

「私もそう思います。今どき盗聴器ぐらいは誰でも手に入れることができるでしょう。しかしですね……」

梶森は眉を寄せて、

「この家の中、特に花町さんの部屋の中からは、盗聴器は一つも発見することができませんでした」

「……なるほど」

弥人は考える。

（犯人が盗聴器を使って、なぐるさんのことを調べ上げたのは

まず間違いないはずだ。ほかの方法では具体的かつ長期にわたる情報の収集は困難だろう。ただし、かんじん肝心の盗聴器が見つからないということは……)

弥人は梶森に聞く。

「すでに盗聴器は誰かの手によって回収された、という可能性は？」

「そうだな。俺もその可能性が高いと思う。しかし、この家はホームセキュリティもしつかりしているので、家に不法侵入して盗聴器を仕掛けたり回収したりすることは難しいだろう。それにここ数年ほど、この家にある花町さんの部屋に他人が入ったことは一度もないそうだ。だから盗聴器に関しては単純な方

法ではうまくいかないはずだな」

「そうですか。でも、なくなるさんの部屋以外なら盗聴器を仕掛けることができます人もいたんじゃないですか？」

「ああ、そのことなんだがな。実は非常に疑わしい人物が一人いるんだ。そいつは電器店に勤めている人間で名前は長須賀ながすが渉わたる。エアコンの修理で二回ほどこの家の中に入っているんだ。ちようど俺たちが今いるここ、リビングにだな。一度目は四カ

月前、二度目は一カ月前だ」

「あ、そうだ。そのことは資料にも書いてありましたね。ものすごく怪しいですよね、そいつ」

「もちろん俺たちはすぐに長須賀じじょうちようしゆに対して事情聴取をおこ

なった。しかし当然やつは容疑を否認しているな。何のことか分からない、の一点張りだ。俺たちも確かな証拠は何もないのでこれ以上は追及できない状態だ」

「そうですか。でも、確かに長須賀は怪しいですけど、リビンのエアコンに盗聴器を仕掛けたぐらいでは、なくるさんのことをあんなに詳しく調べることはできないかもしれないね」

「そうだな。長須賀は一番の被疑者ひぎしやではあるが確証まではないな」

梶森はため息を一つついで、

「今現在、俺たち警察がつかんでいる情報はそれぐらいだ。ほかの詳しいことは渡した資料に書いてあったはずだ。予告され

た犯行まではあと四日。この限られた時間内で何とかして犯人を捕らえないといけないう状況だ。頼む、弥人。事件を解決してくれ」

期待を込めた視線で弥人を見る梶森と花町。

「了解しました！　なくなるさんのためだ。僕は精一杯がんばりまっす！」

立ち上がる弥人。そして、言った。

「では、すみませんがしばらくの間だけ、この部屋を僕一人だけにしてくれませんか？」

花町は意外そうに、

「え？　それは別にかまいませんけど。どうしてですか？」

弥人の代わりに梶森が答える。

「こいつは事件現場で一人だけになって考えたがる癖くせがあるんですよ。ただし、部屋から出るときは必ず事件を解決しているんです。花町さん、安心して俺たちは部屋の外で待っていますよ」

「あら、それはとても心強いですわ。わかりました。では弥人君、私は自分の部屋にいます。何かわかったらすぐ教えてくださいいな」

リビングを出て行く花町と梶森。花町の後にはシロ口を含む何匹かの猫たちが一緒になって付いていった。こうして広いリビングには弥人ともう何匹かの猫だけが残されたのだった。

「よし。早速、事件ちゃんを呼ぶか。今回の事件にも、きつと事件ちゃんが現れてくれるはずだ」

弥人の言う事件ちゃん、それは事件の象徴しやうちやうと呼べるものだった。事件全体を取り巻くあらゆる概念が人間の姿を形取ったものだ。平和の象徴はハト、自由の象徴は自由の女神像、事件の象徴は事件ちゃんというわけだ。ただし、事件ちゃんは弥人にしか見ることも触れることもできない。弥人の生まれ持った探偵の素質と、人間ではない女性キャラクターに対する常軌じやうきを逸いつした執着心しゆうちやくしんが、あいまって生まれた特殊な能力であった。

「おいしい、事件ちゃん、出ておいで。おいしい、事件ちゃん」

弥人はおもむろにそんな言葉を発しながら、うろろうとりビングの中を歩き出す。部屋にいた猫たちも驚いたように弥人のことを見る。

「事件ちゃん、どこにいるんだ？」

これは事件ちゃんを呼び出す儀式みたいなものだったが、誰か事情を知らない人が今の弥人の様子を見たらきつと眉をひそめるに違いない。いろいろな意味で部屋には人を入れてはいけない。

「事件ちゃん」

「……おい。にやんだおまえは？」

数分後。突然、部屋の隅すみから女の子の声が聞こえてきた。慌あわてて弥人が声のした方を振り向くと、そこには一人の少女が床に寝っ転がっていた。

「おまえ、うるさいやつだな。今のわたしはお昼寝をしているところなんだぞ？ あんまりうるさくするんじゃない」

少女は横になったまま眠たそうに、そう言う。弥人は慎重に声をかける。

「君が今起こっている声優脅迫事件の事件ちゃんかい？」
すると少女は上半身だけ起こして、

「ほう？ おまえ、わたしのことを知っているのか。変わった

やつだなおまえ。いったいにやにもものなんだ？」

「僕は谷口弥人。探偵だよ。今、声優の花町なくなるさんの事件について調べているところなんだ。どうしても犯人を捕まえたいんだよ。君も僕に協力してくれれば、すごく嬉しいんだけど」

「……ふくん、探偵……谷口弥人、か」

じろじろと弥人の顔を見る事件ちゃん。ゆっくり立ち上がると、

「よし、いいだろう。わたしも花町家の人たちは大好きだからな。少しぐらいはおまえの相手になつてやるか。おまえのためには、わたしはわざわざお昼寝を中断してやるんだ。ありがたく

「思えよ、弥人とやら」

「本当？　ありがとう、事件ちゃん！」

弥人は立ち上がった事件ちゃんの姿を見る。体は思ったより小さい。少し偉そうな口調の割には小学生ぐらいの年齢に見える。全身には真っ白な猫の着ぐるみパジャマを着ていて、頭にかぶったフードの部分にはしっかりと大きなネコミミが付いている。ご丁寧^{ていねい}におしりの部分からは長くモフモフしたしっぽまで伸びている。髪は短めで、目はくりつと大きく、鼻はちよこんと小さい。まるで猫がそのまま人間になったかのような事件ちゃんだった。

「おい、弥人」

事件ちゃんは、ちよこちよここと弥人の前まで歩いてくるとソファアアを指さして、

「おまえ、ちよつとあそこに座れ」

「え、ソファアアにかい？ うん、別にいいけど」

言われるままに先ほどもいたソファアアに座る弥人。すると。

「うにゃん！」

勢いよく弥人の膝に飛び乗る事件ちゃん。それから、弥人の足を枕にしてソファアアに寝転がったのだった。

「じ、事件ちゃん？」

「おつと弥人、おまえは動いちやダメだからな。わたしが寝やすいうように体をそのままにしてろよ。うゝん、こんな感じか

な？」

弥人の足に乗せた頭の角度を、細かく調節する事件ちゃん。

（か、かわいい。この事件ちゃん、猫みたいで本当にかわいい。すごく頭をなでなでしてやりたい気分だ）

我慢できずに弥人は、足の上にある事件ちゃんの頭をやさしく撫でてやると、

「ふ、ふんにゃ〜」

事件ちゃんは心底幸せそうな顔を見せて、じつとしたままおとなしくなるのだった。

「……はっ！」

しかし、しばらくすると事件ちゃんは急に体を起こして、

「お、おまえ、弥人っ。わたしの頭を勝手に撫でるとは不届きふとどなやつだな！ わたしの頭を撫でてもいいのは、なくなるだけだ。わたしも気持ちがいいから、つついさいされるがままになつてしまった。く、くやしい。おまえなんかにつ。くそうく」

「は、はあ」

「弥人、わたしはおまえに動いちやダメだと言つたはずだぞ。

おまえは早く事件の推理でも始めろよ、このやろう！」

「あつ、そうだった。すっかり忘れてた。事件の推理、ちゃんとしないとね」

弥人は緩んだ顔と気持ちを引き締めて、真面目に話を切り出した。

「事件ちゃん、僕もいちおう今回の事件に対してはいろいろと考えてみたんだ。聞いてもらえるかな」

事件ちゃんは弥人の足にまた寝転がると、

「よし。いいだろう、言ってみろ。まあ、おまえにやんかにわたしの謎が解けるとも思えないがな」

にやりと笑う事件ちゃん。

「それはやってみないと分からないよ」

弥人は考えを整理しながら話し始めた。

「じゃあ、まずは今回の事件の被疑者についてまとめてみようと思う。やっぱり怪しいのは長須賀渉だ」

「長須賀？ ああ、あの電器店の男か」

「そう。資料によると彼は現在二十六歳の独身。ここ宵山町に生まれ育って、五年ほど前に県内の工業大学を卒業、大手家電量販店の『ホタル電機』に正社員として就職している。以後は勤務態度や能力において何の問題も見られず、やや内向的で人付き合いは多くないが真面目で仕事熱心な性格、とある。どうやら彼の表面的な部分においてはまったく問題がないようだ」

「うむ。長須賀の情報については間違っていないな」

「しかし、どうしても長須賀の名を被疑者から外すことはできない。彼は四カ月前と一カ月前の二回ほどエアコンの修理でこのリビングを出入りしている。最初このときに盗聴器を仕掛け、次のときに回収する。こうすれば何の痕跡このときも残さずに、なくなる

さんのことを調べることが可能かもしれない」

「ふくん。でも、長須賀はなくなるの部屋には入ったことも近づいたこともないんだぞ？　どんなに性能のいい盗聴器を使ったとしても、このリビングからなくなるの部屋の声を聞き取るのは不可能だ」

「うん、確かに事件ちゃんの言うとおりで。普通の方法では無理かもしれない。ただし、長須賀は工業大学を卒業していて電器店に勤めている。盗聴器のことぐらいなら完璧に知り尽くしていてもまったく不思議じゃあない。何かいいトリックがあったら今回の犯行も十分に可能なはずだよ」

「……まあな、そうかもな」

少し眠そうな事件ちゃん。弥人は続ける。

「次に考えられるのは長須賀以外の外部の人間か。家の中に、
なくるさんの部屋の中に忍び込むことができれば、盗聴器でも
何でも仕掛けることが簡単にできるけど」

「この家は田舎にある木造平屋の一軒家だが、ホームセキュリティ
ティはけっっこうしつかりしているんだぞ。すべてのドアと窓は
こじ開けられたり割られたりすると、すぐに警報が鳴って警備
会社に通報が入るようになってる。そして、ここ数年の間で
そういったことは一度も起きてはいない」

「つまり、花町家への不法侵入による盗聴器の取り付けはな
い、ということなんだね」

「そうだな。特別に大ヒントをくれてやろう。それはない、とわたしが断言してやるよ」

「……となると、あとほかに考えられる被疑者は一人だけかな」

「んにゃ？ まだほかの怪しいやつがいるのか？」

意外そうに弥人を見る事件ちゃん。弥人は低い声で言った。

「うん。それはなくなるさんの弟、花町徹とおるだ」

「にゃ、にゃんだと？」

事件ちゃんは急に飛び起きて、弥人をにらむように見る。

「おいっ。おまえは徹が犯人だと言うのか！ わたしの大好きな花町家の人たちを疑うとはけしからんやつだな、おまえ！」

弥人は慌てて弁明する。

「あ、あくまで可能性の話だよ。資料によると、なぐるさんの弟である花町徹は今、十五歳の中学生だ。地元の宵山中学校に通っている。実は彼、姉が声優をしているということでもクラスメイトから、からかわれることがしばしばあるそうなんだ。イジメってほどではないみたいだけど、徹君本人にしてみれば当然気分のいいことではないはずだ。そして、それが原因で徹君は姉のなくなるさんのことをすごく嫌っているらしい。脅迫状の中にもあった『なくなるさんが弟と不仲』ということはこちらの事情からきているみたいだね」

「む、むう。まあ、なぐると徹のことはわたしも残念に思っ

いる。二人ともすごくいいやつなんだがな。悲しいすれ違いだな」

「そして、一番問題なのが徹君ならば今回の犯行がすべていとも簡単に実行できる、ということなんだ。彼ならばいつでもくるさんの部屋に入って盗聴器を仕掛けたり回収したりするところができる。中学生とはいえ今どきの子なら盗聴器ぐらいは苦もなく手に入れることができるんじゃないかな。しかも彼の場合には動機も充分だ」

弥人は小さく首を振る。

「悪いけど、現時点で犯人として一番疑わしいのは花町徹だと
言わざるを得ない状況だね」

「ぐっ、うぐぐぐっ……」

弥人の推理を聞いて、しだいに怒りの表情を強くする事件ちゃん。そして――

「ふにやーっ！」

「うげっ！ 痛い！ 痛いよ、事件ちゃんっ。いきなり何するんだよっ？」

「ふがふがっ！ ふがふがっ！」

突然、事件ちゃんは弥人の腕に噛みついたのであった。

「ぎゃあーっ！ マジで痛い！ やめてよ、事件ちゃんっ」

「ふにやーっふにやーっ……よーし、もういいだろう。そろそろ許してやるか」

弥人からパツと離れる事件ちゃん。ソファアの端に立って、弥人をびしつと指さす。

「弥人、このやろう！ よりにもよって、わたしの大好きな花町家の人を犯人扱いしやがって。とんでもないやつだな、おまえ！」

「ええっ」

「徹はすごくいいやつで猫たちにも優しいんだ。世話もしっかりしてくれるんだぞ。たまに親に内緒で高い缶詰を買って来て食べさせてくれるんだぞ。なくるとも仲は悪いが心の底から嫌っているわけではないんだ。むしろ、仲直りしたいと思っっているぐらいだ。そんな徹が犯人だどっ？ 弥人、おまえの推理

は完全に^{まとはず}的外れだ！」

弥人はきれいに歯形の付いた自分の腕をさすりながら、

「そ、そうなのか。じゃあ、花町徹は今回の事件とは完全に無関係なんだね？」

「当たり前だ、このバカ！」

「わ、わかったよ。ごめんよ、事件ちゃん」

弥人は腕に痛みを感じながらも考える。

（ふうー。なんだか怒りっぽい事件ちゃんだな。まさかいきなり噛みついてくるとは。見た目通りというか本当に猫みたいに気まぐれなんだな。こんな事件ちゃん、初めてだ。でも、別にいいか。おかげで花町徹が犯人でないことははっきりしたんだ

し。これはすごくありがたい情報だな)

弥人は再び推理に集中する。

「花町徹は犯人ではない。ということは長須賀か、ほかの外部の人間か。とりあえず長須賀が犯人だとして、犯行の動機はいったいなんだろうか。おそらくは、なくなるさんに何らかの恨みを持っていることには違いないと思うけど」

事件ちゃんはまた弥人のそばまでやって来ると、彼の隣にござろんと横になった。

「なくなるは人気声優だからな。そりゃあ、アンチもたくさんいるだろう」

アンチとはいわゆるファンの反対に位置する人たち、ある特

定の芸能人などを非常に嫌っている人たちのことだ。

「うん、そうだね。なくるさんは比較的アンチの少ない方だと思うけど、それでもほかの声優さんのファンからしたら、なくるさんのことを疎ましく思う人はいるだろうね。あ、そう言えば、なくるさんは雑誌『声優ヘブン』のアンケートで去年の人気ナンバー1声優に選ばれていたんだっけ」

「うむ、その通り。なくるは見た目もきれいだし実力も本物だからな。当然の結果だな」

「しかし、人気があるゆえアンチにとってかっこのターゲットトになってしまった、というわけか。ある意味しかたのないことだけど本当にかわいそうだな、なくるさんは」

弥人も事件ちゃんも同時に深くうなずく。

（これで犯人の動機はわかった。ただ、動機なんてものは分かったところで事件の解決には何の進展もないのと一緒になんだからどね。とはいえ、これで残す謎はあと一つ。長須賀がどうやってなくなるさんの部屋の盗聴をしたか、だな）

弥人はソファから立ち上がった。

「長須賀が修理したエアコンってあれのことだよなあ」

リビングの壁、窓側の端はしに設置された普通のエアコン。今も稼働かどうしていて部屋の中に涼しい風を送り続けている。

「どうってことはない。どこにでもあるいたって普通のエアコンだ。これになら誰にもばれずに盗聴器を仕掛けることは難し

くはないだろうな」

エアコンの側に行つて、細かく観察する弥人。

「最近の盗聴器っていうのは本当に良くできていてすごく小型で高性能なんだ。よくあるのはぬいぐるみや万年筆、電気のコンセントなどに仕掛けるタイプのものだね。特にコンセントに仕掛けるタイプのものなら、勝手に電気を引っぱってくる事ができるので電池切れを起こすことがない。エアコンに仕掛けるとしたら似たようなタイプの盗聴器が考えられるかな」

弥人は流暢りゅうちやうに続ける。

「それに盗聴器による集音の方法は二種類だ。一つは電波を使つて声をリアルタイムでほかの場所に届けるもの、もう一つ

はレコーダーが付いていて声を録音しておくもの。最近、主流なのは前者の方かな。携帯電話を改造したりして使えるからね。ただし、どちらのタイプの盗聴器にしろ、仮にエアコンの中に仕掛けるとしたならば、あまりうまくいかない可能性が高いね。エアコンの中では電波環境が悪いだろうし、ノイズも多いだろう。単純な方法ではとても盗聴なんてできないだろうね」

事件ちゃんは弥人の言葉を聞いて、

「へえー。おまえ、ずいぶんと盗聴器について詳しいんだな。にやんだかんだ言ってもちゃんとした探偵なんだな、おまえは。少しは見直したぞ」

「そ、そう。ありがとう」

苦笑いの弥人。それから彼は窓を開けると、サンダルをはいて外へと出ていった。事件ちゃんもソファーから窓の方へと小走りでやって来る。

「お？ どうしたんだ、弥人？」

「ちよつと外にあるエアコンの室外機も見てみようと思つてね」

リビングのすぐ外には、四台のエアコン室外機が並んで置かれているのが弥人の目に入った。

「うん、やつぱり」

「にやにがやつぱりなんだ？」

室外機の前に立つ弥人は、窓から顔だけを出してこちらを見ている事件ちゃんに答えた。

「ほら、見てごらん。エアコンの室外機が四台一緒に並んでい
るだろう？ これらの室外機はそれぞれこの家のどこかの部屋
のエアコン室内機につながっているはずだよ。例えば、この
一番端のものはたぶんリビングの室内機用だ」

弥人の示した室外機から延びたパイプは、分かりやすくリビ
ングの室内機につながっているようであった。

「ということはだ。これらの室外機のうちの一つはおそらく、
なくるさんの部屋のエアコン室内機につながっているんじゃない
のかな」

「ほほう！」

感嘆の声を上げる事件ちゃん。

「つまりおまえが言いたいののは、長須賀はエアコンの室外機から延びたパイプを利用してなくなるの部屋の盗聴をおこなった、ということなんだな」

「まさにその通り！」

弥人はじょうぜつ饒舌に説明する。

「普通、エアコンの修理をすると何と何も調べるのは室内機にかぎったものじゃないと思うんだ。きつとどんな人も室外機の方も点検してみるはずだよ。修理を頼んだ方だってそのことに絶対違和感を覚えなはずだ。そして、この家にあるエアコ

ン室外機はこうしてすべて一緒に並んでいる。もし長須賀が何らかのトリックを用意することができさえすれば、この室外機となくるさんの部屋まで延びるエアコンパイプを使って盗聴を可能にすることができるともしれない」

「……ふむ、なるほどな」

弥人の話を聞き、短い腕を組んで考える事件ちゃん。それから、

「悪くないな、おまえの考えは」

「だろう？ きつと長須賀はエアコンパイプを利用したトリックを使ったに違いない！」

自信に満ちた表情の弥人だったが、事件ちゃんはそっけなく

言い放った。

「じゃあ、そのトリツクとやらを具体的に教えてもらおうじゃないか」

「うん？ トリツク？ ああ、もちろんさ。長須賀が使ったトリツクだね？ わかってるよ。僕ならきつとすぐに思いつくはずさ。だから、もうちよつと待っててね、事件ちゃん」

必死になって考え始める弥人。目の前にあるエアコン室外機のまわりを行ったり来たりしながら弥人は考え続ける。時折、室外機から延びるパイプを見たり触ったりしてみる。そんな弥人を見て事件ちゃんはニタリと口元をゆがめる。

「どうだ、弥人？ 何かいい答えは浮かんできたかな？ ほれ

ほれ。言ってみろよ、ほれほれ」

「い、いや。まだちよつと考え中だ。でも、きつともうすぐ思
い浮かぶと思うよ」

事件ちゃんは意地の悪い顔で続ける。

「おまえ、まさか『パイプの中に小型マイクとケーブルを通し
て盗聴する』なんてことは考えていないよな？」

「うっ！」

ずぼし
凶星だった弥人。

「そんな、スパイ映画じゃあるまいし」

ジト目の事件ちゃん。

「盗聴器にしるマイクにしるケーブルにしるどんだけ高価で特

殊なものを用意しないといけないと思っっているんだ？ ホントにCIAとかじゃないとそんなことは無理だぞ？ それに当然、機材のセッティングとかにも時間がかかる。エアコンの修理として不自然でない時間内、おかしなことをしているのを家の者に見られない時間内において、果たしてそんなことが可能であるだろうか？」

「……………」

難しい顔で黙りこむ弥人。事件ちゃんの言ったことは完璧に正しかったからだった。

（確かにエアコンパイプを利用して盗聴するなんてことは映画の話だ。それに、仮になくするさんの部屋の盗聴がエアコンから

可能だったとしても、エアコン室内機の中からはまともな音質の声は拾えないかもしれない。リスクに対してあまりにもリターンが少ないトリックだなあ)

弥人の考えはとても現実的とは思えないことだ。

「はあゝ。やっぱ違うよなあゝ。そりやそうだよなあゝ」

観念した弥人はとぼとぼとリビングまで戻ってきた。部屋の中は相変わらずエアコンが効いていて、とても涼しく居心地が良い。ただし、弥人の気分は最悪であった。

「駄目だ。いい考えがまったく思いつかない。長須賀はどうやって、なくなるさんの部屋に盗聴器を仕掛けたんだらう？ そそもそも犯人は長須賀で合っているのだから？ もしほかの誰

かが犯人だとしたら、それはもう、まったくのお手上げだよなあ」

ソファアームに座って、がくんと頭を垂れる弥人。

「……やばい。マジで困った」

そんな弥人の隣に座る事件ちゃん。

「弥人、どした？　もうあきらめるのか？　ダメだ、がんばれ。おまえならきつとわたしの大好きななくなるを助けることができるはずだ。ほらっ。がんばれ、弥人。ほらっ！」

弥人の両肩を手でつかんで、ぐるんぐるんと揺さぶってくる事件ちゃん。

「あ、ありがとう、事件ちゃん。でも、ちよつとそれ、やめて

もらえるかな？ め、目が回っちゃうからね？」

「お、そうか。すまん、弥人」

いつの間にか部屋にいた何匹かの猫たちも弥人の足下に集まっただけで来ていた。ナアーナアー、と鳴いて弥人の足に体をすり寄せてくる猫たち。弥人はそのうちの一匹を抱いて膝に置く。

「なんだ、おまえたちも僕のことを応援してくれているのか。ありがとな。うん、これは猫たちの期待に応えるためにも頑張らないとな。あきらめちゃいけないな」

膝に置いた猫の顔を見る弥人。そのときであった。

「……猫？」

弥人の脳裏のうりに、ある考えがフラッシュのごとく閃ひらめいた。

「なんてこった」

すると次の瞬間、弥人の頭には事件に対する解答が、はつきりと浮かび上がってきた。

「……どうやら僕は、まるつきり思い違いをしていたみたいだな」

猫をソファアームに置いて立ち上がる弥人。隣でほかの猫たちと遊んでいた事件ちゃんは弥人を見上げる。

「あん？　急にどうしたんだ、弥人？」

「僕はついにわかったんだ。今回の事件のトリック、そして犯人が！」

「にやに？」

小首を傾げる事件ちゃんに弥人は言った。

「事件ちゃん、君の謎はクリアーできたよ！」

梶森は二人の部下を連れてある場所へと車で向かっていた。

花町家から遠くないところに構えられた一軒の小さな病院。看板には『南川動物病院』みなみかわという文字が書かれていた。

「ここだな」

車を降りた三人は建物の中へと入る。受付の女性に梶森は警察手帳を見せながら、

「失礼、警察のものです。南川俊則さんとしのりにお話をうかがいたい

のですが」

少しすると、奥から一人の男性が現れた。年齢は三十代半ばぐらいで小柄な体格をしている。

「な、な、なんででしょうか」

体は小刻みに震えていて、視線はまったく梶森に合わせない。明らかに動揺した様子だった。

「南川さん、あなたは以前、花町なくなるさんの飼い猫シロロの治療を担当しましたね。そのときのお話を詳しく聞かせてもらえませんか。できれば署までご同行願います」

「あつ、あのつ、その私は……」

「あなたには脅迫の容疑がかけられています。すぐに逮捕状を

用意することまでできるんですよ」

梶森の口調は丁寧ではあったが、有無を言わさな^{うむ}いような迫力があつた。南川はしばらくしたのち、かすれる声で答えた。

「……わかりました。すべて白状します」

梶森が南川のもとに向かう一時間前、花町家のリビングでは弥人が事件ちゃんに今回起きた事件の解答を示そうとしていた。

「弥人、本当にわかつたんだな？ 事件のトリックと犯人が」

ソファアームの上に立ち上がって弥人をまっすぐ見る事件ちゃん

ん。

「ああ、間違いないよ」

力強くうなずく弥人。事件ちゃんはごくりと唾^{つば}を飲んで、

「よし、じゃあ言ってみろ。しつかりとわたしのネコミミで聞かせてもらおうじゃないか。おまえの出した解答をな」

「うん、わかった」

弥人は落ち着いた声で話し出した。

「まず僕は大きな勘違いをしていたんだ。今まで僕は長須賀を犯人と仮定して推理を進めていたし、盗聴器を仕掛けたトリックも長須賀がエアコンを利用したんじゃないかと考えていた。しかし、それらのことは大きな間違いだったんだ」

事件ちゃんも真面目な表情で問う。

「おまえは、長須賀は今回の事件にまったく関係がない、と言
うんだな」

「そうだ。長須賀は完全に無実だ」

「では、いったい誰が犯人だと言うんだ？　徹でもない、長須
賀でもない、とするならば犯人はもう見も知らない誰か、とい
うことになるんじゃないのか？」

「うん。ということになるね」

弥人はあっさりと事件ちゃんの言葉を肯定した。

「犯人は少なくとも僕のまったく知らない人間、警察の作った
資料にまったく載っていない人間なんだよ」

「そ、それなのにおまえは犯人がわかったというのか？　それ
はずいぶんとおかしな話じゃないのか？」

弥人は首を横に振って、

「実は犯人については、盗聴器のトリツクを暴くことによつて
自然と分かるように今回の事件はなっているんだ。だから、今
から僕はなくなるさんの部屋に盗聴器を仕掛けるためのトリツク
を説明しようと思う」

「……トリツクが先か。いいだろう」

事件ちゃんがじつと見つめるなか、弥人は言った。

「盗聴器はいつたどこに仕掛けられていたか。それは『なく
るさんがかわいがっている猫、シロロが骨折中にはめていたで

「あろうギブスの中』なんだよ」

「シロロ？ ギブス？」

「ああ、そうだ。シロロのギブスだ」

弥人は声のトーンを上げて説明する。

「さっきこのリビングにいたとき、なぐるさんは僕と梶森さんに言ったんだ。シロロは四カ月前に事故に遭って後ろ足にひどい骨折をしてしまった、と。そして、獣医に診てもらって最近になってようやく骨折が治ってきた、ともね。ということだ。シロロはこの四カ月近くの間は確実に後ろ足にギブスをはめたままこの家の中で生活していた、ということなんだよ」

黙って聞いている事件ちゃん。弥人は続ける。

「そして、犯人はそのシロロがはめたギブスの中に小型盗聴器を仕掛けたんだ。猫用のギブスといっても猫の後ろ足すべてを完全に固定しなければいけないのだから、そのサイズはかなりのものだ。おそらくどんな盗聴器だって簡単に仕込むことができるはずだ」

「……おまえの言う通りだ。猫用のギブスは大きいものなら盗聴器を仕掛けることが十分に可能だ」

「しかも、盗聴器の電池だってシロロが通院してくるたびに取り替えることができる。電池切れの心配もまったくないってわけだ」

「仮にレコーダータイプの盗聴器を使っていたとしたら、レ

コーダーのメモリーを取り替えることもついでにできるな」

「うん、そう。それに一番重要なのはシロロが特になくなるさんになつている、ということだ。今もおそらく、なくなるさんと一緒に彼女の部屋の中にいるんじゃないのかな。いつもなくなるさんの近くにいるシロロに盗聴器が仕掛けてあつたのならば、かなりクリアーな音質でなくなるさんの声を拾うことができるだろう」

「それもおまえの言うとおりで。シロロはなくなるが家にいるときは、ほとんどいつもなくなるの側にいる」

「やはりね。これは犯人にとつても予想以上にあるがたいことだつたんじゃないのかな。それとも犯人はなくなるさんに『骨折

中の猫はストレスを減らすためになるべく一緒にいてあげてください』とでも言ったのかもしれない。しかし、仮に盗聴が思ったほどうまくいかなかったとしても犯人側にたいしたリスクが存在しないことも、このトリツクの優秀なところだね」

「ふむふむ」

「こうして盗聴器のトリツクがわかってしまうと後はもう簡単だね。今回の事件を起こした犯人、それは……」
ついに弥人は言い放った。

「シロロの治療をおこなった獣医、その人物だ！」

弥人の推理を聞き終わった事件ちゃん。ややあつて、口を開いた。

「……正解だ、弥人。おまえの推理はすべて正しい」

「本当かい？」

「うむ。犯人はシロロの骨折を治した獣医、名前は南川俊則だ。この近くで動物病院を開業している。行って捜査を進めれば、ほどなく逮捕することができるだろう。南川の動機は、やはり自分のファンである声優が人気投票でなくなるに抜かされたことによる恨みうらだ。そんなところに、なくなるが自分の病院にやって来た。そして、今回の犯行を思いついたというわけだ」

「犯人の名前は南川俊則！ よかった！ これでなくなるさんを助けることができる！」

力強くこぶしを掲げる弥人。

「よくやった、弥人。なくなるが苦しみから解放されることは、わたしにとってもこの上ない喜びだ」

事件ちゃんは穏やかな表情で話す。

「わたしは事件の象徴。中立な立場であり、おまえに事件の犯人を直接教えることはできない。しかし、おまえは見事に事件を解決して、なくなるを助けてくれた。感謝しているぞ、弥人」

「……事件ちゃん？」

事件ちゃんはソファアーの上に立ったまま弥人の真横に来る。

「これでわたしは心置きなく消えることができるな」

「あっ！」

弥人はここにきて思い出した。事件が解決されれば事件ちゃん

んは消えてしまうのだ。それは事件ちゃんが事件の象徴であるためだ。事件が解決されれば事件の象徴も存在意義がなくなつてしまう。事件ちゃんが消えるのは避けては通れないことだった。

「事件ちゃん、君はもういなくなつてしまうのかい？」

「うむ、仕方ないな」

「……そうか。すごく残念だ」

「残念なもんか。おまえが立派に仕事をやり遂^とげてくれたおかげで、わたしの心はすつきり晴れやかだ。こんなにいい気分で消えることができるなんて、まったく思ってもみなかったぞ」

ソファアーの上から横に立つ弥人に飛びついていく事件ちゃ

ん。

「本当にありがとな、弥人！」

それから、ぺろりと猫のように弥人の頬をなめる。

「ははっ。くすぐったいよ事件ちゃん」

弥人の体に抱きついた事件ちゃん。しかし、その体の重さはすぐに羽のように軽くなっていた。

「弥人、さよならだ。じゃあな」

かすかに弥人の耳に入ってくる事件ちゃんの声。

「ああっ……事件ちゃん、もう消えてしまったのか」

気づいたときにはもう弥人の体に事件ちゃんの重さを感じることはできなかつた。ネコミミフードをかぶった彼女の顔もも

う見えない。

「……今回も事件ちゃんを救うことができてよかったな」

弥人の頬には、事件ちゃんがなめた舌の感触だけが残っていた。

(ギャルゲー探偵と事件ちゃん 第二回／おわり)

モッコー B級グルメ部

第13回BOX-AIR新人賞作品さこそくの新連載!



食欲増進♥新感覚B級グルメ青春小説誕生!

第一品目
思い出メンチ

著=吉井伍有

illustration=mot

秘

第十三回BOX-AiR新人賞受賞作選評

『モッコーBグル部』

吉井伍有

・映像が目に浮かぶよう。

・テンポよく進行していき、余計な説明や蘊蓄で足踏みしないところは気持ちいい。会話の軽快な感じもよく、美しい学園生活の一シーンを切り取っている。

・せっかくB級グルメという明解なテーマがあるのに、冒頭二話には「B」の字も「グルメ部」という言葉も見えて来ないのは寂しい。もう少しはっきりした予告や事件が欲しい。

受賞
おめでとうございます

吉井伍有——Gowe Yoshii

神奈川県横浜市出身。本牧出身。第十二回BOX-AIR新人賞を本作で受賞。B級グルメサイトを見ては気になったメニューをチエツクしつつ、太りやすい体質なので我慢する日々。ペンネームの由来はニコ生選考会アンケート結果の44・1パーセントに読者ポイントの5を足したもの。御投票、ありがとうございます。

mot

まんが家、イラストレーター、グラフィックデザイナー。「コミティア」や「ユリイカ」(青土社)などでたまに活動中。『西

島大介のひらめき☆マンガ学校』生徒。

「anticycle」 <http://www.anticycle.com/>

はあ、ふう、はあ、ふう——不安定な呼吸音。

白い息が夕焼け空へ溶けていく。

震える右手の人差し指がインターフォンのボタンに伸び、引っ込んだ。

保永堂東子^{ほえいどうとうこ}は伸ばしかけた手を胸に戻し、制服に垂れかかる紫色のマフラーに押しつけた。

太い竹の幹を何本も並べてつくられた垣根、その向こうに、三階建ての一軒家が建っている。灰色の外壁のせいで住宅とい

うよりは事務所といった感じだ。

東子は三階の端にある窓を見上げ、紺色のカーテンに哀願するような眼差しまなざしを向ける。それから顔を下ろし、正面にある

【魚栄うおえい】という表札を見つめた。

木目の浮き出た長方形の板で、魚栄と彫られた部分は墨で黒く塗られ、漆うるしでコーティングされて光っている。表札といい、監視カメラの設置された金属製の門といい、百合の咲き誇る彫刻の施された木製の扉といい、かなり値が張りそうだ。

持ち手に腕を通して右肩にかけたスポーツバッグ風の学生鞆は紺色で、持ち手の付け根には緑色をしたカエルのぬいぐるみストラップへカワズンがぶら下がっている。

東子は左手でカワズンをにぎりしめて、

「よし」

とつぶや呟き、苦手な食べ物を飲み込むときののようにゴクリとのどで音をたてて、再びインターフォンに人差し指を伸ばした。

一品目 思い出メンチ

「美岬みさきは会いたくないそうです」

インターフォンから返ってきた言葉が東子の頭の中をかき混ぜた。エコーまでかかってリフレインする。見開いた目にじわっと涙がにじんできた。唇は開いたまま、何か言いたいので

に、声が出ない。魂が抜けていくかのようになり、白い息が漏れるだけ。

体感温度を一気に下げる風が東子の吐息を吹き飛ばし、肩にかかる髪を揺らす。毛先が目元を軽く覆い、両頬にかかった。

「では、失礼しま——」

「ま、まま、待ってください！」

左手のカワズンを強くにぎって、勇気を振り絞って、インターフォンの向こうの相手を引き止めた。

「あ、あの、私の何がいけなかったんでしょ？ 気に障るさわ

ことをしたのなら謝ります。ですから一度でいいんです。お母様、ですよ？ どうか、先輩に会わせてください！ お願い

します！」

東子は腰を折って、門に向かって頭を下げた。

インターフォンは、少し黙った。

表札の下に設置された黒くて四角いプラスチツクの板には、電卓のような数字のボタンの他に映像が出るのだろう小型モニターまで付いているが、モニターには何も表示されておらず、音声だけが行き来している。

「東子ちゃん、といいましたね？」

「はい！」

東子は顔を上げた。家まで訪れた気持ちに通じたのかも——
そんな希望が不安まじりの表情に出る。

「娘には娘の事情があるの。だから、もう来ないでください。ごめんね」

ガチャリ、と、受話器が乱暴に置かれるような音がして、通話は終わった。

東子の目の色が薄まっっていく。心が、蒸発していく。カワズンをにぎる左手から力が抜けて、制服の、紺色のスカート横でだらりと揺れた。腫れ物のように赤く、三月初めの空が暮れていく。

桜のつぼみが風に吹かれている。

つぼみたちは揺れる。まだ開花の時期ではないと首を振るよ

うに。

よこはましりつほんもくこうこう

横浜市立本牧高校の文字が浮かぶ、ややくたびれた銅板のプレートがはめられたレンガ造りの正門を、生徒たちがダルそうな足取りで通っていく。桜の木々に見守られながら校庭を囲むネットに沿って坂を登ると、下駄箱のある玄関に出る。

春眠暁を覚えずといった具合に眠たげな顔をして歩く生徒たちを、東子が早足で追い抜いていった。誰とも目を合わせないように硬い表情でうつむいて、ときどき右手と右足が同時に前に出そうになりながら、ぎこちなく進んでいく。

東子の制服は、周りの生徒たちとは違う。オレンジがかつた茶色いブレザー姿の中、東子は濃紺のジャケットとひざ下丈の

スカート。黒革で四角い鞆の中、東子は紺色のスポーツバッグ、カワズン付き。

「転校生？」「いや、あれはモクナン本牧南中学校の制服だよ」「じゃあ、地元か」「志望校の下見じゃね？」「つーか、もう入試終わってね？」

まだ中学生の東子の目には、高校生は大人に見える。彼らの声も、大人びて感じる。聞くとともになく聞こえてくる囁ささやきが、東子の表情をこわばらせた。

（た、たとえば、誰かの妹が訪ねてきたとか、そういう設定つてことで……）

東子はそんなふうに心の中で説明した。けれど心の声が自分

以外に伝わるはずもない。緊張は、おさまらない。周囲の視線に耐え切れず、うう……と呻うめいて走り出した。勢い、髪がふあさつと膨ふくらむ。

東子はガラス戸になっているドアから玄関に入り、壁際の下駄箱に備え付けられていた来客用のスリッパに履きかえた。廊下に出てすぐ、事務室はどこですか、と訊こうとして、近くを歩いている女子生徒のほうを向いた。

「あ、あの」

と声をかけたけれど、知らない人に話しかけるのは勇気がいる。恥ずかしくて、東子の遠慮がちな声は届かなかつた。声をかけるタイミングも遅れた。その女子生徒は何事もなかつたか

のように去っていく。

「うつ……」

東子はヤツチヤツタ感を抱きつつも、諦めない。もう一度話しかけてみようと思われ、彼女を追う。すると下駄箱の上がり口に出た。視界右、廊下の角に窓があったので、その内側をのぞいてみる。白髪まじりの、角刈りの男性職員と目が合った。

「あの、事務室はどこですか？」東子は質問した。

「ここです」

「えっ!？」

彼はあっち向いてホイでもするように、東子の顔の横を指差した。

東子はその指の先を目で追って、左を向いた。窓に、白いシールで、事務室と書かれている。

「あ、すみません……」

東子はよく見ていなかった自分を恥じて、照れた。

「御用は？」

「あ、あの、魚栄美岬さんのクラスはどこですか？」

「ウオエイ？」

「お魚に栄えるで、ウオエイです。ウオエイ、ミサキ」東子は声に力を込めて、左手にカワズンをにぎった。

（今日こそ、絶対に会おう……）

東子の背後でポニーテールが揺れた。ウオエイの音に反応したらしい。飾り気のない青いゴム紐でまとめられた黒髪の下、細い筆先で丁寧にも縦線を描いていったようなうなじを、鞆を持っていないほうの手が無造作に搔く。はらつと艶つやの良い直毛がほつれた。

越村天乃こしむらあまのは二階へつづく階段の踊り場に立ち、東子の鞆かばんから垂れるカワズンを見つめる。思い当たるフシがあるようだ。

東子は背後の天乃に気づかない。職員との会話で精一杯。

「その魚栄さんは何年生？」

「一年生です」

「名簿見てみるけど、君、どなた？」

「モクナン——あ、いえ、ほんもくみなみちゅうがっこう本牧南中学校三年、保永堂東子で
す」

天乃はニヤツとして振り返り、階段を一段飛ばしに駆け上がっていった。

表札に【1の3】とある教室に入り、最前列の窓際、机の横にあるホックに視線をやる。そこには本牧高校指定の四角い黒革の鞆。その鞆の持ち手には、東子がつけているものと同じデザイン、大ききの、緑色のぬいぐるみストラップ、カワズンが結わえられていた。

机の上には、組んだ両腕を枕がわりにして顔を伏せている、ややぽっちやりした体型の、制服の背中。

天乃は、黒板と教壇の間を通ってその背中の中のすぐ横に立ち、肩を揺すった。

「美岬、起きろー」

「ベル、まだ鳴ってないわよ……」と気だるそうな声。

「モクナンの子が探しにきてるぞ」

「そう……」

眠そうな顔のまま、美岬はゆっくり上半身を起こす。頬にかかっていた髪がさらっと流れてあご先を払った。ボーイツシユに後頭部を刈り上げ、こめかみと前髪は長めに残している。

切っ先を墨に浸した日本刀のようにすつきりとした眉毛、深い二重の^{まぶた}瞼は、エクステではない本物の、程よくカールした長い

まつ毛につり合っていて、寝ぼけ眼まなこでも瞳の輪郭がくつきりと浮かび上がる。青みがかかった眼球の白い部分が教室の蛍光灯に反射してキラツと光った。

「モクナンが……何かしら？ ふあ」

美岬は右手を口元にあてて、アンニユイにあくびを一つ。

天乃は、東子の言葉を思い出して、

「えっとね、ホウエイドウ——」

「——トウコ！」

美岬の寝ぼけ眼が一気に広がる。ビームの出そうなキツイ視線を戸へ向ける。

「まだ一階にいるよ。事務室の前」

美岬は困ったような顔をして、黙っている。

「何？ 会いたくないの？」

美岬は軽くあごを下げて、うなず頷き、

「保健室で休むわ」

と狼狽ろうばいまじりに眩くらいて椅子から立ち上がり、鞆たもとを手にとって

天乃の横を通り過ぎようとした。

天乃は少しだけ顔を傾けて、

「ずっと無遅刻無欠席なのに、もつたいない」

真横に立つ美岬の耳に囁いた。

美岬は足を止めた。浮かない顔のまま、黒板の真上にある丸

時計を見つめた。時刻は午前八時四十四分。

「天乃、ちよつといいかしら？」

「あいよ」

待ってました、とばかりに、天乃は笑顔になる。

「ありがとうございます」

東子はペコリと頭を下げ、どういたしましてと答える職員に背を向ける。と、天乃の目、鼻、唇が迫ってきた。間一髪、文字通り髪の毛一本分のきわどい距離まで。

「ひゃっ」と東子。

「うわおっ！」と天乃。

階段を二段抜かしで下りてきた天乃は、ついた勢いに逆らえ

ないでいた。おつとつと、と踏ん張っていたら東子が振り向いた、というわけだ。東子より頭一つ分、背が高いのに、腰を曲げてこらえていたせいで顔の高さが同じになっていた。

「すっ、すみません」

ぶつかりそうになった不注意を、東子は謝った。

天乃は右手の人差し指を自分の唇にポンとあてた。

「あやうくファーストキスだぜ」

天乃がおちやらけてくれたおかげで東子の気は楽になり、つい頬がゆるむ。

「私もです」

「ワハハ」

「えへへ……」

「つて、そうじゃなくて、美岬なら風邪で休んでるよ」

「えっ？」

「あ……、いや、さつき、ちよつと聞こえたから……」

そんな、と東子は言おうとして、声にならなかつた。声が出なかつた。声を出せなかつた。せつかく勇気を出して学校にまで来たのに……。

「美岬の後輩？」

東子は頷いた。元氣なく視線を下げたまま、天乃の顔を見ていない。

「んじゃ、陸上やってるんだ？」

「足、遅くて、二年でやめました」

「ふーん。じゃ、後輩が来てたって伝えておくよ」

「よろしくお願いします。では」

ちらつと天乃の顔を見てから、東子は廊下を右へ進んだ。その先は下駄箱の列が並んでいるだけで、行き止まりになっている。急いで教室へ向かう、遅めにやってきた生徒たちの姿がちらほら。

「出口はそつちじゃないよ」天乃が教えた。

「一応、下駄箱を見てみます」

東子は天乃を振り向いて、微笑んだ。その瞬間、視界の左側を、リスの尻尾のようなものが流れた。天乃のポニーテール

だ。

「速っ」

「バスケット部だからね」

天乃が東子の進行方向に回り込んでいた。得意気な表情にどことなく焦りの色。

「そうですか、ではでは」

東子は構わず、天乃の横を抜けようとする。

天乃が一步、足の幅を広げてブロック。

「待った。あたしが嘘を言ってるだけでも？」

「いえ、その……」

東子は気まずそうに目をそらした。嘘かどうかについては否

定も肯定もせず、

「私も今日、風邪で休んだので……」

「こ、後輩に疑われてるなんて知ったら、美岬、悲しむと思うな」

「そう、ですよね……。では」

目を合わせずにペコッと頭を下げ、東子は天乃に背を向けた。そのまま来客用の玄関へ歩いていく。

天乃はほっとしたような溜息をつき、東子が来客用の玄関に入るまで見送った。これでよし、というふうには、「ん」と頷いてから、階段を一段飛ばしで上がって教室へ戻る。が、

「……………」

嫌な予感がしたらしい。右手を階段の手摺てすりについたまま踊り場で足を止めた。遅刻しそうな生徒が数人、天乃を追い越していく。

「まさかね……ははっ」

予感を笑い飛ばすように顔を振って再び階段を駆け上がった——その数秒後には一階の廊下へ引き返していた。廊下の角からそつとのぞいて辺りをうかがう。果たして、東子の姿があった。下駄箱チェックを諦めていない。やってくれる、と小声でひとりごちて天乃は静かに東子の背後に忍び寄り、そのお尻を後ろからつかんだ。

「ひあっ！」

思わず東子は両手でお尻を押さえる。こんな声、人生で初めて発した。

「柔らかいねえ。相当、筋肉減ってるよ」

天乃は右手を開いては閉じた。東子の右尻の感触が物足りなかったようだ。

「あ、あの」

東子はお尻を押さえたまま振り返り、

「先輩、やっぱり来てるんですね？」

「そうだよ。東子ちゃんと同じ、仮病」

あっさり天乃は認めた。

「やっぱり……」

東子はうつむいた。前髪が目元にかかるくらい、うな垂れる。脱力した両手がお尻から離れ、ぶらりと揺れた。

天乃が、右手の人差し指でうなじを搔きながら近づき、東子の耳元にやんわりと囁く。

「何があったのか、お姉さんに説明してみ」

「うう……」

誰かに聞いてほしい、そんな気持ちで東子の胸に溢れてきた。しかし、会ったばかりの人に悩みを相談していいものか……。

「十秒で」と天乃。

「ええっ！」

「授業が始まっちやうんだって！」

「あああああ」

チャイムが鳴りはじめた。東子は軽くパニックに陥り、ジャケットのポケットに右手を突っ込んで、

「メ、メメメ、メールで！」

黒いボデイのケータイを取り出した。折りたたみ式の背に貼られた、金色の、葵あおいのご紋シールまぶが眩しい。

穏やかな日差し差し込む学生食堂。テニスコート二面くらい
の広さはあるだろうか、中央に二列、縦長のテーブルを囲むよ
うに椅子が並んでいる。校庭を見渡せる一面ガラスの壁際にも

テーブルが設けられていて、椅子が三脚ずつ向かい合って一つの席になっている。そんな六人用の席が八つ。

天乃は壁際の、一番端の席で、美岬と向かい合った。東子と別れて教室に戻ったときにはホームルームが終わりがかけていて、美岬に説明する時間的余裕がなかったのだ。

一時間目の授業のあと、十分休憩のとき、天乃は報告しようとした。しかし美岬は、昼食をとりながらゆっくり聞き、と断った。美岬は美岬で何か考えたいのだからと天乃は察して、あいよと答えておいた。

「先輩に避けられてるんですううう」

天乃は東子のモノマネをしてみせた。泣きそうな顔と声を出

しながら、丸めた左手を右手でつかむように胸の前で合わせた。

美岬は無反応。プリツとした肉厚の唇にストローを挟んで、ぼんやりと校庭を眺めている。テーブルに肘をついて持った苺ミルクの紙パックから、ストローは伸びている。他に生徒が何人か食事していたが、三年生が卒業していたせいで全体的に空いていた。

校庭では男子生徒が二人、学生服のブレザー姿のままサッカーボールを蹴って、パスし合っている。壁には強化ガラスが使用されているらしく、ボールの蹴られた音があまり聞こえない。

「ケータイにメールしても返信なし。通話にも出ない。家に行けば面会拒否だったって？　かわいいそうに」

天乃は美岬の顔をじっと見た。責めるようではなく、楽しげに口元を緩めて。

美岬の表情に変化はない。ストローを吸って、ピンク色の液体を口に含んでから、

「家の次は学校。まるでストーカーね」
伏し目がちに呟いた。

「半年もの時間をかけてやっと縁を切ったと思ったのに……」
「なんで？　嫌な目に遭ったの？」

天乃は首をかしげて、別に悪そうな子には見えなかったけど

なあ、と続ける。

「東子の憧れを壊したくないから」

「はいいいいいい？」

天乃は目を丸くした。意味がわからなかった。

美岬が紙パツクをテーブルに置いて、ブレザーのポケットから茶色い革の財布を取り出した。バスの定期を入れたスペースから、ラミネート加工された一枚の写真を引き抜く。そして、写真の端に指を乗せたまま、天乃へ向けて滑らせた。

半袖の白いワンピースを着た、きゃしゃ華奢な体つきの少女が写って

いる。背後で湖らしい水面がキラキラと輝いていて、そのキラキラはまるで少女の笑顔から発せられたかのよう。背後で組ん

でいるのだらう隠れた両手。腰の脇で折れた細い両肘に絡みつく黒髪。誰がどう見ても、避暑地を訪れたお嬢様にしか見えな
い。

「誰これ？」天乃は写真から顔を上げた。

「どこの美少女モデルかと思った？ ふっ、言わせないでよ」
勝ち誇ったように微笑する美岬。

「憧れを壊したくない、ねえ……」

天乃が顔を上下させて、写真と美岬を交互に見て、

「説得力ありすぎんぞ」

「わかったなら、もう放っておいて」

美岬は軽くムツとしたようで、写真を手前に引き、財布に戻

した。

「ダメ。きちんと説明するって東子ちゃんに約束したし、ケータイのメアドも交換したしいー」

天乃は悪戯いたずらっぽい口調で断る。

「どう説明する気？」

美岬は財布をブレザーのポケットにしまった。不安げな顔で天乃を見つめる。

そうさね、と、天乃は濃紺の、ストレート式のケータイを美岬に向けて、

「撮らせて」

「絶交するわよ？」

即答。美岬は目を吊り上げた。長いまつ毛がトゲのように逆立っている。

「そこまで……」天乃はケータイを持った手を下ろした。

「そうよ、そこまで」

わかってくれたようね、と言いたそうな顔と声で、美岬は紙パツクを再び手に取った。

「……自分がかわいいの？」

と続けた天乃に、美岬は顔を振った。

「わかってないわね。あくまで東子の憧れのため」

「太った自分を見られたくない、でしょ？」

同情したような、呆れたような口調でしよすがない子だねえ

と天乃は言つて、優しく微笑みかけた。

美岬は大きく溜息をついた。

「まあ、否定はしないわよ……」

「写真と比べたら太くなつたけど、気にするホドでもないと思うぞ？」

慰めではなく本心から、天乃は目の前に座る美岬の印象を述べた。

美岬はちゅうと苳ミルクを吸い、

「他の誰でもない私が、私自身が、太つた自分を許せないのよ」

「痩やせるまで再会したくないってか？」

「それか、二度と会わない」

予鈴よれいが鳴った。昼休みは残り十分。

美岬は紙パツクに描かれた苺のイラストを見つめて、

「東子を嫌いになつたわけではないからって、そう伝えておいて」

「あいよ」

午後の授業へと、生徒たちが席を立っていく。

天乃も立ち上つて学食を出ながら、もしテレビドラマだったら東子ちゃんと再会するまで画面に登場できないうぞ、と、からかった。部分的に目とか口だけ映ってさ、再会の場面でやっと全身が映ってオチるパターンだね。

美岬は、視聴率悪そうね、と、面倒そうに天乃の相手をしてから、ふふつと笑った。天乃はその笑顔を見逃さなかつた。いつもの美岬に戻ったと確信して、階段をのぼりながら、うれしそうにポニーテールを左右に振った。

その日の午後、東子は本牧いずみ公園で天乃を待った。バス停・本牧宮原ほんもくみやばらのある公園で、一年中よく葉の茂る、背の高いくすのき楠が何本も植えられている。その根元に置かれたベンチに東子は座り、ひざの上にモクナンの紺色の鞆を載せた。風が吹くたびに葉のこすれる音がさらさら、ざわざわと頭上で響く。東子の不安を代弁しているかのようだ。

東子はふと、赤いロープを編んでつくられた、風変わりなジャングルジムを眺めた。ロープにぶら下がったり登ったりして遊ぶ幼い子供たち。肌寒さをものともせず、奇声を上げて楽しそう。母親がそばで見守っている安心感のせいか、元気にはしゃいでいる。

ちいさかった頃は自分もよく遊んだな、と、懐かしさのあまり東子は笑みをこぼした。

「おまたー」

天乃の声が聞こえた。挨拶しようとして東子は立つ。

なのにタイミング悪く、天乃は東子の隣に座った。

「ども」東子はまた座った。

「ほい」天乃はまた立った。

「あれ？」東子はまたまた立った。

「ん？」天乃はまたまた座った。

「えっと」東子は三たび座った。

「ワハハ、東子ちゃん、ナイスボケ」天乃は、今度は座ったまま
ま でいた。

「あはは……」

本気でウケている様子の天乃に対して、ボケたつもりはな
かったんだけど、と、苦笑まじりに思いながら、手に持った鞆
をひざに再び載せる。

「あたしも遊びたいなー」

天乃が子供たちの群がるジャングルジムに顔を向けた。スカート横に本牧高校の四角い黒革の鞆を置いて。

「どうぞ。鞆、見てますから」

「いや、さすがに恥ずかしいって。東子ちゃんのボケ、冴えまくりだね」

「ど、どうも……」

「カエル、美岬とおそろい？」

東子は、天乃の視線の先を見た。鞆の上でうつ伏せになったカワズンを指でつまんで、仰向けにした。

「陸上部にいた頃、先輩からもらいました。カワズンです」

「ふーん、美岬もまだ付けてる」

「ほんとですか？」

東子の顔が明るくなる。声もつい大きくなった。

「美岬は、東子ちゃんを嫌ってはいないよ」

「よかったあ……」

東子は、手のひらに持ったカワズンの、その緑色のお腹を親指でさすりながら、

「私、小学生のときは足速かったんです。でも中学に入ったらもつと速い人がいっぱいいて……。二年生になってすぐ部活やめたんですけど、先輩はそのあとも仲良くしてくれて……」

「わかるよー。あたしも中一からバスケットやってるけど、好きだったっていうだけで上手うまくないんだよね。何度もやめようと思っ

た」

天乃もカワズンを見つめ、

「中学の頃の美岬ってどんなだった？」

「うーん」

東子は顔を上げた。広い大空にぽつんと、雲が一つはぐれて
いる。まるで青いソーダに添えられたクリームが溶けたよう。

「先輩は一番速い選手じゃなかったけど、一番かわいくて、優
しくて、おしやれで……」

目を輝かせながら自分の世界に入っていた。

「そ、そっか」

天乃は東子の美岬LOVEぶりに軽く驚いたらしく、

「まあ、人にはいろいろな事情があるからね」

「その事情、教えてくれませんか？」

東子が真剣な眼差しを向けた。いきおい顔が天乃の鼻先に触れそうになる。

「そっ、それを言えたらあたしはここに来てないって」

すつと顔を引きながら、天乃は明るいい声と笑顔でやんわり断った。

「でも来月には本牧^{モッコー}高校に入学しちゃうんです」

「マジ？」

「マジです。だからその前にどうしても仲直りしたくて」

「仲直りねえ……」

天乃は腕を組んだ。太ももの間、足元の砂地をじつと見て、考えるような口調で、

「仲直りっつていうのとは違うんだなあ。東子ちゃんとは全く関係ない事情だから」

「もしかして病気ですか？」東子はカワズンをきゅつとにぎつた。

「ううん、健康すぎるくらい健康」天乃は首を振る。

「じゃあ、先輩の走り、また見れますね」

東子が手からカワズンを離して、胸の前で両手を合わせた。ほつとした表情で感激している。

「え？」

よく聞こえなかった、というふうには天乃は東子の顔を見た。しかし東子は気づかない。組んだ両手を裏返し、頭上へ伸ばしている。

「ん、くう〜」

内股のひざ頭をくつつけて背筋をピンと正し、鞆の持ち手をつかんだ。立ち上がると振り返りざま、晴れ晴れとした表情で天乃に微笑む。

「安心しました。同じ高校に行くの、ずっと気まづかったんです」

「あ、ああ、そりゃあ、そうだねえ」

天乃は何か別のことを考えているような、言葉を探している

ような、複雑な声を返したが、思いやるように微笑み返して、「とりあえず、おめでとう」

「何が、ですか？」東子はキョトンとした。

「高校合格、おめでとう。ようこそ、我らがモツコーへ」

「あ、はい！　ありがとうございます」

東子は爽やかな気持ちでお辞儀をした。もう何の心配もしていなかった。天乃という、新しい先輩ができて心強かった。

「よっしゃ。お祝いに何かおごっちゃうぞ！　何がいい？」

吹っ切れたように天乃もベンチから腰を上げた。

東子は鞆を持ってないほうの手のひらを広げて振り、遠慮する。

「そ、そんな、いいです」

「ダーメ。かわいい後輩になるんだから、言うこと聞きなさい」

天乃が得意げに、立てた右手の人差し指を左右に振った。

「でも……」

「ただし五百円まで。だから遠慮はなし」

「じゃあ……」

東子は右手を丸めて、あご先にあてた。

二人は嶋田屋という肉屋にやってきた。通りから見上げる
と、三階のベランダに布団が干してあった。赤いビニールの軒

先に白い文字で店名を書いたただけの、こぢんまりとした佇ま^{たたず}い。一階だけ店舗になっっているのだ。

通りに面したガラスケースに、コロツケをはじめとする揚げ物、スライスや角切りにされた生肉、ソーセージやハムが、金属製のトレイにきちんと並べられていた。

建物に向かって左、勝手口に通じる狭い通路に、塗装の剥れ^{はが}たベンチが置いてあつて、ベンチの先には、ほうき、ちりとりが、ポリバケツに立てかけられていた。それらの向かい、隣家を隔てるブロック塀に沿つて、発泡スチロールのプランターが三つ、三両の列車のように一列になつている。プランターには土が盛られているが、乾燥した土の表面には芽の一つも生えて

いない。

「先輩、こっちです」

東子に呼ばれて、天乃はベンチの前に立った。東子の鞆が先に座っている。

「先輩はここで待っていてください」

「え、でも注文しないと」

「オススメを食べてほしいんです」

東子が自信に満ちた顔をして微笑む。

「ほほお、その挑戦、受けようじゃないの」

天乃もニヤリとして、鞆をベンチに置いた。ブレザーのポケットから丸い小銭入れを取り出して、五百円玉を二枚、差し

出した。

「ごちそうになります」

東子は両手で受け取った。

「それとあたしのことは名前で呼んでよ。『先輩』だと、美岬とカブって紛らわしいし」

「はい。えつと……」

「越村さん、天乃さん、どっちがいい？」

「先輩は——」とまで言っつて、東子は言い直す。「——美岬先輩はどう呼んでいるんですか？」

「天乃。または天乃大先生」

「あはは」

どうやら冗談が好きらしい、と、東子は天乃の性格をつかんできた。

「じゃあ、天乃さんと呼びます。私のことは東子で」

「あいよ。んじゃ、よろしく」

「はい！」

笑顔で、東子は通路を出て、壁の陰に消えていった。

「さーて、と」

天乃はベンチに腰を下ろして足を組み、ブレザーのポケットから出したケータイでメールを打ちはじめた。

件名【ピンチだぞ】

本文【東子ちゃん、来月うちに入学するってよ。断食するしか

ないな（笑）

「キヒヒヒ、送信つと」

美岬は走行中のバスにいた。降車ドア脇の柱を右手でつかんでいる。左手には持ち手にカワズンの付いたモッコーの黒革鞆。柱の降車ボタンを押してぼんやりと景色を眺めていると、着信を知らせる振動を右腰に感じた。ブレザーのポケットからケータイを取り出す。折りたたみ式のピンク色で、紫色のビーズで編まれたハート、シルバーの蝶、薔薇ばらの花をあしらった焼き物のプレート、そんなストラップの飾りがじやらりと音を立てた。

バスが速度を落としていく。

美岬はケータイ画面を見る。

「……、！」

降車ドアが開いた。ケータイを持ったまま美岬は一步も動かない。時間が止まってしまったかのように。

「本牧原ほんもくはら、着きましたよ」

運転手の声が車内に響いた。

「降ります！」

はっとしてタラップを駆け下りる。プリツとした唇から、ふう、と息を漏らして、ケータイをポケットに戻した。

東子は右手と左手に、一つずつメンチを持って戻ってきた。

メンチは下半分を白い油紙に包まれていて、油紙を持つ東子の指裏にうつすら油が浮いている。制服のジャケット、その片方のポケットから、店先でもらってきた白いティッシュが垂れている。

「まずはこちらをどうぞ」

東子は先に右手を差し出した。

「ほいほい」

天乃は両手の指で挟んで受け取って、一口かじり、

「ん~~~~」

目を閉じて、泣きそうな顔になる。

「肉の脂にチーズが乗って、とろけるう」

「上半分がチーズで、下半分はまた別なんです」

「どれどれ」

天乃はメンチを上下逆にして紙袋に入れ直して、あむつと口に含み、

「ん……」

「去年の夏、ここに生えてました。冷凍保存で風味は新鮮なままです」

東子が、まるで友の墓を紹介するかのようになり、発泡スチロールのプランターに右手を向けた。

「紫蘇^{しそ}さん、ありがたく、お命頂戴」

天乃は正面のランタンに向かって、左手にメンチを持ったまま、右手で手刀を切る。紫蘇チーズ、完食。

「次は、目をとじて食べてみてください」

東子は左手を前に出した。

天乃は言われた通りにしたが、

「これは……？」

すぐに目をあけてしまった。まだ一口しか食べていない。

「うまい。でも、何だろう……？　牛肉……なんだろうけど

……？」

天乃は不思議そうに、かじった部分を見つめた。茶色い衣の内側に、火の通った細かい肉がのぞいている。

東子が微笑んだ。狙い通り。してやったり。

「ラムが混ぜてあるんです」

「ラム？」

「羊のお肉です」

「へえ、初めて食べるっぽい！」

天乃は感激したようだった。大口をあけて、豪快にかじっていく。

「部活の帰りに先輩とよく食べてました。天乃さんは、先輩の一番の友達みたいですから、この味、知ってほしくて」

東子は鞆のカワズンを見ながら話した。懐かしさがこみ上げてくる。その声には淡い感情が乗っていた。

天乃、ラムメンチ完食。

どうぞ、と東子がティッシュを渡した。

サンキュー、と受け取って、天乃は指を拭く。

「思い出をプラスしちゃうと味が美化されちゃうもんだけどさ、マジでうまかったよ」

「よかったあ」

東子の安心した表情につられて、天乃もほのぼのした顔になる。

「なんか、東子ちゃんのその、『よかったあ』って、良いな」

「え？ えへへ。そうですか？ 自分じゃ自分の顔、見れませ

んから」

東子は両手を頬にあてて、照れた。

「ケータイで撮って見る？」

「いえいえ、恥ずかしいです、そんな」

頬にあてていた両手を天乃に向けて、振った。

「けど、こんな裏通りにあるなんてもったいない。バス通りならもっと繁盛しただろうに」

「ラムメンチは、知る人ぞ知る絶品なんです」

「東子ちゃんも自分の分、買ってきなよ。あたしもラムメンチ二つおかわり」

「はい！」

東子は通りへ体を向けて、一歩進んだ。しかしそのまま止

まっってしまった。

「ん？」

天乃が東子の後ろ姿、さらに向こうの道路をうかがう。自動車一台通れるだけの通りと、細かい葉の茂った生け垣があるだけだった。

紫蘇の香りが沈黙ににじんでいる。

東子はゆっくりと振り向いた。怯おびえたような目つきで、顔がこわばっている。足音をたてないようにそつと天乃に近づいて、小声で、

「よく見えなかったんですけど、たぶん今、先輩が通りました」

「たぶん？」

天乃も小声になる。

「一瞬、横顔だけ見えたような……。髪が短かったし、人違いかも……。でも鞆にカワズンがついてました」

天乃は腰の横に置かれた東子の鞆のカワズンを見てから、腕を組んだ。

「うゝむ、これもまた運命。会っっちゃえば？」

と、あっけらかんとした声で言う。

東子はあるわけにかんというわけにはいかない。午前中に仮病を使われたばっかりなのに、といった気持ちだが、簡単に首を縦に振らせない。

「そう、ですよね、別に、嫌われてるわけじゃないし……」

「たしかに嫌われてない。嫌われてはないんだけど、東子ちゃんに会いたくない事情はあるんだな、これが」

どういう意味だろう。東子は首をかしげた。天乃は苦笑して何も答えない。どうすればいいのか、と空を仰ぐと、空の青は貧血を起こしたように薄く、元気がなかった。一羽のカモメが用事を思い出したようにUターンしていった。

「会わないほうが、いいんじゃないか？」

東子は顔を、空から天乃に戻した。

天乃は腕をほどいて立ち上がり、両手で、東子の二の腕をぐつとつかんだ。

「本当なら、今日学校に来たとき、会ってたかもしれないんだぜ？」

東子は天乃から視線をそらした。ブロック塀をよちよちと歩くと、赤い背中に黒くて丸い点々のあるテントウムシが見えた。

「そう……でしたね」

東子は通りへと一歩踏み出した。

天乃は東子の左腕から、自分の右手を離さないでいた。

「待った。一つ約束して」

「はい」

「美岬のこと、嫌いにならないで」

天乃の真面目そうな顔と低くなった声に、東子も真剣に頷

く。

「なりません」

「それから、笑っっちゃ駄目だよ」

しかし一転、不真面目そうな顔と軽い声に変わった。

「笑う？ 意味がちよつと……というか約束が二つ……」

「意味ならすぐわかる」天乃はニヤリとして、「せーので行くよ」

「はいっ」

「せーの」

東子と天乃、いつせいに通りに出た。

(モッコーBグル部 第一品目／おわり)

モッコー Bグル部

第二品目
さようなら、先輩



著＝吉井伍有
illustration＝not

変わり果てた「憧れの先輩」のために、東子は……!?

食欲増進♥新感覚B級グルメ青春小説第2話登場!

ぽっちやり体型の女子生徒が身をかがめてガラスケースをのぞきこんでいた。鞆はその足元に置いてある。カラアゲを目の前にして「追加しようかしら」なんて**つぶや**いている。

東子^{とうこ}はカワズンを探した。しかし鞆の裏に隠れているのか、緑色をした物体は見当たらない。

「すみません、人違いでした」

東子は申し訳なさそうに眉を寄せて、左に立つ天乃^{あまの}を見た。

「ブツ、あはっ」天乃がふき出す。

「さつき笑っちゃ駄目って……」

「うん、ごめん。でもさあ」目に溜まった涙を天乃は指でぬぐった。

「ん？」

と、かがんだまま、女子生徒が、騒がしい声のほうへ顔だけ向け、

「……、——ッ！」

まず天乃、それから東子に気づいた。瞳は全開。口元が叫び声を閉じ込めるかのように歪ゆがんだ。すつと背筋を伸ばして立ち上がり、正面の状況を睨にらむ。

「言つとくけど、偶然だからなー」天乃は美岬みさきと視線を合わせ

た。

「え、じゃあ？」東子もわかってくる。

「そゆこと」

ボーイツシユなショートヘアの女の子が美岬だと、天乃は認めめた。

「あ、でも、パーツは合ってるかも」

意志の強そうな輪郭の濃い瞳、小ぶりだけれど低くない鼻筋、プリツとした唇の順で、東子は実感していく。

「ブハハツ、パーツって！ 福笑いか！」

「先輩……」

東子は美岬に近づいたが、

「幻滅した？」

と悲しそうに微笑ほほえまれて、足を止めてしまった。もつとそばに行きたいのに、行けなかった。心が重すぎてその場から動けない。

「そんな……、私たち、友達ですよね？」

「いいえ」美岬は首を振って東子の目をしつかりと見据え、
「違うわ、もう」

はつきりと否定され、東子はめまいを覚えた。違うわ、もう、という美岬の声が体中でこだましている。胸の底から重くて黒い水がどくどく湧いてくる気分。

美岬は目を伏せ、辛そうな表情を隠すように右手で目元を覆

い、

「あの美少女はもういないの……」

「先輩……」

自分で美少女って言うかねえ、と天乃。

「ラムメンチ十個、お待ち！」

突然、しまだやおかみ嶋田屋女将のパワフルな声が飛んだ。六十歳を過ぎても元気いっぱい。近所の奥様方の強い味方である。

「カラアゲ追加します。三百グラム」

事務的な声で美岬が注文を告げた。感傷的な気持ちは一瞬で消えたらしい。ブレザーのポケットから軽い手つきで財布を取り出す。

「じっ、十個……？」東子は目を丸くした。

「まあ、そういう事情だったってわけ」

天乃はほっとしたように笑みをこぼし、東子の、遠いほうの肩にぽんと手を載せて腕を回した。

東子は、はあ、と、気の抜けた返事をするだけで精一杯。

左から天乃、美岬、東子の順で、三人並んでベンチに座った。美岬はカラアゲを鞆に仕舞う。家で食べるのだという。ひざ上の鞆にラムメンチの収まった油紙袋を置いて、美岬が三つ目を口に運びつつ話す——「そもそもね」モグモグ「陸上自体」モグモグ「ダイエットになるかなって思ってた」モグモグ

「始めたような」モグ「もの」モグ「だったのよ」——左手で口元を隠しながら。

「わかったから、食ってから話せ。な？」呆れ顔で天乃が注意する。

「モグ（うん）」

「つたく、一旦デブがバレたらすっかり開き直っちゃって……」

「いいえ」美岬は短く二度首を振り、「ぽっちやり」

「まあ、現実逃避で気が楽になるなら、それでいいのかもな」

「逃避？ 事実よ」

「わかった！ もういくらでも食え！」

と、キレ気味な口調ではあったが楽しそうに天乃は言い放つ。

「あ、あの……」遠慮がちに東子が割って入った。「先輩、ちゃんと食事制限してたら、陸上部で一番になれたかもしれないのに……」

と、ひざの上の、自分の鞆のカワズンを見たまま言った。美岬の姿を、あまり見てはいけないような気がして。

美岬のカワズンはラムメンチの下敷きになって、油紙袋から下半身がはみ出ている。

美岬は四つ目のおかわりを取る前に、蠅でも払うかのように右手を振った。

「そんなに甘くないわ。本気で走ってる子に、ダイエット気分の私は敵かなわない」

東子は納得していない。そんな顔をする。

「やっぱり幻滅した？」美岬がちらつと東子を見た。

東子は、同意しそうになる気持ちを首を振ってかき消し、

「いえ。ただ先輩が本気になってたら、やっぱり一番だったか
もしれません」

「本気にならなきやいけなかつたとしても、本気になれなく
て、怠なまけて、ラクしちやつた時点で、もう駄目だったのよ」

美岬が自嘲するように眉間に皺しわを寄せた。

東子はそんな美岬へ思わず顔を向け、「でも私は！」と勢い

よく言ったたはいいが、すぐにうつむいて、「私は、走ってる先輩がすごく好きでした。活いき活いきしてて、輝いいてて……。だから高校に行ったらまたいっしょに楽しい時間を過ごせたらいいなって、そのためにはどうしても先輩に会わなきゃ……。泣きそうな顔と声で、言葉を絞り出す。

「東子ちゃん……」天乃もしんみりとした顔になる。

「モグモグ」

「このタイミングで食うなよ……」

「ふおいひふふえ、ふおあんふあい（おいしくて、止まんない）」

「あたしのしんみり返せっ」

東子は、カワズンを両手で持った。

「私、何もトリエがないから、短距離と出会ったとき、生まれて初めて『これだ』って言えるものを見つけた気がしたんです。でも勘違いだとわかって、二年生でやめて……。それで、走り続けてた先輩に、自分の夢、託してたのかな……」

「気づいてた。だから東子の憧れ、壊したくなかった」
美岬は自分に酔ったふうには、悲しげな表情を見せた。

まだ言うか、と呟いて、天乃は軽く引いた。

それから、つまり美岬がラムメンチを十個やつつけてから、どこへ行こうかとなつて、とりあえずバス通りへ向かった。本^{ほん}牧原^{もくはら}の住宅地、一軒家に挟まれた、大きな車が通るには窮屈な

路地を、三人横に並んで歩く。暮れはじめの陽は長い影をつくる。それぞれの手に鞆を持つ黒くて細まった斜線が三本、アスファルトに伸びていく。

「じゃあ、先輩はもう陸上やってないんですね」

「すっかり帰宅部よ。がっかり？」

「いえ。でも先輩が陸上部に入ってたらマネージャーしようかなって思っていました」

「いつそバスケット部に来るかい？」

天乃が数歩前に出て、美岬越しに東子の顔をうかがった。

「あ、私、ボールは苦手で……」東子は思い出しながら話す。

「小さい頃、近所の子供たちと野球してて、高く上がったボー

ル、おもいつきり顔でキヤツチしてから怖くて。すみません」
「そっか。まあ、無理にとは言わないさ」

天乃はまた列をそろえた。

ふあーあ、と美岬が大あくび。右手を口元にあてる仕草が自然だ。

「先輩、高校生活、楽しいですか？」

「別に。つまらなくはないわ」

東子は、眠そうな美岬の横顔をじつと見る。するとだんだん気持ちと足が重くなってきた、ひとり立ち止まってしまった。目の前で遠ざかる美岬の丸くなった背中はどこかさびしげで、弱ってさえいるように感じる。

「先輩」いたわるような声で、東子は呼んだ。

「んー？」気だるそうに答えて、美岬も足を止める。

天乃も、美岬に続いて振り返った。

「私と競走してください」

「早食い？」と天乃。

「いえ、百メートル、走ってください」

東子は真剣な表情で頼んだ。

美岬は不敵な笑みを浮かべる。

「今の私が相手なら勝てるだけでも？」

「え、いや、その……」東子は、美岬の目力——迫力に怯^{ひる}んだ。

「きつと楽勝でしようね。だからパス。面倒だわ」

美岬は右手をぱつと振って、東子に背を向けた。

「お願いします。勝ち負けじゃないんです」東子は腰を曲げ、深く頭を下げる。そんなふう^にに影も折れる。「このままじゃ私、すつきり卒業できません」

どうしたらいいの、といったふう^にに、美岬は天乃の目をのぞいた。

「元美少女の意地、見せてやれ」天乃は楽しそう^だだ。

「元はいらない。瘦^やせればいいだけだから、全然現役」美岬も負けない。

「うへえ……」天乃はむしろ感服したような声を漏らした。

本牧南^{ほんもくみなみ}中学校の正門に来た。夕焼けが校舎の白い壁をオレンジ色に染めている。

「勝手に入って怒られないかしら」

美岬が独り言のように訊いた。競争に乗り気ではないと遠回しに言っているらしい。

「何か言われたら、私が説明します」

自分が守る。そんな気持ちを込めて答え、東子は門を抜けていく。

「へへっ、お邪魔します」

天乃はお客さん気分で、足取りも軽い。

三人は校庭の土を踏んだ。サッカー部が練習していたが、東子と美岬が走るくらいスペースはゴール裏にじゅうぶんある。

「やっぱり無理」美岬が首を振った。

「遅くてもいいんです。本気で走ってくれば」東子は粘る。

黙りこくった美岬の肩に天乃が腕を回し、頬を寄せた。

「ここまで来て何ためらってんの。せいぜい二十秒かそこらだろ？　後輩の気持ちに応えてあげなっつて」

美岬は露骨に困惑顔を見せてから、鞆を地面に置いた。東子も自分の鞆を足元に置く。

「んじゃ、あたしが審判ね。ここからあのネットまで」

天乃の言った「ネットまで」というのは、だいたい百メートルだろうという目測のようだ。ネットの向こうは住宅街で、通りを挟んで一軒家やアパートが建ち並んでいる。

「髪、まとめるほどでもないわね」

美岬が東子の後頭部、夕陽を浴びて艶つやを放っているさらっとした直毛に手をあてた。

「あ、はい。それに、すぐ終わりますから」東子は何も考えずに思った通りの言葉を口にする。

「ふふっ、挑発してくれるじゃない」

「あ、いえ、そういう意味じゃなくてですね、百メートルしかないから、その……」

東子は慌てて両手を振る。

「わかってるわよ」と言った美岬の声はやわらかく、温かだつた。

東子は「では」と気を引締め直して、クラウチングスタートの構え——両手の指先と左ひざを地面につける。

美岬は立ったまま両ひじと両ひざを曲げる——短距離にはそぐわないスタンディングスタートの構え。

「あれ？ 先輩、姿勢が……」

「下着が見えるでしょ」

「あつ、すみません」

東子のスカートは丈がひざ下までであるが、美岬のはひざ上

だ。

「女の子なんだから、身だしなみ、大事よ。もちろん内面もね」

慈しむように美岬は微笑んで諭さとした。

「そういうところ、やっぱり先輩です」

「当たり前じゃない。本人なんだから」

「えへへ、そうですね」

「イチヤイチヤやめい。始めるよ！」天乃が冷めた目でふたりの横に立った。

東子と美岬、無言で正面を見据える。

「位置について」と、天乃が右腕を地面と平行にし、「よー

い」でその腕を夕空へ垂直に上げる。

東子は左ひざを地面から離し、腰を浮かせた。その左のふくらはぎが膨らむ。そこに詰まっているのは筋肉だけではない。目に見えないちからが込められている。

「ドン！」

天乃の右腕が一気に振り下ろされた。

東子の髪がふわりと空気をまとう。影が置いていかれて一気に引き伸ばされるくらい、一目散にサッカーゴール裏を走っていく。

そんな東子を、美岬は冷ややかに見送った。

天乃の視線が東子の背中から美岬へ移る。

「おい、内面も大事なんじゃないのか……？」

「やっぱり恥ずかしくて……。ルールに則りのっと棄権します」

「まったく。東子ちゃんに何て言うんだよ。かわいそうに」

状況を理解して落ち込んだ顔の東子が小走りに戻ってきた。
その息が荒い。

「先輩、どうして？」

「だって、この体で走れっていうの？」

「変なのがドスドス走ってるってか？」と天乃。

「ええ、そうよ、笑われる……」

「誰も笑いません！」

東子は両手でにぎり拳こぶしをつくり、美岬を元気づけるように声

を張った。体が、心も、熱かった。走ったからではない。気持ち
ちが沸点に達していた。

「そうかしら」

この人が笑う、という目つきで、美岬は天乃を一瞥^{いちべつ}。

「天乃さん、笑いませんよね？」

「うっ、それは……見てみないと……何とも……」

天乃は言いよどんだ。斜め上へと視線を泳がせて、誰が見ても
（笑う気だ）と思うような顔になってしまっている。目と口
の端がゆるんでいるが、笑わないよう必死に耐えている様子。

「もう……」ちよっぴり天乃を非難してから東子は美岬に近づ
いて、「先輩、いつからそんなにひと目を気にするようになった

たんですか？」

「太ってからでしょ」と天乃が即答。

「違うわ。美少女を自覚してから、ひと目はいつも気にしてた……」

美岬は右手で前髪をさらっと梳かした。

「じゃあせめて、ここを走って輝いてた自分を思い出してください」

東子は切なさを思いつきり顔に出す。そんなこと、言いたくなかった。でも言わずにいられなかった。

「輝いてた？　なんで過去形なの？　今の私が輝いてないみたいじゃない」

東子は肯定の意味を込めて少し黙ってから、

「私の知ってる先輩はいつも堂々としてて、生きてて楽しいって雰囲気は全身から出てました。なのに今は……」

「今は？」

「生きててごめんなさいって感じに見えますう」天乃が東子の声を真似た。

「そこまでは思ってたんですけど……」

「まあ、もつと痩せる努力はします。それでいいでしょ？」

美岬は不機嫌に、もう勘弁してよ、と言いたげな声を出した。

「駄目です。先輩は痩せても輝かない」

東子は真面目な顔で言い切った。

美岬は腕を組んだ。カチンときたようだった。

「ふん、言ってくれんじゃない」

「ちよつと動かないで」天乃が美岬の腕を指差して、「しめ縄」

冷たい風が吹き抜けていった。

「ありや、ハズしたか……」

「天乃、ちよつと静かにしてて」

「へーい」

反省の色なく答えてから、深刻な空気って苦手なんだよなあ、と天乃は呟いた。

東子がうつむいて、話す。

「たしかに先輩の見た目も好きでした。かわいいし、おしやれだし」

「うんうん」美岬は遠慮なく頷く。うなず

「こやつ……」と天乃。

「でも本当に好きだったのは、先輩からあふれる自信でした」

「でした、ってことは、もう好きじゃないってことね？」

「そんなことはないですけど……」

「ほら」美岬は腕をほどいて、やってられない、といったふう
に右手を振った。蠅を追いかうようなあの手つき。「こうなる
から、こうなるってわかってたから、あなたに会うの、避けて

たのよ……」と疲れたように言い、鞆を持った。カワズンが乱暴に揺れる。

東子は何も言えなかった。心と体が気まずさに支配されて固まってしまった。

「モツコー入学、おめでとう。じゃ」

藍色がかってきた空のもと、美岬は校庭を去っていく。

東子は一步追いかけて、ちゆうちよ躊躇して立ち止まり、やっぱり美岬を追おうとした。すつと天乃が東子の腕をつかんで、駄目駄目というふう^たに首を二度、振り向いた東子の目を見ながら振った。

「そつとしておいてあげな」

東子は離れていく美岬の後ろ姿に視線を戻す。

「私はいつも先輩の背中に引っ張られてきました。だから今度
は私が先輩を引っ張る番だと思ったんですけど、大きなお世話
でしたね……」

天乃は東子の腕から離した手を東子の肩に載せる。

「東子ちゃん、美岬はそんなにヤワじゃないし、神経も体も太
いから」

だといいのだけけれど、と思っただが、東子は口には出さないで
おいた。美岬の姿が校舎の陰に消え、見えなくなる。

「それに、美岬は輝いてるよ」

「そうでしょうか」東子はうつむきがちに天乃のほうを向い

た。

「食べてるときはね」

「……はあ」東子は溜息をつく。天乃のおちやらけた態度に気が抜ける。陸上部をやめて以来、二年弱ぶりに気持ちを入れて走った。足がダルイ。運動から遠ざかっていたせいだけではない。結局、美岬に会いづらいままだ。振り出しに戻ってしまった。

家に戻った東子は部屋の明かりも点^つけずにベッドに大の字になつた。顔だけ横に向けて、壁のハンガーにかかった本^{モッコー}牧^コ高校の制服——茶色いブレザー、オレンジ色のネクタイ、^{えんじ}臙^じ脂色の

チエツクのスカート——をぼんやりと見つめる。

「（先輩と気ままずくなっっちゃったし、高校）行きたくないな……」

そう、声に出していた。言葉にしていたことを自分の耳で聞いて知ったくらい、心の声とつながっていた。

翌日は、仮病はやめて、きちんと中学校に登校した。しかし窓の外を眺めてばかりで、どの授業も頭に入ってこなかった。

薄い水色の空、かすれ気味の雲、まるで東子の気分そのもの、白けている。美少女時代の美岬と、ぽっちやりした美岬を心の中で比べては、溜息を一つ、二つ。その日の授業は午前で終わり。鞆を持って廊下に出、あまり歩かないうちに背後から声を

かけられた。

「東子、カラオケ行くぬ」

振り向くと、小さな頭が見えた。左右のこめかみから耳の上にかけて青いV字ヘアピン。隣のクラスからさきまつこの唐崎松子だ。東子も背は低いほうだが松子はもつと低い。低いというより、ちっちゃい。松子は語尾に「ぬ」をつける。

松子の制服の袖は手の甲を隠すほど長い。松子に合うサイズがなかったからではない。すぐに大きくなつて背も腕も伸びる予定だぬ、と、東子は松子から聞いたことがある。

「いいけど、その前にちよつと付き合つてくれる？」

東子は下駄箱で外履きに履きかえてから校庭へ出た。鞆を地

面に置いて、ひざを屈伸させる。

「走ってくるから、ここで待ってて」

「どこへ？」

「どこっていうか、ここ。百メートルだけ。すぐ終わるから」
東子は両手と左足のひざ頭を地面につけた。

（位置について）と心の中で言う。

（よーい）で腰を上げた。

（先輩が勝ったら、私はもう関わりません）

——かかってらっしやい。

そんな美岬の声が聞こえた気がして、目だけ右へ向けた。

華奢きゃしゃな体をした、美少女の美岬が体操着で、東子と同じクラ

ウチングスタートの構えをとっている。想像の美岬だ。わかっている。わかっている。あえて勝負を挑む。

(ドン)

東子は低い姿勢を保ちつつ加速し、思い切り腕を振って、地面を蹴る。蹴り続ける。足の裏が地面をつかむ瞬間しゅんかんに意識を集中させる。

じわり、と、美岬の左半身が視界の隅に現れた。

「——ッ」

東子の心臓がドクンと鳴る。時間が止まった気がした。東子は、スローモーションにすら見える美岬の背をちらつと目で追ってから、静かに瞳を閉じる。

(先輩から……卒業する！)

再び目を開いた後は、正面にだけ集中した。横を見なくとも感覚で、じよじよに美岬に追いついたのがわかる。そして頭から心の中のゴールに突っ込み、

(勝った)

と確信。美少女の美岬はもうどこにもなかった。息荒く空を見上げて、

「さようなら、先輩」

そう声に出した。

遅れて松子も走ってきて、止まれずに東子を追い越した。校庭の端のネットまで突進し、その網目に両手でつかまりなが

ら、呼吸を整えている。

「よしよし」東子は寄って行って、松子の背中を撫なでてやった。

「お、思い出したぬ。東子は、陸上、やってたんだぬ」

「二年になってすぐやめちやっただけどね」

「そうだったかぬ？」

「足、遅かったから」

「そんなことないぬ」

「そんなこと、あった」

東子は笑顔で答えた。松子は何も知らないから、と思い、自分より速い人はたくさんいる、とは言わずにおいた。

「本気になって続けてたら、もつと速くなつたかもしれないぬ」

「——!!」

東子から笑顔が消えた。本気で走っていたら一番になれたかもしれないと、そう美岬に迫った自分自身が目の前の松子と重なる。(何も知らなかったのは自分だ……) そう痛感して、「部活、やめちゃ、いけなかった」と暗い、震える声で呟いた。

「あ、別に責めてるわけじゃないぬ」

「うん。わかってる。ただ、気づいた。走り続けている人だけがわかること、言えることってあるんだなって……」

美岬への申し訳なさで胸がいつぱいになるにつれ、東子の声の調子が落ちていった。

「むむ？」松子は不思議そうな顔をしてから「ま、歌ってすつきりするぬ！」と、バツと両腕を掲げた。ずり下がった袖から手のひらがのぞく。

「ごめん。やっぱり、やめとく」

「ええええええ！」

「同じ高校に行くんだし、いつでもも行けるよ」

「中学の制服で行きたいぬ」

松子が口を尖らせる。青いV字ヘアピンが怒りを帯びたかのように日光を反射する。

「謝らなきやいけない人がいるの。卒業までに必ず行くから、今日はごめんね」

「じゃあ、約束するぬ」松子がちっちやい右手の、ちっちやい小指を伸ばした。

東子も右手の小指を伸ばし、交差させる。

校門の前で松子と別れてすぐ美岬のケータイへ電話した。ボタンを押す指が緊張で震える。電源が入っていないか電波が届かない場所にいるというアナウンスが流れたときには、ほっとして「ふう」と息を吐いてしまった。次に天乃にかけてみる。

「ほいほい」能天気な声が応答した。

「あ、あの、先輩にかけたらつながらなくて。もしかしたら天乃さん、先輩といっしょにいるのかなあ、って思っ、かけました」

「何、仲直りの相談？」

「そんな感じ……です」

「美岬なら、今からテレビに出るかもしれないよ」

「えっ、何かのモデルですか？」

「ははっ、冗談キツイなー」

「あ、いえ、美少女時代のイメージがまだ強くて……」

「そっか。あたしは高校に入ってから知り合ったからさ。まあいいや、うちに来なよ。いっしょに視ようぜ」

東子は「はい」と誘いを受けて、でも、おうちの場所を知ら
ませんと言った。バス停の根岸七曲り下ねぎしななまが したはわかる？ と天乃に
訊かれて、わかりますと答えた。バス停に着いたら連絡ちよう
だいな、迎えにいくから、となつて、通話は終わった。

バス停・本牧ほんもくからバスに乗る。途中、バス停・本牧高校入口ほんもくこうこういりぐち
で停まったが、本牧高校の生徒は一人も乗ってこなかった。い
ないはず、と思いつつ、美岬が乗車してこなかったことに安堵
してしまふ。会って謝りたいのに、いざ顔を合わせるとなると
気まずさが募つる。さらに二つ先の根岸七曲り下で降車。再びバ
スが走り出して、通りを挟んだ反対側の歩道を見ると、灰色の
丸首セーターに細めのブルージーンズをはいた天乃が手を振つ

ていた。東子は信号を渡って挨拶を交わす。天乃の後についてバス通りから坂道になっている路地に入り、こしむら越村家の正面に立った。

(え? ここまでずつと敷地?)

駐車スペースであろう下りたシャツターの前からバス通りまでの下り坂を眺めた。車なら優に六台は格納できそうだ。シャツターの上にはブロック塀が連なり、梅や松の枝が何本もうかがえる。二階建ての一軒家は、路地からだとその駐車スペースを加えれば、東子には三階建てに思えてくる。

上部がアーチ形の鉄製の門をくぐって御影石の石段を三段のぼる。天乃の支えてくれる玄関ドアは軽自動車なら通れそうな

ほど幅広だ。おじやましますと言つて頭を下げる東子の声は、好奇心で半ば上の空。箆^{たんす}筒と間違えそうな靴箱、ゴルフバッグが三セット、何本もの傘が雑に収められた陶磁器の壺^{つぼ}、それらが置かれていても狭くない三和土^{たたき}。上がり口から続く板間の廊下はさながらボウリングのレーンだ。

天乃に「こつちこつち」と案内されて、木目の浮かぶ階段を上へ。のぼり切った正面にある部屋に通されると、「わあ」と東子は声を漏らした。部屋を横切った先、二枚のガラス戸の向こうに広いバルコニーが見えたのだ。そこは一階の屋根にあたる場所で、ゴムノキやポトスの葉が茂る植木鉢、赤ちゃん用のお風呂として使えそうな大盥^{だいたらい}に水草を浮かべたビオトープ、

ゴルフの練習用ネットまであった。

部屋の中央にあるコタツで、ふたりは向かい合う。天板の下にあるべきコタツ布団が取り除けられていて、暖房機器がむき出しだ。天乃の背後に布団が敷いてあって、布団のまわりに漫画、ノートパソコン、アイアンやパターといったゴルフクラブ、孫の手、ティッシュボックス、イヤホンのコードがだらしなく延びたFODなど、こまごましたものが散乱。

（あれ、ベッドじゃないんだ……）

東子は違和感を覚えたが、口には出さなかった。東子の背後には箆笥や本棚が並んでいる。机はどこにもなかった。どうやらコタツが机がわりらしい。マイケル・ジョーダンのポスター

と、【**適当**】と印字された高田純次たかだじゅんじのポスターが、視界右の壁に貼つてある。ジョーダンはダンクシュートを決めるために宙に浮き、高田純次はホールインワンを狙うような目つきでゴルフクラブを構えていた。ガラス戸側、コタツの左横に、やや古めの、ビデオ一体型のテレビが置いてあつて、テープが動いているジーツという音がする。録画中表示赤い丸が表示画面で点灯しているが、テレビ画面はオフ。

「いただきます」

東子は缶コーラのプルリングを引いた。天乃が用意してくれたものだ。どうぞ、と言つて天乃も自分の分を開ける。

「んじゃ、まずは相談から聞こうか」

「あ、はい……」

東子は、松子とのやりとりで気づいたことを話した。自分の無神経さを告白する恥ずかしさで、時間の流れが遅く感じられる。

「つまり、部活を途中でやめた自分に美岬を責める資格はなかった、というわけだ」

「先輩みたいに三年間続けたならまだしも……。それで、謝ろうと思いましたが」

「いいよ、謝らなくて。どうしても謝りたいっていうなら、今あたしが許す。っっていうか、東子ちゃんは悪くないって」

軽い口調で天乃は慰めた。

「でも……」

「だいたい、デブバレ防止に縁を切ろうとしたアイツこそ謝るべきだろう」

東子は両手で持った缶の飲み口を見つめた。肯定も否定もできさない。

「美岬の気持ち、わからなくなっていくって顔してる」

「先輩はすごく女の子ですから……」

「優しいねえ。でもさ、ほんとのことを言い合える仲じゃないとつまんなくないか？」

「それは、そうですね……」

「まあ、そういう距離感って微妙だしなー」

天乃はリモコンをテレビに向けてボタンを押し、天板に置いた。パシツと電源の入る音がして、画面がゆっくり映像を映していく。午後二時過ぎのワイドショー。画面右上に【ブランド品大安売りバーゲンに密着！】の字幕が表示された。

「村上さーん、村上裕子むらかみゆうこさーん？」

スタジオの司会が呼びかけた。司会の両隣にふたりずつ座るタレントも、画面が中継先に切り替わるのを待っている様子。しかしすぐには切り替わらなくて、「ん？」と言いたげな表情を五人そろって浮かべたところで、

「はい、ユッコです。もう会場は、たいへんな混雑で

」

マイクを持つ中年女性が映った。背景には、ワゴンに盛られた鞆やら服やらを殺気立って物色する客たち。

「ブランドとか興味ないんだよねー」天乃はテーブルの上のリモコンを押してテレビを消した。「東子ちゃんはゴルフする？」

「いえ、したことないです」

「ゴルフの練習用ネットがあるんだけどさ、やってみない？」
「ボール、苦手で……」

東子は目を伏せた。顔にボールが当たるイメージが浮かんでしまつて、心がきゅつと縮こまる。

「大丈夫だつて。自分のほうに飛んで来ないもん」

「……………」この沈黙は、自分にできるのかな、という不安からだった。

「気持ちいいよー」

「じゃあ、ちよつとだけ」

「そう来なくつちや」天乃はコタツから立ち上がる。

「でも、テレビは？」

「ビデオに録とってるから平気へいき」

天乃は、美岬が出るかどうかかわかないのにじつと待ってるの嫌なんだよね、靴、とってくる、と続けた。ドアのほうへ歩いて行って、部屋を出る前に、

「胸の中がモヤモヤするときはず、無心でブツ叩くんだ。ス

カッとするぜ」

片目をつぶってニヤリ。

その頃、松子は、カラオケボックス「四面素歌」しめんそかの受付にいた。モクナンから歩いて五分ほどの、住宅街にある個人経営店で、東子と別れたその足でやってきたのだ。

正方形の中庭に幸福の木が一本、レンガを正方形に組んで土を埋めた内側に立っている。そんな中庭を、二階建ての正方形が囲んでいて、一辺に四部屋ずつ、計三十二部屋ある。受付、キッチン、従業員室、事務所、トイレを除き、防音の施された客室が一階二階含めて二十二部屋。どの部屋の窓からも幸福の

木を見ることができた。

怒っていないのに睨んでいるように見える切れ長の奥二重で、静かだけれどよく通る声の、若い女性店員が松子に対応した。顔の白い肌がよく映える金髪、黒い長袖トレーナーに小麦色のエプロンをして、左胸に【ひろかげ広景】と書かれたバッジを付けている。背が高く、受付のカウンター越しに松子を見下ろしながら、「一名様？」と尋ねた。松子が制服を着ていて、学校の鞆を持っていたので、友達と待ち合わせているように思ったのだらう。

「ひ、ひとりだぬ」

松子は幸福の木から広景へ視線を移した。カウンターの高さ

が松子の肩と変わらない。

「お時間は？」

「に、二時間だぬ」松子は少し照れた。

広景は、ひとりで二時間歌っていく客なんか珍しくないと
いった涼しい顔で、背後のフックから部屋番号の記された札を
外した。真っ赤なプラスチック板に伝票を挟む金属のバネが付
いていて、松子の部屋は18番。

「ジュース、おまけする。オレンジ」

「え？ いいぬ？」松子は札を受け取って、広景を見上げた。

「うん。あとで持ってくる。のど、潰さないように」

「ありがとう」

「最初の一発は、何も考えないで打ってみて」

天乃が、ネットの外から声をかけた。足元にはゴルフボールで満杯になったバケツ。

東子はボールに目と顔を向けた姿勢で「はいっ」と答える。左手に白い革のグローブをはめて、教えられたにぎり方で7番アイアンを短めに持ち、真剣な表情で構えている。靴は、天乃が一階に下りて取ってきてくれた東子のものだ。

東子は、右肩の近くに両手がくるまで、銀色に光るステイールシャフトのクラブをゆっくり持ち上げた。そしてクラブを持ち上げた速度よりも速く、腕を振り下ろす。長方形の人工芝か

らのびたゴム製のテイー、そのテイーの上のボールめがけて、力いっぱい振った。しかしクラブヘッドはボールの上を通過して、当たらなかった。空振り。

「あれ？」と、クラブの回転とともに体の左方向へかかっていく遠心力を、左足で踏ん張ってこらえる。

「もう一回！」

「はいっ」東子は同じような腕の動きで、もう一度振った。今度は当たった。が、カチンと硬い音がしてボールはコンクリートの床を転がり、ネットに刺さった。

「いたたた」

と、しびれた右手をクラブから離す。ボールがクラブヘッド

の真ん中に当たらないと、いびつな衝撃が指に伝わってくるのだ。

「惜しい！ でも筋は良いよー」

天乃が明るいい声で励まして、別のボールをテイクに乗せた。

お世辞だとは思わずに、素直にうれしくなる単純な東子。

「そ、そうですか？ えへへ」

「うん、もう一回！」

「はいっ」

松子は両手をお腹に当てて、何も映っていないモニターの横で、鼻から大きく息を吸い、口からゆっくり吐いた。曲目リス

トの載ったテーブル、そのテーブルを挟んで置かれた二人用のソファアートを、暗めの照明が照らしている。マイクをモニター横のフックに引っ掛けたまま松子はもう一度すーっと鼻から息を吸って、目を閉じ、口を縦に丸く開いた。

「ここには昔 海があり 白いカモメが 飛んでいた」
暗記している歌詞を丁寧に発声していく。ちっちゃい体に見合わない声量。カラオケの伴奏はなく、まったくの独唱。

「今 その 海は わたしらの 心に青く よみがえり」

突然、ドアがひらいた。缶ジュースを持った右手に続いて広景の顔が現れる。「あ」と言った瞬間だけ広景は体の動きを止めて、そそくさと缶をテーブルに置く。

松子は歌を中断して、

「ただくぬ、ありがとう」

「ごめん。音、聞こえなかったから、入っても平気だと……」

「大丈夫だぬ」

「校歌、懐かしい」独り言のように広景は呟いた。

「南みなみしょう小の出身かぬ？」

広景は頷いたが、睨んでいるようなその目は松子を見ていな
い。

「いっしょに歌うぬ」

「え？」広景が驚いたときには、

「ここには昔 海があり」松子は歌い始めていた。

「白いカモメが 飛んでいた」

と、閉めたドアのすぐ内側で、広景は続ける。高い音程の透き通るようなその声に、松子は照明が明るくなつた気さえした。

「今 その 海は わたしらの」

「心に青く よみがえり」

「希望をのせた 船がでる」

「ほんもくみなみしょうがっこう本牧南 小学校」

この校名の部分は、二人でいっしょに歌った。

「じゃ」広景はドアの取っ手をつかんだ。受付に戻るのだから。

「自然のままに 育てよと」松子は二番を歌いはじめていた。

「ごめん、二番は覚えてない」広景が表情を変えずに言う。

「聞いてるぬ」

「……………」広景はそうした。

「正しいものを 選べよと

やさしい父や 母たちの

願いを込めた この庭に

光はあふれ 草萌える」

いっしよに、というふうには、松子が広景に手を向ける。両耳

の上にある青いV字ヘアピンがきらりと光った。

「本牧南小学校」

東子はさらに二十球、打った。低く転がったり、高く上がったりするも、空振りにはほとんどしなくなっている。慣れない動きに手と腕が痺れ、額に汗が浮かんだ。

「難しいですね」

という感想とは裏腹に楽しい。次はうまく当たりそうな気がする、もう一球もう一球と止まらなくなる。天乃がボールの入ったバケツをそばに置くと、自分でテイクにボールを載せるようになった。

「よっしゃ。じゃあ次は、右斜め四十五度からボールの真下を斬ってみよう」

「四十五度？」

「んーとね、ちよつと動かないで」

クラブを振らないように東子を制して、天乃は東子の後ろへ回り込み、胸を東子の背中に、お腹を東子の腰にぴったりつけた。

「うわっ」

小さく、東子は声に出してしまった。同性だから照れるのはおかしい。でも、誰かとこんなに体をぴったり合わせたことはなかったから、照れに似た気恥ずかしさを覚える。

天乃は、東子がそんなふうに思っているなんて想像すらしていないようで、東子を背後から抱きしめるようにして、両手

を、東子の手の甲に添え、「極端なくらい、こう、Vの字に振る」とクラブを動かしてみせた。「右から左に振るんじゃない、て、刀で斜め右上から左下へ斬りつけるようなイメージ」と、もう一度、Vの字に動かした。

「助さんですね」

東子がワントーン明るい声で言った。

「スケさん？」

「水戸黄門で刀を使うほうの人です。凄く強いんです」

「そ、そうなんだ……、なんか熱いね」

熱いね、という言葉は助さんにではなく、水戸黄門を語る東子に向けられているようだった。東子はそう思わない。

「はい、熱い男なんです」

「うむ。じゃあ、その刀のイメージでいってみよう」

「でもそれだと、左下四十五度にボールが飛びませんか？」

「そうならないように」天乃は右腕を、東子のお腹を抱えるように絡ませて、「顔はボールを見たまま、先に腰を左に回すと、自分の体と一緒に東子を左へ回した。「上半身とクラブは、下半身の後に、勢いで勝手に回らせる」

「下半身、上半身」東子は自分に言い聞かせた。

「そう。遠心力で振られる腕を、Vの字を意識して動かしてやる。やってみて」

「はい」

天乃がネットの外へ出ると、東子はじつとボールを見てからクラブを高く振り上げ、

（下半身、上半身っ——）

左腰からスイングを始動。

カン、と乾いた音が響いて、ボールはクラブを振った方向へまっすぐ飛んだ。網にかかった生き物のようにネット中央でボールは回転している。まもなくストーンと落下して、コンクリートの床でバウンドした。

「当たった……」東子は、信じられないといった顔を天乃に向けた。

「ナイスショット」天乃はニヤリとして組んでいた腕をほど

き、右手の親指をぐつと立てる。「ちゃんと当たると、手も痛くないでしょ」

「そういえば……」と、クラブをにぎったままの両手を見る。

「東子ちゃんも、ちゃんと美岬に当たってくれた。だから美岬は痛くなかったと思う」

東子はハツとして天乃を見た。

天乃は、うん、というふうには笑顔で頷いた。

「だと、いいんですけど……」

しかし、すぐに東子は不安になる。視線も下がりがち。右手の指の皮が、打ち損じたときの摩擦で赤くなっていて、ひりひりと痛む。

松子は受付で代金を支払ってから、ちよこんと頭を下げた。

「ジュース、ごちそうさまでした」

「ん」と広景。

「あっ」

「ん？」

松子の顔が、広景の頭から腰まで、上下した。

「メーターみたいだね」

「メーター？」

「アニメのキャラ。髪が金色で、物凄く長いぬ」

「そう」広景は興味なさげ。

「また来るぬ」

松子は歌いまくつてすつきりしていた。アニソンもたくさん歌った。笑顔で、広景に背を向ける。

待って——広景の声で、松子は立ち止まった。靴が床にこすれ、きゅつと鳴る。

「モクナンの校歌じゃなくて、なんで南小？」

広景は松子の、本牧南中^{モクナ}学校の制服を見つめた。

振り返った松子の目に、広景の斜め後ろ、窓越しに、幸福の木が映る。細い幹から垂れ下がる何枚もの、ワカメのような葉が風に揺れている。

「来月から高校生だぬ。でも、不安でいっぱい……。勉強につ

いていけないかもしれない。嫌な人がいるかもしれない。そんなふうには怖いときは、歌うんだぬ」松子はそう自分にも言い聞かせて、「南小の校歌は、なんていうか、勇気が出るぬ」と、鞆を持っていないほうの手で制服の袖をきゅつとにぎり、微笑んだ。怖いのを我慢しているような、そんな弱弱しい微笑み。袖の長さは入学式から変わらず、手の甲を半ば隠したまま卒業式を迎えそうだ。高校に行けば何かが変わるのだろうか。

「勇気……」

どんな意味だったか思い出そうとしているような、そんな顔と声で、広景は呟いた。

「だぬ」

「高校、どこ?」

「モッコー」

広景はあごを上げた。険しい目が、松子の穏やかな目と合う。が、斜めにそらし、

「そう。がんばって……」

「がんばるぬ」

きりつとした顔を見せてから、松子は四面素歌を出ていった。カランカランとドアに取りつけられた鐘が鳴って、やんだ。

「勇気……」

広景は、ふふつと笑みをこぼした。楽しそうではなかった。

頬にかかった金色の髪を払おうとして指にくるくると絡ませる。その毛先を、しばし見つめた。

またその頃、東子と天乃はビデオに録画された映像を視、啞然となっていた。

弾けるような太鼓のリズムにせわしなく鳴り響く笛の音、金銀輝くアクセサリーの宝石に派手な原色の羽根飾りをつけた、ほとんど全裸のビキニ姿。そんな格好をした五人のサンバガールズに交じって、美岬が踊っている。

(モッコーBグル部 第二品目／おわり)

3人の少女たちが夢に向かって舞い、踊る——
第12回BOX-AiR新人賞受賞の
青春舞妓小説、登場!!

み つ の わ の

第一景 上洛

大 一
見 見
迎 迎
心 心
人 人

著=松本逸暉

illustration=えむけー

秘

第十二回BOX-AiR新人賞受賞作選評

『みつわの』

松本逸暉

・文章が大変安定しており、安心して読み進められた。

・舞妓になるための「試験」や修行中の女の子同士の会話劇も適切な量でしっかり書いている。

・一風変わった職業ものとして楽しいが、起伏が単調。はらはらするような意外性があれば……。

・登場する少女たちがとても健気で思わず応援したくなる。

・一話ごとに、ハッピーな結末が用意されていて、読後感が爽やか。



松本逸暉——Matsumoto Itsuki

1984年生まれ。早稲田大学第一文学部卒。高校卒業まで京都で育つ。本作で第12回BOX-AIR新人賞を受賞、デビュー。

えむけー

愛知県在住、20歳。第5回『ペンタブレットdeアート投稿コンテスト』でグランプリを受賞。

「摩擦仙人掌」<http://masatusaboten2.blog.so-net.ne.jp/>

ホームへ降りると暖かい空気が肌にまとった。少し冷えた頬ほおに熱が宿る。

京都はまだ寒いから——。父さんはそう言っていたけれど、もうすっかり春だ。

新幹線は乗客を降ろしたようので、新大阪へ向け出発した。ホームに残った多くの人たちは階段に向かっている。

自分と同じように京都で新生活を始める人もいるのだらう。スーツケースを転がす若者や、大きめのリュックを担いだ人た

ちが階段に飲み込まれる光景を見て、妙な仲間意識を抱いてしまおう。

一ノ瀬舞依は眼下に見える京都駅八条口方面を眺めながら、大きく深呼吸をした。

——鼻がちよっぴりくすぐったい。

「よしっ」

舞依は実家の父から借りてきたスーツケースを片手に階段へ向かった。黒のビジネス用だけど、贅沢ぜいたくは言ってられない。荷物は置屋へのお土産みやげと、パジャマと……Tシャツとジーパンが二セットずつだけ。ゲームなんかは持ってきていない。これからは修業の身だし、誘惑されるようなものは我慢して実家に置

いてきた。

さて、と……。置屋おきやへはどうやって行けば良いのだろう。何回か祇園ぎおんへは行っているものの、いつも誰かと一緒だったから道順を全く覚えていなかった。……。まあ、なんとかなるか。

長い階段を下りる。新幹線の改札内コンコースにある土産物屋には、多くの人たちが群がっていた。

漬物、八つ橋、赤福。

赤福って、京都だったっけ？ しばらく考えたが、どうも違うような気がする。でも、明確に答えてくれる人は傍そばにいない。結局、疑問符を消せないまま舞依は改札を抜けた。



かずは
一葉さんとの出会いは、中学三年の修学旅行だったから、もうすぐ一年が経つ。季節はちようど梅雨つゆに入りかけた頃で、一週間前から天気予報を毎日チェックしていたことをよく覚えて
いる。

京都へ着いた一日目は集団行動で、自由行動は二日目の朝からだった。ホテルのロビーで点呼が済むと、各班四人ずつに分かれて市内へ散らばり、舞依は自分の班員とともに、ホテルの玄関をくぐった。

わら天神、
北野白梅町きたのはくばいちよう、
大將軍たいしょうぐん——

バスは西大路通にしおおじどおりを南に進んでいた。停留所の名前から、京都っぽさを感じる。

すでに嵐山と金閣寺を回った後で、舞依たちは次の目的地、きよみずでら清水寺を目指していた。途中、阪急を乗り継いで、かわらまち河原町駅に着く。その頃にはもう三時を過ぎていた。

電車を降り地上へ出ると、予想以上に大きなビルが四方を埋め尽くしていて、舞依たちはその都会さに驚かされた。新宿や渋谷に比べるとそれほどでもないけれど、四条通は多くの人でごった返し、その密集具合がさらに都会さを際立たせている。

通行人の邪魔にならないように、舞依たちは道の端で地図を開いた。目指す清水寺はここから歩いていける距離だ。

いざ清水寺へ。

と、進みだしたところで、舞依は姉にお願いされていたお土産を買っていないことに気づいた。きょうごくどおり京極通には寄らないコースになっていたから、今買わないとダメだ。京都限定の漢字Tシャツなんて、たぶん京都駅には売ってない。

忘れたままだったら良かったのに。

いっそ無視してしまおうかという思いが頭に過ぎる。……でも、頭の隅っことでTシャツのことが気になってしまい、たぶん集中して観られない。自分の性格を考えると、きつとそうだ。

「ごめん。ちよつとお土産買ってくるから先に行つてて」
舞依はそう言い残し、京極通を一人目指した。

やっと買えたけど、だいぶ時間がかかってしまった。早く合流しようとして、早足になるが、歩道の狭い四条通はなかなか思うように進まない。

鴨川を越えて、少し遠くの方に八坂神社の朱色が見えた。ただ先は人で溢あふれている。どこかに回り道は……。

辺りを見回す。舞依は人垣の向こうに信号があるのを確認した。近づいて、交差点の右手を見る。

……あ、すごい。

アスファルトが続くと思っていた。予想していなかった光景に、思わず立ち止まってしまう。

両端には古めかしい町家が並んでいる。瓦屋根に、少し焦げたような色の木戸きど。その家ごとに少しずつ色の違う土壁とげつきょうに心が躍った。この光景に舞依は歴史を感じていた。嵐山の渡月橋とげつきょうも金閣寺も綺麗だったけど、どこか観光用という気がして、そこにいた人々の姿を感じることはできなかつた。でも、ここに並ぶ町家は、そこに住む人々の暮らしを想像できる。ここにいる人たちの日常に溶け込んでいるのに、美しかった。作られた美しさとは違うものを感じていた。

花見小路はなみこうじって名前なんだ……。

舞依は道の入り口の石に彫ってある名前を確認した。なんだかすごくいい。

地図を見る。ここを通っても清水寺へ行けそうだ。舞依は回り道がてら、この花見小路を歩くことにした。メニュー表が出ている家があり、飲食店がちらほらあることに気づく。店内の様子は見えないけれど、どこも敷居が高そうだ。

歩き出してすぐ、足元の石畳に黒い点がついた。同時に、舞依はそれが落ちてきた感触を頭に感じる。ぽつりぽつりと遠慮がちだったのも最初だけで、雨は石畳すべてを黒く染めようとしていた。

天気予報では、今日はいくもりだったのに……。舞依は傘を持ってきていないことを後悔した。まあ、降ってきたとしても友達に入れてもらえばいいや、と考えていた自分を振り返る。

今、自分は一人だ。周りの通行人は傘をさつと開き、みんな用意がいいなと感心した。

雨はその勢いをさらに強め始めている。どこかで雨宿りをしないとダメそうだ。

お店の廂ひさしをしばらく借してもらおうかな。舞依は道の脇に向おうとしたが、足が止まった。この高そうなお店の前で一人たたず佇むことに躊躇ちゆうちよしたのだ。まだ小雨だし、それにみんなに早く追いつかないとダメだから……。言い訳するように歩みを進めた。

舞依はそのまま歩き続けて、建仁寺けんんにんじという寺に突き当たった。この寺を突っ切れば早そうだ。舞依は建仁寺の境内に入

り、雨が止むことを祈りながら、清水方面を目指した。手元の地凶は濡れて破れてしまったけれど、なんとか清水寺への道は確認できていた。

雨の境内は薄暗く、舞依の不安を駆り立ててきた。

誤魔化すことのできる強さではとうの昔になくなっていて、

雨はその勢いを止める^{とど}気配がない。何もこんな時に頑張って降らなくていいのに……。一瞬の躊躇のせいで、舞依はずぶ濡れになっていた。雨をしのぐ場所を探そうとしたけれど、時すでに遅し。境内の奥へと続く細い道は、見渡す限り両側に木が植えられていて、雨をしのげるところが見当たらない。もう、これだけ濡れてたら今更だ。舞依は開き直り、頭に残っている地

凶を頼りにして、清水方面へ進み続けることにした。不安を噛み締めながらも、雨は少しも労いたわつてくれない。

雨の雫しずくが頬をつたう。それに涙が混じっていることは知っていたけれど、止めどなく流れるそれを拭ぬぐうことを諦めた。心細かった。なんで修学旅行に来て一人でずぶ濡れになっているんだろう。昔から泣き虫と言われ続けているけれど、京都に来てまで泣くとは思わなかった。

——ふと雨の音が変わったことに気づいた。見上げると、赤くて大きい傘が舞依を包み込んでいる。

「こんなところで、どないしたんや」

綺麗な着物の人だ。それが最初の印象だった。

「あんた修学旅行生か？　ちよつとこつち来き」

ハキハキと話す人だった。京都弁だとみんななゆつくり話すイメージがあつたけど。

話し方は置いておいて、その外見には目を惹かれるものがある。艶つやのある長い黒髪と赤の髪留めかみどはすごく目に留まり、紫の着物と白い帯のバランスも純粹に綺麗だと思った。

舞依はその人と同じ傘に入りながら、瓦屋根の下に誘導された。着物の人は袖の袂たもとから手ぬぐいを取り出し、舞依の身体を拭ふこうとする。

「あ、自分でやりますから！」

舞依はそう言うだけでいっぱいいっぱいだった。借りた手ぬ

ぐいで濡れた髪の毛を拭きながら、ちらつと横目で観察する。

「なんや？ 着物が珍しいんか？」

「え、えーと……。……はい」

そうかー。そうかー。とニコニコしながら話してくるその人に、何がそんなに嬉しいんだろうと思ったが、その笑顔にはどこか癒いされるものがあった。

「あの、なんで着物着ているんですか？」

ニヤニヤしながら着物の人は舞依の方を向き、「なんでやと思う？ 当ててみ」と言ってきた。

えー、と舞依が困った顔をすると、「ウチ、舞まい妓こやねん」とその人は言った。

「でも、舞妓さんって、顔——白いですよね？」

「そやな。白いで。でも、普段からそんな格好でうるちよろしてるわけないやん」

それから舞依はその人と雨が止むまで、十五分ほど話した。建仁寺の境内に降り注ぐ雨を見ながら、その人の話に聞きいていた。

「舞妓って面白いで」その人の名前は一葉さんといった。

「どう面白いんですか？」

「なんか、歴史を感じる仕事やと思う」

一葉さんはどこか遠くを見るような目で言った。

「それに京都で一番京都人になれる仕事やで」

京都人になれる——。

「舞妓さんって京都出身の人じゃなくてもなれるんですか？」

「うん。だってウチ東京出身やし」

そうなんだ……。その時、舞依は白粉おしろいを塗って、お座敷で

踊っている自分の姿を想像してしまっていた。一葉さんのように綺麗で、人の目を惹くような舞妓姿を……。

「舞妓さんって、いろんな着物もいっぱい着れるんですか？」

「そんなん嫌になるほど着てるで。むしろジーンパンとか履はいて楽になりたいわ」

「へえ……」

最初は京都弁が難しかったこととか、外で白粉を塗っている

人は、本当の舞妓じゃなくて、観光客の舞妓体験の人がほとんどだとか、一葉さんの話はどれも面白かった。

「でも、やっぱり舞妓さんの仕事って大変ですよね？」会話に少し間ができたとき、口から自然とこんな質問が出てきた。

「んー。まあ大変っっちゃ大変かな……。でも、ウチから舞妓の仕事取ったら何も残らへん。そんぐらい、夢中になれる仕事なんやわ」

「……じゃあ、舞妓になったことは後悔なんて全然してない……ってことですか？」

「そやなあ。そんなこと考えもせんかったし、ほんなら後悔はしてないって言えるやろなあ。ウチはたまたま舞妓になるのを

勧め^{すす}てくれた人がいたから良かったけど、もしその人に出会わなかったら、ウチは今ごろ舞妓になれてへんくて、めっちゃ後悔してたと思うわ」

「そう……なんですね」

「どないしたん？　なんか急に真剣な顔なってるで」

「いや、なんか変な質問してすいません」

舞依ちゃんはなかなか哲学的な人なんやねえ、と一葉さんは勝手に納得してくれた。

一体、自分はどんな答えを求めていたんだろう。もし後悔してるって一葉さんが答えていたら？

自分には向いていない。そう、納得する理由が欲しかったん

だろうか。

「ほな、ウチはもう行くわ」

雨はその勢いをすっかり無くし、もうほとんどやんでいた。雲の隙間からは夕陽が覗のぞいている。

「あ、ありがとうございますました！」

一葉さんは傘を手に取り、「きょうとくおおはら、三千院」と唄うたに乗せて少し踊った。

一葉さんの舞に合わせて、紫に染め上がった桔梗ききぎょうが揺れる。境内けいだいに降り注いでいた雨粒は夕陽を反射して、一葉さんを照らすバツクライトに見えた。

一葉さんの踊りで、舞依は思い出してしまった。一目惚れを

する感覚を……。

「ほなねえ」

一葉さんは笑顔で手を振り、そのまま去っていった。

一葉さんの踊りが、ずっとその景色が、頭に浮かんだまま離れない——。

携帯が鳴る。

我に返り、友達からの心配する声に状況を把握する。舞依は電話を切ると、境内を歩き出した。

なんだか愉快的な人だ。舞妓さんってもっと大人しい感じだと思っただけだ。

だけど、すごくカッコいい人だ。それにカッコいいけど、綺

麗な人。

自分も、あんな風になりたい……。

自分の気持ちに正直に向き合ってみると、胸につかえていたものがスツと無くなつていく気がした。



「高校に合格しないと、舞妓修行はダメ」

それが両親から課された条件だった。

修学旅行から帰ったある日の夕食後、舞依は父と母に告白した。舞妓になりたいと。

最初は聞く耳も持ってくれなかった。少し頭を冷やせと言われて、舞依はカツとなつてしまい、「わたしはもう、舞妓になるって決めたの！」とすぐに反論した。

普段、声を荒らげることのない舞依だったので、親も冗談ではないと分かったのだろう。それから真剣な話し合いが深夜まで続いた。

「ほんとに、勉強から逃げてるわけじゃないんだな？」
もちろん、と舞依はうなず頷く。

「……分かった。でも、高校に受かるぐらいの学力がないと社会に出すなんてできない。大人同士の話ができない舞妓なんて、誰も相手にしてくれないよ」

たぶん両親は受験勉強から逃げ出す口実だと最後まで疑っていたかもしれない。だから、あんな条件を出したのだと思う。

今その時のことを振り返ると、親の言う通りにして良かったと舞依は思う。当時の舞依は興奮していて、舞妓になれるものだと思いきっていたけれど、面接に行くと、予想以上に多くの同年代の子が待合室にいた。

「どんな舞妓になりたいですか？」

静かな部屋の中には、長机がひとつ。そこに面接官が三人座っていた。舞依は母と一緒に受ける面接にこそばゆい思いを感じていた。

「はい。えーと……一葉さんのような……」

「え？」面接官が舞依の言葉を遮る。

「いや、すいません……。あの……。普通の人が親しみやすい舞妓さんになりたいと思っています」

——受かったのは、かなり運が味方してくれたからだと思う。

高校受験を終え、合格発表で自分の受験番号を確認できた時は、かなりホツとした。これで親の条件はクリアし、晴れて舞妓修業への道が開ける。中学の友達と離れ離れになるのは寂しかったけれど、一生会えなくなるわけじゃないし、応援もしてくれていたからそんなに悲しくはなかった。

「高校、合格したよ。これで舞妓になってもイイよね」

家に帰り、舞依が合格の報告をすると、両親は複雑な顔をした。無難に高校に行つて、大学に進学することを今でも期待されていゝるんだ。分かつてはいたことだけど、もしかすると喜んでくれるかも、と思つていた自分に嫌気が差す。

でも、反対もしない。父と母は自分との約束を守ろうとしてくれている。そこにある優しさにむしろ感謝しなきゃいけない。

「……ありがとう」そう言うだけで精一杯だった。

今朝、京都へ向かう新幹線に乗るために、両親はわざわざ新横浜駅まで舞依を送つてくれた。家の最寄り駅まででいいと言つただけだ。

電車を待つ乗客は、ホームにぽつぽつと点在しているだけだった。平日の早朝はこんなものかもしれない。陽射しはまだ高くなく、四月に入ったものの結構寒い。舞依はパーカーの上に羽織っていたダウンベストのジップを首まで上げた。

「辛くなったら、帰ってくればいいからね」

母から出た言葉に少し驚く。

「簡単に諦めるな！ とか言うものだと思ってたよ」

「父さんたちは舞依が決めたことだからと思って応援してる。

でも、舞依がこんなになんて早く家を出るなんて思ってなかったから、母さんは少し寂しいんだよ」

父はそう言い、舞依に紙袋を渡してきた。さつき駅の構内で

買ったやつだ。中には、置屋へのお土産が入っている。

予約した号の「のぞみ」が横に滑りこんできた。風が少し遅れて舞依を追い越していき、到着を知らせるアナウンスがホームに響き渡る。

少し、ブルツとした。

震えたのは、頬に受けた風が冷たかったからじゃない。

「……じゃあ、行くね」

スーツケースを手に取り、乗り口に向かう。

「京都の夏は暑いぞ。クーラー病には気をつけろよ」父が言った。

「メールするんだよ」母の目は少し潤んでいて、思わず目を逸そ

らす。

「うん……」

舞依が乗ると、新幹線はすぐに発車した。手を振る両親が遠ざかっていく。

ホームを抜けると、窓から朝陽が差し込み、眩まぶしくて目を細める。

エアコン、部屋にあるといいけど。ケータイも、使えないな、たぶん。手紙でいいかな……。

後ろへ流れていく景色を目にしながら、舞依は今になって、寂しさを感じていた。



——そうだ、赤福は伊勢だ。京都駅の改札を抜けた後、しばらく歩いていたら、ぼんやりした頭に答えが見つかる。

もつと京都のことも勉強しなくちゃいけない。受験勉強をギリギリまでしていたから、京都についての予習を全くしてこなかった。とは言っても、これからは勉強不足で済まされない。なんとかか時間を見つけて、学んでいかないと。

辺りを見回すと右手に地下街があった。

とりあえず地上へ出よう。舞依は案内図で現在地を確認し、地下街を奥に進んだ。

エスカレーターを上り切る。視界いっぱい広がったのは、大階段だった。左には改札が見える。右からは、京都タワーが舞依を見下ろしてきた。じつくり見るのは初めてかもしれない。

父と置屋に挨拶に来たのが三カ月ほど前だから、京都へ来るのは、久しぶりでもない。むしろ慣れてきたと言える。でもこれからここで新しい生活が始まると思うと、それまでの気持ちとは少し違って、なんだかぞくぞくする。不安と期待が混じって、今まで経験したことのない気持ちだ。

これから親も姉もいない。置屋では、女将おかみさんと先輩の舞妓さんたちと一緒に生活していく。電話で採用通知をもらった

時は、どんな人たちなんだろうと不安だったけど、実際はすごく優しい女将さんだったし、先輩たちも春から一緒に頑張ろうと言ってくれた。

京都タワーを眺めながら、これまでのことと、これからのことを考えていると、ロータリーにバスが入ってきているのに気づいた。ちょうど「祇園」という文字が見える。このバスに乗れば連れていってくれるはずだ。舞依はよもぎ色のバスに向かって歩き出した。

バスは四条河原町の交差点を右に折れる。四条大橋を渡っていると、鴨川の河川敷に並ぶ桜が見えた。一葉さんもどこかで

この桜を見ているのだろうか。

少しして、あの日歩いた花見小路が見えた。道をバツクに写真を撮っている観光客がいる。太陽の陽射しは行き交う人々に降り注ぎ、上着を手に持って歩いている人を見つけた。今日はあの日と違って天気にも恵まれている。

八坂神社が近づいてきたところで、バスを降りることにした。ここからの道は分かる。目指す「しげ久」は四条通に続く路地を北に上がり、少し歩いたところにある。しげ久は財団から紹介を受けた置屋だ。舞妓になるための情報収集をしていると、京都の伝統芸能を守る財団があることを知った。そこで舞妓の募集をしていることも。舞依が受けた面接は財団の建物で

部には目立たない看板がある。木の引き戸はすっかり黒く変色していた。

舞依は意を決し、戸を開けた。

「東京から来ました、一ノ瀬舞依です。よろしくお願いします！」

——数秒待ったが、反応がなかった。

顔を上げる。玄関から見える範囲には誰も居ない。

こういう時はどうすればいいんだろう、と困り出したところで、上下緑のジャージ姿の少女が現れ、こっちに向かって廊下を走ってきた。

「ちよつとどいて！」

「え！ ごめんなさい」

邪魔にならないようにというよりも驚いて道を空けた。緑ジャージの少女は、勢い良く玄関を出てどこかへ行ってしまった。なんだったんだらう……。。

「あれ？ あんたも、もしかして新人さん？」

「あ、はい！ そうです！」

振り返ると、長い黒髪の女の人^{だいたいいろ}がいた。ジーンパンに橙色のネルシヤツと^{だいたいいろ}いったラフな格好だ。この人っぽい。

「そっかー。うーん」

「どうかしたんですか？」

何か間違っていたただらうか？ 玄関の入り方が間違っていた

とか。

「ここ、無くなることになったんやわ」

「えっ……」

無くなる？　何が？

「ごめんな。急に女将さんが倒れてしまつて——。ここ数日は、通夜や葬式の準備やらなんやかんやで、めっちゃバタバタしててな。新人さんが来るのに、何も連絡できてなかつたみたいやわ……」

耳を疑うという言葉はこういう時に使うのだろう。

「じゃあ、わたしはここで修業できないつてことですか？」

「うーん。前からしげ久で働いてた舞妓さんらは、他の置屋に

推薦してもらたらしいけど、ちよつと新人さんのことは聞いてないわ……」

立ち話もなんだからと、来客用らしい座敷に案内された。ジーンパンのおねえさんは志乃しのという名前だと自己紹介してくれた。しげ久の舞妓ではなく、別の置屋で働いていて、お手伝いに来ていたらしい。

改めて舞依も自分のことを説明した。ついさつき京都に着いたこと、きちんと合格通知をもらっていたことも含めて。

ほどなくして、障子が開かれた。ゆつくりと入ってきたのは、茶髪の女の子だった。

長袖の黒シャツに、焦茶のハーフパンツ。膝ひざから下は黒の夕

イツで覆われた細い脚が伸びている。シャツは肘^{ひじ}までめくり上げられていた。

「粗茶ですが……」茶髪の女の子は膝を折り、お盆からお茶を出してくれた。

「あ、ありがとうございます」

見ると、白く厚いお碗に若草色の抹茶がぷつぷつと泡を立てていた。深みのある香りが鼻を刺激してくる。

志乃さんの前にも置くと、茶髪の子は静かに部屋から出て、障子はゆっくり閉められていった。

舞依は出された抹茶を飲みながら、しげ久に起こった出来事を聞いた。女将さんの体調があまり良くなかったことや、舞依

をしげ久の最後の舞妓にしようと思っていたこと。そして、舞依が来るのを楽しみにしていたことを。舞依は泣きそうになりながらも、じつと聞いていた。夢なのではないかとも思ってたが、初めて飲む抹茶の苦味が、そうではないと分からせてくれた。

「ほんまにごめんな」志乃さんが困った顔でこつちを見ている。

「別におねえさんが悪いわけじゃないですから」

「……これからどうするんや？」

「え、えーと」

どうしよう。どうすればいいんだろう。

「……とりあえず、家に帰ろうと思います」

それからお茶のお礼をし、しげ久を後にした。

この道は舞妓へ続く道なんだと、さつきはすごく特別な道に
思えたのに……。今ではなんてことのない、普通のアスファル
トだ。

はつきりとした目的を持たない重い足を数回運んだころ、ま
たもや緑ジャージの少女とすれ違った。何か買ってきたのだろ
うか。コンビニ袋を振り回し、祇園の道を颯爽と走る姿は、な
んだか眩しく見えた。



数時間前に京都駅に着いた時の気持ちとは打って変わって、舞依の心はぐちゃぐちゃだった。夢と希望は簡単に打ち砕かれ、その残骸と悲愴感だけが漂っていた。舞依はすぐに実家に帰る気にもなれず、京都の街を彷徨さまよっていた。

新京極のアーケードは、若者が多く、舞依と同年代の子も多かった。古着屋に入っていく独特な格好をした人たち、映画館の前で次の上映の時間を確認しているカップル。なんだか、自分にはないものを持っているその人たちがすごく羨まうらやしかった。

自分に残されているものってなんだろう……。

スイーツケースの中にはお土産と着替えが少し。所持金は

一万五千円ほどで、帰りの切符を買って少しおつりが出るくらいだ。友達も知り合いもない。誰も心配してくれる人なんていないんだ……。慣れない土地での孤独は舞依の気持ちをさらに暗くさせた。

六角通沿いに雑貨屋を見つけては、買うつもりのないショーケースの中の時計を眺めたり、土産物屋で自分のイニシャルのキーホルダーを探したりした。もやもやした気持ちを抱えたまま、時間はなんとなく過ぎていった。

新京極のアーケードを抜けると、大きな通りに出た。四条通だ。人の流れに身を任せて、舞依は東の方へ歩きだした。

とんぼ返りでバカみたいだ。かと言って、このままじゃホー

ムレス……。いつのまにか陽は傾きかけていて、少し冷えてきた。まだまだ夜は寒そうだ。鴨川の橋の下で寝ている自分を想像した。——絶対耐えられない。

しばらく歩くと、あの道が見えた。花見小路。一年ほど前に雨に打たれたあの日も心細かった。でも、今は本当に一人だ。待っていてくれる友達もいない。

舞依は花見小路を歩きだした。スーツケースの車輪は石畳の隙間を通るたび、カツンカツンと唸うなっている。

この道をいつか、舞妓の姿で通りたかった……。

舞依は美味しそうな天ぷら屋のメニューを見て、お腹が空いていることに気づいた。そういえば昼ご飯を食べていない。昼

前に京都に着き、そのまま食べることなんて忘れていた。たしか、この先にお寺があった。そこで腹ごしらえでもしよう。お腹が満たされれば、心も少しは満たされるはずだ。

あの時と違い雨は降っていない。建仁寺の境内をゆつくり歩きながら、舞依は一葉さんと雨宿りしたあの瓦屋根の場所を探した。

両足院りょうそくいんという寺の入り口であることを初めて知った。屋根の下は階段上になっており、舞依はそこに腰掛ける。そういえば座るのも久しぶりで、すごく疲れていたんだと気づいた。スーツケースを横に倒す。新幹線に乗る前に父から受け取ったお土産が、そのまま詰め込まれているはずだ。

食べちゃうか。どうせ渡す人なんていないし。

紙袋から取り出すと、見たことのある赤い箱に入ったシューマイだった。

普通、お菓子でしょ。期待していたものとは違うものが出てきて、舞依はどうしようかと思った。ひとまず開けてみると、中にはシューマイが真空パックにつまっていた。これって温めなくても食べられるのかな……。少し考えたが、お腹が大きく鳴った。食べ物を前にして、もう舞依のお腹はこれを食べる準備を始めている。逆らわずに、一つ齧かじってみることにした。

——冷たい。けど、美味しい……。涙がこぼれてきた。なんで京都に来て冷たいシューマイなんて食べてるんだろう。自分

の惨めさを語る相手がいなかった。さらに舞依を悲しくさせた。

悔しかった。すごく。自分のせいじゃなく、誰のせいでもないけれど、夢を諦めなきやいけないことに。

「なんやあ。変わったもん食べてんなあ」

びつくりして顔を上げた。涙であまり良く見えないが、綺麗な着物の人だ。あれ？ この人――

「あ、あんとときの子ちやうの？」

「一葉さん！」

「そうそう！ 良く覚えてたなあ。あんたはえーと……」

「一ノ瀬舞依です」

「そうそう。舞依ちゃんな。またここで会うとはなあ。……てか、どうしたんや?」

一葉さんにまた会えるなんて——。でも、こんな状況で会いたくなかった。次に会えるときは、舞妓になったときだと思つてたから。

「ちよつと、訳ありで……」

「ちよつとの訳で、こんなところでそんなもん食べてるんか?」
一葉さんは舞依の手にある箱からシユーマイを一つ取り出すと、勢いよく口に放り込んだ。

「……うん。まあ予想通りの味やな。で、どうしたんや?」
「えつと……」

自分のこんな惨めな話をするのは氣後れしたが、舞依は少しずつ、この悲しさと悔しさを吐き出すように言葉をつむぎ始めた。今日舞妓になるために京都にやってきたばかりであること、置屋が無くなってしまったことを。

「ほんまか、それ。ひどいなあ……。まあ、しげさんが大変やったのは聞いてたけど、でもあんたに非はないしな。うーん。不憫ふびんやな……」

自分の境遇を哀れんでくれるだけだけど、少し楽になった。でも、何も解決してないことも冷静に分かっていた。

「で、今日はこの後どうするんや？　もうこんな時間やけど」「どうするって……」

境内はもう薄暗く、観光客はほとんどいない。静寂な空気が舞依たちを包んでいた。気持ちの良かった早朝が遠い昔のように思える。

このまま実家に帰っていいの？ まだ何もしてない。京都を離れたくない……。舞妓になる夢を諦めたくないっ！

「あの！」

「ん？」

一葉さんの方を向き、「わたしを……。一葉さんがいる置屋さんへ、連れてってもらえませんか？」舞依は思い切って頼んでみた。

「ええよ」

「え……いいんですか！」

あつさりとした返答に驚かされる。

「ウチにも責任あるしなあ。それに、舞依ちゃんの夢を応援したいし！」

あなたは本当にカッコいい！一葉さんに惚れそうです……。舞依は京都でこの人に会えて本当に良かったと思った。



一葉さんのいる置屋は宮川町みやがわちようにあるらしい。京都には全部で五つはなまちの花街がある。祇園甲部こうぶ、祇園東ひがし、先斗町ぽんとちよう、宮川町、上七かみしち

軒けんの五つだ。五つ合わせて五花街ごかがいとも呼ぶ。事前にそれぐらいの勉強はしていたが、それぞれの花街の特徴については全く知らなかった。ましてや、しげ久は祇園甲部にあつたから、宮川町に来るのは初めてだった。

それにしても絵になる。紅色の着物を纏まとつた一葉さん。狭い路地に石畳。両脇の町家は、それぞれの顔が少しずつ違う。頭上には瓦の屋根で囲われた薄暗い夜があり、遠慮がちに続く街灯あかの灯りによつて、ほんのりと照らされていた。思わず写真に収めたくなる景色だ。

「置屋に来てても、おかあさんがどう言うかは分からへんで」一葉さんはそう言ったけど、なんとか女将さんに修業させてもら

えるようお願いしよう。

大丈夫。財団の面接も通ってたわけだし、舞妓になる素質はあるはずだから。

「ここや」

一葉さんは立ち止まり、「菊屋きくや」という名前の置屋であることを教えてくれた。

「ちよつとここで待っててもらってええ？」

「はいっ」

一葉さんは菊屋の中に入り、静かに戸が閉められた。

あー、緊張する。舞依はなんとかこのままうまくいくんじゃないかと、何の根拠も無い予想をしていた。修業予定の置屋が

無くなるなんてことがあれば、さすがに同情してくれるはず。菊屋の玄関には、ぼんやり光る提灯があった。その灯りを眺めながら、自分の夢はほんとはここにあつたんだと、少し明るい気持ちになつた。

そういえば、来る途中にもこの三つの輪が重なつた提灯を目にしてきた。たぶんお茶屋のマークだ。舞妓さんが寝泊まりする場所が置屋で、お客さんが舞妓と遊ぶところがお茶屋。一見いちげんさんはお断りで、来る人はすごくお金持ちだつていうことは知っている。自分が舞妓になろうとしなかつたら、一生縁のないところだ。

戸が開かれ、一葉さんが出てきた。舞依に向かつて手招きし

てくる。緊張しながら、舞依は静かに菊屋の引き戸をくぐつた。

「とりあえず、おかあさんに話してきた」舞依の耳元で一葉さんが囁く。

一葉さんの後に続いて、冷たい木の床を歩いた。ところどころ、ミシツという音を立てるのは、年季の入っている証拠だ。

一葉さんは、中庭に面した部屋の障子を開け、「この子なんやけど……」と、舞依をその部屋に招いた。

「一ノ瀬舞依と申します。突然失礼いたします」

座敷に正座している女性は、貫禄のある人で、切れ長のその目に舞依は威圧されそうになった。結ゆわえてあるその髪には少

し白髪が混じっている。六十は越こえているだろうか。

「……まあ座りなさい」

「はい」

舞依は一葉さんの横に座った。もちろん正座だ。

「……」

少しの沈黙が流れた後、「ウチらのおかあさんや」と一葉さんが舞依に紹介する形になった。一葉さんも緊張しているのか、少なくとも、のん気な様子ではない。

「で、用件はなんや？」

「はいっ！ ここの置屋で舞妓になるために修業させてくださ
い」

舞依は思い切って土下座した。鼻先のたたみ畳からは、藺草いぐさの匂いがする。

「あかん」

「え……」

えー！

予想外の返答に女将さんの顔を見た。変わらず無表情だ。

「なんとかありませんやろか？」一葉さんが困った様子で訊きいてくれる。

「今年は新しい子はとらへんことに決めたんや。他の置屋に行きなさい」

ばっさりとしたその言い方に、舞依は少しびっくりした。し

げ久の女将さんとはだいぶ違う。

「そこを何とかお願いします！ わたしはどうしても舞妓になりたいんです！」

「……なんでそんなに舞妓になりたいんや？」

「それは……一葉さんみたいな舞妓さんになりたいと思ったからです！」

負けまいと、舞依は女将さんの切れ長の目を見て続けた。

「一葉さんが教えてくれました。京都の文化を守り続けることができる仕事だって。去年、京都に初めて来てこの街がすごく好きになったんです。それに、すごくイキイキした一葉さんの話を聞いて、舞妓の仕事をしなくなりました！ 今は昔ながら

らの京都弁を話す人は減ってきて、でも、舞妓になれば、京都の伝統を守る立派な京都人になれるって教えてもらって……」
口の中が乾いてしまっていた。唾を飲み込み、呼吸を整えて続ける。

「だから……わたしはもう決めたんです！ 絶対、舞妓になるって」

興奮して息が荒くなっていた。もう自分に残されているところはここしかない。他の置屋のツテなんてないし。憧れの一葉さんと一緒に働きたい……。

会って数分の女将さんだけど、自分の正直な思いをぶつけた。

「……一葉。あんた、この子の言ったことほんまか？」
「あ、はい……」横目で一葉さんをちらつと見た。俯うつむいた顔は少し赤くなっている。

「まったく。そんな格好で歩かんときつていつも言うてるやろ。関係ない子の人生まで狂わして」

「でも、一葉さんは何も悪くないんです。別に舞妓になるようにそそのかに唆そそされたとか、勧誘そそされたってわけじゃなくて……。ちゃんと良く考えて、舞妓になりたいと思っただんです」

「この子、ちゃんとしげ久さんに入る予定やったんやで。ウチにも責任あると思っけて、なんとかお願いできひんやるか？」

一葉さんが自分のために頭を下げてくれている。舞依も、も

う一度額を畳にこすりつけた。

その時、「ごめんください！」と玄関の方から大きな声が聞こえた。女将さんが立つものだから、一葉さんと舞依は、後についていく形になった。

玄関に着くと、そこに立っている少女に驚いた。

「これっ、履歴書です！ アタシをここに置いてください！」
あの緑ジャージの少女が頭を下げながら、女将さんに向かって紙を差し出していた。

「なんや、あんたは」

「お願いします！ もうここしか頼れるところが無いんです！」

緑ジャージの少女の後ろには、しげ久で会った志乃さんがいた。



緑ジャージの少女が再び舞依の前に現れた後、女将さんが、一葉さんと志乃さん呼びつけ、廊下の奥に消える。

残された舞依は自然と、玄関脇の廊下で立ちっぱなしになった。緑ジャージの少女は、舞依に気づいたようで、こっちを睨み付けてくる。広くもない玄関に、気まずい空気が流れた。

話しかけようかと思っただが、かける言葉が見つからなくて、

舞依は俯き続けた。無言で居続けるには微妙な距離だった。

「十分後に菊屋の外で集合」

これ以上は耐えきれない。もう天気の話でもしてしまおうと口を開きかけたところで、女将さんたちが戻ってきた。舞依と緑ジャージの少女にそう伝えると、再び女将さんは奥に下がってしまふ。

一旦、荷物は一葉さんの部屋へ置かせてもらえらることになった。一葉さんの部屋は四畳半ほどのシンプルなもので、中には布団と、化粧台が置いてあるだけだった。

憧れていた一葉さんの部屋に居る。舞依はドキドキしている鼓動を聞かれないように少し距離をとった。

「あの子もしげ久さんに入る予定やった子やねんてさ」
こそつと一葉さんが教えてくれた。

「わたしと同じ……」

舞依は自分と同じ境遇になったあの少女の気持ちがすごく分かった。標準語だったし、たぶん同じようにひとりで京都へ来たのだ。肉親どころか知人すらいない街で、突然ひとりつきりになる。その辛さを自分と同じように体験したんだ。

「あの子もここで一緒に修業できるようになったらいいな……」

「……今は自分のことだけ考えたらええ」

一葉さんはそれ以上何も言わなかった。確かにそうだ。他人

のことを心配している余裕など自分にはない。でも……同じ境遇のあの子がどうなるのか、舞依は自分のことのように気がかりだった。

十分後、外へ出るとすでに緑ジャージの少女がいた。目があつたが、すぐにぷいっと逸そらされた。陽はすっかり落ちてしまいい、辺りは真つ暗だった。

「これからふたりには試験を受けてもらうことになったわ」
女将さんは玄関から出てくるなりこう言った。試験？

「この試験に合格したら菊屋に入れてやってもええ」女将さんが手に何か持っていることに気づいた。

とりあえず合格すれば舞妓になれる！
舞依はやっとな手にし

たチャンス逃すまいと、何が何でも合格するんだと心の中で叫んだ。

「試験内容は今から説明するさかい。まずは、この提灯を持ちなさい」女将さんは手に持っていた提灯を舞依と緑ジャージの少女に渡した。

渡された提灯を見る。菊屋の前に飾ってある三つの輪のデザインが施されているものだった。一葉さんと、志乃さんは黙ったままだ。

「これに今から火をつける。この提灯を持ちながら、指定された場所まで行って、帰ってくることに。それが試験内容や」
「それだけですか？」緑ジャージの少女が訊く。

「それだけや。——ただし、ろうそくの火がついた状態でここへ戻ってくることに。指定するルート歩く時間と、ろうそくの火が持つ時間はギリギリやと思う。寄り道してる余裕はあらへん」

つまり、この提灯の火を消さずに決められたルートを通ってここまで戻ってくるだけ。なんだ、結構簡単そうだ。

「あと、ろうそくは倒れやすいから注意しいや。走ったら燃えてまうから」

提灯の中を覗いた。確かに上部からぶら下がっている台座にろうそくがちよこんと載っているだけで、安定していない。

「ほんで、ルートはこれや」

女将さんは近くにいた舞依の方に地図を渡した。緑少女はちらりと舞依の方を見て、仕方なさそうに覗き込んできた。どうも良くは思われていないようだ。

宮川町を抜けて、鴨川に出る。河川敷に下りて北へ向かう。御池大橋を渡り、反対側の河川敷を通って、戻るルート。舞依はコピーされた道路地図に、ピンクのマーカーで記してあるルートをたどった。迷いそうな道ではない。

「準備はええか？」

「はい」ふたりは同時に返事をした。

提灯に火が灯された。至近距離で持っている、結構明るい。暖かさを感じる。

「気をつけて行ってくるんやでえ」一葉さんが言う。志乃さんも手を振って、舞依たちを見送ってくれた。

変な試験内容だけど、こんなものでいいのだろうか？ 舞依は疑問に思ったが、緑少女がもう先陣を切って先に行くものだから、慌てて後をついていった。



宮川町の路地を抜け、川端通かわばたどおりという片側二車線の道路に出た。車のヘッドライトが提灯の灯りを鈍くさせる。奥には鴨川が見えた。

舞依は提灯をあまり揺らさないように手に意識を集中させていた。緑少女を見ても同じ速度で歩いている。すり足に近く、いつも歩く速さの半分以下だ。

「ねえ」緑少女が口を開く。

「な、何？」

突然声をかけられて、足が止まる。提灯は無事だ。

「あそこ」

緑少女の指差す方を見る。ちようど舞依たちの反対側に、河川敷へ続く階段があった。ダウンベストのポケットから地図をまっばらどおり取り出す。ルートを見ると松原通から、河川敷へ下りるようになった。あの階段で大丈夫そうだ。

「ありがとう。あれで合ってると思う」

緑少女は特に反応なく、ふたりは横断歩道を目指した。緊張しているのは試験にと言うよりも、この少女に対してだと思っただ。距離感がイマイチつかめなのまま、舞依は足を進めた。

すれ違う人たちや追い越していく人たちは、舞依たちを見て不思議そうな顔をするが、特に何もなく通り過ぎていく。舞依は今が夜で良かったと思った。昼間だったら、もっと恥ずかしいはず。それに、誰も知り合いがいないことにも救われた。この緑少女も自分と同じだろうか。

「あの……」舞依は自分が東京から来たことを話し、緑少女はどこから来たのか訊ねた。たず

「関係ないでしょ」

予想通りの反応が返ってきた。女将さんに履歴書をいきなり渡すくらいだから、積極的な性格だとは思っただけで、舞依に對しての態度はそっけないものだった。

ふたりは無言のまま、松原通の横断歩道を渡り、鴨川の河川敷に着いた。遮るものがないからか、少し風が強い。舞依は提灯の炎が消えないように、さらに慎重に歩いた。

それにしても綺麗な子だ。さらりとした艶のある黒髪に、ジャージ越しでも分かるスタイルの良さ。その服のセンスはどうなのかとも思うが、ジャージ姿でこれだけ映はえるのだ。もし、着物を纏まとい、化粧もしたらきつとすごくなる。

「何、人のことジロジロ見てんの」

「あ、ごめんなさい」

睨まれて咄嗟とっさに謝ってしまおう。別に、悪気があったわけじゃないんだけど。

「名前……なんて言うの？」舞依は思い切って訊いてみた。

「そっちは」緑少女に訊きかえされる。

「わたしは、一ノ瀬舞依」

「……四十の川って書いて、四十川あいかわ」

「そうなんだ！ 変わった名前だね」

「うっさいな！」

「え、……ごめん」またしても謝ってしまおう。

「下の名前は？」

「……」

答えてくれない。じゃあ、

「みどりちゃんって呼んでいい？」

「はあ？」

「だって、そのジャージの色。ずっと緑の人って心の中で呼んでた」

「バカじゃないの！」

緑少女が声を大きくして、舞依に向かって言った。ふたりの提灯が大きく揺れる。すぐにろうそくが倒れないようにバランスを取る。

「だ、ダメだよ。気をつけないと……」今のは危なかった。舞依は提灯の状態が問題ないことを確認し、歩くのを再開した。

「……あなたは敵なんだから」

「敵って……どういうこと？」

「無理に置屋に入れてもらおうとしているのはアタシもあんたも同じだよね？ アタシはこの試験の意味って、ふたりのうちどちらをとるか判断するためだと思ってる。あんたもそう思ってるんじゃないの？」

なるほど。舞依はこの試験についてそこまで考えていなかった。考える余裕が無かったとも言える。提灯の火を消さずにゴールすることだけを考えていて、ふたりとも一緒にゴールで

きれば、ふたりとも採用されると思っていたからだ。確かに、一度にふたりも置屋に新人が入るのは大変なのかもしれない。だとすると、落ちるのはどっちだ？

舞依は緑少女と自分の容姿を客観的に比較し、これは不味まずいと思った。緑少女の容姿に勝てる人などなかなかない。でも……容姿以外にも舞妓に必要な素質ってあるはずだ。

「まあ、同じ境遇になったんだし仲良くやろうよ。ね？ 別にそうと決まったわけじゃないんだしさ」

「よく、そんなにポジティブに考えられるね。バカじゃないの？」 緑少女が呆れた顔で舞依の言葉を一蹴した。

そう言われて舞依は、この状況がそこまで嫌いじゃない自分

に気づいた。孤独を抱え、この街から追い出されそうになっていた状況を思い出す。あの時に比べると今は十分マシだ。一葉さんと再会してから、舞依にとって嬉しいことが続いている。もちろん、この試験に合格しないと逆戻りだけど。

あまり話しかけるのは得策じゃなさそうだ。そう判断した舞依は黙って提灯に集中することにした。

それ以降、会話は生まれることなく、ふたりはもくもくと歩き続けた。

四条大橋が見えてきた。河川敷の下から見上げるのは初めてで、車のヘッドライトは橋の輪郭を暗闇に浮かび上がらせてい

る。対岸には等間隔にカップルが並んで座っていて、自分たちのことを、話のネタにされているのかなと思った。

「ねえ、あれ見て」カップルの女が言う。

「なんだろうね。灯りが動いてるね」男が答える。

そんな会話が舞依の頭に浮かんだ。カップルの間で話題が尽きた頃、現れるふたつの提灯。新しい会話のきっかけとなる。

舞妓の試験なんだよ、あれは。

なんて、誰も話してないだろうな……。

四条大橋が近づくにつれ、賑にぎやかになってきた。カップル以外にも、橋の下で酒を片手にはしゃいでいる人たちがいる。同じように桜を観賞する余裕は、当然ない。

酔っているのだろう。大声で何か喚わめいていた。早く通りすぎたい。舞依は速度を上げたいと思いつつも我慢した。

緑少女の方を見る。特段気にしていない様子で、まっすぐ前を見て歩いていった。

一人じゃなくて良かった。一人だと今頃もう泣いていて、とつくに提灯を燃やしているだろう。緑少女のぴしつと伸びた背中を見て、舞依は自然と自分の背筋を伸ばす。

「何してんのー？」

酔っぱらいです、と顔に書いてあるようだった。その男二人組はフラッと舞依たちの前に現れ、話しかけてきた。「何これ？」と、金髪の男の方が、ふたりの手に持っている提灯を見

て言う。

「今日お祭りやったっけ？　まあ、とりあえず俺らと一緒に飲もうや」

もう一人の坊主男は、近くにきて舞依と緑少女の顔を舐めるように覗いてきた。地元の坊主頭の少年たちと違い、こだわりを持った坊主のようで、つまり舞依が接したことのない人種だった。怖くて何も反応できない。

「消えろ」

萎縮した舞依と違い、緑少女はすぐにこう言った。予想外の返事に男たちどころか、舞依まで驚く。

邪険にされたのが気に障ったのか、「なんやねん、その言い

方。ちよつと来いや」と、金髪男が緑少女の肩をつかもうとした。

あ……。

舞依は緑少女の華麗な動きをぽかんと眺めるしかなかった。緑少女は、音を立てず男の腕を避け、緑少女はその腕をとる。その後見えたのは、上体が反転した男の背中だった。まるで人形をひよいと投げ飛ばしたかのように、緑少女の動きに重さなど感じられなかった。

坊主男も、舞依と同じように目の前の出来事を把握出来ていないようだった。数秒後、我に返ったようで「大丈夫か！」と地面に叩きつけられた金髪男の身体を揺さぶった。坊主男の呼

びかけだけが、河川敷に響き渡る。

「今のうちに逃げるよ！」

緑少女が舞依の手をつかんで走りだそうとする。咄嗟に提灯の火を守ろうとしたが、「もう消えてるから！」と言われて気づく。緑少女の動きに気をとられて、いつのまにか地面に落ちてしまっていたようだ。

足元の提灯を拾い上げるとすぐに駆け出した。緑少女の方も灯りを失っている。ふたりは、無我夢中で砂利道を走った。



後ろを振り返る。暗い河川敷に人影はなく、酔っぱらいの男たちは追ってこなかったようだ。四条大橋はいつの間にか遠くに見える。さっきまでの明るさとはうって変わって、辺りは暗い。川端通からの明かりで、なんとか歩ける程度だ。

「ありがとう……みどりちゃん」全力疾走してきたものだから、まだ息が整っていない。大きく息を吸うたび、冷たい空気が肺に入ってくるのが分かる。

「……ごめん」

緑少女が頭を下げてくる。

「なんで謝るの？」

「だって、アタシがあんなことしなかったら、まだ試験続けら

れてたと思うし……」

「そうじゃないよ！　だって、みどりちゃんが居なかつたら、あの男の人たちに絡まれて試験どころじゃなかったよ」

手元の提灯を見る。ろうそくは台座から外れてしまつていた。

「まあ、仕方ないよ！　話せば分かつてくれるんじゃない？

『ごめんなあ、そんなことがあつたんやなあ』って。楽観過ぎかな？」

「……ほんと、あんたってバカだね」クスッと緑少女が笑う。

「またバカって言った」舞依も釣られておかしくなる。

「バカだけど、必要なバカだ」

「なんかそこまで言われると、さすがに頭にくるなあ」
舞依と緑少女は笑い合った。

「そういえば、本当の下の名前って何なの？」舞依が訊く。

「え、みどり……だけど……」なんか照れているみたいで可愛い。
い。

「なんだー！　じゃあやっぱりみどりちゃんじゃん！　それに、そんな顔でできるのに勿体ないよー」
もったい

「緑色じゃなくて、ひすい翡翠の翠だから！」
みどり

「あ、そうなんだ。まあ、とりあえずよろしくね！」舞依は握手を求めた。

「ふんっ」と言うのと、みどりはなんだかんだで握り返してくれ

た。

「あーあ、結局どう足掻^あいてもダメだったなあ」みどりは提灯を持ちながら、両手を広げた。真似をして上を見る。真ん丸の月が空に浮かんでいた。舞妓の道は終わり。みどりと会話して、少し気が晴れたのもつかの間、また泣きそうになつてきた。

「あれ？ 何だろう？」

みどりの指差す方をたどる。舞依たちがいる河川敷の砂利道から少し奥まったところの方、草むらで丸い物体が動いていた。

「何だろう？　犬かな？」　そう言ってみたけれど、少し大きく感じるなど舞依は思った。ふたりはゆっくりとその物体の方へ歩きだす。

近づくにつれ、それが腰を屈めたお爺さんだということに気づいた。もうすっかり日が暮れてしまったのに、何をしているんだらう。

「暗いし、危ないですよ」　舞依はお爺さんに向かって言った。

「あ、ああ……。この辺に鍵を落としてしもうてなあ」　お爺さんは振り向いて、舞依とみどりを確認すると、ゆっくり話しました。

「それ、かなりマズイですね」　みどりは他人事ひとごととは思えないと

いった表情になっている。寝に帰る家もないような状況なので、もつとひどいかもしれないけど。

そもそも、もう夜なのに、ご老人が一人で鍵を探している。なんだかその姿を見ているだけで、すごく悲しい気持ちになった。

舞依はその辺に落ちてないかと周りを見たが、足元がかるうじて確認できるレベルだ。

「こんなに暗いと大変ですわ……」

「そうなんじゃ。歳とるとよう見えんわあ。まったく」

いや、この暗さだと歳は関係ないんじゃ……。

「お、それは提灯とちやうか？」

「え、ああこれですか？」舞依は提灯をお爺さんの方へ向け、「でも、これろうそく取れちゃって、火がつけられないんですよ」と説明した。

そう言ったのにも拘わらず、ええから貸してみ、とお爺さんは舞依から半ば強引に提灯を奪い、中に手をつっこんだ。そして、どこかからライターを取り出すと提灯の中のろうそくに火を灯した。

「お、おお……。あかりじゃあ」

まるで、砂漠でオアシスを見つけたかのように、お爺さんは提灯の灯りを仰いだ。

「すごい！これなら見つかるかも！」みどりが言う。

「じゃあ、わたし手伝いますよ。みどりちゃん、それも点^つけてもらおうよ」

「だね」みどりの提灯もお爺さんの手に渡って、ふたつの提灯に新しく命が宿る。これなら細かいところも良く見えそうだ。

「ほんま助かったわー。おおきに、おおきに」お爺さんが手をスリスリさせて舞依たちを拝む。

「いやいや、そんなに大したことないですから……。ほら！ さつさと探すよ」みどりが腰をかがめて草むらに分け入る。舞依も負けまいと、パーカーの袖をまくった。



結局鍵は見つからなかった。見つかるよりも前に、ろうそくが燃え尽きてしまったのだ。

「ええんじや、ええんじや」

お爺さんはもう今日は諦めると言った。力になれなかったことは残念だったけれど、笑顔になったお爺さんを見て、手伝つて良かったと思った。

舞依はすっかり生気を無くした提灯を見た。

「娘さん、この提灯借りるで」お爺さんが言う。

「え、どうぞ……」三人の真ん中にあつた提灯に向かつて、お爺さんは屈み込む。ろうそくとライターを取り出し、またも

や提灯を生き返らせた。ろうそくを持ち歩いているなんて、不思議なお爺さんだ……。

「ほれ。これで行きなさい」

「だったら、まだ探すの続けますよ」舞依は言う。

「おおきに。でも大丈夫や。こんな遅うなってもうたし、若い娘さんはもう家に帰った方がええ。親御さんが心配しはるしなあ。ほんまええ娘さんやわあ。ふおっふおっ」

ほれほれ、と急かすものだから、舞依とみどりはお爺さんの元を後にした。お爺さんからもらったろうそくは結構太く、その後の歩みは安定したものだだった。御池大橋を渡り、行きとは反対側の河川敷を歩いて、舞依たちは菊屋に帰ってきた。

「おかえりい」

一葉さんが手を降つて出迎えてくれる。菊屋の前には女将さんも、志乃さんもいた。

「えらい遅かつたなあ。心配したでー」

「あ、なんとか……」提灯を一葉さんに渡し、舞依は地面に手をついた。——やつと到着した。みどりも同じ気持ちのようで、どことなく元気がない。舞依は後ろめたい気持ちを抑えながら、女将さんのところへ向かった。

「提灯、消さんと戻つて来られたようやな」女将さんが言う。

「あ……はい……」

みどりの方を見る。肯定してしまったことに、みどりは何も

言つてこない。

あの時——消えた提灯が復活して、舞依とみどりは顔を見合
わせた。「これで失格にならなくて済むかも……」たぶん、み
どりもそう思ったはずだ。

おじいさんと別れた後の会話は弾んだ。どこの出身なのか、
どうして舞妓になろうと思ったのか、舞依はみどりに質問し、
同じくみどりも舞依に訊き返してきた。お腹が減つたと言う
と、今はカレーが食べたいとみどりが言う。試験の話はお互い
わざと触れずにいた。

このままゴールして、途中の出来事を黙っていれば、ふたり
とも合格できるかもしれない。でも、これで本当に胸をはって

舞妓としてやっていけるかな。そんなもやもやを、舞依はずつと抱えて歩き続けていた。

「すごいであんたらー！。ウチやったらすぐ消してもうてるわあ」一葉さんが褒めてくれる。

全然すごくないです。

つぶやいた。心の中で。

一葉さんの手元を見る。ゆらゆらと明るさを変える提灯に、紅色の三つ輪がくつきりと浮かびあがっていた。

自分の一言でみどりの合格まで無くしてしまうわけにはいかないと思っていた。……でも、それって自分も合格したいからって言う言い訳だ。

嘘をついてまでならなくちゃいけないもの？ そんなのは目指してた舞妓じゃない。だったら――

「ごめんなさい！ 実は、一度消しちやっただんです！」

結局、自分は利口ではない。みどりの言うとおりのただのバカだ。でも、バカはバカらしく、最後までバカを続けよう。

舞依は酔っぱらいに絡まれたことを話した。みどりが自分を助けてくれたことも。そしてその後、お爺さんに提灯を復活させてもらったことも。

「だから、失格なのはわたしだけで、みどりちゃんは失格にさせないで欲しいんです！」

一葉さんの驚く顔が見える。女将さんは相変わらず無表情

だ。

「ちよつと待ってよ！ アタシはあんたを助けたわけじゃなくて、勝手に投げ飛ばしてたの。あんたよりもアタシの方が失格だよ」

——みどりだったからこそ言うだろうなと思っていた。舞依はみどりと一緒にいた数時間で、とても芯の通った強い心の持ち主だと分かった。だから自分と同じように、嘘をついてまで合格を受け取って、満足するような人間ではないだろうなと。

みどりが醸し出す美しさは、その内面からにじみ出ているところもあるんだな。告白してすつきりしたのか、妙に冷静になっっている自分がいた。

「はい、試験終わり！ ええよね、おかあさん。この子たち合格やんね？」

一葉さんが言う。合格？ どういうこと？

「ふおっ、ふおっ」女将さんの後ろ、菊屋の玄関から誰かが出てきた。

「あ！」みどりが驚く。

「おじいちゃん！」舞依も思わず声を発した。

「今年は、オモロイ子たちが入ってくれそうじゃなあ。ふおっ、ふおっ」

「こちら、竹^{たけ}さん。菊屋のお茶屋さんの経営してはる」一葉さんは、然^さも予定されていたことのように、舞依とみどりに紹介

し始めた。

「んで、こちらは志乃しのちゃん」

「ちよつと、ちゃん付けはやめてや」

志乃さんが一葉さんの脇腹を小突こづく。

「ヨロシクね。……って、しげ久さんところで会おうてるよね。また会えるとは思ってなかったわ」

「あ、よろしくお願いします……」そう返事したものの、状況がまだ飲み込めない。

「あの……合格って、どういうことですか。アタシたちは失敗しちゃったはずなんですけど」みどりが訊く。

「合格は合格やで。なあ、おかあさん」一葉さんがそう言う

と、女将さんは静かに頷いた。

「え？　でも、なんでですか？」　続けて舞依が訊き返す。

「別に提灯をずっと点けたまま戻って来なあかんって言うってな
かったやろ？　まあ、結局は竹さんが気に入ったのが一番の理
由やろうけどな」　一葉さんが笑う。

竹さんが舞依とみどりが持っていた提灯を手を取った。ふた
つの灯りを消し、中から何かを取り出す。

「ふおっ、ふおっ」

竹さんは、舞依とみどりの手をぎゅっと握ってきた。満足そ
うな顔で舞依たちの顔を見てくる。反応に困っていると、結局
何もせず、ゆっくりと菊屋の中へ戻っていった。

手のひらを開く。中からは少し錆びて黒くなった古い鍵があつた。

「置屋の合い鍵や。竹さんはほんまに舞妓になれると思つた子にしか、その鍵は渡さへん」

「おじいちゃんが探してたのって、自分の家の鍵じゃなかつたんですか？」

「さあ……。竹さんっていつも鍵かけて出ていかへんと思つけど」

みどりの方を向く。驚きと嬉しさが混じつたような顔をしていて、たぶん自分もそんな顔になっているんだろうなと思う。

手の中の鍵は、軽くて少し頼りなさそうだ。けれど、形に

なっているものをもらえたことが嬉しくて、少し泣きそうになつてきた。

「ほんま、合格して良かったなあ」志乃さんが頭を撫でてくれる。

「みどりちゃんもなあ。戻ってきていきなり、履歴書書くから他の置屋紹介してくれって言うんやもん。どうなることかと思つたけど、合格してくれてホツとしたわ」

みどりが顔を赤らめていた。しげ久ですれ違った時のことを思い出す。みどりはしげ久が無くなると聞いてすぐ、部屋を飛び出したらしい。

しげ久を出た後、コンビニ袋を振り回して走っていた姿が浮

かんだ。あれは、履歴書を買って戻ってきた時の光景だったんだ。

「おいでやすう。菊屋へ」

一葉さんは左手を腰に置き、右手をこちらに向けてそう言う
と、「これ、せんとかんのポーズな」と一言添えた。

舞依とみどりはお互いの顔を確認し、笑いあった。涙が出てきたのは一葉さんが面白かったのか、それとも合格したのが嬉しかったのか――。どっちでもいいと思った。

(みツわの 第一景／おわり)

みつのわの

第二景 想い

舞妓のテツペン、
目指します！

舞妓修業が本格始動!? 第12回BOX-AIR新人賞受賞作、第2弾!



著=松本逸暉 illustration=えむけー

首の痛みで目が覚める。まだぼんやりした頭のまま、舞依まいは上体を起こして枕元を確かめた。布団には箱枕はこまくらが一際誇ひときわらしげに立っている。

慣れなくて寝つけなかと心配してたけど、すごく疲れていたので眠りは自然とやってきたみたいだった。

音を立てないようにそつと布団から出た。みどりの上をまたぎ、廊下に出る。しんと静まり返っていて、歩く度たびに床の冷たさが足裏に染みてきた。

床を鳴らさないよう、ゆつくりと階段を下りていく。トイレは一階にある。中庭には盆栽が並べられていて、どれも手入れが良く行き届いてるように見えた。瓦屋根の向こうの空はまだ薄暗い。

手を洗いながら、昨日言われたことを思い出していた。六時半には起きて朝食の準備。まだ時間には余裕がある。せつかくだから散歩でもしてみるか。

玄関の戸をゆつくり開けて、みやがわちよう宮川町の路地に立つ。誰も起きていない早朝に、自分が歩く足音だけが鮮明に聞こえた。なんだか世界から自分だけ切り取られた感覚になる。

狭い路地に面と向かって並ぶ町屋の中には、玄関の表札に所

属する舞妓まいこや芸妓げいこの名前を掲かかげてあるところがあり、置屋おきややお茶屋だと見て分かる家もあつた。自分と同じような仕込みさんもいるのかなと思うと、早起きした分だけ一歩リードした気分になつた。

あまり土地勘がないため、遠くまでいかずにすぐに引き返したけれど、外のひんやりとした空気が、すっかり目覚めさせてくれた。

部屋に戻り、廊下側に寝ているみどりの肩に触れると、「んー」と無防備な声を漏らす。多少強引に肩を揺らすと、やつと起きてくれた。

「んー、眠い」

静かに。と舞依はみどりに囁く^{ささやく}。みどりはやっと思ひ出したように、ちつと舌打ちをする。布団からモゾモゾと抜け出し、隠れていたジャージが現れた。本人に言わせると、ジャージは万能だから寝間着にも当然使うでしょ、という理屈だった。

今ので起こしちやっただろうか。舞依は振り返り、みどりは反対側の一番奥の布団を注視した。壁の方を向いていて顔は見えないが、綺麗な栗色の髪の毛が静かな寝息とともに揺らいでいた。

ぺちゃんこの布団を静かに畳んでスペースを作る。パジャマを脱ぎ、スーツケースからTシャツを取り出した。そして、畳

の上に置いてあつた桜色の作務衣さむえを手取る。

作業するのにジーンパンやと窮屈きゆうくつやしなあ、と一葉かずはさんが用意してくれたものだった。

袖を通してみた。アイロン掛けがしつかりされていて、すつと身体なに馴染なじんでいく。化粧鏡に自分の姿を映してみた。

うん。悪くないかも。

物音を立てないように気をつけて、部屋を出て行く。みどりは結局、パジャマ兼室内着のジャージのまままだ。

「なんかお手伝いさんみたいでええやん」

一階の奥にある食堂に着くと一葉さんと志乃しのさんが居た。

「えへへっ。一葉さんは、その格好でいいんですか？」

一葉さんは上がパーカー、下がジヤージという格好でなんとも楽そうだ。志乃さんは自分とお揃いそろの作務衣を着ている。

「朝っぱらから着物はちよつとしんどいからなあ。置屋に居るときぐらいは、なるべく楽な格好しときたいねん」

「ふーん。なんかお客さんがその格好見たらびっくりするんじゃないですか？」

「ん？ ああ大丈夫やで。座敷の後もこんな格好で飲み屋にいったりするし」

「案外平気なもんなんですね」

「志乃ちゃんとかはしつかりしてるけどなー。そんなことよりごはん作らな、ごはん」と、一葉さんに背中を押される。

志乃さん、みどりチームと別れることになり、舞依は一葉さんと台所に入った。

「こっちは使わないんですか？」

「ん？ ああ、おくどさんな」

「おくどさん？」

「かまどのことを京都ではおくどさんって呼ぶねん」

舞依が見つけた土間には、古びたかまどがあった。かまどって、キャンプのときにも見たことがあったかどうか。こうやって家の中にあるのを見たのは初めてだ。これでご飯を炊いたらどんな味がするんだらう。

「もうだいぶ昔から使つかってないみたいやで。まあでも、ウチはコ

イツで十分やわ」

一葉さんがポンポンと炊飯器を叩く。ずいぶん古い建物だけど、中まで古いままじゃないみたいだ。設備は最新ではないものの、手入れは行き届いて清潔感がある。

「ほな、ぼちぼち始めようかと思うんやけど、舞依ちゃん料理できる？」

「え？ ああ、まあできなくはないですけど……」

「そか！ いやー良かったわー。今日竹さん^{たけ}おらんし、ウチらが家事教えるようにおかあさんに言われたやん？ でも、ずっと竹さんに任せつきりやったし、どうやって教えたらええもんかと思つててなあ。じゃあ舞依ちゃんに教えてもらおかな！」

「はあ……。じゃあ適当に作らせてもらいます」

料理は毎日手伝っていたから割と得意な方だけど、もし自分も下手だったらどうするつもりだったんだろう。まあそれでも一葉さんだったら何とかしそうだ。

ブーンと低く唸^{うな}っている草色の冷蔵庫を開けてみる。白菜やほうれん草、豆腐やこんにやくがあり、冷凍庫には干物や鮭がパツクのまま凍っていた。

「これ、適当に使っちゃっていいんですか？」

「ええよー。好きなもん作って！」

「わかりました！　じゃあ、やっとききます」

「一人でいけそう？」

「まあ一人でも大丈夫そうですね」

「ホンマにいい？」

目をキラキラさせて、一葉さんにじっと見つめられた。明らかに次の言葉を待っている。

「寝てて、いいですよ？」

「あ、そう？　まあ、ここで見張ってるのも変な感じやしな。じゃあお言葉に甘えて二度寝してこよっかな」

ごめんな、という言葉とは裏腹に、一葉さんはゴキゲンで台所から出ていった。

食堂のテーブルに箸はしを並べていると、みどりが戻ってきた。

「もう終わったの？」みどりに訊く。

「とりあえず今は洗濯機が頑張ってくれてるから」

寢床に戻った一葉さんとは違い、志乃さんはしつかり教育係をしているみたいだ。まあ、寝てていいですよと言ったのは自分なのだが。

「これ、一人で作ったの？」料理し終えた小皿を眺めてみどりが訊いてきた。

「うん。まだできてないのものもあるけどね」

「ふーん。……手伝っても、いいけど？」

「ほんとに！　ありがとう！　結構優しいんだね、みどりちゃんって」

みどりは無言のまま台所へ向かった。追いかけるとみどりは玉子焼きをじつと見ていて、一切れつまんで口に放り込んでしまった。

「あ……。つまみぐい」

「まあまあだね」

「ちよつと。早く準備してよ」

「はいはい」

台所に並んで立ちながら、こんな何気ない会話ができていることに感謝する。舞依はふたりで合格できて本当に良かったなと、心から思った。

食堂にみんなが揃い始めたのは七時半頃だった。女将さんおかみ、一葉さん、志乃さんが集まる。一葉さんは自分が起こしに行つたのだけだ。

女将さんは、もう着物をぴしつと着ている。さすが女将さんだ。一葉さんと違って、普段から隙がない。

女将さんが合掌がっしょうする。続いてただきますとみんなが声を揃えた。舞依も少し遅れて声に出す。

ちゃんと口に合うだろうか。京都の人たちは、ちよつと薄味がいいと言っていたから、少し気を遣つかってみただけだ……。

「この味噌汁、作ったん誰や？」女将さんがお椀わんを手に持ち話し出した。

「あ、わたしです……」やばい。口に合わなかったんだ。

「一葉、あんたが作り方教えたんか？」

「ううん。なんかエエ感じに作ってくれたでー」一葉さんは口をもぐもぐさせていて、鮭の身をほぐすのに熱心だ。

「すみません！ ちゃんと教えてもらうべきでした」舞依はとつさに謝った。

「いや、なかなかええ」

「うん。美味しいよ、舞依ちゃん」志乃さんが褒めてくれた。

「あ、ありがとうございます！」自分の居場所ができたみたいで、なんとも言えないほっこりとした気持ちになった。

何気ない会話が続き、舞依は入り込むことなく耳を傾ける。

結局、ほぼ一葉さんの独壇場どくだんじょうだった。

そうしてみんなが食べ終わりがけた時、食堂の入り口から声がした。

「すいません……。うちのごはん、ありますやろか……」

舞依たちと同じ部屋で、それも隣の布団で寝ていた女の子——栗色の髪の少女がそこに居た。



——昨日、試験が終わって置屋の中に入ると、食堂に掛かる古い時計は夜の九時を指していた。それから少しばかりまかな賄いの

残りを食べていたら、からだ身体から湯気を上らせた女の子が食堂に入ってきた。

肩にかかる髪は綺麗な栗色をしていて、前髪の下には重そうなまぶた瞼がある。首からぶら下げたバスタオルで髪を拭っている姿は外国のお人形さんみたいだ。桃色のタオル生地のパジャマは気持ちよさそうで、肌触りを確かめたくなる。

目が合うと、その栗色の子は静かに舞依とみどりにえしゃく会釈をし、どこかへ行ってしまった。

あれ？ 今の子、どこかで見たことがあるような……。

「何してんにゃ、あの子は。一葉、ちよつと呼んできて」

女将さんの指示の下、もとこ一葉さんは栗色の子を後ろに引き連れ

て戻って来た。

「ほら、挨拶あいさつし」

女将さんに促され、その子は舞依とみどりの前にやってきた。

「菊月莉子きくづきりこて言います。よろしゅうお頼たの申します」

その声は小さく、自信がなさそうだ。

こちらこそよろしゅう、と言いかけてしまい、変な挨拶になつてしまった。京都弁を話すのはまだ早い気がして、おかしな言葉遣いをしてしまう。

同じ理由ではないだろうけど、みどりは無言で会釈をした。

「あの……昨日、しげ久ひささんでお会いしましたよね？」莉子は

舞依に向かつて話しかけてきた。

ん？ しげ久でのことを思い出す。みどりが走ってきて、それから志乃さんに会って……。

「あ、あの時の！ お茶、ありがとうございます」

志乃さんと話をしていた時に、お抹茶を持ってきてくれた子だった。髪の毛が結ばれていなくて、だからちよつと印象が違ったんだ。

「舞依、みどり翠。あんたらふたりは今日からこの子の部屋で寝泊ま

りしてもらおうさかい。後で一葉に布団の場所教えてもらい」

「え！ そんなん聞いてないわ……」 莉子の声が少し大きくなる。

「そやし今言つたやろ？ ふたりも早^はよ風呂入って今日はもう寝なさい。明日からみつちり働いてもらおうで」

急に押しかけた立場だから、寝られればどこでもいい。でも急に三人の相部屋になって、莉子にとってはさぞ迷惑だろう。

「いつも何で勝手に決めるん。おばあちゃんは……」

おばあちゃんって……、女将さんに向かつて大丈夫なのかとハラハラしてしまう。

女将さんに言われたとおり、すぐに風呂に入り、莉子の部屋に荷物を移動した。二階への階段を上がって、一葉さんの部屋とは反対側にその部屋はあった。

一葉さんと、莉子の部屋に入り、上段の押入れから二組の布団と、枕を取り出した。その背の高い箱枕を持って一葉さんは、「舞妓さんはみんなこの枕で寝てんねん。そやし舞依ちゃんたちも今から練習しといた方がええと思うでー」と自分たちに渡してきた。

「ほな、おやすみい」と手を振られる。もう片方の手には普通の枕があった。

部屋にはみどりと莉子で三人だ。急に静かになってしまう。

「けっこう広いね」舞依は誰に向かってというわけでもなく話し出した。

「京間やとちよつと関東より大きめらしいですね」莉子が教え

てくれた。同じ八畳間だけど確かに実家の和室より広く感じる。でも三人でここで暮らすのは少し窮屈そうだ。

「ホンマうちなんかと一緒に部屋ですいません。邪魔せんようにもう隅っこで寝ますから。朝は勝手に起きますし、なんも気にせんといってください」

「え、もう寝るの？」

舞依の呼びかけに答えることなく、莉子はそそくさと既に敷いてあった布団に入り、頭まですっぽり掛け布団を被^{かぶ}つてしまった。せっかく相部屋になったんだし、いろいろ教えてもらえればと思ったんだけど。

「アンタさー、一体何者なの？」みどりが莉子のお尻を足でぐ

りぐりしだした。

「ああっ、ごめんなさい。やめてください……」

布団ごしに莉子のくぐもった声が聞こえる。

みどりはしばらくその動作を続けていたが、莉子が何も発し
ようとしないうちに諦めたのか自分の布団を敷きだした。

仕方なく舞依もふたりの間に布団を敷く。天井には和紙の
シエードに覆おおわれた照明がぶら下がっていた。そこから伸びる
紐ひもを引っ張ると、カチツという音がして暗闇が部屋を包む。窓
からは莉子の枕元へ月明かりが差し込んでいて、栗色だった髪
は黄金色こがねいろに輝いていた。



そして今——。初めての朝食を終えると、今度は志乃さんと一緒に洗い物担当になっていた。

洗剤の泡が流されていき、白く光沢のある皿が顔を出す。綺麗になった食器を並べていくと気持ちよくなってくるのはなんだろう。

「莉子ちゃんは、女将さんのお孫さんなんやで」蛇口から流れ出る水の音に紛れるまぎように、志乃さんは話しかけてきた。

「なんとなく、そんな気はしてましたけど……」そんなにじつくり見た訳じゃないけれど、女将さんとはあまり似てない気が

する。まあ、孫だとそこまで似ていなくても不思議じゃないか。でも、自分のおばあちゃんにしてはどこか他人行儀だったところに違和感を覚えた。

「ここに住み始めたんは二年前くらいやけどね」

「割と最近なんですわ。そういえば、いくつなんですわか？　莉子さんって」

「この春から高校生やと思うで」

「高校生ですかー。じゃあ、わたしと同一年だ！　舞妓修業も一緒にできるんですかね？」

「いや、本人は舞妓になる気はないみたいやわ」蛇口をキユツと閉めると、志乃さんは舞依の拭いた皿を食器棚にしまい始め

た。

「なんでですか？　せつかくいい環境にいるのに」

「まあ、普通は舞妓なんて辛いことばっかやし、なりたいてって思う子は中々おらんしなあ。なかなかそれに身近なあたしらの生活見たら、莉子ちゃんじゃなくても誰でも嫌になると思うで」

「そんなに辛いんですか」

「辛い中にもやりがいはあるし、そんなに怖がらんでええよ」

「もう遅いですよ……」

ごめんごめん、と志乃さんはほほえ微笑む。笑顔でさらつとかわ躲されたけど、辛いってことは否定してなかったな。

それから聞いた話によると、莉子は父子家庭で育つたらしい。幼い頃に母親を亡くし、父と子ふたりで生きてきたが、父親が仕事の都合で海外赴任になったらしい。それが二年前のこと。

詳しい事情は志乃さんも知らなくて、父親が向こうでの生活に慣れたら、莉子を赴任先へ呼ぶということになったらしい。お呼びがかかるまで、莉子はおばあちゃんである女将さんの元で暮らすことになったというわけだ。

女将さんのお孫さんということは、舞妓のサラブレッド。舞依は莉子の環境が羨ましく思った。

「いつも一緒にごはん食べてるんですか？」

「学校があるときはそうやなあ。昨日まで春休みやったから、朝はずっと寝てたみたいやけど」

「高校生活かー。楽しそうですよね」

「別に大したこと無かったで。あたしはちよつと通ってたことあるんやけど」

「そう……ですよね。学校だと面倒なことも多いですね」

舞妓修業を始めるのは普通は中学を卒業してすぐだ。でも中には高校を卒業してから始める人もいるって聞いたことはある。どういう経緯で志乃さんは舞妓になろうと思ったのだろうか。興味が湧いたが、志乃さんは志乃さんの事情があるだろうし、あまり軽々しく訊くべきじゃないかなと思つて、黙々と皿

を拭き続けた。

皿洗いが終わっても、莉子はひとり食堂に残ってたまごかけご飯を食べていた。

せつかくだから、みんなと一緒に食べれば良かったのに。

舞依は台所から、つまらなそうに口を動かしている莉子の横顔をそつと覗のぞいていた。

莉子がようやく食べ終わり、片付けを終えると、女将さんに部屋に来るように言われた。みどりにも既に声がかかっていたように、女将さんの部屋に入り、みどりの横に正座する。

「あんたたちは今日から仕込みや」女将さんはお茶をすすり、

話を続けた。

「仕込み期間は十カ月間や。あんたたちはその間に、舞妓の基礎を学んでもらう。舞や三味線しゃみせんのお稽古けいこは当然やけど、この置屋の雑用を、まずはしつかりとやってもらおうで」

「はいっ！」ふたりは声を揃えて返事をした。

「仕込み期間が終わる頃に、舞妓になれるかどうか試験を受けてもらうさかい。これは五花街ごかがい全体の試験やから、気合い入れとかなあかんで」

置屋に入っても、すぐにお座敷に立てるわけじゃない。舞妓としてお座敷に立つためには、お客さんに満足してもらえる実力をつけてからじゃないとダメだ。

「ありがとうございます。わたし頑張ります！」

「アタシも頑張ります」みどりも続けて言う。

「おきばりやつしゃ。それから、莉子のことやけど……」女将さんが少し言いにくそうな顔をした。

「あの子は今、少し不安定な時期みたいやから。ちよつと迷惑かけるかもしれんけど、大目に見たつてくれるか」

舞依とみどりは黙つて頷く。うなず

必要なことはもう伝えたようで、さつさと行きなさいと、女将さんに部屋から追い出された。

莉子のことつて、どう不安定なんだろう。自分も不安定なお年頃といえはそうだからなあ、と心の中でつぶやいた。

掃除や洗濯など、置屋の雑用をこなすだけでもう昼前になっていた。急いで昼食作りにとりかかる。雑用だけなのに結構ハードだ。

昼を食べ終わって片付けてとやっていると、もう中庭に夕陽が差し込んできていた。早起きのせいで長い一日が始まるなど思っていたのに、もうこんな時間だ。それから、置屋に帰ってきた一葉さんたちを手伝っていると、制服姿の莉子が着付け部屋を覗き込んできた。薄茶のブレザーに赤のチエツクのスカートはすごく莉子に似合っている。もう自分は制服を着ることはないんだな。そう思っちゃダメなんだけど、やっぱり羨まし

い。

「おかえりなさい」舞依は莉子に明るく声をかける。

「あ、はい。お疲れさまです……」

莉子はそのまま二階への階段を上がっていった。

夕食の準備をしていたら、莉子が食堂に顔を出してきた。舞依とみどりは気づいていないフリをして、台所で作業を続けた。

結局、莉子はちよこんと席についてから、何もせずそこに居るだけだった。何がしたいんだろう。ちらつと覗くと目が合ったが、すぐに逸そらされる。それからも、そわそわとして落ち着きがない様子が続いた。

「何か用？」

スタスタと歩いていったと思ったら、みどりは莉子の元に行き、喧嘩をふっかけた。いや、本人は普通に話しかけただけなんだらうけど、莉子のおどおど加減はさらに増してしまっている。

「ごめんなさい！ 許してください！」

「別に何も悪いことしてないでしょ。何か用事があるからここに居るんじゃないんですかって訊いてるの」

「いや、あの……お手伝いをしようかなと思ひまして……」

みどりは舞依の方へ振り返り、どうする？ といった顔をしてきた。

「じゃあ、じゃがいも剥くの手伝ってくれますか？」舞依は食堂に顔を出す。

「ええんですか？　うちなんかが手伝って……」

「どうしたいの！　手伝いたいんじゃないの！」みどりの声が荒くなりこっちまでびっくりしてしまふ。

「ごめんなさいごめんなさい」

莉子は逃げるようにして、台所へやってきた。そして、ブレザーを脱いで白いブラウスを肘まで捲る。透けそうなほど白い肌が目に飛び込んできた。

みどりは莉子の包丁さばきをじつと見て、「ねえ、なんでそんなにビクビクしてるの？」と話しかけた。訊きたいことを訊

くのに、なんの躊躇ためらいも見せない。そんなに見られていると、慣れていたとしても作業しづらそうだ。

「うちは、この家に住む資格なんてないんです」

「どういうこと？」みどりが早口で急せき立てる。

「ああ、変なこと言ってます……。うちのことなんかどうでもええんで、早く準備しましよ」

手伝いというのは口実であって、ほんとは話を聞いてもらいたかったんじゃないだろうか。

俯うつむいた莉子の長い睫毛まつげはまっすぐじゃがいもに向いていて、

その指先は器用に包丁を操っている。待っていると、また話し出すんじゃないかと舞依は思ったが、それきり莉子は何も喋しゃべる

うとしなかった。



朝は早く起きて、朝食を作る。そして、「京おどり」へ向かう。一葉さんと志乃さんを見送る。

京都に来て、十日が経った。四月の二週目ぐらいから終わりがらいにかけて、ここ宮川町は「京おどり」で賑にぎわっている。宮川町の舞妓さん芸妓さんが演じる舞台上、年に一回ちようどこの時期に開催されている。

一葉さん、志乃さんは公演が終わって帰ってくると、一息つ

く暇もなく急いで夜の座敷の支度を始める。夕食をとる余裕なんてないから、用意しておいたストローで、水分だけ補給してもらおう。舞依は化粧崩れがないかチェックして、ふたりに送り出した。

「舞依、翠。あんたらふたりも、来年はあんな感じやで」女将さんの声が背中から聞こえた。

「すごいですね。こんなに働いてるのにあんなに元気なんですよん」舞依は振り返り、女将さんに返事をした。

何か夢中になれることをしている人は、すごくキラキラしていて輝いて見える。舞依は菊屋の外に駆けだしていった一葉さんたちの背中を思い出していた。

「舞妓は激務やさかいに、あんたらもあのふたりを見習ってお稽古に励むんやで」

「はいっ」舞依はぴしつと背筋を伸ばして返事をする。

「はいじゃなくて、へえや」

言われたとおりに言ってみるが、自分の言葉になっっていないか、むずがゆい。

置屋の仕事には徐々に慣れてきた。疲労は溜まっているけれど、一葉さんたちに比べたら申し訳なくなる。みどりや莉子との関係もなんとなく定着しつつあった。

莉子が学校から帰宅してくるのが四時前くらい。ちようど夕食の準備をしている時なので、莉子は積極的に手伝ってくれ

る。みどりは相変わらず莉子をいじっているし、莉子はその度^{たび}に謝っている。でも、莉子の口数も徐々にだけども多くなってきた。ていた。

「今日は学校どうだった？」準備が一段落したところで舞依は莉子に訊いてみた。

「やっぱり友達できませんでした……」

「なんでまだできないんだよ！ 昨日あんなにアドバイスしたのにさー」^{ようしゃ}容赦なくみどりが責める。

「ごめんなさい！ でも元々得意じゃないし……」

今までの話を総合すると、莉子はおとなしいタイプで、あまり積極的じゃない。でも髪の毛が茶色いせいで、クラスでおと

なしめのグループには入れなかったそうだ。かといつて、同じように髪を染めているグループの子たちとは合わないらしい。だったら、その髪の色を黒く染め直せばいいのに、と舞依は以前アドバイスしたのだが、それだけはできないと強く拒まれた。確かに綺麗な髪をしているからもちたいのは分かるけど。

莉子は目をうるうるさせていて、自分に助けを求めてくる。みどりの言うことも正論だけど、ちよつと言い方がキツイのは後で注意しておこう。

「まあまあ。また頑張ればいいよー。おきばりやすやで！ 莉子ちゃん」舞依は莉子の肩をさすり励ます。

「うん……」

昨日もこんなやり取りをしたような気がした。

「そう言えば、どうですか？ お稽古の方は？」 莉子が話題を変えてきた。

「結構楽しいよ。新鮮だし、お師匠さんは丁寧に教えてくれるし。ねえ？」 みどりに同意を求めると、黙って頷き返してくれた。

「いいですねえ」

「え？ じゃあ莉子ちゃんも一緒に行こうよ」

「いや、うちはここに居させてもろてるだけで十分やし、お稽古なんてもう受ける資格ないんです」

「そうなの？　女将さんをお願いしてもダメかな？」

「それだけは絶対あきません！　そもそもおばあちゃんから、お稽古なんてする資格ないって言われたようなもんやし」

「そんなこと言われたの？」

莉子はコクンと頷くだけだった。

もう少し仲良くなったら聞かせてくれるだろうか。何かを思い出しているような莉子の横顔は、これ以上掘り下げないでほしいと言っているようにも、訊いてほしいと言っているようにも見えた。



「もつと腰落として！ あんよはすり足やで。そうそう……」
お師匠さんの指導が入る。

畳をこする足袋たびの音は、もう最初ほど気にならない。

舞依とみどりは舞の稽古をつけてくれる稽古場にいた。菊屋から歩いて五分ほどのところに大きめの町屋があり、その古くて伝統のありそうな建物の中に入った時、三味線の音色や唄が微かすかに聞こえてきた。自分が本当に舞妓の道に入れたんだなと実感する瞬間だ。

お師匠さんは菊屋の舞妓や仕込みに対して、代々担当していると言っていた。女将さんよりは少し若いらしく、千代花ちよばなとい

う名前前で舞妓、芸妓として活躍していたらしい。

丸いシルエツトからは親しみやすい雰囲気にじが滲み出ている。

話し方も女将さんに比べるとおっとりしていていい感じだ。今の子らは怒るとすぐ辞めるしなあ、と言っていたから、昔からそうなのかどうかは定かじゃない。

みどりとは陰で、はなまる師匠と勝手にあだ名をつけて呼んでいた。

「まあまあやな。普通はこの体勢がキツイんやけど、あんたらふたりはようできとるわ」

「ありがとうございます」舞依は褒められて嬉しくなった。

「おおきに、や。京ことばの方はまだまだやなあ」

「へえ。おおきに、お師匠はん」

このすり足の体勢は、最初に課せられた試験を思い出す。提ちよう灯ちんの火を消さないように気をつけてゆつくりと歩く動作は、舞に必要な動きに繋つながっている。なんでこんな試験内容なんだろうと思っていたけれど、きちんと理由はあつたんだと今になって気づいた。

お稽古が終わると、みどりと並んではなまる師匠に向かい合い、その日の反省点や宿題をもらおう。

「舞依、あんたはもう少し三味線の音を良く聴くこと。それができたら今月は、はなまるあげよ」

「おおきにー」舞依は畳に手をついて頭を下げる。

「んでみどり。あんたはちよつと動きがまだ硬いわ。なんか空手の型みたいや。舞はもつとしなやかに動くことをイメージせなあかん。あんたもそれがクリアできたら、とりあえずはなまなま」みどりにも講評が下る。おおきに、とみどりは頭を垂れる。

はなまる師匠も昔、自分のような修業時代、尊敬していた先輩舞妓から同じように指導されたらしい。もうちよつとで、はなまるあげよ、と。はなまる師匠のお喋りなところはオリジナールっぽいけれど。

「どうや？ 置屋の生活も慣れたか？」

ここからはただの雑談。いつもはなまる師匠は自分たちの生

活にも気を配ってくれているのが分かる。

「ぼちぼち慣れてきました。でも、一葉さんや志乃さんはすごく大変みたいで、でもわたしたちは何もできないのが、なんか申し訳ないなつて……」

「まあこの時期は一番忙しいからなあ。あんま気にせずあんたらはあんたらにできることをコツコツやってればええ。——そういうえば、莉子ちゃんはある年やっただな？」

「え？ あ、はい」

「最近はどうや？ 元気にしてるんか？」

「んー。ちよつと元気なさそうですね」

「そうか……」はなまる師匠は残念そうな表情を浮かべた。

「お師匠さんって、莉子ちゃんのこと知ってるんですか？」

「ん？ ああ、よお知つとるで。ちよつと前までお稽古つけてたしな」

「そうなんですか！ じゃあ、莉子ちゃんってどんな子だったんですか？ まだあんまり本音で話してくれないんですよね……」

「ええ子やったで。飲み込みも早いし、さすが菊菜きくなの子って感じやったわ」

「菊菜？」

「あ、いや、なんでもなかったわ。ほら、さつさと帰んなさい」と、はなまる師匠はバツの悪そうな顔をして、立ち上がる

うとする。

「えー。いいじゃないですかー、教えてくれても」

「マイ。アンタしつこい」みどりが制止してくる。

「でも……、莉子ちゃんと仲良くなりたいし、ちよつとだけでもいいんです。何か莉子ちゃんと仲良くなるきっかけでも知れたらなつて」

「んー。まあ、あんたらやつたらええか……。ほな、ちよつとだけやで」

それからお師匠さんは、昔を振り返るように少しづつ話し出した。

始まりは莉子のお母さんの話だった。

菊菜さん。宮川町でこの名前を知らない舞妓、芸妓はいない。それぐらい有名な舞妓さんだったらしい。それが莉子の母親だった。

宮川町に来た時、菊菜さんは女将さんの養子になって、跡取りのため一段と厳しく指導されたらしい。その指導の甲斐あってか、菊菜さんは当時の五花街で一番の舞妓になった。

「え！　すごいですね、莉子ちゃんのお母さんって」
「そや。すごかったでー。あん時はめっちゃ花街全体が盛り上がっててなあ。でもなあ……」そこで話は終わらなかつた。

一番の座はすぐに明け渡してしまう。菊菜さんは体調を崩して舞妓の仕事ができなくなってしまった。結局、菊菜さんは交

際していた人と結婚し、家を出て行く。そして結婚後に生まれ
たのが莉子というわけだ。やがて菊菜さんは莉子が幼いときに
亡くなってしまった。

菊屋の養子になってから引退するまで、はなまる師匠は菊菜
さんの指導を続けていたらしい。

「ここからはあての推測も混じるんやけど……」と、はなまる
師匠は莉子が菊屋に来てからの話を始めた。

菊屋への帰り道はいつもと違った。いつもだったら、みどり
とその日の稽古の内容について反省し合う。でも今日は、ふた
りの歩く足音だけが続いていた。

「莉子ちゃん。このままでいいのかな？」舞依は、ジャージのポケットに手を突っ込んでいるみどりに訊いてみた。

「……さあ。アタシたちが分かるわけないよね」
いつも以上にばっさり言い捨てられてしまった。結局また沈黙が続く。

莉子にそのつもりがあつたのかどうか。本人の意思は誰も訊いていないらしいけど、女将さんが莉子を跡取りとして迎えたのは確かだ。

父親とのふたり暮らしから急に置屋での生活へと変わる。菊屋に来て半年ほどが経つたある日、莉子は女将さんにかなりキツく怒られたらしい。莉子に対してだけ異常に厳しい女将さん

の態度は、莉子にとって納得いかないことも多かつたに違いな
い。

その翌日、莉子は髪の色を茶色に染めて、菊屋に帰ってきた。無言の抵抗だった。舞妓は地毛で結うから、それはつまり舞妓になる気が無いというメッセージ。それきり女将さんも無理に稽古に出すことはなくなつたそうだ。

ただ、舞依はその話を聞いて思い出した。しげ久で出してくれたお抹茶の味。座敷に入るときしよさの所作。素人目でも莉子の舞妓としての才能を感じた。それに、あの時の莉子は楽しそうだった。おもてなしの心というのは、舞妓として備えているのが当然で、それが自然とできているってことは、莉子は舞妓の

仕事を本当に嫌いになったわけじゃない。それに、もし舞妓になんて最初から興味が無かったら菊屋に来た時点で話しているはずだ。

——女将さんも莉子も頑固なだけだ。お互い口ベタだし、歩み寄ろうとしない。

菊屋に到着してすぐ、みどりは二階に上がって行ってしまった。舞依は遅れないようについていく。みどりは部屋をノックして、返事も聞かずに襖ふすまを開けた。

壁にもたれてこっちを向いている莉子が見えた。その目はいつぱいに開かれています。

「莉子！ アンタのこと、はなまる師匠から聞いた」

「え、はなまる？　ああ……千代花師匠のことですか」

莉子はそう気づくとすぐ、目を伏せてしまった。

「アタシたちが何かコソコソして探ったみたいで嫌だから言つた。だからアンタも聞かせて。これからどうしたいと思つてるのか」

直球ど真ん中で、みどりは莉子を問い詰める。

「どうしたいって……、何のことですか？」

「ほんとに舞妓修業を辞めたこと、後悔してるんじゃないのかな？　だから、わたしが志乃さんと話してた時、お茶出してくれたりしたんだよね？」　舞依はその時の光景を思い出しながら言つた。

「それは別に、手伝いが必要だって言われたからで……」

「あー、もうめんどくさい！ さっさと正直になりなよ！」
みどりが痺れを切らしたようで、莉子をどなりつける。

「なんですか！　うちは正直に話してますから！」

莉子は立ち上がり、舞依たちの横を足早に通り過ぎる。階段を下りる足音が置屋に響いた。

「もうちよつといい言い方なかったの？」
「恐る恐る舞依は、みどりの背中に訊いてみた。」

「うっさい！　じゃあ、なんか他にいい考えでもあったの！」

「それは、分かんないけど……」

みどりの激しい呼吸がおさまるまで、ふたりの間の沈黙は流

れ続けた。

「あ、じゃあさ、ふたりで考えてもダメだったら、他の人に相談してみようよ。三人寄らばなんとかってヤツ」

「ナントカって……誰に？」

「とりあえず、姉さんたち？　なんとかなるよーなんとか」

みどりの強^{こわ}ばった顔が少しだけ溶けていった。

一葉さん、志乃さんが座敷から帰ってきたのは深夜の一時すぎだった。眠さをこらえながら帰りを待つのは辛かったが、一葉さんたちはもつと疲れている。着付け部屋で着物を脱ぐのを手伝いながら、舞依は莉子のことについて切り出してみた。

「そうやなあ……。いや、ウチらもな莉子ちゃんが髪の毛染めて帰ってきたときは、めっちゃびっくりしたで。戻すように言ったんやけど、なんやもう全然聞かんくてなあ」

あーかゆかゆ、と一葉さんは長襦袢ながじゅばんの上から、肩胛骨けんこうこつの辺りを搔かいている。

「やっぱり莉子ちゃんがどうしたいかちやうかな。それを確かめんと、あたしらがしたことが余計なお世話になるだけかもしれへんし」

それは至極当たり前な意見だけど、志乃さんが言うと言得力があり、アドバイス通りにやってみようという気持ちになる。

今日の仕事が終わりに、舞依とみどりは部屋に戻った。そつと

襖を開けると、鬼灯色ほおずきの部屋の隅っこに莉子のこんもりとした布団が見える。壁の方を向いているようで、その顔は見えない。豆電球をつけたままにしてあるのは、舞依たちが部屋に戻ったときに暗すぎて困らないようにという莉子の配慮だ。ちよつとした心遣いに心を打たれる。こんなにもいい子なのに、不憫ふびんなこの状況には全く納得できない。

静かに布団を敷き、ふたりは床についた。舞依は莉子とみどりに挟まれる形になる。

「ねえ、莉子ちゃん」舞依は照明から垂れ下がっているスイッチの紐の先を見ながら声をかけてみた。返事はないけれど、まだ起きているのはなんとなく分かる。

「わたしたち、やっぱり莉子ちゃんに教えてもらいたいんだ。なんで舞妓になるのを辞めたのか」

やはり応答はない。もう少し違う話題から話し始めた方が良かっただろうか。

今日のところは諦めて明日出直すか。

舞依が眠りに入ろうとした時、「うちは……おふたりが思っているとおりアホなだけです」と莉子の声が聞こえた。暗くて顔を見なくて話せるこの状況が、手助けしてくれたのかもしれなかった。

話し終えた莉子に「ありがとう。おやすみ」と言い、舞依は目を閉じた。でも眠りにつくことはなく、その話の内容を思い

出していた。

莉子はまだ舞妓になりたがっていて、でも女将さんに言われたキツイ一言が莉子の自信をすっきり無くしてしまっただらし。

「あんだなんか全く才能ないわ。そんなんやったらもう辞めてしまい。ここにはそんな中途半端な子は置いとけへん」

そんな台詞せりふを莉子は女将さんに言われてしまった。それが髪を染めた日の前日のこと……。

確かにひどい。けれど、それは女将さんのただの指導だったと、第三者の立場からははつきり分かる。わざわざ跡取りとして迎えた莉子を本気で辞めさそうなんて思うはずがない。

それから莉子は、置屋での居心地が悪くなつたらしい。結局頼れる親戚はおらず、ここに居させてもらうしかなかつた莉子は、女将さんと上手く接することができずに、ぎくしゃくした生活が続けていた。そして、舞依たちが菊屋にやってきた。

それまで食事の準備も手伝うことはなかつたらしいけど、さすがに同い年の自分たちの用意したご飯を、何もせず食べるのに気が引けたらしい。確かに今は朝も手伝ってくれている。「別に今から舞妓になろうなんて思つてませんよ。でも、一度でいいんで舞妓としてお座敷に出てみたかつたな」

その莉子の言葉は、舞依の頭からしばらく離れなかつた。

翌朝、朝食の準備を始めるため一階に下りると玄関の電話が鳴った。こんな早い時間に、なんて非常識なんだと、電話の主
に言っ
てやりたくなる。

「はい、菊屋ですが」

受話器の向こうと時間差を感じた。うまく聞き取れなくて、
誰からなのか訊き返す。そして、電話の主のことが分かると同
時に驚かされた。舞依は急いで階段を駆け上がり、部屋で着替
えていた莉子に告げる。眠そうだった莉子の目が、はつきりと
焦点を合わせた。

電話の相手からして、ややこしい話なんじゃないかと思っ
て
いたけれど、莉子は主に聞いているだけで、
ふたことみこと 一二言三言つぶや

き、受話器を静かに置いた。そのまま莉子は廊下に佇ただずんでいる。

「なんて？」舞依は莉子にすすつと近寄る。

「迎える準備ができたからこつちに来いって。一週間後にうち、お父さんトコに行くことになってしまいました……」

「えっ……」

「なんか勝手ですよね。お父さんも、お母さんも……」

返す言葉が見つからず、複雑な表情をした莉子を見ることしかできなかつた。



なんとかして最後に莉子の思いを叶えてあげたい。舞妓になつて座敷に出るといふ願いを成就じょうじゆさせてやりたい。乗つてくれるか不安だったけど、みどりも協力してくれた。みどりはあまり内面を表に出さない性格なだけで、やっぱり莉子のことは大事な仲間だと思つているんだなと再確認できた。全く不器用な人間が多いと困る。

莉子が旅立つまで残された時間は全然ない。一葉さんも志乃さんも連日京おどりの公演で忙しいから、こんなプランに協力を仰げない。舞依とみどりはふたりで話し合い、何が必要か考へた。

「第一に、場所が必要だ」みどりは細長くキレイな指を立てる。

「それはもう竹さんをお願いしたよ。菊屋のお茶屋の座敷使つていいって」舞依は得意げに報告した。

「ん。じゃ、次はお客さんだけど」

「それはまだだー。わたしたちじゃダメかな？」

「それって、あんまり緊張感出ないよね？ やっぱ本物のお客さん用意したいな」

「じゃあ、わたしたちでお客さんを集めてみようよ」

「どうやって？」みどりが首をかしげる。舞依はしばらく考えて口を開いた。

「京おどりのお客さんを誘うつてのはどうかかな？」

「……確かに、舞妓に興味ある人は集まっつてそうだね。菊屋に
来たことがある人もいそうだし」

「でしょ？　そこで声かけてみたらきつと誰か来てくれるよ」
「ふーん。たまにはアンタも役に立つもんだ」みどりにバカ扱
いをする目で見つめられる。

京おどりは一日三回公演する。プランを実行するとすれば、
二回目が終わる三時半だ。その時間帯なら買い物に行くことも
あるし、置屋を出ても不思議じゃない。

小腹が空いてきた頃、みどりと一緒に置屋を出た。宮川筋を
歩いていると観光客と頻繁にすれ違う。

「今はいいけど、舞妓さんになつたら嫌だね。結構目立ちそう」舞依は観光客の集団の背中を振り返って観察した。一眼レフを肩から下げた人もいて、あんなカメラを向けられでもしたら、なんか有名人になつたかのように錯覚してしまいそうだ。

「ほんとうつとうしいよ。今でさえ結構ジロジロ見られるしさ。それになんか尾^つけられてるような気もするし」

「それは気のせいだよー。まあジロジロ見られるのは、わたしたちが不思議だからじゃないかな？ 観光客でもないし、舞妓でもないし」

舞依たちは京おどりの会場となつている宮川町歌舞練場かぶれんじょうに着した。歩いていて急に頭上に現れた水色の看板に、「京おど

り」の赤の文字はしつかりと目立っていた。その下には三つ輪の提灯が何個もぶら下がっている。

少し入るのに躊躇ちゆうちゆうしたものの、みどりと一緒にいるから敷地内に足を踏み出せた。

会場がある灰色の建物には、一際大きな三つ輪の垂れ幕と水色の看板がかかっていた。

まだ公演中らしく、建物の外にはほとんど人がいない。関係者つぼさを演出しながら、しばらく様子を窺うかがうことにした。

公演が終わったようで、入り口から観客が出てきた。年配の人が多く、みんな満足そうな顔に皺しわを作っていた。

「話しかけに行きなよ」みどりが背中を乱暴に押してくる。

「えーふたりで行こうよ」なんで自分一人なんだと思つて振り返ると、不安そうなみどりがいた。こんな顔を見るのは初めてだ。

「そうだね……。じゃあ、話しかけやすそうな人選ぼうよ」

舞依は流れていく群衆の中から、優しそうな顔をしたおばあさんを見つけ、近寄つた。

「すみません。わたしたち、舞妓修業中なんですけど、良かったら座敷見に来てくれませんか？」

「座敷？ あんたたちが？」

ジロジロと怪訝けげんな顔で見られる。みどりのジャージ姿は違和感ありすぎだなと今更気づく。

「ほんまかあ？　なんやおかしなカツコしてるし、座敷の勧誘なんて変やわ」

「いや、それはいろいろ事情がありました……」

「そもそもなんや、その喋り方は。そんな関東弁でよう舞妓なんて言えるなあ」

弁解しようとしたが、おばあさんはそそくさと舞依たちから離れていった。

「ごめん。なんか……」珍しくみどりがしおらしい。

「大丈夫大丈夫。まだ一人目だし」

その舞依の言葉も虚しく、それから五組ほど声をかけたが、誰も相手にしてくれなかった。舞依たちが修業中だと信用して

くれた人もいたけれど、中には修業中の舞妓の座敷にわざわざ好き好んで見に来る奴なんておらんわと、吐き捨てる人もいた。

会場の入り口からはもう観客はいなくなっていて、一時の喧^{いっとき}噪^{けん}がもう嘘^{けん}のようだ。しかたなく舞依たちは歌舞練場を後にすることにした。

「結局収穫なしだね」舞依は綺麗に並ぶ石畳の目地^{めじ}を見ていた。

「そうだね……」みどりも元気がない。

「また明日もあるしさ。今日はさっさと買い物行って帰ろうよ」

なぜかみどりを励ましている自分がいた。本当に明日は大丈夫だろうか。今日と同じ結果になってしまったら、計画を練り直した方が良いかもしれない。

でも、こういう時こそ顔を上げて前向きになろう。最初から上手くなんていきっこないんだ。舞依が文字通り前を向こうとして顔を上げた時、狭い路地をすれ違う着物の女性が目に入ってきた。

「あー！」その女性の着物に自然と吸い寄せられてしまっていた。

「これつてもしかして、京友禅の水色みずいろちりめん縮緬ちりめんじゃないですか！」

叫んでからハッと我に返り、「すいません！」と平謝りする

る。勝手に興奮してしまっていた自分に気づき恥ずかしくなつてしまう。

「なんやなんや。あんた詳しいなあ」

一際明るい声で舞依の肩を叩いてきた。よく顔を見るとセルフレームの黒縁眼鏡をかけていて、気持ちのいい笑顔に向けてくれていた。

女将さんと同じぐらいの歳に見える。声は若々しくて着物の豪華さに負けていない。水色の背景に浮かぶように、はなかご花籠から赤や黄色の花びらが舞い下りているデザインは、見ていてうっとりしてしまふ。至近距離でこんないい着物が見られるなんて、顔はすっかりニヤついているだろう。

「すいませんつい……。でも、どうしてこんなところに？」

「あ、これ？ レプリカやレプリカ。ええやろ？ おばちゃん
が作らせたんやで」

正式名称、水色縮緬地じはなかがこもようこそで花籠模様小袖——レプリカで納得し
た。本物は国立博物館に展示してあるはずだ。それでも、こん
な豪華なレプリカ見たことない。

「あんだ着物好きなんやねえ。どこの子なんや？ ここら辺
の子じゃなさそうやし、パツと見、観光客でもなさそうやし
なあ。ん？ おばちゃんに言うてみ」

黒縁眼鏡のおばさんは面白いものを見つけたと言わんばかり
に、質問攻めにしてきた。舞依は菊屋で仕込みとして修業をし

ていることを話した。着物は確かに好きだということも。

「舞依ちゃんのはじゃあ、着物いっぱい着れるから舞妓はんになりたいんや？」

「違いますよ！」

舞依は慌てて否定する。鋭い、と思ったがこんな行動を取っていたら誰でも分かるかと思ひ直す。一葉さんに初めて会った時、着物着放題の言葉にクラツときたのは事実だけど……。

黒眼鏡のおばさんは呉服屋を営んでいると言った。だからこんな高くて貴重な着物を着られるわけか。

「うちに来たら、着物いっぱい見せてあげられるで」

「ほんとですか！」

「ああ、ほんまやほんま。あんたみたいなおもろい仕込みさんは初めてやわ。気に入った！　いつでも遊びきに来いや」

「ありがとうございます！　あ、じゃあちよつとお願いというか、わたしからもお誘いがあるんですけど」

「ん？　何や？」

舞依は友達の日本での最後の記念に、座敷を用意していることを簡単に説明した。

「へえー、おもろそうやん。行くいく」

「え？　いいんですか？」

「いいも何も、行ってええんやろ？　こんなおばちゃんが青春の一ページに加わってもええんやったらやけど」

「いや、それはもちろん大歓迎です。あ、でもうちは一見さんいちげん無理なんでどうしよ……」

「ああ、菊屋さんやろ？ そやったら大丈夫や。お友達がそこ行つたことあるし」

なんとという幸運。気が変わらないうちにと、舞依は詳しい場所と時間を伝える。

「じゃあ、お待ちしてますね！ お友達と一緒にいらしてください」

「はいはい。最後までおきばりやー」と呉服屋のおばさんは路地を歩き出した。

みどりに「やったね」とピースを送る。さすがにVサインま

では返してくれなかつたけど、久しぶりの笑顔を返してくれて嬉しくなった。



「うちのためにそこまでしてくれんでええのに……。ほんま申し訳ないです」

座敷がもう明日に迫っていた。夕食後、舞依とみどりは莉子を部屋に連れていき、計画の内容を打ち明けた。自分たちも莉子にいろいろ手伝ってもらったからと、感謝の意味も込めて。

「いいんだよ。別にわたしたちが好きでやってることだし。ね

え」舞依はみどりの方に問いかける。

「まあね。アンタは気持ちよく海外へ行けばいい。同じ部屋の住人としての義理だよ義理」

「ふふっ。ふたりとも、ほんまおおきに」

みどりはカツコつけているけど、内心きつと嬉しいはずだ。

自分たちの計画がうまくいきそうだし、莉子に拒絶されなくて安心した。

「ごめんね、ギリギリになっちゃって。でも驚かせたかったから」

「ううん。もつと前に知ってたらずつと緊張して、身体に悪かったですよ。てか、もう緊張し始めてるかもしれへん」

そう言いながらも莉子はここ最近で一番嬉しそうな顔をしている。

「でも髪とかどうするんですか？」 莉子は自分の栗色の髪をつまんだ。

「大丈夫。ちゃんと考えてるから」 舞依はびしっと親指を立て、決めのポーズを見せつけた。

翌日の夕方、いつもより少し遅く、莉子が最後の学校から帰ってきた。舞依とみどりは莉子を着付け部屋で出迎える。こうして莉子の帰りを待つのも最後かと思うと、やっぱり悲しくなる。

「今まで話してこんかった人たちも、最後にいっぱい話せて、
今までもつたいなかつたなーって思いましたよ」クラスメイト
から貰ったんだろう花束を抱えて、莉子は寂しそうな顔を見せ
た。

「ごめんね、最後の日しか座敷が空いてなくて」
「ううん。それは大丈夫です。充分すぎるくらい話せました
し」

花束の中身を見たり、莉子が学校で開いてもらったお別れ会
のことを聞いたりしていると、廊下を歩いてくる足音に舞依は
気づいた。いつもより高い音で床が鳴っている。

「おにいちゃん来たでー」一葉さんが姿を見せる。続けて志乃

さんも。

「ごめんやすー」

低い声が聞こえた。ニユツと細長い顔が出てきて、長い脚が座敷をまたぐ。志乃さんの後ろから入ってきたのは、百九十七センチぐらいはありそうな大男だった。おお、と舞依はその大きさに圧倒され、自然と壁にもたれてしまう。

「さっそく用意さしてもらおうさかいなー。ほんまー葉さんはかなんわー」

その男の人は莉子を見つけると、シヨルダーバッグを下ろし、さっそく化粧台に座らせた。

三十歳くらいだろうか。無精^{ぶしょう}ヒゲを生やしたその顔は無愛想

で、莉子のふたつ分はありそうだ。一葉さんがおにいちやんと呼ぶその人は、男衆さんおとこしと花街はなまちでは呼ばれていて、舞妓や芸妓の髪結いや着物の着付けを行ってくれる。

一葉さんと志乃さんには三日前に、計画を明かしていた。髪と着付けはどうしても自力では無理で、誰か紹介してほしいとお願いしていたのだった。

「まかせとき」と一葉さんは自信満々に答えてくれたけど、直前まで忘れていたらしく、ついさつき、京おどりの帰りに一葉さんが無理矢理連れてきたらしい。

バッグから髪結いに使うと思われる道具を取り出すと、莉子の髪を器用に操っていく。

「あ、ちゃんと黒くしてあげてな」一葉さんが鏡越しに男衆さんに伝える。

「え、染めるんですか？」莉子が少し嫌な顔をした。

「いやいや。せつかくキレイな髪してんのに、真っ黒にすんのはもったいないやん。スプレーで最後にちよちよいとやっつけばええよ」一葉さんが当然のことに言う。

「そんなサービス普通はやってへんのやけどねー」

男衆さんは莉子の長い栗色の髪を触りながら複雑そうな顔をした。

「そんなお固いこと言わんと、ええやんおにいちゃん」

「……一葉さんだけやでー。特別なんは」

細長い無愛想な顔が一瞬崩れた。みどりも気づいたようで、厳しい視線を男衆さんに向けていた。

みるみるうちに莉子の髪が整えられる。若い舞妓の髪型は「割れしのぶ」といい、年を重ねることと変わっていく。あんならふたりも最初はこの髪型やで、と志乃さんが教えてくれた。

長い髪に豪快にコテがあてられていった。カチカチカチと、根元から髪先へ。リズムよく進み、音とともに湯気が立ち上つのぼていく。

「それって何つけてるんですか？」男衆さんの手が空いた時を

見計らい、舞依は訊いてみた。

「これは油や。鬢びんつ付け油。髪の毛固めて乱れんようにつけてんねん」素早い手さばきで、莉子の髪に油をつけていく。そして、男衆さんは、頭のとっぺんから腕ぐらいの太さに髪をまとめると赤い布をあてがった。

「それは、何なんですか？」気になることが多すぎてつい訊いてしまう。

「ありまち鹿の子」無愛想に言い返される。

「ありまち？」

「興味津々やなあ、舞依ちゃん。手絡てがらのことや。手絡てがらつちゅうのを鬘まげにあてて結わはるねん。いやー、じっくり見るの初めて

やわー。こんな風にしてはんねんなあ」

一葉さんが莉子の頭を凝視して、少し男衆さんは作業がしにくそうだ。莉子も何か注目されっぱなしで照れくさそうにしている。

そうこうしているうちに、最後にスプレーして、ちゃんと舞妓さんの髪型になっていた。

一葉さんが莉子の黒くなった髪をチエツクする。てっぺんの鹿の子のところか気になって舞依も見してみると、さすがプロだ。髪の毛のところだけ黒くなっていて、手絡はきちんと赤いままだ。

「いやーおおきにー、おにいちゃん。お化粧はウチらがやる

わあ」と一葉さんは志乃さんをぐいっと引き寄せ莉子の後ろに立たせた。

「ウチらがって、ほとんどあたしがやるんやろ？」

「だって、志乃ちゃんの方が上手いし」

それに難しいねもん、と一葉さんはつぶやき、後ろに引っ込んだ。

鬢付け油を取り出した志乃さんは、顔や背中に薄く延ばしていった。こうすることで化粧が落ちにくくなるらしい。次に白粉おしろいで白くなった刷毛はけを手にして、莉子の首筋からそれでなぞっていった。肌色の長いV字が二本、首から背中にかけてキレイに残っていた。わざとこうしているんだなと分かる。続け

て顔にも白粉を塗り、化粧は終わった。

「莉子ちゃんは新人さんということで、紅べには半分やな」志乃さんはそう言うと、莉子の下唇にちよこんと紅色を残した。

「おー」

完成した莉子の顔に一同が声を上げる。そこにいたのはまさしく舞妓さんで、目を奪われてしまった。

「じっくり見てる時間あらへんでー。次や次。着付けやって、おにいちゃん」一葉さんが男衆さんを急かす。

「あいよ。んで、どこにあんの？ 着物」

男衆さんが部屋を見回す。

あ——。みどりを見る。ブンブンと首を振られる。ここにき

てやってしまった……。着物、準備してなかった。

「なんやその顔ー。この世の終わりみたいやで。ウチらの貸してあげるさかい安心しい」一葉さんが舞依の顔を見て笑ってきた。

「あの一、勝手なこと言って申し訳あらへんのですけど……。せつかくやから着たい着物あるんです」

莉子が珍しく自分から話しかけてきてくれた。

何があるんだろうと気にはなっていた。舞依たちの部屋にある押入れには布団が詰まっている方ともう一つ、開けたことのない奥の押入れがあり、その前にみんなが集まっていた。

莉子は屈みながら、ゴソゴソと奥の方から一つの箱を引つ張り出してきた。焦茶に変色した木箱で、莉子がゆっくりと蓋ふたを開けていく。

「おー。めっちやええやん、これ。ウチに着さしてー」一葉さんが歓声を上げる。

「ダメですよ」舞依は箱の中から視線を離さず言い放つ。

莉子が箱から取り出したのは、薄い若草色の着物だった。赤や紫の朝顔の柄がちりばめられていて、すごく落ち着いた印象を受ける。自分だってこの着物を着たいけど……今は我慢だ。

「結構おとなしい感じの柄と色やから、姉さん舞妓用のかな、これ？」志乃さんは上から覗き込んできた。若い舞妓は赤など

の派手目の色で、年季が入ってきた舞妓は落ち着いた色になるらしい。

「これ、うちの実家から持ってきたんです」莉子はじつと手の中にある着物を見ている。

「そうなんだ。じゃあ莉子ちゃんのなの？」舞依は別人に見違えるほどになった莉子の横顔に訊いた。

「ううん。母親のやつ……」

莉子の母親——つまり、かつて祇園ぎおんで一番だった菊菜さんが着ていた着物。それを莉子が今身につけようとしている。莉子はあまり詳しくは話そうとしないけど、きつと莉子にとつても特別な着物のはずだ。

「おにいちゃんよろしゅうなあ」着付け部屋に戻り、一葉さんが莉子の着物を渡す。

長襦袢の上に着物が、あつという間に帯も巻かれ、男衆さんの手でぎゅっと締められる。これを締めるんに結構力があるんや、と男衆さんは自慢げに説明してきた。残念ながら、一葉さんは全く聞いていなかっただ。

「おー。完成や完成」一葉さんは着物を纏まとった莉子を見て、「ばつちりやん！」と声を大にした。

「まだ、簪かんざし付けてないやんか」と志乃さんは冷静に化粧台の上においてあつた簪を取ると、莉子の頭にそれを挿した。

「舞依ちゃん、みどりちゃん。良く見てみ、この花何に見え

る？」

一葉さんの簪は、ピンク色の花びらが連なってぶら下がっている。志乃さんの頭にも、ピンク色で似たデザインのそれがあつた。

「……桜ですか？」みどりが答える。

「正解や」

「ウチら舞妓さんの簪は、季節によって花の種類がちやうねんで。今は四月やから桜な。ちなみに先月は菜の花」一葉さんが得意げに言う。

「へえー。おもしろいですねー」髪飾りにまでこんなルールがあるなんて知らなかった。自分が初めて付ける季節花は何にな

るんだらう。そのときが楽しみになった。

「月初げっしょは結構忘れがちでなあ。この前なんか前の月のやつ付けてつてもうて、お客さんに指摘されても「たわ」一葉さんがケタケタ笑いながらこっちに向き直る。

「ぽっちりは何でもいいんですか？」

「そうそう。別にぽっちりは自分の好きなんでええんやで。でもぽっちりって言い方よう知ってたなあ」

「え、ああ……たまたまですよ。たまたま。帯留めのことですよね」

莉子の帯には色鮮やかな帯留めがあり、赤の帯を背景にして一段と際だっていた。——危ない危ない。着物好きだったこと

はあまりバレたくない。

「ほんま、おおきに。うちのためにこんなぎょうさんの人に色々してもうて……」

完全な舞妓姿で莉子が丁寧にお辞儀をしてきた。ただのお辞儀なのに高価な感じがしてしまう。

「まだ本番はこれからだよ。そろそろ行かなきゃね」座敷の間まであと三十分もなかった。舞依は莉子の手を取り、着付け部屋を後にした。

菊屋のお茶屋さんの方は、置屋の隣にあり、部屋数は少ないけれどこぢんまりとされていて人気があるらしい。ただし、今は

専属の舞妓が一葉さんと志乃さんしかいないから、昔ほどではないと志乃さんが教えてくれた。

お茶屋に入ると竹さんが出迎えてくれた。約束の時間まであと少し。空いている座敷にそろそろと足を踏み入れ、莉子を囲んでみんなが座る。

「あんたが気持ちよくなれるようにウチらがサポートするし安心しいな」

一葉さんが緊張している莉子に語りかける。元々静かな莉子だが、お茶屋についてから緊張が増したようで、表情が硬い。

「リラックスだよ、莉子ちゃん」舞依はなかなかいい言葉が見つからず、ありきたりな励ましをしてしまう。

「アタシは、空手の試合の前とかにイメージトレーニングするよ。勝つイメージをするとね、結構いいんだ。自然と落ち着けて」

みどりはぶつきらぼうだったけど、そのアドバイスどおりに莉子が目を閉じる。どういうイメージをしているのか、まだ一つの舞もろくに踊れない自分からするとイメージすることすら困難だ。次第に莉子の表情が穏やかになってきた。

実家が空手と合気道の道場だと、みどりが言っていたことを思い出す。なんで武道とは正反対に思える舞妓の世界にやって来たんだらう。前から少し気にはなっていたが、あまり突っ込んだ話はまだできていなかった。

「ふおっ、ふおっ。お客さんじゃあ」竹さんが呼びびに来てくれた。

いよいよだ。後は見守るだけ。でも、舞依は自分のことのように緊張してきた。対して莉子は落ち着いている。やはり花街で一番だった舞妓の血を受け継いでいるだけあって、持っている器が違うのだろうか。自分が心配するのも失礼な話かなと思っただ。

志乃さんを先頭に、一葉さん、莉子が廊下を進む。舞依とみどりは廊下の角からこっそり様子を見ていた。三人は廊下に座り「失礼します」と志乃さんが声をかけて障子しょうじを開ける。一葉さんと莉子は続けて座敷に入っただ。

「大丈夫かな？」改めて本番を目の前で見ると、やはり心配してしまふ。

「アタシがアドバイスしたんだもん。うまくいくに決まってるでしょ。アタシたちは帰って置屋の仕事するよ」みどりは立ち上がり、廊下を歩き出した。舞依も後を追うように歩き出す。そして、ちようど座敷の前を通り過ぎようとした時――

「おばあちゃん！」

莉子の甲高かんだかい声が廊下まで響き渡った。

「なんでここに居おるん？ おばあちゃん」

「なんでで、私が招待されたからや」

座敷の中に入ってから、莉子と女将さんのやり取りを隅っこで眺めていた。せつかく勉強できるええ機会やからという理由で、女将さんから部屋に入るように呼ばれたのだった。

一葉さんも志乃さんも、事態が呑み込めていないようで、固まってしまっている。

「いやー、菊菜さんによく似とるわー」女将さんの前には、呉服屋のおばちゃんが座っていて、莉子のことをじっくり見ている。

「おばちゃん、莉子ちゃんのこと知ってたんですか？」舞依は呉服屋のおばちゃんに話しかけた。

「ああ、知ってたで。うちの店のお得意さんや、菊屋さんは」

「えー！ そんなこと一言も言っただけじゃありませんか」
「言わん方がおもしろいかなと思っただけじゃありませんか。サプライズってことで、女将さんが直接見た方がええなーと思っただけ。グッドアイデアやろ？」親指を立ててウインクをしてくる。歳の割にという
と失礼だけど、お茶目なおばちゃんだ。

でも莉子がそれで大丈夫なのか、心配になってきた。

「うち、もう帰ります……。おばあちゃんが居るなんて聞いてへんかったし」

莉子は障子に手をかけて、座敷をまたごうとした。

「あんだ、いつまで中途半端なつもりなんや？」

女将さんは莉子の方を振り返らず、その視線の先は窓の奥に

広がっている中庭の景色に向けられていた。

「……そんなん、おばあちゃんに言われる筋合いません」莉子は半開きの障子に手をかけたまま俯いている。

「そうや。でも、その着物を着て何もせずに帰るつもりなんか？ 手伝てつどうてくれた人たちには何て言うんや？」

「それは……」

莉子はそれきり黙ってしまった。舞依には莉子が考えていることも、女将さんが考えていることもなんとなく分かった。お互い頑固だから素直になれない。女将さんは、ほんとに莉子の踊りを見たいと考かんえているだろうし、莉子は踊りたいけど、女将さんの言いなりになるようで嫌だと思おもっているはずだ。

だから――

「わたしは見たいな。莉子ちゃんのと踊るところ」静まりかえった座敷には舞依の声がよく通った。

「そやそや。せつかく久しぶりに晴れ舞台に出られるんや。その着物が泣いとるでー」呉服屋のおばちゃんが援護してくれる。

「アタシにも見させてよ」続けてみどりが。

「そやそやー。せつかく準備したんやし、やろやろ」一葉さんは扇子せんすを振り回す。志乃さんも頷く。

「じゃあないですね……。じゃあせつかくやし、やりましよか」莉子は振り返ると、部屋の正面まで歩いていき膝を折る。

「ほな、やらしてもらいます」

畳たたみに扇子を置き、こちらに向かつてお辞儀をする。後ろに控えている一葉さん、志乃さんも莉子に続いた。

莉子と一葉さんが立ち上がり、扇子を手に後ろを向いて静止した。すると志乃さんが弾いた三味線の音に合わせてふたりが振り返り踊り出す。やがて、弦の音に負けない志乃さんの唄声
が聞こえだした。

「町も野山も花ざかりー」

志乃さんは地方じかたさん。莉子と一葉さんは立方たちかたさん。三人の息
がぴつたりと合い、醸し出す空間に引き込まれそうになる。

志乃さんの予想外の声量で、身体の内側まで唄声が響いてく

る。莉子と一葉さんの扇子は宙を舞い、ふたりの着物によって目の前の景色が彩られていく。

舞依は目が離せなかった。初めて見る舞妓の舞台に、そして普段とは違う三人の表情に驚いていた。

志乃さんの唄声が座敷の中に溶けていくように終わると、莉子と一葉さんも静かに舞を終えた。見た者に余韻よいんを残していき、そんな終わり方だった。

「結構久しぶりやのに、できてるやん！　すごいすごい」一葉さんが莉子の頭をグリグリと撫でている。

そう。すごいんだ。みんなすっかり別人で、いつのまにかただの観客になってしまっていた。

横に居るみどりに視線を移すと、その目は莉子を睨んでいた。唇を噛んでいて、舞依は黙って視線を前に戻す。

女将さんは舞が始まる前と、姿勢がちつとも変わっていない。けれど、その表情は少し優しくなっているように見えた。



朝の陽射しは瓦屋根を掠^{かす}めているだけで、まだ宮川町の路地は薄暗い。莉子は小さな身体に不釣り合いな特大のブーツケースを引きずっている。

「もうぼちぼち行こうと思います」

スニーカーに白のロングスカートは、機内用に楽な格好を選んだのだろう。

あれから女将さんと話をしたのだろうか？ 結局何も莉子に訊けないまま、別れの時が来てしまった。

「気いつけてな」一葉さんの目は今にも閉じようとしている。

「わざわざ早起きしてもろてすいません」

「何言うてんの。見送るのが当たり前や」志乃さんは一葉さんと対照的に今にも泣きそうだ。

「ほんとにここまででいいの？」舞依が訊く。

「いいですよ。みなさん仕事ありますやろし」

「別にアタシたちなんて大したことしてないんだけどね。特に

コイツなんか」みどりが肩をつついてくるので、腕をつねってやっただ。

できれば空港まで見送りに行きたいけれど、そんなお金もなく、この菊屋の前でお別れになる。莉子の視線が置屋の後ろに移るのが分かった。

「これ、おばあちゃんに渡しておいてくれはりますか？」

莉子は背負っていたリュックから封筒を取り出した。舞依は黙ってそれを受け取る。表には「おばあちゃんへ」と記されていた。

「せっかくだから自分で渡しなよ」舞依はそう提案してみたけれど、「直接会おうと、また余計なこと言ってしまうそうです

し」と、やんわり拒否された。

「じゃあ行きますね。志乃さん、一葉さん、色々教えてくれて
おおきにありがとうございます」

うう、と唸うなっているのは一葉さんだった。その声はすぐに鳴お
咽えつに変わる。やがて豪快な号泣になっっていた。

志乃さんは静かに目元を拭っている。

「舞依ちゃんもみどりちゃんも。短い間やったけど一緒の部屋
でめっちゃ楽しかったです。なんか……姉妹きょうだいができたみたい
やったわ。京都に帰ってきたときは遊びにいいこな」

莉子の長い睫毛から滴しずくが落ちる。

「うん……」舞依はフエイントのような一葉さんの泣き顔を見

た時点でもうやられていた。涙は自然と溢あふれてきて、でも最後まで莉子の姿をしつかり見ていようと、目は伏せずに作務衣の袖で拭う。

「待ってるから。マイとふたりで」みどりはいつもと変わらな
いトーンで、まっすぐ莉子を見ている。最後まで涙を見せない
んだな。そう思っていたけど、みどりがぎゅっと自分の拳を握
りしめているのが見えた。

こつちを振り返りながら莉子は路地を歩いていく。角を曲
がって消えるまで、舞依は手を振り続けた。

「おかあさん、これ、莉子ちゃんから預かりました」

舞依は莉子を見送るとすぐに、女将さんの部屋に向かった。

「そこ置いといてくれたらええから」

女将さんはこちらを見ずに返事をした。

「良かったんですか？ 見送らなくて」

「私の顔なんて見とおないやろしな」

「そんなことないですよ！ 莉子ちゃんがそんなこと一言でも言ったことあるんですか？」どこまで頑固なんだと、思わず反論してしまう。

「……さっさと仕事に戻りなさい」

「すみません……。じゃあ、ここ置いておきますね」舞依はちやぶ台の上にそれを置き、部屋を後にした。

それから一時間くらいが経った頃、二階の物干し場で洗濯物を干していたところで、女将さんに声をかけられた。

「舞依、翠。あんたらの部屋にある、莉子が持ってきた箱あるやろ？ あれ、取ってきてくれんか？」

舞依はみどりと一緒に自分たちの部屋に戻った。どういこうとだろう。よく分からないけれど、とりあえず女将さんに言われた通り、木箱を持って女将さんの部屋に向かった。

女将さんは蓋を開けると着物と帯を取り出して、さらに木箱から何かを取り出した。莉子のものと同じように封筒だが、年季が入っているみたいで、茶色く変色している。

女将さんはその中から色あせた手紙を読み出した。誰が誰に

宛てた手紙なんだろう。舞依とみどりは黙って待つ。

「舞依。あんたの言うとおりやわ……」

女将さんは読み終わると、ぽつりと一言こぼした。舞依は何も答えられず、しばらく沈黙状態が続いた。何か考えているように、指で眉間みけんをつまんでいる。

ようやく動き出したと思ったら、壁際の棚から筆と紙を取り出して隅のちやぶ台で何かを書き出した。すぐに書き終えたみたいで、封筒にそれをしまおう。

「これ、今から莉子に渡しに行けるか？」

「え、今からですか？」

「そや」

「向こうに送ったらダメなんですか？」みどりがもつともなことを言う。

「ちよつとな。どうしても出発する前に言い残したことがあつてな」

「莉子ちゃんにとつても、大切なことなんですね？」

舞依が訊くと、女将さんは静かに肯定した。

だつたら見送りにくれば良かったのに。

でも、女将さんの気持ちに分からなくてもなかつた。もし自分が女将さんだつたら、たぶん見送りにはいかない。絶対的に強くいなければならぬ存在である女将。そんな立場の人間がもし泣いてしまつたら、それはどういう風に映ってしまうの

か。自信がなければ立ち会わないのが正解だ。

「行こ！ とにかく早く追いかけなきゃ！」

舞依はみどりの手を取り女将さんの部屋を出て行つた。

二度寝に入っていた一葉さんに悪いと思いつつも叩き起さず。舞依たちが頼れるのはもう、姉さん舞妓たちしかいない。不機嫌そうな一葉さんを宥めなだながら舞依は着付け部屋に誘導した。

昨日はここで莉子が変わっていく様子をみんなが集まって見ていたのに、今は誰も座っていない化粧台は、なんだか所在なげだ。

みどりも志乃さんと呼んできてくれていて、四人が集まっていた。

「これを莉子ちゃんに渡してこいって？」

舞依は一葉さんと志乃さんに女将さんに言われたことを説明した。一葉さんの手にはその封筒が握られていて、電球の明かりに透かして中身を見ようとしているが断念したようだ。

「電車ですぐ追っかけたらええやん。国際線やから多少余裕持って出てるやろし間に合うんちゃう？」一葉さんは舞依とみどりに向かって、ニヤリとした。的確なアドバイスをしたと思っているんだろう。満足げな顔をしている。

「いや、それはアタシたちも考えたんですけど、その……」み

どりは続きを言いにくそうにして、なかなか口を開かない。

「実はお金全然ないんです」舞依は告白した。

「なんで？ 全く？」志乃さんが訊いてきた。

「いや、あの……。買い物についてにちよつと甘い物食べてて。莉子ちゃんに美味しいお店紹介してもらってたんですよ。仕事サボってほんとにすいませんでした！」

ここは正直になるしかない。今は自分たちを守ることより、女将さんの依頼を優先すべきだ。莉子にとっても重要なこと。だつたら、自分たちは莉子のために行動すべきだ。

買い物途中にあるカフェ。そこから漂う甘い誘惑に舞依たちは勝てなかった。莉子が早く帰ってきた時、一緒に三人で

行ったこともある。あの時はすごく楽しかった。

「そんなこと気にしてたんかー」

一葉さんがバシバシと背中を叩いてくる。強くて痛い。

「ウチらもよくやってるやんな？ 志乃ちゃん？」

「まあ……。あんま大きな声では言えへんけど。おかあさんには勿論そんなこと黙つといてあげるさかい、今はあたしらのお金貸してあげるわ」

「ありがとうございます！」舞依はこれで空港まで行けると思った。みどりもホツとした様子だ。

「でも、たしか莉子ちゃんって『はるか』に乗るはずやんな？」

志乃さんはそう言うのと、作務衣のポケットからケータイを取り出した。親指が画面を素早くなぞっていく。華奢な指なのに大っきなケータイを操っていて、なんかかっこいい。「はるか」は京都駅から関西国際空港まで直通の特急列車だ。

「やっぱり……。特急やからちようどええ時間の電車がないわ。このままやと間に合いそうにないで」

「えー！　そうですか……」女将さんが何を莉子に渡したいのかわからないけれど、無理なものは無理だったと女将さんに伝えるしかない。一応関空まで向かってみるか。望みは薄そうだけれど。

「車はあかんかな？」一葉さんがいきなり割って入ってきた。

「車やったら一時間半で着くと思うけど……」志乃さんが不思議そうに答える。たしかに。どこに車があるんだ。車があったとしても、一葉さんって免許持ってるんだろうか。

「うしつ。じゃあ、ちよつとウチに任しといて」

一葉さんはジャージのポケットからケータイを取り出すと、耳にあてる。

「あ、おにいちゃん。おはようさん。寝てた？　——うんうん。寝過ぎはあかんでえ」

一葉さんだつて二度寝してたのに……。

「とりあえずあと五秒でうちに来てや！　車で！」

あまりにも当たり前のように男衆さんにお問い合わせするものだから

ら、これも仕事のうちなんだろうかと一瞬思ってしまった。

五秒はさすがに無理だったけど、男衆さんは五分で菊屋の前に来た。男衆さんが大きすぎて、水色の小型車がおもちゃみたいに見える。

「一葉さんはホンマ、いつも急すぎるで」

男衆さんは寝癖をつけたまま、開口一番こう言った。そりやそうだ。誰だって、急に来いなんて言われて不機嫌になるに決まっている。そもそも来てくれたのがすごいと思う。

「かんにんかんにん。おにいちゃんやかからお願いしてるんやんかあ」

一葉さんはサンダルをつっかけて、菊屋から出てきた。

「ほら。何ぼーっとしてんの？　舞依ちゃんみどりちゃん、早よ行くで」

さっそく一葉さんは助手席のドアに手をかけている。舞依とみどりも急いで後部座席に乗った。

「関空までって、どれくらいかかるのかな？」一葉さんが助手席から男衆さんに向かって話し出す。

「え？　関空？　いやー一時間半はかかると思うけど……」

「何言うてんのん。おにいちゃんやったら、一時間で行けるやろ？　運転上手のおにいちゃん見たいわー」一葉さんが上目遣いに男衆さんの横顔を見上げる。

「……当然や！」男衆さんの声と共に、車はあり得ない速度で

路地を走り出した。

後部座席には舞依とみどりと志乃さんが座っている。舞依はふたりのあいだから、フロントガラスの向こうで急速に移り変わっていく景色を見ていた。

朝の一般道は空いていて、京都東インターからの高速道路も渋滞に巻き込まれることもなくスムーズに進んでいた。飛ばしすぎで捕まらないか、ずっとヒヤヒヤは続いている。

「そこそこ！　そこガーツていけば抜けるで！」

一葉さんは高速を走っている他の車を見ながら男衆さんに指示を続けていた。そして、あの車は遅すぎるとか、大きすぎて

邪魔だとかヤジも多い。

後ろのみどりを気遣ってか、座席をあまり後ろに倒すことなく、男衆さんの身体は可愛そうな角度で折り曲がっている。よくそんな窮屈な体勢で器用に運転できるものだ。一葉さんの指し通りこなしていく男衆さんに感心してしまう。

「なんかあたしも流れでついてきてもうたけど……」
志乃さんはすっかり酔ってしまったようで、上を仰いでいる。

「そんなこと言わないでくださいよ。志乃さんが居なかったら、うまく仕切ってくれる人いなくなっちゃいますし」

舞依はまだ結ってある髪を見て答える。莉子の「割れしの

ぶ」とはちよつと違うように見えた。

「なんかドライブ楽しいなあ」一葉さんは出発してからずっとこんな調子だ。

自分が世界の中心だつて真剣に思つてそうだ。まあ、そんなところが魅力的に男衆さんには映つてそうだけど。

ほんとに一時間くらいしか経っていない。高速道路を挟む景色はいつの間にか青い海に変わっていた。奥にうつすら見えるのが関空みたいだ。

「あー、もうドライブ終わりかー」

なんでそんな早く着くんやー、と一葉さんはダダをこね、いきなり男衆さんの首を絞め出した。

「アホ！ 何やってんの！」すぐに志乃さんが止めに入ってくる。やっぱり志乃さんが居てくれて良かった……。

車は男衆さんに任せ、舞依たち四人は空港のエントランスに到着するとすぐ、国際線の方のカウンターに走り出した。一葉さんたちが舞妓の髪型をしているせいで、すれ違う人がみな、こちらに驚きの視線を向けてくる。

走りながら空港内の大きな時計が目に入った。九時十分。まだ出発まで時間はある。

国際線のカウンターに到着した。結構人が多くて莉子を探すのに時間がかかりそうに思えたけど、舞依はすぐに見つけることができた。身体がすっぽり隠れてしまいそうな巨大なスーツ

ケースの横に、眉間に皺を寄せた莉子がいた。

「莉子！」

舞依が呼ぶ声にすぐ反応して、莉子はこっちを見てきた。舞依たちに気づいたようで立ち上がると、「仲いいですねえ。みなさん」と目を細めた。

「ごめんな、せつかくええお別れしたのになあ」一葉さんが莉子に駆け寄る。

一人で行く初めての海外に、たぶん心細かったんだろう。莉子の顔はさっきまでの険しい顔と違い、優しくなっている。

「とにかく、これ」舞依は封筒を莉子の胸に押しつけ、女将さんから、と付け足した。

「おばあちゃんから？」

莉子は封を開け一枚の便せんを取り出した。そして、莉子はすぐその場にしゃがみ込み……泣き出した。

莉子の背中をさする。そして、その手に握られている便せんをそっと受け取って確認すると、莉子が泣いた理由が分かった。

便せんいっばいに、朱色のはなまるがそこに描かれていた。



莉子は照れくさそうに女将さんに渡した手紙の内容を話して

くれた。莉子の母親——菊菜さんが急に引退した理由は、女将さんが厳しくしすぎたからだと言った、今までずっとそう思っていたらしい。でも、それは間違いだったと莉子は言った。菊菜さんの着物が入っていた木箱に手紙が入っていたらしい。莉子はその手紙を読んで、菊菜さんの本当の思いを知った。厳しくしてくれたことに感謝していたこと、体調を崩したのは自分の管理不足で、全然恨んでいないことを。

莉子は、その菊菜さんが渡せなかった手紙のことを女将さんに伝えた。昨日の座敷の礼と一緒に。そして、莉子も女将さんに育ててもらって感謝していると。面と向かって話していればこんなところまで来ないで済んだのになと思ってしまう。

まあ、でもお互い思いは伝わったし、これで気持ちよく旅立ってくれそうだ。舞依たち四人は莉子がゲートの奥に消えるまで見送った。

——あれからもう二週間が経った。相変わらずみどりの動きは硬いし、はなまる師匠はおしゃべりだ。男衆さんは一葉さんに振り回されっぱなしだし、志乃さんはそんな一葉さんの世話役になってしまっている。

舞依はいつもどおり朝ご飯を食堂に並べていた。全員が揃い、女将さんの声で合掌する。一見女将さんは何も変わりはないさそうだけど、一つ空いている椅子を片付けないことに舞依はしつかり気づいていた。邪魔なものをはきちんと片付けるよう

に。女将さんは指導する時、いつもそう言っているのに。

ガラガラと玄関の戸が開かれる音がした。誰だろう。男衆さんだろうか。

「ちよつと見てきますね」舞依は箸を置き、食堂を出る。

廊下を進んで玄関に立っている人物を見ると、思わず大声を上げてしまった。すぐにみんなが駆け寄ってくる。

「今日からまたここに置いてもらえますやるか……」

莉子の視線は舞依を通りすぎ、後ろの女将さんに向かっていた。

「どうい^{りょうけん}う了見や？」

「舞妓になるために修業させてほしいんです、おばあちゃん」

「……修業中はおかあさんって呼びって言ったやろ」

それだけ言い残すと、女将さんは廊下の奥に帰っていった。

「すごいね！ よく言ったよ」舞依は裸足のまま三和土^{たたき}へ降り、莉子の手を取った。

ふーっと一息ついて莉子は、「まだ言えてなかったことありました」と言い、「うちはお母さんみたいに花街で一番の舞妓になります！」と宣言した。

「あー、それわたしも密かに思ってたのにー」舞依が言い返す。

「何言ってるの？ 一番はアタシだよ」みどりが舞依の頭を小突く。

「あんたら、あたしらのこと忘れてへんか？」志乃さんが少しお怒りだった。

「みんな一番や、一番。そんでウチがオンリーワンや」一葉さんは一段上がった廊下から莉子の頭を撫で撫でしていた。

「ズルイです！ それ！」莉子が叫ぶ。ふてくされた莉子がなんだかおかしくて、みんな笑っていた。

(みツわの 第二景／おわり)

サムライ・ゲイム

OF THE GENUS ASPHALT



著=てん
illustration=De

第二話 ボーイ・ミーツ・ボーイ

いつまでも全力少年。

BOX-AiR新人賞2012年の第一号は
すこし不思議なハイウェイ・アクション!

秘

第十一回BOX-AiR新人賞受賞作選評

『サリー & マグナム
OF THE GENUS ASPHALT』

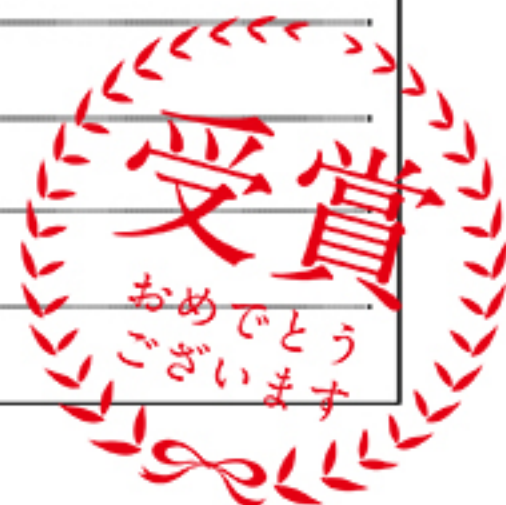
てり

・ 導入が面白く、そこで出会う相手の描写・設定もとてもよかった。文章も実にテンポがよく、楽しく読まされた。

・ 一方、主題がどこにあるのかがわかりづらく、想定読者が浮かばなかった。

・ 自分はこれを書きたいのだ、という強い思い入れを作品に反映できればぐっと奥行のあるものになると感じた。

・ 主人公の年齢・職業などが新鮮な設定。最終話までそれを活かしたものになるとよい。



てり——Teri

1967年生まれ。受賞をサッカーに例えると、敗色濃厚の前半45分（歳）、起死回生の弾丸シュートをゴールに突き刺した感じ！

De——De

福岡県在住のイラストレーター。「De」と書いて「で」と読みます。

「De'2」 <http://denim2.web.fc2.com/>

プロローグ

「あ、マグ？　急な話で悪いんだけどさー、明日、空いてるー？　加湿モジュールの取り付けの現場で、どうしても人手が足りなくなっちゃってさー。そうそう、去年も行ってもらった桜木町の駅前のー。どう？　二万出すから助けてよー」

悪くねえ内容の電話だった。暖房シーズン前の定期点検と並行して、ビルの各階に二台ずつある空調設備の内部に、人の背^せ

丈^{たけ}ほどもある洗淨済みの加湿モジュールを順序よく取り付けていく仕事だ。俺ならワンフロアをほぼ三十分でやつつけられるから、九階建てのあのビルなら、朝九時から作業を始めて午後三時には撤収できる。近くにいい店がなく、昼飯がコンビニになっちゃうのが唯一の難点だが、現金で日当をもらって、その分、夕飯をゴージャスにすればいい。大体、空調設備メンテナンスの師匠であるトシさんの頼みじゃあ、無下に断るわけにもいかねえしな。

「現場直行でいいかい？」

「えー、一度会社に寄りなよー。モジュールの積み込みもあるし、みんな会いたがつてるぜー」

ガラにもなく、真つ当な会社員として二十代の前半を捧げた中規模の空調会社だったが、ここ半年ほどは、すっかりご無沙汰していた。このタイミングで馴染みの職人たちに会おうもんなら、結局、大人数で夜に飲むことになる。せつかくの二万が『あっ』と言う間に吹っ飛んじまうのは、火を見るより明らかだ。飲んで大騒ぎしたいのはやまやまだったが、割のいい仕事を最低限こなし、のんびり暮らす贅沢ぜいたくを知っちゃまった今となつては、泥酔でいすいして一人暮らしのマンションに帰ることの面倒くささが先に立つ。

「桜木町なら、今から横浜の女の家に行つて泊まっちゃまうんで」

俺は適当な嘘をついて、その仕事を現場直行の条件で引き受けることにした。

「マグも、来週でいよいよ三十かよー。俺も年をとるわけだよなー」

翌朝、現場ビルの地下にある防災センターの前で、鉄色のツナギ姿の俺が自分の名前と生年月日を書き込んだばかりの作業員名簿を手渡すと、内容を確認した白髪頭しらがのトシさんがやけに嬉しそうに笑った。作業員はトシさんと俺、それに若いアルバイト君の三人だった。もつともトシさんは、作業報告書を作るための写真撮影が主な仕事で、実際に設置作業に携わるのは、

俺と若いアルバイト君の二人だけだ。背丈は普通だが、ガツチリとした職人体型の逞たくましいトシさんと、そのトシさんよりさらに太い腕を誇る身長百八十五センチの俺に比べると、作業助手を務める若いアルバイト君はかわいそうなくらいに貧弱で、初対面の俺に露骨ろこつにビビっていた。

「俺じゃあ入れねえ狭い場所もあるから、その時は頼んだぜ」
ちよつと小突けば簡単に折れちまいそうなその細い肩を、ポンポン、と軽く叩いて俺なりにリラックスさせてやる。どんなヤツにも、必ず適性ってえモンがあるんだ。現場仕事だからって、ただ体がデカけりゃあいいってえもんじゃあねえ。

俺は若いアルバイト君にバケツ状の工具バッグを持たせる

と、加湿モジュール二台をかかえて業務用エレベーターに乗り込み、まずは最上階の空調機械室へと向かった。

作業は順調に進み、昼休みまでに全工程の半分強にあたる五フロアが消化できた。やっぱり三時までには撤収できそうだ。

「こいつのアソコ、デカくてさー。マグナムみたいだからマダ」

昼飯は、ビルの地下駐車場に止めたワンボックスカーの中で、ということになった。会社の倉庫から加湿モジュールを積んできた車だ。運転席でのり弁にパクつくトシさんが、助手席に座った若いアルバイト君に、ホンツトにどうでもいい話をし

てニヤニヤしている。今日は珍しく一人も喫煙者がいねえから快適だ。

「マグのマグナムをデジカメラで撮ろうとしたら、フレームに納まり切らないんだぜー」

いくらナンでも、それはウソだ……。

で、リアシートに堂々と陣取った俺はと言えば、『おかず』のカップラーメンから突然出て来た小せえ人魚のソバージュ頭を、まさにつまんで持ち上げたところだった。ナルト模様のブラが笑わせる。

「やめて！ 食べないで！」

ナニをどう勘違いしたんだか、人魚——カップラーメンのバ

グ——は、そう泣き叫びやがった。

おいおい、麺と一緒に食っちゃまわねえように、わざわざつまみ出してやったんだぜ。最近は何の優しさあってえヤツが分からねえ女が多くて、ホント、困っちゃまうよ。

「んー？ カップラーメンに何か入ってたのかー？」

バックミラー越しに、やたらと目ざといトシさんが訝いぶかしげな表情を見せる。

「ああ、俺の髪の毛」

この世は決して完全じゃあねえ。完全じゃあねえから様々な不具合がある。精霊、幽霊、妖精、妖怪、モンスター。自然物であったり、元は実体があったりと、ナニから発生するかの違

いによつて呼び名は様々だが、一切合切をひつくるめて魑魅魍ちみもうの類りょうたぐいの全てがそれだ。俺はヤツらをひとくく一括りにバグと呼んでい
る。

俺は生まれた時からバグたちが見え、その声を聞き、その体
に触ることができた。そして実に幸いなことに、俺は自分に見
えているバグたちが、両親や他の人間には見えていねえことを
かなり早い段階で直感的に理解し、必要に応じてナニも見えて
いねえフリをすることすらできた。もしその小賢こざかしさが幼少の
時分の俺になく、両親が見えねえと言うモノを、見える見える
と意地を張り通す真っ直ぐなガキだったとしたら、俺は今頃一
体どうなっちまっていたのかと思うと、正直ゾツとする。ま

あ、どんな相手にでも長所を見つけて、即座に受け入れちまえる節操のなさつてえいうのも、硬派が売りの体育会系男子としては少々考えモノなんだがな。

——来るモノは拒こばまず、去るモノは追わず。

俺はトシさんの視線を意識しながら、手についた髪の毛を振り払うフリをして、人魚を車のシートシートの座面にそつと降ろした。カップラーメンを豪快に一気食いし、スープだけを残して、容器を人魚の隣に置いてやる。ナルトブラのソバージュ人魚は、俺に可愛くアツカンベーをしてみせると、器用にスープの中に飛び込んで、あつさりとどこかに姿を消した。

第一話 ボーイ・ミーツ・ボーイ

そんなわけで、俺はガキの頃からいろんなモノが見えたから、ヤツがナニもねえアスファルトから、ドウルン、と立ち上がったのを見ても、別段驚きはしなかった。

ほう、こいつは珍しく完全な人間の形をしている。長身瘦そうく躯だが、体は適度に筋肉質で、決して薄っぺらくはなかった。黒髪をきれいにオールバックにし、黒のタンクトップに黒の革かわパンツと、コーディネートにも統一感があって悪くねえ。まさに水も滴したたるいいバグだ。

新青梅街道沿いの大きな墓地の駐車場だった。ススキが月夜

に揺れている。俺は自販機の横に置いてあったボロいベンチに座ってアイスココアを飲んでいた。

世界で一番美しいバイクであるカブのタンクに残っていた古いガソリンを使い切りたくて、気持ちのいい秋風の中を時速六十五キロで飛ばしていたら、急にエンジンブレーキがよくかかるようになり、案の定、ガス欠で、ホンダが世界に誇るタフネスエンジン様が、急に止まりやがったんだ。もつとも、エンジンが止まること自体は、当初の目的から想定の内だったわけだが、よりにもよって、ガソリンスタンドが近くに全くねえような場所で止まっちゃまうとは思ひもしなかつたのさ。

『おまえは人一倍体力に自信があつて、いつも出たところ勝負で

何とかなるさと無意識に思っているから計画性がないんだ』

高校二年の頃、担任の先生から言われた言葉が、時を越えて胸に刺さる。

磨き^{みが}上げられたカブのスポークが、白い街灯に、キラリ、と眩^{まぶ}しく光っていた。地べたから湧き出て来たイケメン野郎は、ゆっくりと俺に近づいてきて、ベンチの隣にそっと腰を下ろした。

おいおい、ナンだよ、名案でも思いついたみてえな、そのキラキラとした表情は？

自分で言うのも変だが、バグが見える人間である俺のことは、バグの世界じゃあかなり有名だ。その上、もう目まで合っ

ちまっていたから遅いかもしれねえが、露骨にイヤな予感がしたので、俺はごく普通の人間のようにヤツが見えていねえふりをする。

「んもう、見えてるクセにいーん♥」

うえっ、よりにもよって、そう来たか！

雌雄しゆうがはつきりしねえバグは確かに多いが、見た目が男で中身は女、てえパターンは激レアだ。それでも無理してシカトを決め込んでいたら、そつちがその気ならこつちにもこの手があるわヨと言わんばかりに、あからさまにキスしようとして来やがった。

こ、こいつ、舌を入れる気満々じゃあねえか！ 俺は慌てて

立ち上がる。

「初めて会った相手に、唇を安売りするんじゃないやあねえっ！」

たとえ容姿が細マッチョのイケメンであろうとも、中身が女である以上、あくまでレディとして扱ってやることにする。好戦的なバグたちと素早くコミュニケーションをとるためには、見た目の印象に惑わされず、正確に本質を見抜いて、その本質と真正面から向き合ってやることがナニよりも大切だ。

「いやあーん、ダーリン、素敵いーん。ねえん、いつになったらチューしていいのん？　いつになったらチューしていいのん？」

俺の返しのセリフがよっぽどツボだったのか、イケメン……

おかま野郎が俺の左腕に大げさに抱きついてきた。こいつ、身長百八十五センチの俺より、さらにデカイ。

「ちよつと待て！　俺は確かに素敵だが、おまえのダーリンじゃあねえっ！」

「だって、こんな場所でこんな時間に二人は出会ってしまったのヨ。これが運命じゃナイんなら、一体ナニが運命だっていうのん？」

「出会ってしまったとか、意味が分かんねえよっ！」

今夜こそはいい夢を見たかったんだが、そうは簡単にいかねえようだ……。

俺は、ここ二日ほど、黒マントを羽織はつたお同年代のロン毛の

おっさんに背後から無理やり犯されるといふ、かなりキツイ
悪夢にうなされていた。そんな身の毛もよだつ悪夢を続けて見
ちまうのは、どうやら俺のマンションの建っている場所と寝て
いる時間に原因があるような気がしたんだが、俺はアホだか
ら、家にいるときずっとまた普通に寝ちまうので、夕飯を食いに
外出しがてら、三カ月ぶりに愛車のカブにまたが跨ることにしたっ
てえわけだ。

たった四回のキットで元気に再始動した小さなエンジンに気
をよくし、夜中の洗車場でボディをピカピカになるまで丁寧に
洗ってやって、さっそう颯爽と新青梅街道に繰り出したところまではよ
かったんだが……。

「ギーツ！」

ナニかと思えば、今度は巨大なセミの幼虫だった。俺の左腕にブラ下がるおかま野郎よりも二回り以上デカイ、体長二メートルほどの茶色いセミの幼虫が、前脚をカマキリみてえに振り回しながら、二本の太い後ろ脚で立ち上がって器用にこっちに走って来る。どうやら残りの中脚二本は、二足歩行時のバランス用に使われているようだった。たとえ駐車場であろうとも、やっぱり夜の墓地なんて、絶対に来るもんじゃあねえ。

「なんだ、ありやー!？」

「セミー」

不幸の元凶が耳元でケタケタと笑う。

さてはこいつ、あのセミの幼虫の化け物から逃げている途中で俺を見かけて、この俺を時間稼ぎに利用しようと考えやがったな！ 戦わずに逃げているってえことは、こいつなりにナニかやましいことでもあるんだらう。

と思った瞬間、おかま野郎は現れた時と同じように前触れもなく、ドウルン、と足元のアスファルトの中に溶けるように消えやがった。さ、最悪だ……。

「ンギーッ！」

ワン！ 名刺代わりの強烈な右ストレートが俺の頬を掠めかすた。

「ちよつと待て、俺はあの黒タンクトップ野郎じゃあ

ねえっ！」

「でも、あいつと一緒にいたっ！」

言葉が通じた！ こいつ、思ったより上級のバグだ！

「だから待てっつて！ 一体あいつとナニがあつたんだ!？」

ツー！ 俺は巨大なセミの幼虫の左フツクをのけぞってかわしながら、ナンとかこの場を切り抜けられるうまい方法を必死に探す。激情にかられて、この手のヤツと一度でも戦っちまうと、ずっと付きまとわれる羽目になる。こいつらとききたら、自分たちのことが見えねえ人間には触れず透過しちまうことを逆手にとつて、人混みの中で急襲を仕掛けてくるから始末に負えねえ。俺はと言えば、繰り出される攻撃をほとんど避けられ

ず、化け物に一方的にタコ殴りされたうえに、周りの人間を次々となぎ倒して、最後は警察のお世話になるってえ寸法だ。おかげで俺は、スポーツ推薦で大学に上がることができなかつたんだ。大学サッカーで活躍できれば、今頃はＪリーガーになっていたかもしれねえっていうのに、理不尽なこと、この上ねえ。

「あいつ、アスファルトの精！ オレ、あいつのせいで地上に上がれなかった。あいつ、憎い！」
なるほど！

こいつは見た目通り、セミの幼虫の怨念が凝り固ま^こって、この世に生じたモノってえわけだ。ふーん、実際、アスファルト

のせいで地上に上がれなかったセミの幼虫って、どれくらいいるもんなんだろう。確かに何年も土の中にいれば、それだけ地上の状態が激変している可能性は高いわけだから、いくら逃れられねえ宿命とはいえ、確かにかわいそうな気もする。だが、そういうことなら答えは簡単だった。

「アホか！ おまえ、今、実際に地上に上がってるじゃあねえか！」

「ギ？」

スリー！ 間に合わなかった。死角から放たれたヤツの右中脚が、俺の鳩尾みぞおちにモノの見事にメリ込む。たまらず俺は体を

『く』の字に曲げて、駐車場にくずおれた。澄すみ切った秋の夜

空に、星々が美しく瞬またたいでいた。いいパンチだった。

「あうっ、ゴメン、人間。おまえ、正しい。おまえ、いいやつ。オレ、いいやつ殴った。大丈夫か、大丈夫か、人間」
「き、気にするな、セミ。いつか機会があつたら、俺のことを助けてくれればいいさ。そ、それより、気持ち晴れてよかつたな」

息も絶え絶えにそう伝えてやると、巨大なセミの幼虫の茶色い体は、砂浜で作った像みてえにサラサラと夜風に流れ始めた。その微小な粒子の一粒一粒が、地上に上がれなかった幼虫一匹一匹の、小さな小さな魂そのものなのかもしれない。

「あうっ、オレ、おまえのことは絶対に忘れない」

そう言い残して、セミの幼虫の化け物は、あつさりと虚空こくうに姿を消した。隣接する新青梅街道を、大きなトラックが爆音をたてて通り過ぎて行く。この世の全ての揉もめ事が、こんな風に簡単に解決するといいんだがな。

ようやく呼吸が落ち着いてくると、俺は駐車場から体を起こし、そのまま地べたにあぐらをかいた。ナニか小さなモノが、ネズミのように俺に向かって近寄ってくる。それは飲みかけの、アイスココアの缶だった。缶は俺の目の前で止まり、澱よどみのねえ動きで三十センチほど上昇した。その缶の下に、上目遣うわめづかいで俺のことをじつと見つめる、おかま野郎の端正な顔があった。アスファルトのバグであるらしいこいつは、頭の上にアイ

スココアの缶を載せて、アスファルトの中を俺の前まで移動して来たってえわけだ。

「ダーリン、ありがとう。実のところ、夏の終わり頃からずつとあいつに付きまといわれて、チヨット困ってたのヨ」

俺はナニも言わず、地べたから生えたおかま野郎の頭の上から缶を右手で取ると、残りのアイスココアを一気に飲み干した。うめえ、こいつは生き返るぜ。

「……つまり、もう俺には用がねえってことだよな。じゃあ、さっさと新宿二丁目へ帰れ、卑怯者。俺はガソリンスタンドに行かなきゃあならん」

空き缶をオールバックの頭の上に丁寧に戻す。ちよつとおも

しろかった。

「いやあん。あたし、カッコいいダーリンと一緒にいたいーん」

「俺はいたくねえ……。いや、待てよ。おまえ……。アスファルトの中ならどこにでも移動できるのか？」

「うん、最高速度マツハ三。東京から福岡までの自己最高記録、十八分十八秒」

「福岡まで十八分十八秒だと!? そりゃあ、すげえ! スクランブル発進した戦闘機みてえだな。じゃあ、そのアイスココアの缶みてえに、アスファルトの上にあるモノを、ナンでも自由に動かすこともできるのか？」

「できるワよ。あんまり重いと持ち上げらんナイけど、アスファルトの上を水平に滑^{すべ}らせるように動かすだけなら、チヨウ簡単だワ」

次の瞬間、俺はガス欠のカブに颯爽と跨っていた。アイスコアの空き缶を乗せた頭だけを地上に出して、きよとんとしている美しい顔へ、サイドスタンドを跳ね上げながら、嬉々として叫ぶ。

「よう、アスファルトの彼女！　俺をこのカブごと、ガソリンスタンドまで運んでくれ。それでさっきの貸しはチャラにしてやる！」

厄介^{やっかい}払いするために一度はおかま呼ばわりしかけたが、やっ

ぱり表向きはレディとして扱ってやることにした俺のジエントルな低音に、逆にこつちがドキツとするような屈託のねえあで艶やかな笑顔でヤツが応えた。

「ワオ。その話、乗ったワ！ サリーよ、ダーリン。あたし、サリーっていうの！ タイヤが回っちゃうと下から押さえてらんナイから、バイクのブレーキは、しっかりかけててヨ！」

おかま野郎……のサリーが、海に潜るイルカのように、アスファルトの地べたから、ドウルン、と再び地中に姿を消した。

カラン、と小気味のいい音をたてて、異形のしよくだい燭台を唐突に失ったアイスココアの缶が、月夜の駐車場に寂しく転がる。と思つたら、ブレーキをかけているはずのカブが、俺を乗せたまま

ゆっくりと動き出し、音もなく墓地の駐車場の出口を出て、歩道を横切るような形で一旦停車した。そう、それはまるで、ジェットコースターの最初の上り勾配をドキドキしながら登って行く、あの時みてえな心境だった。俺は息を大きく吸い込みながら、お気に入りの黒ヘルメットのあごひも顎紐を、カチン、と締める。深夜だけに、片側二車線、合計四車線の新青梅街道は、右からも左からも車は来ていねえ。

「ゴー！」

途端に反対車線まで鋭く飛び出すと、カブは車体を垂直に保ったまま、一気にケツを左に振って進行方向を右にとり、マシンホールをきれいなよけながら豪快に加速した。それはホント

に夢のような体験だった。俺は慌てて左足をステップに乗せ、ハンドルに必死にしがみついで、無様なくらいに極端な前傾姿勢をとった。容赦なくヘルメットのシールドにブチ当たる凄まじい風圧と、耳をつんざく強烈なまでの風切り音の中、互い違いに並んだ街灯と街路樹が次々と後方に流れて行く。

時速百五十キロは出てる！ と、思った瞬間、今度は急減速しながらケツを右に振り、俺の青い愛車は慣性の法則などおかまいなしに、お目当てのセルフ式のガソリンスタンドを正面にして、ピタツ、と鮮やかに停止した。ガス欠のこいつを押して歩けば、確実に一時間はかかったであろう数キロが、文字通り『あっ』という間だった。

カブが赤レンガの敷き詰められたカラフルな歩道の手前で止まったところを見ると、サリーはアスファルト舗装の中だけしか移動できねえらしい。

「おまえ、最高！」

俺は足元に向かって右手の親指を立て、カブを押しして無人のガソリンスタンドに入った。だが、人工的に美しく押し固められた幾何学模様の冷てえ地面からは、期待した答えはナニもなかった。

まあ、いいさ、これで貸し借りはナシだ。もう二度と会うこともねえだろうしな。

「ねえん、ダーリン。あたし、黒マントでロン毛のおっさん
に、後ろから犯される夢見ちやっただあーん」

耳元で、ありえねえ声がある。俺はひどく寝ぼけた頭で、状
況を正確に把握しようと思った。昨晚、ガソリンスタンドで給
油した後、そのままカブで自走して自宅に戻り、ジーンズと靴
下だけは脱いでベッドに倒れ込んだところまでは、はつきりと
覚えている。馴染み深い感触を頬に絶え間なく伝えているこの
ブランケットは……、クンクン。やっぱ間違いねえ、愛すべ
き俺の寢床の匂いだ。

背後に誰かさんの忌まわしい存在を強く感じながら、恐る恐
る薄目を開けてみると、ガラッ、としたフローリングの床の上

に、お気に入りの古いちゃぶ台がいつものように鎮座しているのが見えた。だが、そのちゃぶ台の上に、ナニか見慣れねえモノが載っかっている。暗灰色あんかいしよくの野球のボールのような……、ああ、あれは丸いアスファルトの塊だ。

アスファルトの中に潜れるサリーと、丸いアスファルトの塊……。ふと俺の脳裏に、一つのイメージが鮮やかに浮かび上がる。

薄闇の中、窓の外側に取り付けられたアルミ格子の隙間から、レースのカーテンをよけて室内に差し込まれる細長い左腕。その拳には、ボール状のアスファルトの塊が握られている。と思うや否いなや、長身の人影が、ドウルン、とタール状に

なつてその塊に吸い込まれ、同時に今度は、ドウルン、と室内側に姿を現して、虚空で引力に負けかけたアスファルトのボールを、再び左手で難なくキャッチすると、足元にあつた古いちやぶ台の上にそつと置いた……。アスファルトの塊を利用して細い隙間を通り抜ける、サリーならではの瞬間移動だ。

「てめえ、俺をこつそり尾行して、警戒されずにこの家に忍び込むために、わざとガソリンスタンドで姿を消したふりをしやがつたな！」

俺はブランケットにくるまりながら、背後の温ぬくもりに向かつて毒を吐く。もしもこのまま振り返るうものなら、憎つたらしい端正な顔がすぐそこにあることは簡単に予想できた。

「あの玉を一目見ただけで、あたしがこのおうちに入った方法が分かっちゃうなんて、ああーん、ダーリン、やっぱり素敵いーん。もうこの脳みそ、食べちゃいたいくらいだワ。あの玉はねえん、ダーリン。あたしの手が届く範囲でしか使えナイのが玉にキズなんだけど、いろいろ『できる』玉だから、キャン玉って言うのヨ」

玉、玉、玉って、こいつ、寝起きから、なんて下品なんだ。せめて頭に『お』ぐらいつけろよ、おかま野郎。キャン玉じゃあねえ、強いて言うなら、おキャン玉だ！

と、同時に、俺は跳ね起きていた。入り口は窓だ、窓、窓。
長袖のTシャツに、ながそで体にぴったりフィットしたボクサーブリー

フ、という無防備ないでたちで、共用廊下側の窓に走り寄る。俺の家はマンションの四階にあった。レースのカーテンの隙間から、どんよりと曇った低い空が見えている。時刻は午前十一時半、といったところだろう。

「いやあーん♥♥♥」

ベッドから、語尾に大量のハートマークが貼りついた、切ねえほど甘い声がした。プリツとした俺の自慢のケツに突き刺さる、異形の視線が痛い。

「サリー、おまえが見たっていう黒マントでロン毛のおっさんに後ろから犯される夢な、実を言うと俺も昨日と一昨日の夜に続けて見たんだよ」

俺よりデカくて細いサリーが、俺の太い首にブラ下がるように抱きついてきた。

ちっ！　どうも見た目の綺麗なヤツらは、第一印象で嫌われた経験がねえせいかな、こっちの気持ちにお構いなしに、初めからびっくりするほど馴れ馴れしくて頭にくる。目が合っただけで子供には泣かれ、犬には吠えられ、警察官には職務質問されるこの俺の身になってみる！

「あれはねえん、ダーリン。誰かのSOSよん。だから裏鬼門きもんの方角にいる一番強い相手に届くのん」

「マジかよ！」

「マジマジ。それで自然と強いモン同士がぶつかり合うことに

なるのヨ」

「……そうか、眠りにつく時間は関係なかったのか。偶然とはいえ、今日は俺の代わりにおまえが見てくれたってえわけだな、あの悪夢を……。なあ、サリー。この窓は北東、つまりまさに鬼門に向いているんだ。こっちの方角に、ナニかおかしなモノはねえか？」

サリーが、カーテンも開けずに、そつと目を細める気配がした。

「黒い……教会があるワ。初めっから黒かったワケじゃなくつて、その教会を手に入れた人が、わざわざあとから真つ黒に塗った感じ……。品が悪いのヨ、とつても禍々まがまがしい雰囲気だ

ワ。距離は……、昨日のガソリンスタンドと同じくらいじゃナイかしらん」

腹が減っていた。まだ誕生日前に桜木町のトシさんの現場で稼いだ日当が、ジーンズのポケットにそこそこ残っているはずだ。SOSと聞いて、じつとしていられる俺じゃあなかつた。もしもの時は、それこそ昨日のお返しにサリーを置いて逃げ出すまでだ。途中のステーキ屋で、一日二十食限定のスペシャルランチを食って、その黒い教会とやらに偵察に行ってみるとするか。

「よし、サリー。ちよつくらデートと洒落込しゃれもうぜ」

「あーん、ダーリン。あたし、もうその言葉だけでイツちや

いそう」

ぐえっ、一瞬でも感謝して損したぜ。勝手に地獄へでもどこへでもイツちまえ、このお下品野郎！

金木犀きんもくせいの可憐な香りすらドブ色に穢けがしかねえ、ひどく薄気味の悪い教会だった。正門には太いチェーンが巻かれ、窓という窓が、屋根や壁と同じ漆黒しつこくに塗り潰ぬされたブ厚い板で塞ふさがれている。そう、まるで巨大な……棺桶だ。調べてみるだけの価値はある。

やけに空が薄暗かった。全身に鳥肌とりはだが浮き立つほどの寒さの中、別の住所を探しているふりをしながら、左腕にブラ下がっ

た長身のサリーと近所を一周し、再び黒教会の裏手へと戻る。

「ボスは……、どうやらご不在みてえだな」

「うん、灰汁あくの強いオーラは感じナイ」

俺は周囲を用心深く見回して、腰に吊り下げた巾着きんちやく袋状のチョークバッグの中から、持って来たおキヤン玉を右手で取り出すと、頭よりもやや高いところにある黒教会の黒塀の上に、そつと置いた。途端に、ドウルン、とサリーが、その野球のボール状のアスファルトの塊に吸い込まれ、ほぼ同時に、ドウルン、と塀を越えて、教会の敷地内へ忍び込んで行く気配がする。

ほどなく黒塀の内側から小さな通用門の鍵が開き、サリーの

細長い手に手招きされて、俺も黒教会の敷地の中へと、静かに足を踏み入れた。庭らしい庭はなく、どうやら長方形の建物の周りをグルリと細い通路が取り巻いて、そのすぐ外に高い塀、といったシンプルな設計のようだ。通用門をくぐってすぐのところにある勝手口には、ご丁寧に頑丈な目張りがんじょうがされており、黒教会そのものへの出入り口となるのは、建物の正面側にある観音開きの大きな鉄の扉だけだった。扉は上部が半円状になっていて、縦に長い蒲鉾かまぼこの形をしていた。ダメ元で、その真っ黒の扉に左肩を当て、力を入れて内側にグツと押ししてみる。

開いた！

決して無用心なわけじゃあねえだろう。しつかりと施錠され

た門や高い塀を乗り越えて、こんな薄気味の悪い教会に、わざわざ侵入を試みようとする物好きな輩やからは、いくら世間広しといえども、俺たちくらいしかいねえはずだからだ。

ガランとしたホールに、地下へと続く小さな階段だけがあった。扉を閉めると、全身に圧力さえ感じる底深い闇に包まれた。極端に夜目がきくこの俺でさえ、目が慣れるまでに数秒はかかる絶望的な闇だった。足音を忍ばせ、両手で左右の壁を探りながら、ゆつくりと階段を降り、地下室の扉を開ける。

「ゲロゲロ」

後ろからサリーが慎ましく遺憾いかんの意を表明し、やがて俺にも全裸きやしやの華奢な少年が見えてくる。

ビンゴ！

そいつはビリヤード台のようなごついテーブルの上にも、うつ伏せに寝かされていた。両手両足を大の字に開かされ、尻はモロに入り口側に向いていて、闇の中に小さな肛門こうもんが見えていた。年の頃は十三、四歳、といったところだろうか。明らかに肌が透けている。間違いねえ、このコは幽体だ。黒マントで口ン毛のおっさんに背後から無理やり犯されるといふあの悪夢が、誰かのSOSだというのなら……、哀れなことに、それはこの囚われの少年幽霊の毎夜の苦痛の念に端を発したモノにちがいがなかった。挿入から射精の瞬間まで、行為の一部始終が透けて見えるはずだから、その手のマニアにはたまらねえ相手な

んだらう。

ふいに俺の脳裏に、家の形を模した、紙製の粘着式のゴキブリの罫のイメージがよぎる。本能が瞬間的に危険信号を発していた。生きとし生けるモノの様々な欲望に呼応して、この世に生じちまうバグたちは、互いに惹き付け合い、容赦なく喰らい合う。

「やべえ！ 逃げるぞ、サリー！」

だが、そう叫びながら素早く振り向いた俺の視界に飛び込んできたモノは、地下室の扉の内側に大の字に張り付けられたサリーの姿だった。

ナニかがサリーの全身に絡みついている。慌てて引き剥がそ

うとしたが、現場で鍛えたゴツい指先に、全身の力を込めてもビクともしなかつた。それは……、長い髪の毛だつた。何十本、いや、いつの間にか何百本もの黒く長い髪の毛が、サリーのモデル体形の長身を扉に縫い付けていた。

闇の中でなら、名前を呼んだり、目を見るだけで相手を殺せるといふ伝説のモンスターを俺は知っている。そうか、からくりは闇に紛れるこの髪の毛か……。待てよ、その推測が間違つていねえとするならば、俺とサリーがこの禍々しい黒教会を生き返らされる可能性は、迂闊に敷地内に足を踏み入れちまつた時点で、万に一つも残つていねえつてことじゃあねえか！

呆然と立ち尽くす俺の背後に、凄まじいほど邪悪なオーラ

が、強大な山脈のように一気に聳え立そびった。死を思わせる深い深い無我の眠りの底から、一瞬にして難なく完全に覚醒してみせたその圧倒的な迫力に、俺の体の毛穴という毛穴からドツと冷や汗が吹き出す。

マジでやべえ、やば過ぎるぜ。いくら夢の中のこととは言え、黒マントにロン毛という組み合わせで、とつくに気がついておくべきだったんだ。

俺の肩越しにその実像を捉えたサリーの瞳が、大きく見開かれる。俺は……、振り返らせてさえもらえなかった。サリーに抱き付くような形で、ナニモノかの力によって、強引に扉側に引き寄せられちまったからだ。例の長い髪の毛の群れに纏まとわり

付かれたことだけは間違いなかつたが、髪の毛一本一本の力に引っ張られた、と言うよりは、髪の毛どもが主の念動力を受信して形作つた、目には見えねえ均質なエネルギーの網かナニかに捕らえられた感じだつた。恐らくあの少年幽霊も、同じ要領で寝台に押さえ付けられているんだらう。まるで深海の底に、力ずくで沈められたみてえな強烈な圧力だ。

「ほーう。人間でありながら、私を実体として知覚できるとは、素晴らしい感性をしている。どうやらこんな飾り気のない小さな別荘にも拘かかわらず、一千万人、いや、一億人に一人いるかどうかの珍しいお客様にご訪問頂けた、というわけだな」

予想に反してその声は、俺の右肩のすぐ後ろから聞こえた。

ちようどサリールの顔の真正面あたりだ。暗黒の闇全体に強大なオーラが均一に溶け込んで、ヤツの正確な立ち位置が全く分かっていなかった。それでも俺の憎まれ口は辛うじて塞ふさがれていなかったから、俺はささやかな抵抗を試みる。

「こりゃあ、ひでえ抜け毛の量だな。じきにハゲるぜ、吸血鬼のおっさんよう」

狼男と双壁を成す伝説のモンスター、吸血鬼。日本にも何体かいるらしいことはバグたちから聞いていたが、まさか家の近所で本当に出会う羽目になるとは、今日の今日まで思ってもみなかった。いたいけな子供が、通学路で出会い頭に殺人鬼にぶつかってしまったようなもんだ。勝ち目がどうか、初めからそ

んなレベルの話じゃあねえ。

「ふふ、不老不死の私を相手に、じきにハゲるぜ、とは、なか
なかおもしろいやつだ。それにしても、ナマの人間を抱くのは
本当に久しぶりだな。私の姿を見ることができ、私が触れるこ
とができるような人間は、ここ百年で、すっかり減ってしまっ
たからな。そうだ、おまえには特別に、犯されてから殺される
のと、殺されてから犯されるのと、どちらか好きな方を選ばせ
てやるとしよう」

不吉な言葉の羅列と同時に、吸血鬼の冷てえ舌と鋭い犬歯
が、俺の鍛え抜かれた首筋をいやらしく這い、冷てえ指が、俺
のジーンズとボクサーブリーフを器用にズリ下げる。吐息を一

切感じねえところが、かえって不気味だった。こいつの頭の中には、毘にかかった俺とサリィを一方的に犯す、ただそれしかねえようだ。時間が無限にあり、好きなことを何度でも追体験できるとなれば、やがては薄れゆく思い出に深く刻んでおくためだけの儀式的な前戯など、全く意味がねえからなのかもしれねえ。俺は……、きつと犯されながら血を吸われて殺される。

「！」

俺の無垢^{むく}なる肛門に、ナニかおぞましいモノの先端が押し当てられた。

ああ、お母さん、ごめんなさい。そして……、

「すまねえ、サリィ。俺のせいで、出会ったばかりのおまえ

を、とんでもねえことに巻き込んじゃまった……。なあ、あの世でまた会えたら、今度こそ思いっきり暴れまくろうな……」

俺の目の横あたりにサリーの小さな耳があり、その表情を窺^{うかが}い知ることには叶わなかったが、サリーの美しいラインを描く頬を、悔し涙が静かに伝わり落ちて行くのは分かった。

そうさ、こいつは見た目こそ一流ホスト並みのイケメンだが、中身は敷きたてのアスファルトみてえな熱い熱い乙女なんだ。たとえばバグといえども、やりてえことだつて、まだまだたくさんあつただらうに……。

ふいにホール内に充満した、霧のごとき新たな異形の気配に気がついたのは、全員同時だった。壁を通り抜けて来たわけ

じゃあねえだろうから、侵入経路は空調ダクトか。気体のような淡いオーラが、吸血鬼の背後で瞬間的に凝縮して、巨大な熊ほどの大きさに固体化する。

「ンギーッ！ 人間、おまえ、ケツがピーンチ！ 地中はオレの縄張り！ オレ、約束通り、おまえ、助けに来た。オレ、えらい！ ん？ 髪の毛いっぱい。でも、オレ、サラサラになれる。だから、こんなモノ効かない。必殺パーンチ！ ん？ ん？ 硬いな、おっさん。じゃあ、包んでやる。ギヤーツ！」

絶望的な暗黒の結界にご陽気に乱入して来たのは、思いもよらぬ助っ人だった。こんな低能な喋り方しゃべをするアホアホなヤツなど、そうそう他にいるはずもねえ。言うまでもなく、それは

あのセミの幼虫の化け物だった。俺の後ろから聞こえていたヤツの単純明快な実況中継によれば、どうやら自慢の必殺パンチがちーっとも効かなかったセミは、大した考えもなしに、一度サラサラになって、吸血鬼の全身を包み込んでみたらしかつた。……やっぱり日本代表クラスの大バカだ。ノープランにもほどがある。伝説のモンスターである吸血鬼と、セミの幼虫の魂の集合体ごときじゃあ、バグとしての基本的なパワーに差があり過ぎるんだ。当然のようにセミ野郎は、包み込んだ吸血鬼に内側からあっけなく吹き飛ばされて、粒子レベルで総失神してしまったようだった。

しかし……、形勢は奇跡的に逆転する。

実際、セミのそれは、あまりにも彼^ひ我^がの力量差を無視した稚^ち拙^{せつ}な攻撃だった。いや、攻撃にすらなつてやしなかつた。だが、粒子になつて均一に吹き飛ばされたことで、ホントに一瞬だけ、俺ですら忘れていた吸血鬼独特の本能をくすぐることに成功していやがったんだ。すなわち——吸血鬼は『あらゆるモノの数を数えずにはいられない』という本能！

吸血鬼の集中力が緩んだのは、百分の数秒の出来事だったにちげえねえ。現実には、ただの人間である俺は、唾^{つば}を飲み込むことすらできやしなかつた。しかしそれは、最大限に集中していたスピードスターのサリールにとっては、十分過ぎるほどの時間だった。魔の髪の毛の束縛の僅かな間隙を突いて、中途半端な

位置にズリ下げられた俺のジーンズのベルトにブラ下がった
チヨークバッグの中に、ドウルン、と潜り込んだサリーは、今
度はフルチンの俺が無様に扉に直接張り付けられることになる
のと引き換えに、ドウルン、と吸血鬼のすぐ目の前に姿を現し
て、ゾツとするほど艶やかな声で、ゆっくりとこう言った。

「なあ、吸血鬼。俺、すつごく怒ってるんだよ。だから、とつ
てもいいことを教えてやる。河童が川に子供や牛を引きずり込
むのと同じように、俺もアスファルトの中に、俺のことが見え
るモノを引きずり込むことができるのさ。この玉はなあ、小さ
過ぎて、おまえの全身を引きずり込むことはできないが、逆に
こうやって心臓の位置に埋め込むことができるんだ」

俺の体を扉に押さえつけていた異世界の圧力が、唐突に弱まり始める。全身に纏わり付いていた気色の悪い長い髪の毛どもを振り払うように勢いよく振り返ると、トレードマークの黒マントをダンデーにはだけさせ、ムキムキの裸体を惜しげもなくさらした吸血鬼の胸に、いつのまにかおキャン玉が三分の二ほど、趣味の悪い冗談のように、やけに現実感なくメリ込んでいた。サリーの左手の長い指が、さも愛おしそうに、その少しだけ露出したアスファルトの球面を色っぽく撫でている。吸血鬼の初めから血の気のねえ顔が、小刻みに震えていた。夢で見た、あのロン毛のおっさん顔だった。吸血鬼にしては、やや高潔さに欠ける印象だ。俺を強引に貫くはずだった、ヤツの屹きつ

立りつした巨大なイチモツ——職人仲間からマグナムとあだ名される、この俺ですらビビるほどの——が、情けねえほど急速に萎しぼんでゆく。

「これで死なないんだから、伝説のモンスターは恐いよな。さて、おまえには特別に、腹をノコギリで切り裂いて、生きたまま自分の内蔵を順番に食べさせられるのと、飲み込まされたレングスがケツから出てくるまで、口に差した鉄パイプをハンマーで叩き続けられるのと、どちらか好きな方を選ばせてやるよ」
それを聞いて、俺はへっぴり腰になりながら、慌てて叫んだ。

「サリーー！　すぐにとどめを刺すんだ！」

こんなやべえヤツ相手に、今さら小洒落た言葉遊びのお返しなど、命取りになりかねねえ！

「……だとさ。残念だが、そろそろお別れだ。いいか、地獄で誰にやられたかと問われたら、こう答えるがいい。サリー & マグナム……、オブ・ザ・ジーンズ・アスファルト！」

途端に、ボンツ！ と籠こもった音がして、吸血鬼の体が、心臓の位置に埋め込まれたおキャン玉を中心に、モノの見事に粉々に吹っ飛んだ。ほぼ同時に、俺は地下室の換気扇のスイッチを入れていた。排気口の大きさから見て、ベルト式の強力なファンが天井裏にあるはずだ。ボクサーブリーフとジーンズを慌てて穿き直しながら階段を駆け上がり、鉄の扉を開け放って外に

飛び出すと、思った通り、排気ダクトから戸外に舞い出した青黒い細かな肉片が傾き始めた薄暗い西日に晒さらされて、ジュツ、ジュツとイヤな音をたてながら、次々と灰になっていくのが見えた。

まさにジャイアントキリング！

……いや、ちよつと待てよ。違う……かもな。この星の命あるモノの中でも最も欲深い動物である人間は、科学の力で闇に対する恐怖を克服したが、アスファルトのねえ生活には、もはや決して耐えられやしねえだろう。

——闇の世界よりアスファルトの世界。

サリーの起死回生の逆転勝利は、実はごく当然の結果だった

のかもしれねえ。

まるで異国の少女のような可憐な顔をした囚とらわれの少年幽霊が、チラリ、と俺の顔に視線を走らせ、金木犀の香りの向こう側へと幻のように消えて行く。

よう、小僧、もう二度と変態モンスターなんかには捕まるんじゃないやあねえぜ！

「ダーリン！」

長身瘦躯のサリーが、つい先刻の凄惨なセクシーボイスとは打って変わって、スライスチーズのような黄色い声を、頭のとっぺんからトロトロにトロけさせながら、ベタな恋愛映画のラストシーンのようにドラマチックに抱き付いてきた。は

はっ、ジーンズを穿き直しておいてよかったぜ。もちろん俺も、サリールの体を力いっぱい抱き返してやる。

「いやっほう！　　すげえぜ、サリール。伝説クラスのモンスターを瞬殺しちまったよ。おまえ、やっぱり最高！」

黒教会の尖^{とが}った三角屋根の遥か遠くに一筋、美しく飛行機雲が見えていた。

「ダーリン、どうやらあたしたち、次から次へと災難を呼び込んで、それをあつという間に解決しちゃう、無敵の相性みたいヨ」

「あはは、ちげえねえ。なあ、サリール。今日の件は俺の借りだ。だから約束しろ。次は必ず俺がおまえを守ってやる。だか

らそれまでは、ナニが起こったとしても決して俺のそばを離れるんじゃないやあねえぜ！」

「ああーん、ダーリン！」

次の瞬間、俺の唇は、柔らかいモノに塞がれていた。

まあ、吸血鬼のおっさんに、青首大根みてえなイチモツで無理やり犯されるよりは何百倍もマシだったから、俺は頼れる相棒の過激な愛情表現に、今回ばかりは素直に身を任せることにしたよ。

念のために言っておくが、俺に少しでもその気があるわけじゃあねえんだからな。つまりアレよ、下手に拒否して怒ったサリィにアスファルトに引き摺^ずり込まれでもしたら、せっかく

これから、もつともつとおもしれえことがたくさん起こりそう
だつてえいうのに、もつたいなさ過ぎるつてえもんじゃあねえ
か。

ホ、ホントだぜ。それが証拠に、舌を入れられるのだけは
……、まだ勘弁さ。

(サリー & マグナム OF THE GENUS ASPHALT 第一話／おわり)

青春時代が
終わらないが。

今日も世のためバグのため奔走するマグナムに「オシナ」の悪意が忍び寄る——!

第二話
パリ・マグナム・ラリー

著=てり illustration=De

ラリー & マグナム

OF THE GENUS ASPHALT

自慢のマグナムを体の両側から交互に撫なでられる感触に、たまらず俺は目を覚ました。

「いやあーん、あたしの勝ちいーん」
部屋は冷え切っていた。妙だな、窓は全部閉めて寝たはずなのに……。

俺の右の耳元で勝ち名乗りを上げたのはサリーだ。見た目こそ細マッチョで綺麗系のイケメンだが、ベツタバタのおかま野郎である。

どうやらボクサーブリーフを突き破らんばかりに朝勃ちした俺のビツグマグナムは、『二人で順番コに触って、俺が目覚ましちゃったら負け』という、世にもひでえルールのゲームに供されていたようだった。しかし、サリーの対戦相手が分からなかった。俺は俺の左側に添い寝しているナニかに、寝ぼけまなこで視線を走らせる。

肌が透けていた。

ああ、こいつは先日、俺とサリーが吸血鬼の魔の手から救い出してやった、少年幽霊じゃあねえか。それで寒いと思っただのか。幽霊が出ると背筋に悪寒おかんが走るのは、有史以来のお約束だ。

「ナンだ、俺たちの気配を感じてマンションを覗き込んだら、サリールに捕まっちゃまったのか？」

「は、はい。ベランダで……」

「おまえは、変態モンスターに捕まるのが趣味か」

「そ、そんなことはありません！」

「ぶー！ あたし、変態モンスターじゃナイもーん！」

お下劣ゲームは、お下劣サリールの勝利で幕を閉じたはずなのに、幽霊野郎はさつきからずっと俺のマグナムをぎこちなく撫で続けている。

「小僧、念のために言っておくが、俺はノーマルだぞ」

こいつはこいつで被害者なのかもしれねえが、調子に乗ら

ねえように、俺は意識して放ったダンディーな低音で、きつちりと脅しおどをかけてやった。

「ご、ごめんなさい、知らなくて。ほ、僕、女のコにもなれませ

す」

次の瞬間、俺の太い左腕に柔らかい少女の感触が当たった。

華奢きゃしゃな体にB、いや、ギリでCカップの理想的なふくらみだった。指のタッチが微妙に変わり、可愛らしく突起した胸の先端が、俺の上腕二頭筋を不規則に刺激し始める。

あ、あ、や、やべえ、出ちまう！

『GOOOOOOAL!』

目覚まし代わりにセットしていたケータイのアラームが鳴っ

た。とほほ、わが清水エスパルスの歓喜の着ボイスを穢しち
まっただよ……。

最っ低の朝だった。

「♪ダーリン、キミに夢精だヨー」

……『夢精』じゃあなくって、『夢中』だろ。大体それはナ
ンの歌なんだよ。

俺は愛車のカブに跨り、外苑東通りを六本木方面に疾駆して
いた。

サリーは、俺が腰に吊り下げたチヨークバッグの中のおキヤ
ン玉——野球のボール大のアスファルトの塊——から、ドウル

ン、と黒いタンクトップ姿の上半身だけを出し、俺の広い背中におぶさつて、上機嫌で謎のオリジナルラブソングを口ずさんでいる。腕を組んで道を歩く時とは違い、サリー自身のリアルな体の重みはほとんど感じなかった。

幽霊野郎……のユキは、タンデムシートの後部に横向きに座っている。『俺の前では男の姿で必ず服を着ているように』と、キツく厳命したから、今は全裸ではなく、透けたシーツのようなものを羽織はっおっていた。道行く人間の目には、カブに乗っているのは季節なりに厚着の俺一人、としか映らねえが。

昔馴染なじみの占ない師からの仲介で、ポルターガイスト現象に悩まされているという南麻布のお屋敷を、午前十時に訪ねること

になつていた。この俺が呼ばれた、ということはお祓はらいの真ま似事ねごとをすれば即解決、という類たぐいの簡単な案件じゃあねえだろしょうしんしょうめいう。正真正銘、『本物』のトラブルだ。

ポルターガイスト現象——動くはずのねえモノが勝手に動くのは、大抵、この世の不具合であるバグの仕業だ。俺がこの手の仕事を引き受けるのは、決して金のためじゃあなかつた。ヤツらが人間の目に付くところでわざわざそんなことをするのに、必ず事情つてえモンがある。その事情を理解し、問題を解決してやることができるのは、バグが見え、その声を聞き、その体に触ることができる俺だけだ。

青山一丁目の信号が黄色に変わろうとしている。止まるかそ

のまま渡っちまうか、判断に迷うところだった。信号の先、向かいのビルの屋上には、『あなたの心の痛みを力に変えま
す』、そんなキヤッチコピーを謳うたった艶つややかな看板が見えてい
る。相談するだけで、どんなに根深いトラウマでもたちどころ
に消え失せるという、人気急上昇中の美人カウンセラー、小原おはら
巴里ぱりの広告だ。とても信じがてえ話だが、俺はそれが真実であ
ることを知っている。

その時だった。

ピカピカに磨みがかれた赤いアウデイが、俺のカブに幅寄せする
ように強引に割り込んで来やがった！ 右の車線からウイン
カーも出さず、猛スピードのまま交差点を左折して行く。アク

セルを開けかけた、最悪のタイミングで進行方向にフタをされた俺は、たまらずフルブレーキをかけた。後輪がロックし、細かい車体が路面を躍る^{おど}。が、目の前の交番の二人の警察官は、一部始終を見て見ぬふりをしていやがる！

……ふう、だが俺は紳士^{しんし}だからな。こんなことぐらいじゃ絶対に怒らねえぜ。ナンてったって、ホンダ本社のあるここ青山一丁目は、誇り高きホンダ乗りの聖地じゃあねえか……。

「サリーッ！」

「あいー」

次の瞬間、俺のカブは車体を垂直に保ったまま、車が峠道をドリフトするようになり、一気にケツを右に振って交差点に進入

し、青山通りを急加速すると、さっきの自己チューなアウディをアウトから豪快にブチ抜いていた。動力源はもちろん、われらがサリールだ。アスファルトのバグであるサリールは、アスファルト上にあるモノならナンでも自由に高速で移動させることができる。

俺は身長百八十五センチのゴツい体をジャツクナイフのように折り畳み、無様なくらいに極端な前傾姿勢をとったまま、背後のいけ好かねえドライバー野郎に向けて、左手の中指をおっ立ててやった。

へへっ。どうだい、ご自慢の高級輸入車が、五万円の中古のカブに、モノの見事にブチ抜かれる感想はよおっ！

今日の現場は、麻布十番に程近い、二の橋と三の橋に挟はさまれた上り坂の途中にあった。頑強な石垣と白壁に囲まれた、歴史を感じさせるお屋敷だった。都心の小せえ小学校なら、すっぽりと入っちまいそうだ。

占い師の指示通り、お屋敷の裏手に回ると、約束の十分前だと言うのに、初老の男性が惚ほれ惚ほれするような姿勢で立っていた。心身ともに相当疲労している気配があったが、黒服の着こなしにも、耳元に覗いた小型トランシーバーにも隙はねえ。

「本田様でいらっしやいますね。お待ち致しておりました。執事の豊田とよたと申します。オートバイはどうぞこちらに」

本田、というのは偽名だ。案外、トヨタというのも、ホンダに当てつけた偽名かもしれないねえがな。俺はお気に入りのヘルメットを、カブの前カゴに丁寧に入れる。

「これからご覧になられることは、どうかご内密に願います」裏門をくぐると、豊田さんは小声でそう言った。俺に対して興味も関心もねえ、そんな印象だ。まあ、一種の職業病だろう。

「毎度、三河屋デース」

誰にも聞こえねえのをいいことに、俺におぶさったままのサリーがケラケラと笑った。ちえっ、裏門の梁はりに、わざとサリーの頭をぶつけてやればよかったぜ。朝方の狼藉ろうぜきに一矢報いっしいる

チャンスだったのにな。おみそのユキは、空からふわふわと白壁を越える。

雑木林ぞうきばやしのような裏庭を抜けると、意外なことに母屋おもやは洋館だった。

「ほーう」

「もう何かお分かりになられましたか？」

圧巻だった。

お分かりになるもならねえも、豪華なお屋敷のあちこちの窓から、巨大なタコの足が飛び出して、ウネウネと蠢うごめいている。

イモ羊羹ようかんならぬ、タコ洋館だ。建物の外でさえこれだ、室内がひでえ有様ありさまになっていいるであろうことは想像に難くねえ。とて

も人間が暮らせる状況じゃあねえだろう。

「いやーん、キモいーん」

「なあ、豊田さん。詳しい話は聞いていねえが、誰もいねえのにモノが勝手に動くっていうよりは、ナニか太いモノがのたくっているみてえに、お屋敷の中のあらゆるモノが次々と壊れているんじゃないか？」

まずは目の前のお客様に、こちらの实力を知ってもらわなければあんなになかった。俺の指摘が的のド真ん中を射抜いたのか、豊田さんの瞳に、明らかに驚きの色が宿る。だが、初老の執事殿は俺の問いには答えず、脇に挟んでいた黒いファイルを開いて、丁寧にA4サイズの紙を取り出した。

「こちらが屋敷の見取り図でございます」

……そうか、あくまでもナニも起こっていないねえってことにしてえんだな。

お屋敷はシンプルな長方形だった。建物の中央にある玄関ホールは吹き抜けになっていて、玄関の真正面が大階段だ。タコの本体は、この吹き抜けいっぱい膨張して外に出られなくなり、仕方なく足をジタバタさせているようだ。問題は、ナニが原因でそこまで膨張したのか、だった。

「マグナムさん、サリーさん、視線はそのままにして聞いて下さい。斜め先のイチヨウの木の陰に、おつきなヘイケガニが隠れてて、こっちの様子を窺うかがってます」

見取り図を覗きに空から降りてきたふりをしながら、ユキが小さな声で言った。ナンだよ、タコの次はカニかよ。お昼は回転寿司だな。

「距離はどれくらいだ？」

「ざっと三十メートルです」

「サリー、おまえ、三十メートルを走るのに何秒かかる？」

「うーん、普通の地面の上なら二秒くらいだと思うけど……」

「……つてえことは、……えーと、えーと、時速五十四キロ

か。じゃあ、俺がおキヤン玉を投げたほうが倍以上速いな」

言い終えるよりも早く、サリーがチョークバツグの中に、ドウルン、と消える。俺は野球部の顧問の先生が泣いて欲し

がった強肩ぶりを遺憾なく発揮して、おキヤン玉を矢のように右斜め前方に投げ放っていた。

丸いアスファルトの塊が唸りを上げながら、イチヨウの幹のすぐ左側を通過しようとした瞬間だった。ドウルン、とサリィが再び地上に姿を現し、頭上を過ぎて行くおキヤン玉を片手で強引にキャッチすると、足元のナニかにねじ込むようなアクションを見せた。野球で言えば、牽制タッチアウト！ という緊迫した場面だが、飛んで来るボールから野手が出現するわけだから、タッチされる走者はたまったもんじゃあねえだろう。おキヤン玉の、あまりにも常軌を逸した軌道に口をパクパクさせている豊田さんを制し、俺とユキはサリィのもとへと急い

だ。

まさに人面ガニだった。

サリールが捕まえたそいつは、大きさといい質感といい、甲羅こうらが日に焼けた人間の顔そのものだった。むしろカニの足が生えた人面だ。その表情が怒りに醜みにくく歪ゆがんでいる。本物のヘイケガニはせいぜい数センチだから、確かにこいつは特大だった。憐あわれなことに、最大の武器である両腕のハサミがおキヤン玉の中に引きずり込まれていて、まるで手錠をさされているようだ。

「てめえら、ふざけるな！ 一体このオレを誰だと思っていやがる！ ヘイケガニの棟梁とうりょう、清盛様だぞ！」

サリールはナニも言わずにおキヤン玉を高く持ち上げると、万

歳をした人面ガニの鼻の穴に、ズブリ、と小指を突っ込んだ。

「いでででででっ！ ミソが出る、ミソが出る！」

「よう、棟梁。サリーはおまえのハサミごと、このアスファルトの塊を吹き飛ばすこともできるんだ。だから観念しちまえよ。おまえ、あのタコ足についてナニか知っているんだらう？」

そいつを俺たちに話しちやあくれねえか？」

サリーが小指を抜いた。ミソは出なかった。

「話すよ、話せばいいんだろ！ あいつはメタンガス大好きタ

コの、メタン子だ。いつもは海底から湧き出るメタンに浸つて、ジャグジーを気取ってる。けどな、最近、海に住む妖精やら幽霊どもが一斉にナニかに呼ばれて、続々と陸に上がり始

めたんだよ。オレたちも声なき声に誘われて、真っ直ぐここを越えて行こうとしたのさ。ところがだよ、メタン子のヤツ、よっぽどいい匂いでも嗅ぎつけたのか、突然この屋敷の中に入って行つちまつたんだ。普段はオレより少しデカいだけなのに、メタンに浸った途端とたん、あつという間にあの大きさだからな。それで屋敷の吹き抜けにハマつちまつて、このザマというわけさ」

確かに南麻布界限は意外と海に近い。日之出棧橋まで、直線距離なら二キロちよつとというところだろう。

「おいおい、それじゃあ、このお屋敷にはメタンが漏れ出して
いるってえ言うのかよ。そりゃあいくらナンでも冗談が過ぎや

しねえか。さてはおまえ、あのタコ足をおとりに囚にして、ナニか企んでいやがるな」

「ナンでそうなるんだよ、バカ人間！ チクシヨウ、おまえらなら、オレのメタン子を助け出してくれると思ったのに！」

「ん？ 『オレ』の？」

思わず口元がほころが綻んだ。

「ナンだよ、そういうことか。それならそうと早く言えよ。惚れた女を助けてえって話なら、喜んで手を貸すぜ。ここで一肌脱がずんば、人にあらず、さ。なあ、ミソ盛。参考までに聞かせろよ。おまえ、彼女のどこが好きなんだ？」

「マ、ママみたいに豊満なところ……」

「うほーい！」

「いやーん、素敵いやーん！」

「ええっ！　そ、それでいいんですか、マグナムさん、サリーさん!?　ウツかもしれないことに、変わりはないんですよ!?!」

「まあまあ、ユキちゃん。いい？　愛は、あー♥いいー♥なのヨん♥」

ワケの分からんおかま野郎のツイートはスルーして、俺はポケットからケータイをそつと取り出し、インターネットで『メタンガス』を検索して大体のことを頭に叩き込むと、ゆっくりと黒服姿の豊田さんに歩み寄った。

「このお屋敷は、地中から温泉かナニかを引いていねえかい？

突拍子もねえ話で申し訳ねえんだが、どこかから玄関ホールにメタンガスが漏れ出しているみてえなんだよ。今回の件はそのことを……、いや、そのことに気がついたご先祖様からの、ド派手な危険信号ってえわけさ」

ポルターガイスト現象は悪霊のせいだと思われがちだが、経験上、もつともらしい理由をつけて、ご先祖様の仕業にすり替えると、途端にありがたがられて、話が前に運びやすい。

「屋敷内ではガスの匂いなど、一切致しませんが……」

「いや、いわゆるガスの匂いは、漏れたらすぐに分かるように、人為的に後からつけたモノなんだ。天然のメタンは匂いがしねえ」

仕入れたばかりのウンチクが、いきなり役に立った。

「……あ！　ほ、本田様。屋敷の地下に古い防空壕ぼうくうごうがございませす。そこに今は使っていない枯れ井戸があるはずですが、相当深く掘ったものだと言ったことがございます！」

ほーう、井戸つきのパーソナル防空壕とはね。やっぱり本物の金持ちは違うよな。

「防空壕の換気はどうなっている？」

「いえ、何しろ七十年以上も昔のものですから、設備らしい設備はございません。もし本当に井戸からメタンガスが漏れ出ししているのだと致しましたら、ガスの通り道となるのは、裏口を開けてすぐのところにある地下扉でございます！」

よし、狙い通りだ。『ご先祖様』というキーワードを聞いた途端、急に協力的になりやがった。若い執事クンならこうはいかなかったかもしれねえが、六十歳前後と思しき豊田さんの年齢を考えれば、先代や、下手すりゃあ先々代が当主の頃からこのお屋敷に仕えている可能性が高い。かつてのご主人様からの危険信号と聞けば、居ても立ってもいられなくなるのが本心だろう。

急に張り切り出した豊田さんの案内で、裏口からお屋敷の中に足を踏み入れると、そこは大階段の真裏だった。恐る恐る玄関ホールを覗く。予想通り巨大なタコの本体が、三階まである吹き抜け全体にギュウギュウ詰めになっていた。かわいそう

に、いくらナンでもこれは苦しそうだ。幽霊野郎のユキが俺と豊田さんの頭上を越えて、大階段脇の隙間から二階の廊下へ、ふわふわと上がって行く。

「メタン子さーん。今、助けてあげますからねー。もう少しの辛抱しんぼうですから、頑張がんばって下さいねー」

「ブモーツ！」

異世界の重低音に、お屋敷全体が大きく揺れる。

「こちらでございます」

「いや、その扉は開けるな！」

俺は内ポケットから恭うやうやしく鍵束を取り出した豊田さんを慌てて止めた。地下扉と壁の隙間にお屋敷の見取り図をかざすと、

案の定、僅わずかに風が流れ込んできている。扉の向こうのほう
気圧が高い証拠だ。この状況で地下扉を開けようものなら、溜
まっているメタン——人面ガニの言葉を信じるとして——が一
気に玄関ホールへ溢あふれ出し、タコがさらに膨張して、お屋敷を
内側から完全に破壊しちまうかもしれなかった。

「ブルーシートなんてえ気の利きいたモノはねえよな。なあ、豊
田さん、よかったらゴミ袋をたくさん持って来てくれねえか
な？」

俺の唐突なりクエストに怪訝けげんな表情を見せながらも、初老の
執事殿は、すぐに東京都指定のゴミ袋の束を持って来てくれ
た。俺はゴミ袋を次々とカッターで切り開き、ビニールシート

を何枚も作った。それをテープで筒状に繋ぎつな合わせ、メタンが地下扉の隙間全体からお屋敷の裏口に真っ直ぐ抜ける、簡易ダクトを仕立ててみせる。言ってみれば、原価数百円の太いこいのぼりだ。

「マグナムさーん、すごーい。もうメタン子さんが小さくなり始めましたー」

どこか高いところからユキの声がした。今まで地下扉から漏れ出していたメタン——人面ガニの言葉にウソはなかった——が屋外へ直接逃げるようになって、玄関ホールに流れ込まなくなつた証拠だ。

木漏れ日の中、裏庭に佇たたずむサリールにウインクを飛ばすと、お

キヤン玉から人面ガニの両腕のハサミが、ドウルン、と抜けた。容疑が晴れ、自由を取り戻した人面ガニは、待ち切れねえ様子でお屋敷の中へ横走りで駆け込んでくる。

ふと見上げれば、あちこちの窓から飛び出して蠢いていた夕コノ足が、規格外の太さと長さを失って、建物の中へ次々と引っ込んでいた。

「メタン子さん、もう少しで玄関から出られそうですーす」

「だ、大丈夫か、メタン子!? ああ、助かった! ホント助かった! 俺たちはやっぱり陸には向いてねえよ。海に帰ろうぜ、ハニー……。ありがとな、幽霊ちゃん。ありがとなー、ドSタンクトップとバカ人間!」

人面ガニの小憎つたらしい捨てゼリフにせかさされるように、体長十メートル前後にまで縮んだタコが、大階段の向こうで大きく体を傾け、大理石のフロアを這いずって、器用に正面玄関をくぐり抜け始める。頭にシヤンデリアの跡がついていた。

「ブモーツ！ ブモーツ！ ブモーツ！」

表に回って最後まで見送ってやりてえところだったが、豊田さんが納得してくれそうな理由を咄嗟とっさに思いつけなかったから我慢する。

「……ふう。終わったぜ、豊田さん。これでもう動くはずのねえモノが、勝手に動くことはねえだろう。とりあえず簡易ダクトはこのままにして、メタンの処置については専門の業者を

呼んでくれ」

黄色く染まつたイチヨウの梢こざえに青空が高かった。やつぱり秋はいいな。

豊田さんは左耳にはめた小型のトランシーバーを通して、お屋敷内に配置している部下たちからの報告を聞いているようだ。その表情が一気に柔らかくなる。いくら仕事とはいえ、ポルターガイスト現象真っ只中のお屋敷に留まっていたヤツらが生きた心地がしなかつたことだろう。

「ありがとうございます、本田様。その……『異変』が終息したことを確認致しました。どうやらあなた様には、私どもに見えていないモノが見えておいでなのです。視線を追わせて

頂ければ分かります。私は……屋敷の中の物が次々と壊れていく様子を目の当たりにして、それでも目の前で起こっていることが信じられなかった。ところがあなた様は、水晶玉ならぬアスファルトの玉を自在に操って、その原因をあつという間にお言い当てになられた。きつと私どもには想像もつかない、色々なことを経験しておいでだ」

「いやいや、そんな立派なモノじゃあねえさ。あ、そうだ、豊田さん。空調のことで困ったことがあったら、また俺のことを呼んでくれよ。実を言うと、そっちが本業なんだ。設備の入れ替えから修理まで、ナンでもやるぜ。メタンじゃあなくフロンなら、ガス漏れの検知器だって自前で持っているからさ」

俺は飄々ひょうひょうと裏門を抜けて外に出た。豊田さんには、裏庭で軽く会釈えしゃくをして別れを告げた。彼には、これからお屋敷内部の全面復旧という大仕事が待っている。

「マグナムさん、よかったんですかー？　清盛さんとメタン子さんを行かせちゃってー」

「ナンでだ、ユキ？」

「だってあの二人とお友達になっておけば、海底の天然ガスを百発百中で掘り起こし放題ですよー」

「あ！　そういうことは早く言えよ、バカ！」
その時だった。

しばらく床屋に行っていねえ俺の長めのクセっ毛が、ご

そっ、と抜けて、束のまま路上に落ちた！ まるでかつらが意地の悪い秋風に煽あおられて、後ろから足元にはたき落とされたみてえだった。反射的にその髪の毛の束の軌跡を追って下を向くと、今度は鼻が引力に負けた。ぼろっ、と糸を引きながら落下し、現実感なく路肩へと転がる。痛みはなかった。ナンの前触れもなかった。ただ右の耳と左の耳が、それぞれの側の肩に当たった。左手の小指が音もなく抜け落ちる感触があり、続いて右手が手首ごと、ごろん、と大きく取れる。

「うああああっ！」

叫んだ拍子に、ボクサーブリーフからジーンズの腿に、自慢のマグナムが玉ごところぼれた。肩関節が内側から腐敗し、残っ

た皮膚がゆっくりと裂けて袖の中で豪快に腕が抜け、ついには両眼までもが、びちゃっ、と路上にはせて、俺は視覚を喪失する。

「ひひっ、くひひひっ」

まさに正気を失う寸前だった。舌と歯が、口角からよだれと一緒になくなってだらしなく垂れてゆく。俺は本当にギリギリの夕イミングで、グン！と体を後方に引かれた。底なしの悪夢から力ずくで引き摺^ずり出され、急激に正常な視界と思考が戻って来た時には、俺はお屋敷を離れた全く別の通りの陰にいた。異変を察したサリーが、俺の足をアスファルトの中から引^{つか}きつ、歩道の上を滑らせるようにして、一気にここまで運んでく

れたんだろう。

俺は両手で顔を覆っていた。鼻は……ある。耳もある。髪の毛も……、ああ、よかった、大事なマグナムも無事だ。力を入れたら、ピクンとちやんと動いた。ははっ、最後にイッたのが幽霊野郎の手コキじゃあ、死んでも死に切れねえもんな。

「ダーリン、大丈夫？」

タールのような黒髪をきれいにオールバツクにした、見た目だけは特級の美形が、足元から、ドウルン、と、ひまわりのように生えてきた。腰から下はまだアスファルトの中のまま、俺の蒼白な顔面を上目遣い^{うわめづか}で覗き込んでくる。

「……サリー、おまえのおかげで助かったよ。体中からいろん

なモノが抜け落ちる幻覚を見せられたんだ。今のは……、マジでヤバかったぜ」

くそっ、口の中がカラカラに乾いていて、うまく言葉にならねえ。だが、犯人が誰なのかだけは、はっきりと分かっていた。こんなエグい幻覚を鮮明に見せられる危ねえヤツなど、この世に二人といるわけがねえ。自己チューを絵に描いたような高飛車女、高校時代の同級生、小原巴里！ 通称『オツパリ』の仕業に間違いなかった。もう十年以上も会っていねえし、住む世界も全く変わっちゃまったってえいうのに、ナンで俺がこんな目に……。

「うはあ、今朝の赤いアウデイか！ あれを運転していたの

が、オツパリだったんだ！」

鉄色のフリースの下から、冷や汗がドツと吹き出してきた。偶然とはいえ、史上最悪な女にケンカを売っちまった……。

唐突にケータイが鳴る。俺に今日の仕事を仲介してくれた占い師からだった。

「すごいわね、マグ。もう解決しちゃったの？ お礼の半金が振り込まれてたわよ。あなたに頼んで大正解だったわ」

「美奈子みなこ！ ちょうどよかった。おまえ、オツパリから電話を受けなかったか？」

「受けた、受けた。巴里と話をしたのなんて、何年ぶりだろう？ お互い駆け出しの頃はマメに連絡を取り合ってたんだだけ

ど、巴里、すっかり有名人になっちゃったしね。『青山でマグらしいバイクを見かけたんだけど、あんまりにも懐かしくて会いたくなっちゃった』って。『もし美奈子案件で都内に出て来てるんだったら、マグの居場所を教えてチョーダイ』って言われたんだけど、こんなに早く終わるとは思ってなかったじゃない？ だから、『マグなら確かにあたし絡みの仕事で南麻布にいるけど、今日は会えないと思うわよ』って伝えたわ」

プライドを傷つけられた時のオツパリの執着心は尋常じゃあねえ。出不精のこの俺が、青山通りをカブで走り去って行くのを見て、即座に美奈子に連絡を取り、南麻布というキーワードだけで再び俺を見つげ出しちまうあたりは、昔より断然パワー

アップしている印象だ。……成長していいねえのは俺だけってことか？

「そ、そうか、分かった。お狐様によるしく伝えてくれ」

「ごめん、マグ。私、ナニか余計なことしちやっただ？」

「いや、ナンでもねえよ。それより、いつか肉でも食いにいこうぜ。じゃあな」

「マグナムさーん、サリーさーん。ご、ごめんなさい。赤いコートにサングラスの女の人逃げて行くのを見つけて追いかけて行ったんですけど、車に乗られて見失っちゃいました。ほ、僕、車みたいに速く飛べなくて……」

空から半べそでユキが降りてくる。

「いや、ありがとうな、ユキ。赤いコートにサングラス、ね。なあ、その女は、細身で縦ロールでおっぱいがデカかったか？」

「はい。細身で縦ロールで、コートの上から分かるくらいにデカかったです」

オツパリのヤツだ……、間違いねえ。カウンセラーとして大成功しているんだから、その日暮らしの俺のことなんて、きれいさっぱり忘れてくれればいいのに……。

「ちっ。帰るぞ、サリー、ユキ」

「あいー」

街路樹の楓が秋風に冷たく鳴いた。

ベッド以外の唯一の家具である古いちゃぶ台の向かいで行儀よく正座しながらも、ユキはもじもじしている。基本的に照れ屋なんだろう。薄衣を羽織った華奢な体の向こうに、調理道具がナニ一つねえガラシとしたキッチンが透けて見えていた。サリーは俺の背中にぺつたりと貼り付いていて、クソ重てえ。

「もう十二年も昔の話さ。俺はサッカー部のキャプテンでな、オツパリは女子テニス部のキャプテンだったんだ」

俺は高校時代を懐かしく思い出しながら、ゆっくりと話し始めた。ユキが入れてくれたカフェオレは、やけに濃かったが、そこがウマかった。

「オツパリのヤツはな、試合前の不安だとか、ウイークポイントに対する悩みをいつでも丁寧に聞いてくれて、小原キャプテンに相談すれば、どんな心の傷や痛みもたちどころに消え失せるって、同級生や下級生の女子たちから満遍なく人気があつてな」

「カウンセラーになつた今と同じなんです」

「ああ。ところがだ。それはオツパリにとっては、実弾を拾い集めるのと同じことだつたんだよ」

「実弾？ どういうこと？」

「サリー、ユキ。いいか、聞いて驚くなよ。オツパリは、相談相手の悩みや心の傷みてえな負のエネルギーを、物理的に吸い

取ることができると。しかも、それを別の相手に幻覚としてぶつける、悪質な幻覚使いなんだよ。たとえば同級生や下級生の試合前の不安を吸い取って、自分の対戦相手にぶけると……」

「ワオ！ 相手は試合中に、敗戦の不安に押し潰されそうになつちやうつてわけネ！」

「そういうことだ。多分、俺が今日見せられた、体中からいろんなモノが抜け落ちる幻覚は、カウンセリングを受けに来た相談客から吸い取った、抜け毛の悩みだとか、薄毛をバカにされて心に負った傷なんかを、まとめて凝縮したもんだらう」

オツパリは、顔も頭もスタイルも家柄も人当たりも、抜群に

よかった。ただ底意地が悪い、という実に強烈な女だった。本質は今でも変わってないねえだろう。

「高三の四月の話なんだが、当時、俺はウーパーとルーパーっていう双子のミイラ男とつるんでいてな。ミイラ男と言ってもアレだぜ、中身がねえんだよ。笑っちまうことに、包帯そのものが本体なのさ。二人は俺にテーピングみてえに巻きついて、どこへ行くにも一緒だった」

俺の首に回されていたサリーの腕に、ピクツ、と力が入ったのが分かった。俺が人間の女と付き合うことには一切関心がねえが、過去に他のバグとつるんでいたことに対しては、少々、嫉妬しつとの虫が疼うずくらしい。ざまあみろ、俺はおまえだけの

モンじゃあねえんだぜ。

「運動部の予算配分の生徒枠だかナンだかを巡って、男子と女子が対立することになっちまっつてな。それならスポーツで決着をつけようってことになっつたんだ。代表で対決することになったのが俺とオツパリさ。オツパリは対決種目を決めるクジで、モノの見事にテニスを引き当てやがったよ。今考えれば、それも幻覚だったのかもしれないねえが、ド素人の俺がボロ負けするのは、誰の目にも明らかだった」

話がおもしろくなってきたのか、サリーがグツと身を乗り出して来る。

「で、ここからが修羅場しゅらばさ。負けず嫌いのウーパーが俺の右手

に、ルーパーが両足に巻きついてな。俺の体を乗っ取って、勝手に試合を始めやがったんだ。全校生徒が見守る前で、俺はオツパリの渾身のこんしんサーブを完璧にリターンしてポイントを先取した。すると、オツパリの顔が……それこそ今日会ったヘイケガニみてえに怒りに歪んでな。次の瞬間、俺は幻覚の真っ只中にいたよ。本人から直接聞いていたとはいえ、実際に体験してみると、それはモノすげえ責め苦だった。尋常じゃあねえ嫌悪感が脳と内臓を這いずり回ってな。ところが体は勝手に動く。俺はすぐに意識がブツ飛んで、胃液をコートに吐き散らしながらプレーを続け、結局、最後はオツパリの執念の前に屈することになったちまったんだが、みんなは俺の健闘に感動してくれて

な。試合には負けても勝負には勝ったって、口々に称えてくれたのさ。それ以来、俺は、オツパリがこの世から抹殺したい男ナンバーワンになっちまった、ってえわけなんだ」

ちやぶ台の上に置いてあつたケータイが突然鳴り響き、驚いたサリーとユキが、仲のいい女友達のように顔を見合わせる。

「あら、マグ。久しぶりね」

噂をすればナンとやらだ。それにしても、久しぶり、とは恐れ入る。

「これはこれは小原巴里先生、久つきぶりだな。俺みてえなプー太郎に一体ナンのようだい？ 実は昼前に南麻布でおかしな幻覚を見ちまって、かなり気分が悪いんだ。用件は手短に頼

むぜ」

「……分かっていないわね、マグ。あなたは私の人生の中で、私が幻覚を使えることを告白した、たった一人の特別なヒトなのよ。それなのにあなたは、私をフツて美奈子と付き合った拳句、テニスでも全校生徒の前で私を追い詰めた。私がどれだけあなたを憎んでいるか分かる？ 私に唯一煮え湯を飲ませたあなただが、いつまでも社会の底辺でグダグダしていることが、どれほど私のプライドを傷つけているか……。私の幻覚は空間に作用することは知ってるわよね？ いい機会よ、逃げ場のないその部屋で、苦しみながら私の憎しみを思い知るといいわ！」

「おいおい、一体、何年前の話だよ。俺とおまえはナニもな

かったんだ。それでいいじゃあねえか」

「忘れようとしたわよ！　あなたを忘れるために、今日までどれだけ頑張って来たか……。風の便りにあなたの噂を聞いて心が騒いでも、同窓会さえ一度も行かなかったわ！　なのにどうして突然私の前に現れて、私を侮辱ぶじよくするような態度をとったの!? 私の一十二年間を返してよ！」

「運転していたのがおまえだなんて、知らなかったんだ！」

「ダーリン！　オッパリは幻覚をどれくらい遠くに飛ばせるの!?　あの赤いアウデイ、すぐそこまで来てるわヨ！」

「！」

「さようなら、マグ。私はカウンセラーの道を選んだことで、

途方もなく多くの心の痛みを得たわ。出力でできる幻覚は飛躍的に進化した。もっと早くこうするべきだったわね」

次の瞬間、俺の体は深く冷てえ水の中にあつた。

くそっ、やられたぜ！ 今度は溺れて死おぼにかけてたヤツのトラ

ウマでもぶつけられたか！ご丁寧にここまで追撃に来ていやがつたとはな。畜生、体が自由に動かねえ！ このままじゃあ、俺は家の中で溺れ死ぬ！

どこか遠いところへ沈んで行く感覚に抗あらがって、俺はどうにか後ろを振り向いた。暗い水中でもがきながら、永遠とも思われる長い長い二メートルを必死に進む。手に当たったナニかが右にスライドした。ベランダに出るガラス戸だった。口から豪快

に息が漏れて白い泡になり、紺青こんじょうの視界が一気に遮かざられる。俺は最後の力を振り絞ってさらに突き進み、見えねえベランダの柵を乗り越える。俺の家はマンションの四階だ。落ちれば無事では済むまいが、溺死よりは随分マシだった。下は駐車場だ。車のルーフを目がけて飛び降りるんだ！

ふいに世界に光と空気と音が戻った。部屋の外に出たことで、オツパリの必殺の射程から抜け出せた！俺のブ厚い胸筋が、生き延びるための酸素を求めて貪むさぼるように荒い上下運動を繰り返す。だが、俺の体は既に空中にあった。眼下に白い枠線と駐車位置番号が、やけにはつきりと見えている。

やべえっ、クツションになると当てにしていたワンボックス

カーが、今日に限って停まっていねえっ！

「ダーリン！」

サリィがおキヤン玉から上半身を出し、建物の外側からベランダの手すりを引っ掴んだ。まるで東欧のサーカスだ。

「ぐええっ！」

唐突に浮遊感が消え、俺の体がベルトを支点にして『へ』の字に折れ曲がる。あまりの衝撃に、へそがちぎれそうだ。それでも俺は上体を強引に捻^{ひね}り、三階のベランダに飛び込もうとした。だが、それがいけなかった。頼みのおキヤン玉が、サリィごと腰のチヨークバッグから抜けちまった！

「ぶわあっ！」

頭が真下になった。地上まで、およそ六メートル。

「マグナムさん！」

空を飛べるユキが、半泣きで抱きついてくる。ところが、落下のスピードは少しも緩まねえ。バカ、力がねえんなら、カーテンを柵に縛って俺に掴ませるとか、少しは工夫しろよ、幽霊野郎！ ダメだ、俺は死ぬ！

その時だった。俺のすぐ脇を、ナニかが猛スピードで追い抜いて行った。

おキヤン玉だ！

おキヤン玉は、駐車場のアスファルトに音もなく吸い込まれ、入れ替わりにサリールの長身瘦そうく躯が美しく生えてくる。次の

瞬間、俺は頼れる相棒に力強く抱き止められていた。衝撃を殺すためか、再び腰のあたりまでアスファルトに沈んだサリールは、俺を横抱きにしたまま、歌舞伎役者のように地上に迫り上がる。

サリールの潤んだ唇が、ゆっくりと動いた。

「俺に本気を出させるなよ、豆鉄砲。全力で投げ下ろしたキヤン玉に飛び込むのは、結構難しいんだぜ」

「す、すいません……」

ユキが上からサンダルを取って来て、びーびー泣きながら俺に履かせてくれた。サリールに降ろされ、ちゃんと自分で立ったつもりが、情けねえことに足に全く力が入らねえ。俺は思わず

傍らの細マッチョにすがりついた。

「うざっ！」

「仕方ねえだろ、マジで死ぬところだったんだからよっ！」
……デレツンか、おまえは。

「で、どうするんだ、マグナム。おまえの最期を確信して行っちゃまったぜ、オツパリは。追いかけるのか？」

「いや、あいつは俺が死ぬだなんて、これっぽちも思っていないやしねえよ。オツパリにとって俺は、絶対に壊れねえオモチャみてえな存在なのさ。——さてと、人間を裁くには人間社会のルールを使うのが一番だ。俺に考えがある。サリー、力を貸してくれ」

翌朝、俺は青山一丁目の交差点にある、例の交番の近くに立っていた。空はどんよりと曇っている。通勤時間帯を少し過ぎているから、上りも下りもそれほど道は混んでいなかった。やがて信濃町方面からS字コーナーを抜けて、聞き覚えのあるドスの効いた低いエンジン音が聞こえて来る。ピカピカに磨かれた赤いアウディだった。畜生、いい音させていやがるぜ。ホント、もつたいねえ。

昨日とは違い、外苑東通りの信号は完全に赤に変わっていた。さすがのワンパクアウディも減速し、停止線から二台目の位置にお行儀よく停車する。一瞬の間があって、左ハンドルの

運転席に踏ん返り返ったオツパリと、歩道でわざとらしくカッ
コをつけた俺の目と目が、十二年ぶりに合った。美人カウンセ
ラー先生様の整った小顔が、間抜けなほどゆっくりと引き攣っ
る。さすがに俺が、心身ともに全くの無傷だとは思っていない
かったんだらう。

シートベルトで左右に振り分けられた、メロンのような二つ
の胸のふくらみがエロい。問題は、微乳マニアの俺の許容限度
がCカップ、ということだけだ。それにしても高校生の頃から
ほとんど変わっていいねえ。テレビや雑誌で見るよりも、掛け値
なしにいい女だった。とでもアラサーには見えねえ。

「あいにくと、俺は泳ぎが得意なほうでね」

ドヤ顔で、俺は、ニヤリ、と笑ってみせる。

信号が青に変わった。この女は頭がいい。カブや、幻覚をくらった俺が路上を高速移動するサマを思い出し、アスファルト上にいる自分の不利を、直感的に理解したようだ。オツパリは前の車を露骨に煽り、クラクションを何度も鳴らす。

よう、あれ以上の幻覚はもうねえのかい？　俺とおまえは腐れ縁だ。何度でも受けて立ってやるぜ。

次の瞬間だった。

赤いアウディは、交差点に進入する直前で、突然左向きに加速した！　ガードレールの切れ目から豪快に歩道を乗り越え、今度は交番に突っ込むギリギリのところまで急停車する！

二人の警察官が建物の中から慌てて飛び出して来た。相当肝を冷やしたはずのその二人が、昨日の警察官たちじゃあなかつたことだけは少々不満だったが、交代で番をするから交番だ。まあ、仕方がねえか。

ビルの屋上に、『あなたの心の傷を力に変えます』、そんなキヤッチコピーを謳った、小原巴里オフィスの看板が見えていた。俺はその看板が背景に入る意地悪な角度で、運転席で呆然ぼうぜんとしているオツパリの顔を、ケータイで動画に収める。このスクリーン映像が手元にある限り、俺の身もしばらくは安全だろう。

しかし、いくらナンでも朝っぱらから交番の目の前でこの

ビッグパフォーマンスは、有名人としちやあ少々マズかったな、オツパリ。こりやあ、しばらくは大変だぞ。泣け、泣け、ほれ泣け、……ありや？ 泣かねえか。

「いやあーん、危機一髪うん」

ドウルン、と俺の左腕にブラ下がった長身のサリーが、他人ひと事ことのように唇を尖とがらせる。二人の警察官が運転席の窓をノックして、オツパリに窓を開けるよう指示していた。

俺たちを信じて頼ってくれりやあ、どんなトラブルもスピード解決してみせるが、俺たちを敵に回せば、トラブルはスピードアップしてやって来るのさ。

「記者会見で誰にやられたかと問われたら、こう答えるがい

い。サリー & マグナム、オブ・ザ・ジーナス・アスファルト！
なーんてな」

それにしても、こんなにうまくいくって初めっから分かって
いたら、昨日の一連のドタバタ劇に疲れちまったのか、可愛い
泣き顔のまま俺の部屋でふわふわと浮きながら寝ていた幽霊野
郎のユキも、無理やり起こして一緒に連れて来てやるんだった
な。

一時間後、意気揚々とマンションに帰宅した俺とサリーを待
ち受けていたモノは、泣きじやくるユキと、共用廊下に倒れ伏
した、血まみれのヤンキーババアの姿だった！

(サリー & マグナム OF THE GENUS ASPHALT 第二話／おわり)

講談社BOX×AiR×スターチャイルドが、
あなたの作品をアニメに!!

BOX AiR

BOX-AiR新人賞

ここが
自慢!

●受賞作は電子雑誌「BOX-AiR」でデビュー、連載を即スタートさせます。

●年末にその年の全受賞作品の中から1本を選び、キングレコードスターチャイルドとアニメ化を具体的に検討いたします。

応募要項

書き下ろし未発表の小説作品に限ります。メールのみでの募集です。応募には下記の①～③が必要です。(39文字×16行を1枚とする)

- 1 ストーリーの第1話、第2話の原稿。各40枚以内。
- 2 ストーリーの第1話から最終話までの内容がわかるシノプシス。2枚(約1200文字)以内。
- 3 タイトル・筆名・本名・年齢・性別・職業・略歴・郵便番号・住所・電話番号を記したものを。

以上のデータをテキスト・ワード・太郎・pdf いずれかの形式で作成し、下記メールアドレスにお送りください。

電子雑誌「BOX-AiR」に掲載したものについては、配信時に規定の原稿料もしくは印税を支払います。連載で単行本1冊分のページ数に達した作品についてはすべて講談社BOXより単行本化し、規定の印税をお支払いします。選考結果に関する問い合わせにはお答えできません。ご了承ください。

原稿送付先

kodansha-box@kodansha.co.jp

(件名に「BOX-AiR新人賞投稿原稿」、本文に小説タイトル・お名前をご記入ください)

募集と発表

年5回としています。最新の情報については講談社BOOK倶楽部内の講談社BOX公式ページをご覧ください。なお各回で、最終選考に残った作品の第1話を一定期間Web上に掲載いたします。予めご了承ください。

<http://www.bookclub.kodansha.co.jp/kodansha-box/boxair/>

新人賞 募集

KODANSHA
BOX

“Powers”受賞作は書籍に!
ジャンル不問、枚数上限なし!

POWERS

講談社BOX新人賞Powers

logo design:take

- 全投稿作を編集部員が直接審査します。
- 全投稿作について、
講評をWebサイトに掲載します。
- “Powers”受賞作品は講談社BOXより
Powers BOXとして必ず書籍出版します。

ここが
自慢!

応募要項

書き下ろし未発表の小説作品に限ります。ジャンル不問。郵送・宅配での募集です。手書き原稿は受け付けておりません。応募には下記の①～③が必要です。

- ① 400字詰め原稿用紙換算350枚以上の原稿。A4用紙におおよそ30文字×30行、ページ番号明記、縦組みで印字したものを。
- ② タイトル、20文字前後のキャッチコピー、800字前後のあらすじを記したものを。
- ③ 筆名・本名・年齢・性別・職業・略歴・郵便番号・住所・電話番号・メールアドレス・原稿用紙換算枚数・人生で一番影響を受けた小説を記したものを。

以上をダブルクリップで留め、下記宛先にお送りください。受賞作品の書籍化に際して、規定の印税をお支払いします。応募原稿は返却いたしません。選考結果に関する問い合わせにはお答えできません。あわせてご了承ください。

原稿送付先

〒112-8001 東京都文京区音羽2-12-21
講談社 講談社BOX
「講談社BOX新人賞Powers」係

募集と発表

年3回、3月・7月・11月の末日を締め切りとしています。選考結果は締め切りの翌々月末、講談社BOOK倶楽部内の講談社BOX公式ページにて発表いたします。

<http://www.bookclub.kodansha.co.jp/kodansha-box/powers/>

選考回数が変わりました!

あなたしか書けない“物語”がある。

講談社BOX

誰かじゃなくて、『お前』のために。

実体を持たずにこの世に産まれた不具合・バグ。ガキの頃から俺にはそいつが見えた。ある夜俺はアスファルトの精サリーと出会う。お姉口調のやけに馴れ馴れしいそいつは、俺に助けを求める声が聞こえるのだと言い出して――。

2012年の
BOX-AIR新人賞
受賞作第一弾!!

2013年
1月7日 [月]
発売予定

著=てり illustration=De

サリー&マグナム

OF THE GENUS ASPHALT

STOP

「編集後記」

新人賞選考会をニコニコ動画で公開生中継するという、文芸の世界においてはある種「未知の冒険」に打って出た2012年のBOX-AIR新人賞ですが、毎回の選考会は選考をする側の私たちにとっても、非常にドキドキするものでした。それでも、この賞から次代のスター作家が生まれ出ていくことを願いながら、公開生中継の狙いの一つである「ファンや投稿者の皆といっしょにガラス張りの選考をしつつ、ともに盛り上げていく新人賞」という意図がぶれることのないよう、新たな才能を見出す努力を最大限続けてきたつもりです。いよいよ今月、12

月中旬に、この増刊号に掲載されている5作のうちの1つが、今年度のアニメ化作品として選出されます。公開番組の詳細は、講談社BOXのHP、「BOX-AIR」ページにてお知らせいたします。ぜひ、ご注目ください！

(文責 辰)

BOX-AIR 新人賞増刊号2012

2012年12月1日発行

発行所

株式会社講談社

〒112-8001 東京都文京区音羽2-12-21

<http://www.bookclub.kodansha.co.jp/bc/kodansha-box/>

デジタルプロダクション

アルフエイズ

主宰

講談社BOX

A i R

スターチャイルド

編集人

佐藤辰宣

発行人

鈴木哲

本書の無断複製は

著作権法上での例外を除き

禁じられています。



BOX-AIR